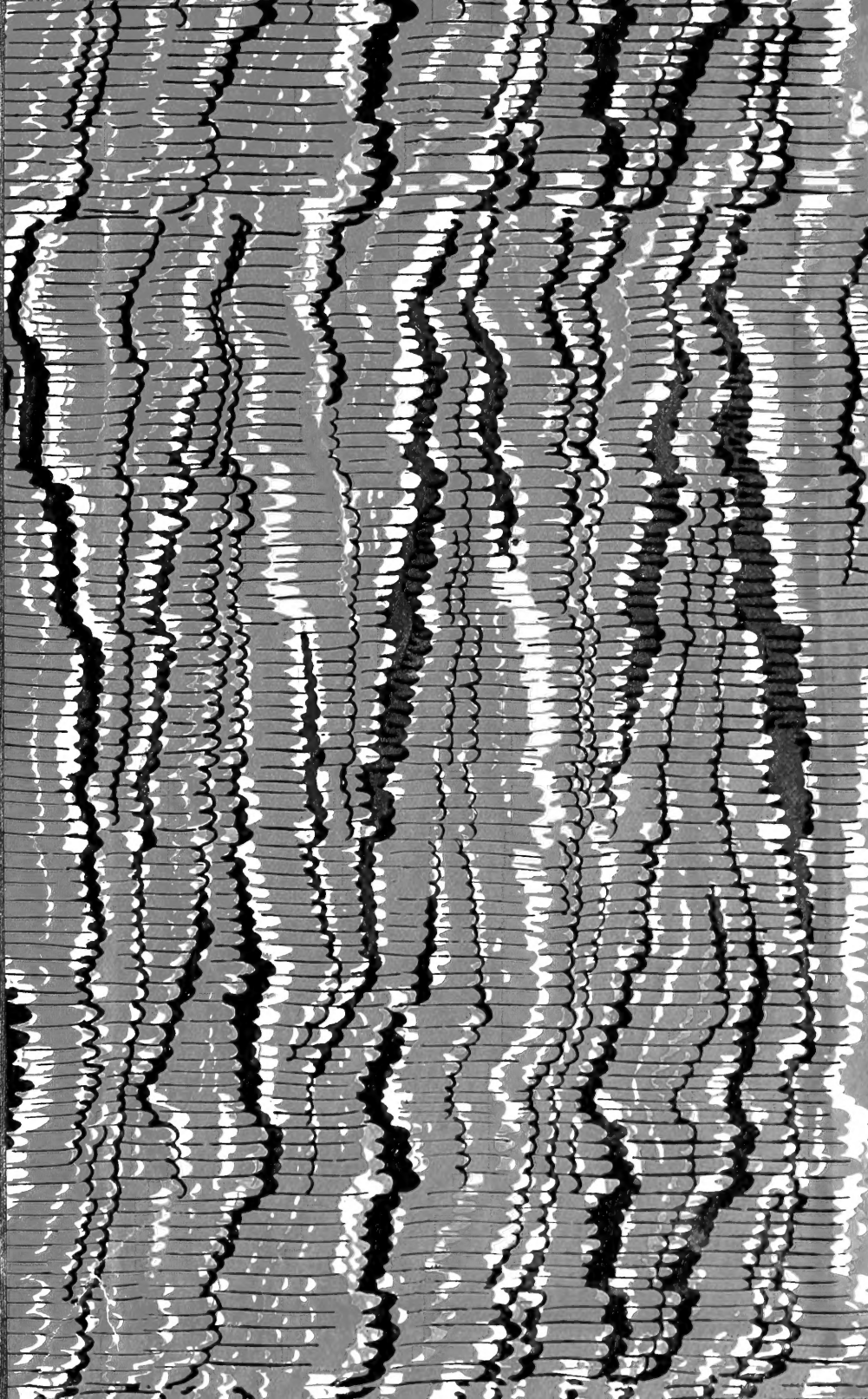
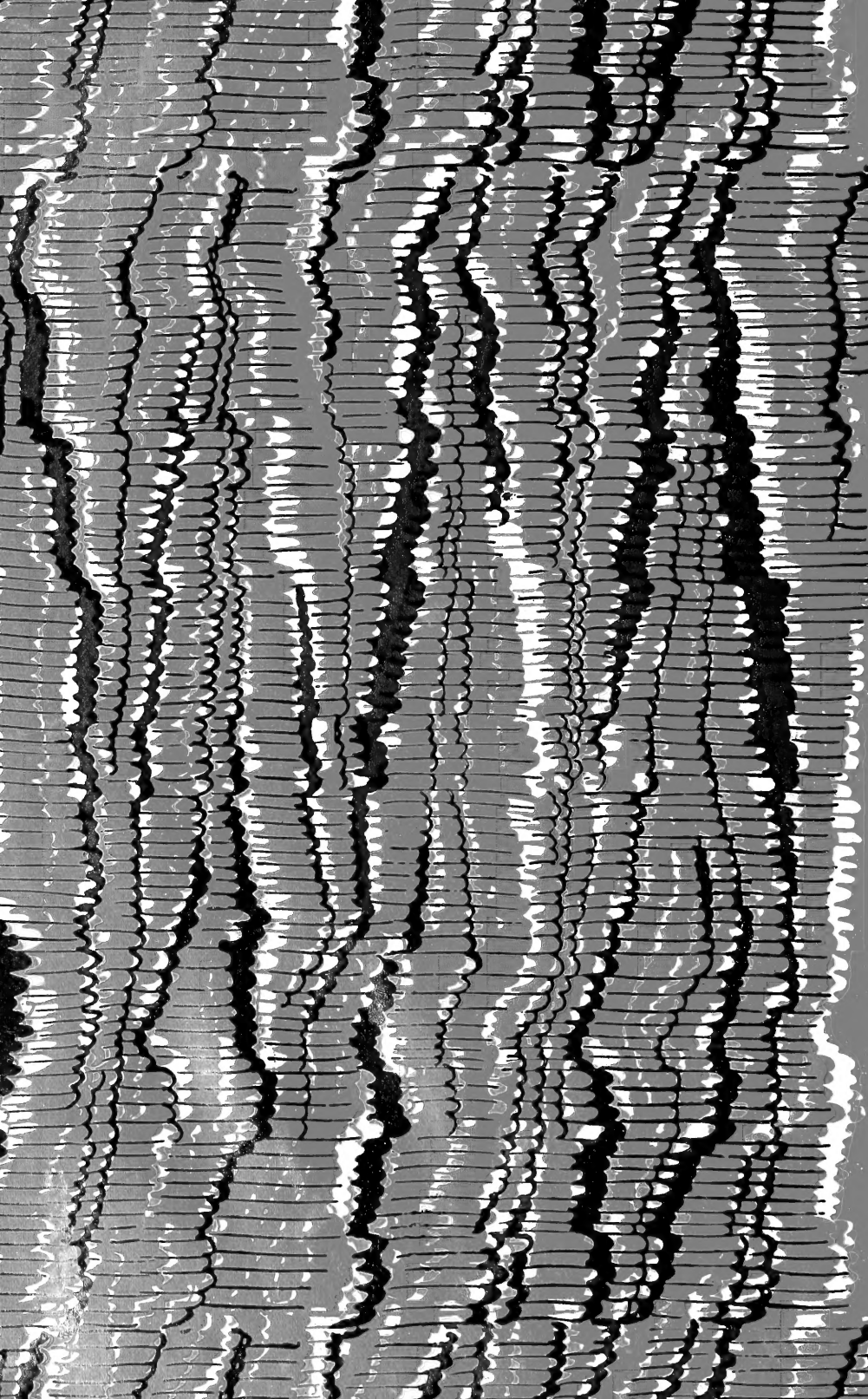


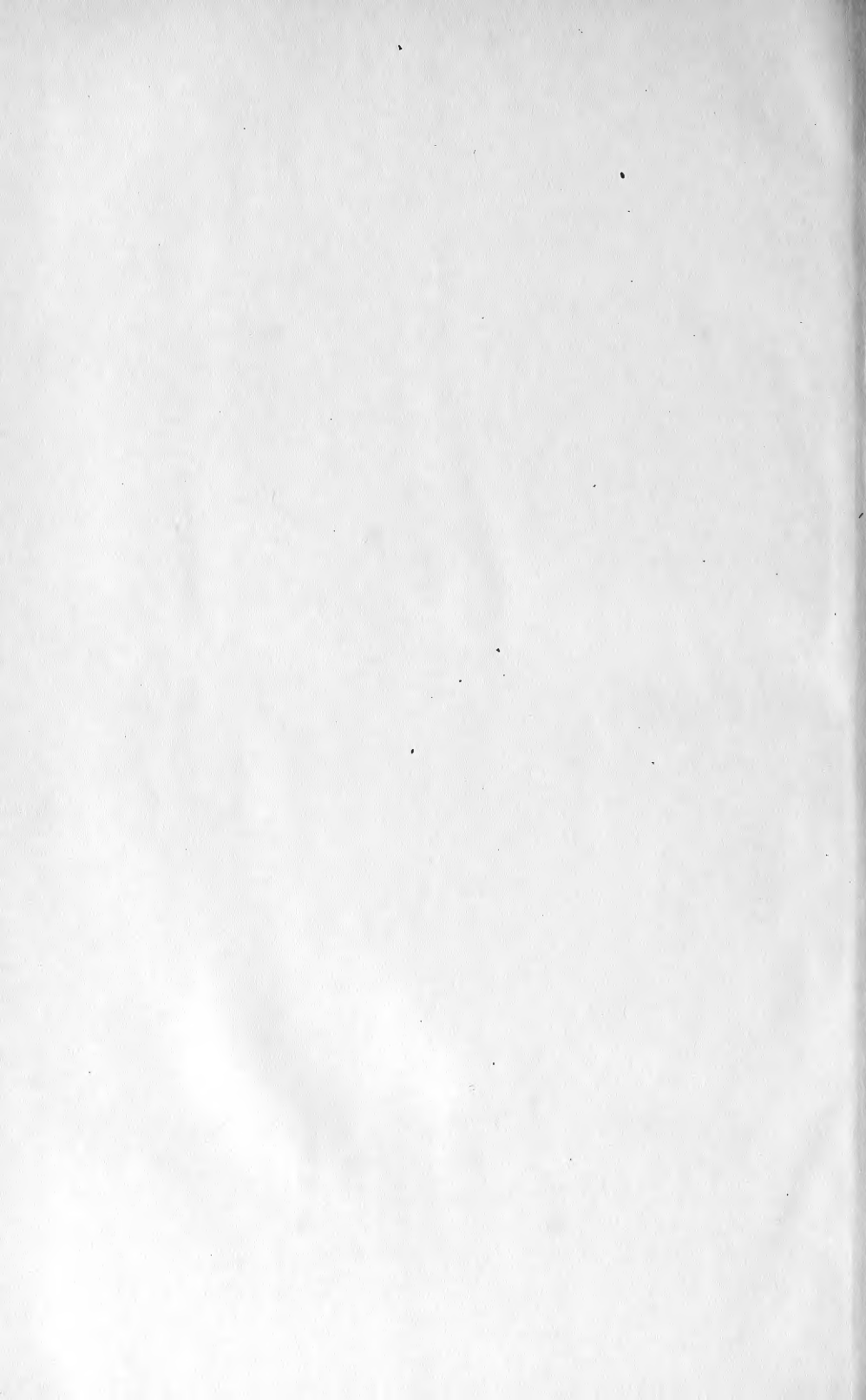
SMITHSONIAN INSTITUTION LIBRARIES

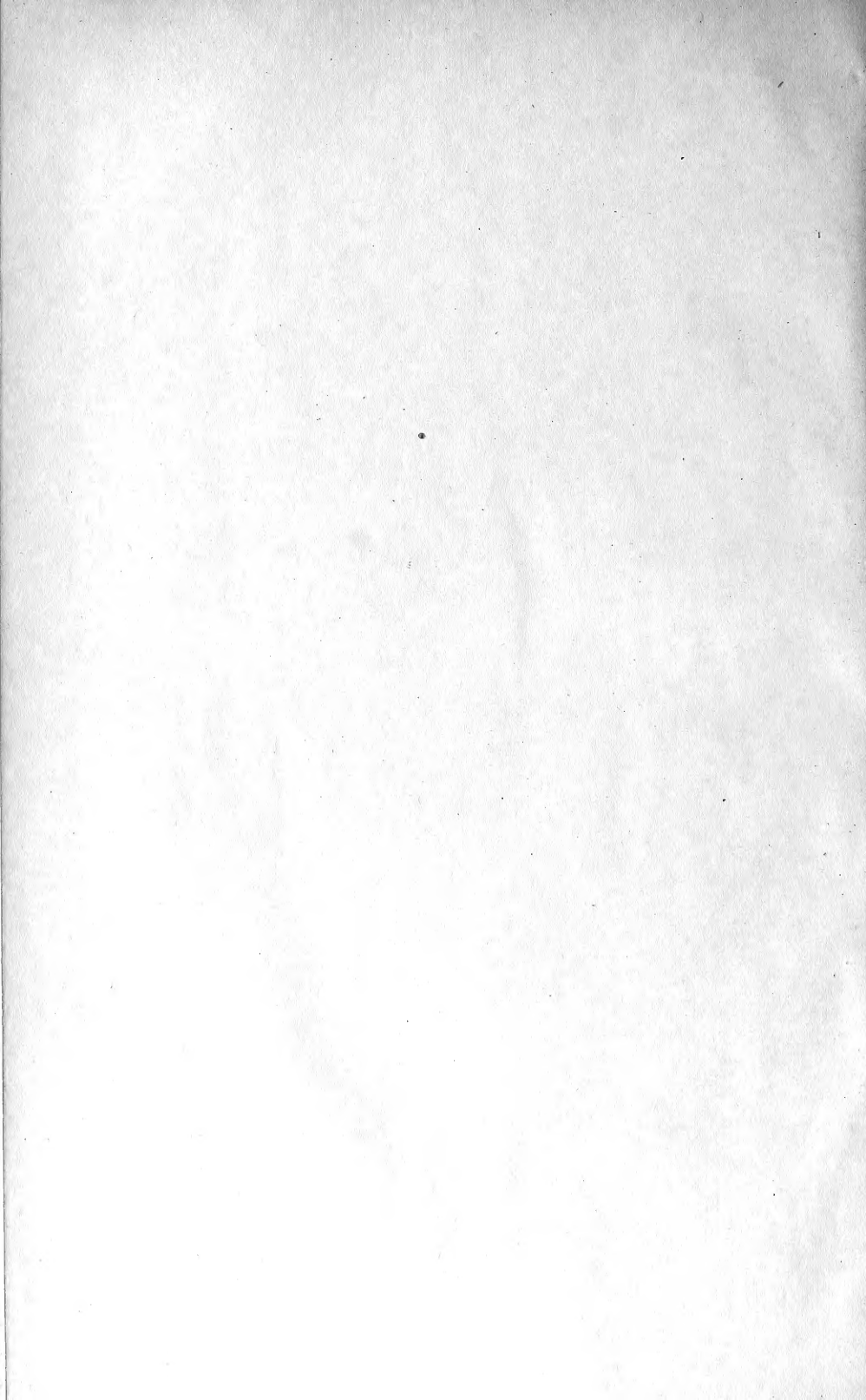


3 9088 00987 1237









9 Birds

Mura



鳥

第
十
號



大正九年十二月發行

日本鳥學會

鳥 第二卷第十號目次

口 繪

ヤマガラ類各亞種(第五原色版)..... 理學士 黒田長禮氏原圖
 榎山徳太郎氏筆
 小林重三氏筆

論 說

薩陵島採集の主なる鳥類に就て(附、薩陵島産鳥類目錄)..... 理學士 黒田長禮氏筆
 長門佐々並地方の鳥類の初鳴期「渡り」及び蕃殖に就て..... 兼 常 爲 彌 富
 宮城縣下に於ける二三鳥類の蕃殖期..... 兼 常 爲 彌 富
 アナバヅクの蕃殖の經過..... 法學士 池川村平太郎

雜 纂

日本産ガランテウの種名に就て..... 獸醫學士 内田清之助
 ヤマドリ尾羽に就て..... 熊谷徳太郎
 鶉類雜記..... 中村正雄
 フルマカモメにつきて..... 水野誠助
 リンコンパーク飼養水禽名..... 荒木常隆
 アウムの習性..... 藤木常隆
 京都御所御苑内に於ける夏の鳥類..... 榎山徳太郎
 イスカ本州にて蕃殖せる鶉..... 森 爲 彌
 朝鮮産チガハコマドリ..... 脇山三富
 鏡前鳥信..... 兼 常 爲 彌 富
 コシアカツバメの巢にスバメ營業す..... (黒田長禮回答)

質 疑 應 答 八 件 (黒田長禮回答)
 報 十 四 件

ヤマガラ類各亞種 (口繪解説)

理學士 黒田長禮

叔山徳太郎

邦領内に産するヤマガラ類の調査は尙ほ完結せられざるも現今知らるる處は一種九亞種(?)を算するに至れり。即ち其學名、分布及び特徴左の如し。

Parus rarius oustoni Ijima. オーストンガラ

分布 伊豆七島の内三宅島及び八丈島に限り産す。

特徴 大形にして上面オリブ色あり、頭、顔側、上胸に淡色部なく全部栗色、嘴太く長く嘴峰一七耗、翼七四—八六耗、尾四八—五五耗、跗蹠長く二〇—二二耗(第二圖)

Parus rarius ussuriensis Kuroda & Mori, subsp. nov.

分布 朝鮮鬱陵島(松島)特産。シマヤマガラ(新亞種、新稱)

特徴 大形にして上面にオリブ色あることオーストンガラに似たるも頭、顔側、上胸に淡色部を存す、嘴峰一四・五—一五耗、翼七七・五—八一耗、尾五三—五八・五耗、跗蹠二〇耗—二二耗(本篤黒田及び森氏論文参照)(第二圖)

Parus rarius namiyei Kuroda.

分布 伊豆七島の内、新島特産。

特徴 オーストンガラよりも小形にして上面のオリブ色は殆んど消失す、頭、顔側はシマヤマガラよりも淡色なれどオーストンガラよりは淡色、上胸に淡色部を缺如す。嘴峰一三・五—一四耗、翼七一—八二耗、尾四七—五八耗、跗蹠二〇—二二耗。(第三圖)

Parus rarius yakushimensis Kuroda.

分布 鹿兒島縣屋久島特産。

特徴 ナミエヤマガラと同様なれども嘴稍細く、尾及び跗蹠短かし。嘴峰一二・五—一三・五耗、翼七一—七五耗、尾四五—五一・五耗、跗蹠一七—一九耗、(此亞種は色彩ナミエヤマガラと同様なるを以て圖を出さず。)

Parus rarius rarius T. & S.

ヤマガラ

分布

千島、北海道、本州、四國(？)、九州(？)、對馬(？)、奄美大島(？)、朝鮮(？)

特徴

體は中形にして上面には全くオリーブ色を帯びず、頭、顔側、上胸には淡色部あり但し個體により濃淡あり

喙峰一二・五——一三・五耗、翼七二——八〇耗、尾四八——五五耗、跗蹠一六——一九耗、(第四圖)

Pteropus varius susimurae Kurouda & Mori, subsp. nov.

サイミウヤマガラ(新亞種、新種)

分布

朝鮮濟州島特産。

特徴

本州産ヤマガラに酷似するも頭、顔側、上胸にある淡色部は一般に著しく殆んど白色に近きものあり 但し個體により濃淡あり。跗蹠著しく長し。喙峰一二・五——一三・五耗、翼七六——八〇・五耗、尾五四——五九耗、跗蹠一〇・五

——二二耗、(本篤黒田及森氏論文参照(第五圖))。

Pteropus varius susimurae Kurouda.

タネヤマガラ

分布

鹿兒島縣種子島特産。

特徴

本州産ヤマガラよりも體は小形にして上面多少濃色、脇は特に栗色濃し。頭、顔側、上胸の淡色部を存す

喙峰一二——一二・五耗、翼七二・五——七七耗、尾四九・五——五〇・五耗、跗蹠一七——一八・五耗、(第六圖)

Pteropus varius, subsp. nov.?

ヲキナワヤマガラ(新種)

分布

沖繩島特産(？)

特徴

次のタイワンヤマガラに似たるも稍大形なり。喙峰一二耗、翼六七耗、尾四八耗、跗蹠一九耗(標本なきを以て圖を出さず)但し此測定はスタインゲル氏により。

Pteropus varius cincticentris Fould.

タイワンヤマガラ

分布

臺灣島特産。

特徴

最小形にして上胸に淡色部なく、頭及び顔側の淡色部は純白、後頭の下部に栗色斑を殆んど缺如す 下面の栗色甚だ濃色なり。喙峰一〇耗、翼五九・五——六一・五耗、尾三八・五耗、跗蹠一五・五耗、(第七圖)。

Pteropus hakodensis Momiyama = *P. varius* var.?

ベンケイヤマガラ

分布

北海道、本州(共に極めて稀れなり)

特徴

ヤマガラと同様なるも頭喉の黒色は灰青色を以て代置し、頭頂、顔側、上胸に淡色部なく凡て栗色なり。喙峰一二耗、翼六九耗(不完全)、尾五〇耗、跗蹠一八・五耗、此測定は基型のものにより、(第八圖)。

附記——ベンケイヤマガラはヤマガラと同一の地方に極めて稀れにのみ見出さる。余はヤマカラの變色變種なるべしと信ず、因に本州産シフカラにも之れに類似の現象あり又外國産の鳥類にも變色變種あり(黒田記す)。

シフカラにも之れに類似の現象あり又外國産の鳥類にも變色變種あり(黒田記す)。

オーストンガラ

Fig. 1.

シマヤマガラ

Fig. 2.

ナミエヤマガラ

Fig. 3.

タネヤマガラ

Fig. 6.

ヤマガラ

Fig. 4.

サイシウヤマガラ

Fig. 5.

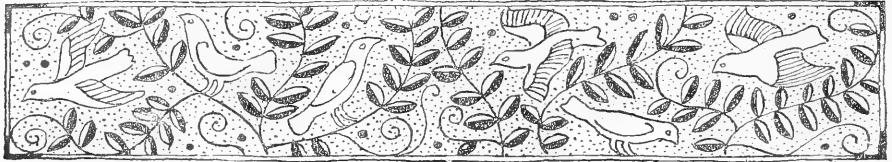
タイロンヤマガラ

Fig. 7.

ベンケイヤマガラ

Fig. 8.





論 說

鬱陵島採集の主なる鳥類に就て

(附、鬱陵島産鳥類目録)

理 學 士 黑 田 長 禮

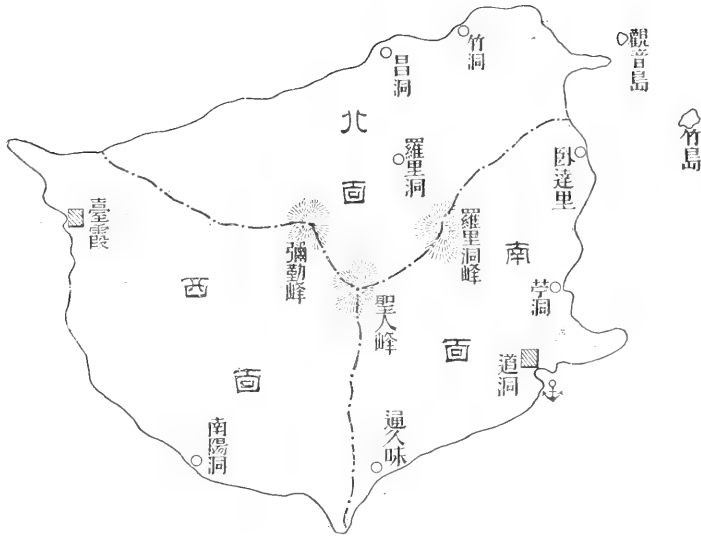
森 爲 三

鬱陵島は一名松島と稱し外人間には *Raschel Is.* として知られ朝鮮の最東端にあり江原道竹邊港を東北東に去る事七十八浬、内地隱岐島を北西北に去る事百七十餘浬の海中に孤立す。其の地理學上の位置は北緯三十七度二十七分より同三十七度三十三分、東經百三十度四十七分より同百三十度五十五分に亙り、面積は從來未だ完全なる實測なく約五六方里と稱せらる。

本島は一の火山島にして日本海の滔没せし際生ぜし地裂線の一弱點に熔岩噴出し、其の堆積物によりて形成せられたるものゝ如し、從て地形極めて險峻、急角度を以て深海底より突出せり。地質は暗青色のアルカリ性岩石、主體とし之に粗面岩・浮石及黑曜石を交ふる所あり。最高峯を聖人峯と云ひ、海拔三千二百尺其の他に羅里洞峯・彌勤峯等岬々として峭立し、島の北側にある舊火口趾羅里洞平原を圍みて存す。

本島は其の名の如く以前は蒼鬱たる常綠・落葉及潤葉樹林にて被はれたりしも、今より數十年前内鮮人の移住盛んなるに共に、火田作業及濫伐の爲め今日急傾斜の山腹にのみ昔日の倂を存するのみ。然れども絶海の孤島なるを以て其の所産植物種類三百餘の中五十種近くの特産種あり又其の植物分布の内地に近きが如き注意すべき事と云ふべし。動物にても兩棲類及爬蟲類は一も生存せず、哺乳類も鼠の如き人類

鬱陵島概形圖



第十四圖

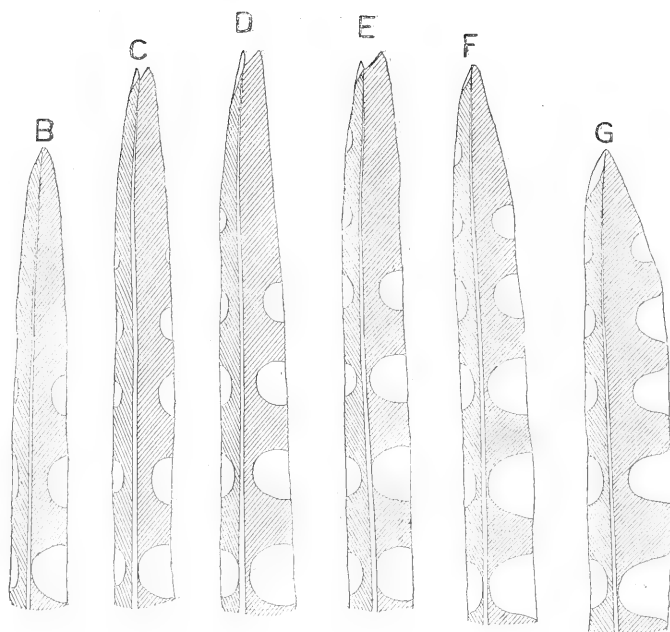
と共に移住せしもののみなりこの事に、鳥界にも異なる事あるべし、殊に本島は前記の如く樹木も繁茂し朝鮮内地間島の「渡り」の際の定息地にもなるべし、又其の分布の何れの陸地に近似せるかを調査するも興味あるべしこの期待を以て京城高等普通學校にては職員高橋永造氏に該島出張を命じ同氏は四月十九日より二十三日間同島に滞在前記の如き地形なるを以て險崖を攀ち荆棘を分ち幾多の苦辛を嘗み附録採鳥類目録の如く十九種三十九個の標本を獲て京城に歸へられたり、今左に其の主なものにつき記述せんしす。

(1) *Dryocates leuco: takahashi, subsp. nov.*

シマオホアカゲラ(新亞種・新種)

本亞種はオホアカゲラに稍々近似せるもオホアカゲラとは(1)體形稍小なること(2)耳羽殆んぎ白色に近く褐軟皮色を帯びざること(3)腮・喉・上胸純白色なること(4)尾羽の幅狭きこと(5)跗蹠の特に短きこと等により區別せらる。次にテウセンオホアカゲラと比するに(1)體形稍小なること(2)下背の白色部の區域狭小なること(3)耳羽殆んぎ白色なること(4)腮・喉・上胸純白色なること(5)尾羽・風切羽の白色斑小なること(第四十二及四十三圖参照)(6)尾羽の幅狭きこと等により區別せらる。更にサイシウトホアカゲラと比するに(1)體の黄白色部が白色部とされること即ち後胸兩側・下背・腮・喉・上胸中央部等の白色なるが如き(2)中及び大雨覆・風切羽・尾羽

等の白色斑大なること(第四十二及四十三圖参照)等により異なる。以上の如く近似せる三亞種を比較するも各々相違せる點を有するを以て新亞種を考定しシマオホアカゲラを稱せんことす。



第四十二圖

シマオホアカゲ

ラの初列風切

- A 第一羽
- B 第二羽
- C 第三羽
- D 第四羽
- E 第五羽
- F 第六羽
- G 第七羽

今其の基型標本雄(二號)につき體色の記載をなし次に今回採集せし七個の標本につき體の測定及尾羽・大雨覆の白色斑の數を記載せば次の如し。

頭・前額・眼先淡黃褐色、眼の後上部・耳羽は汚れたる白色、後頭兩側白色、頭上鮮紅色なり。

背 上背一様に黑色なるも下背は白色に少許の黑色横斑を交ゆ。

翼 小翼羽、小雨覆黑色、中雨覆外側の二三は黑色其他は大なる白色斑を有す。大雨覆内側の一個は黑色なるものあれども多くは外瓣に一個又は内外瓣に一個づきの圓形白色斑を有す。大雨覆及風切羽の斑紋は圖の如し。(第四十二及四十三圖)

下面 腮・喉・上胸中央純白にして稍光澤あり。胸部兩側及び腹部の羽毛は汚れたる白色の地に中央黑色縦斑を有す。腹部及び下尾筒は紅色なり。

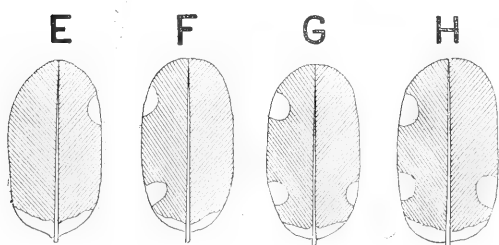
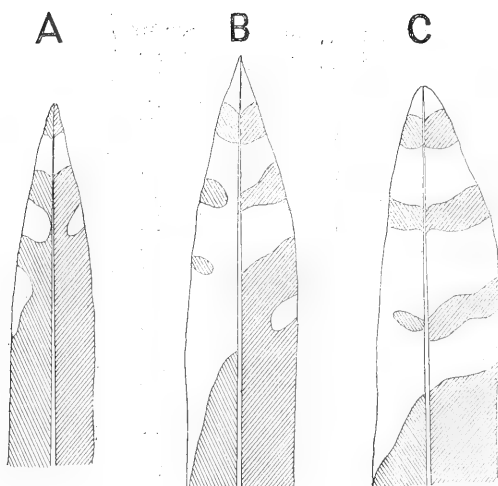
尾 中央の二對は全部黑色稀に第二對目の先端に各一個の小にして不判明なる黃白色斑を有するものあり。第三・第四・第五の斑紋は

圖の如し。(第四十三圖A-C参照)

體の測定表

亞種名	テウセンオホアカゲラ				シマオホアカゲラ				番號	雌雄	採集年月日	採集地	翼長	尾長	跗蹠	嘴峯	尾羽ノ幅							
	四	三	二	一	七	六	五	四									三	二	一	第一對	第二對	第三對	第四對	第五對
	♀	♂	♀	♀	♂	♂	♀	♀	♂	♂	基型	♀	九、四月、二〇口	彌勤峯	一四一 <small>ミヤク</small>	八七 <small>ミヤク</small>	破損	四〇 <small>ミヤク</small>	五二 <small>ミヤク</small>	五五 <small>ミヤク</small>	五五 <small>ミヤク</small>	五五 <small>ミヤク</small>	四五 <small>ミヤク</small>	四五 <small>ミヤク</small>
	同	同	同	探集年月日、採集地、體の測定は「鳥」第七號七八頁記載と同じ但し跗蹠は二三ミリ誤りて短かく記載す	九、四月、一六	道洞	一四三	九〇	四五	四〇	五〇	六〇	五六	五八	五八	五八	五八	六〇	五五	五五	五五	五五	五五	五五
	同	同	同		九、四月、二〇	彌勤峯	一四六	九〇	二三・五	三九・五	四八	五〇	五三	五三	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
	同	同	同		九、四月、二六	彌勤峯	一四四	八九	二三	三五	四八	五〇	五四	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
	同	同	同		九、五月、三	竹洞	一四六・五	八九	二四・五	三八	五〇	五一	五一	五五	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
	同	同	同		九、四月、二〇	彌勤峯	一四六	九〇	二四・五	三九	四八	五〇	五一	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇

次に木亞種の第三對尾羽及び大雨覆の白斑の数を内外瓣に分ち記すれば次頁の表の如し。各番號に對する雌雄・採集年月日・採集地等は體の測定表中のものと同じ。



第四十三圖
 シマオホアカゲ
 ラの尾羽及び大
 雨覆
 A 第三尾羽
 B 第四尾羽
 C 第五尾羽
 E-H 大雨覆
 E 内側第一羽
 F 同 第二羽
 G 同 第三羽
 H 白色部の最も多きもの

以上の結果により本亞種はオホアカゲ
 ラミテウセンオホアカゲラミの中間に
 位するものと云ふべし。

(2) *Nycticorax nycticorax*

nycticorax (L.) コ井サギ

本鳥は朝鮮半島に棲息するを聞かず單
 に濟州島にて一回採集せられしのみ。

又今回採集せしものは日本鳥類圖説記
 載の體色とは異なり幼鳥より成鳥に移
 る途中の羽衣なり(二年鳥なり)今其の
 體色を記載せば

頭・後頭光澤薄き黒色にして稍毛冠狀
 を呈す。喉・頸・胸は黃白の地に幅廣き
 淡黒色の縦斑あり。背は一様に瓦青色

第三對尾羽		番 號
内 瓣	外 瓣	
二	三	1
二	三	2
二	三	3
二	三	4
一	三	5
二	四	6
二	三	7
大雨覆		番 號
内 瓣	外 瓣	
一	一	1
一	二	2
一	二	3
一	二	4
一	二	5
一	二	6
一	二	7

を呈し上尾筒は灰色なり。尾は灰青色にして第五對の先端は白色なり。下面は白地に黄味を帯ぶ。小及中雨覆には小なる三角形の黄褐色斑點在す。

測定 翼長九寸(二七二耗) 尾長三寸二分(九七耗) 跗蹠二寸三分(六九・五耗) 嘴室二寸四分(七二耗)

(3) *Troglodytes troglodytes peninsular* (Clark)

テウセンミソサザイ

朝鮮半島産ミソサザイ異なる所なければも雄として翼稍々小なり、日本内地産とは全く相異す

測定 翼長一寸五分(四五耗) 尾長一寸三厘(三一・五耗) 跗蹠五分五厘(一六・五耗) 嘴室四分(二耗)

(4) *Farus major dagelensis*, *subsp. nov.*

ウツリヤウシジフカラ 新亞種・新稱

記載——内地及び朝鮮産のシジフカラと同様なるも翼の風切羽の縁には全く橄欖色を缺如すること、初列風切の外縁は淡石板灰色にしてその先端に向ひ白色となる。翼の白帯及び後列風切の縁は殆んど純白にして寧ろ幅廣し。上翳に於ける橄欖黄色部は多少局限せらる。體の下面は中央黒縦斑を除き純白色にして脇には認め難き程度の灰色を帯ぶに過ぎず。

基型標本は大正九年四月廿二日鬱陵島西而南陽洞にて高橋永造氏の採集せる雄成鳥にして現今黒山の所藏標本たり、測定次表の如し。

雌	雄	採集年月日	採集地	全長	嘴	峯	翼	尾	跗蹠
♂ ad.	型	九年、四月、二二日	南陽洞	一四〇 _(ミル)	一一 _(ミル)		七五 _(ミル)	六九・五 _(ミル)	一九 _(ミル)
♀ ad.		九、四、二五	彌勤山	一三三	一〇・五		六七・五	六二	一八・五

備考——ウツリヤウシジフカラと朝鮮半島産シジフカラを比較するときは上記の如き相異あり。半島産のものは内地産に比し多少鬱陵島産に近き様なれども蕃殖期前の完全の羽衣のものは内地産と全く同一のものあり多くの標本を比較せざれば明に決し難し。次に此新亞種と濟州島産のシマシジフカラとは(1)背面の橄欖色下方に延びず(2)翼の白帯に橄欖色を帯びず(3)翼の風切の外縁にも橄欖色

を帯びず(4)下面も白色に富むことにより區別せらる。

鬱陵島は松柏科植物少なき爲めか四十雀類極めて少し。漸く高橋氏苦心して上記二個の標本を獲たるのみなり。

(5) *Farus variegatus utsurionensis*, subsp. nov. シマヤマガラ(新亞種・新種)(第五圖版第二圖)

記載——伊豆七島産ナミエヤマガラ及びオーストンガラに似たるものにして前者は(1)嘴著しく長く太きこと(2)上面に明かなる橄欖色を帯ぶること(3)額、顔側及び後頭の縦斑並びに喉の下部の不規則の斑は何づれも淡色なることによりて區別せられ而して後者は(1)嘴多少短かきこと(2)上面の橄欖色の程度弱きこと及び(3)頭及び顔側の淡色部は著しく淡色にして栗色ならざることによりて區別せらる。

基型標本は大正九年四月廿五日鬱陵島彌勤山にて高橋永造氏の採集せる雄成鳥にして黒田の標本館に藏せらる。

測定次表の如し。

雌	雄	採集年月日	採集地	嘴	峯	翼	尾	跗	蹠
♂ ad.	♂ ad.	九年四月、二〇日	彌勤山		一五 _{ミルメ}	八一 _{ミルメ}	五六・五 _{ミルメ}	二〇 _{ミルメ}	
♂ ad.	♂ ad.	九、四、二二	同		一五	八一	五八	二二	
♂ ad. 基型	♂ ad.	九、四、二五	同		一五	七九・五	五五・五	二〇	
♂ ad.	♂ ad.	九、四、二七	同		一四・五	八一	五八・五	二〇・五	
♀ ad.	♀ ad.	九、四、二七	同		一五	七七・五	五三	二〇・五	

雌の記載——右表の雌一個にありては他の雄よりも測定上小形(翼及び尾)にして上面にも橄欖色少なく而して體の下面も淡灰褐赤色にて恰もオーストンガラの雌に於けるが如し。

備考 右表の雄四標本に於ける各個的相異は下の如し。上面の橄欖色は著しく濃きものより甚だ淡きもの迄あり又頭及び顔に於け

る淡色部も淡きより濃き迄の變異を見るもこは次に記す濟州島産の場合に於ける程變異の度著しからず。此シマヤマガラ類の發見は最も顯著なる事實にして日本、朝鮮並びに其屬島に於けるヤマガラ類中最大のもの、一つたり。即ち「イムトシガ」の次に位し、

附記 左記の濟州島産ヤマガラ類も新亞種の値あり因て茲に附加し以て記載を發表す

Parus varius saimensis s. subsp. nov.

サイシウヤマガラ(新亞種・新稱)第五圖版第五圖

記載——内地木州産ヤマガラに極めて似たるも(1)額、顔側及び後頭の縦斑並びに喉の下部の不規則の斑は何れも一般に、より淡にして白色に近し(2)跗蹠は平均上長く二〇・五——二二耗に達するところによりて區別せらる ヤマガラには一六——一九耗なり

基型標本は大正七年六月二日濟州島漢羅山に於て高橋永造氏の採集せる雄成鳥にして現今黒田の所藏に屬す 「鳥」第七號八七頁にヤマガラにして掲げあるもの即ち今回の新亞種なり。

測定次表の如し。

雌	雄	採集年月日	採集地	嘴	峯	翼	尾	跗蹠
♂ ad.		七年五月二〇日	漢羅山		一三・五	七八	五四	
♂ ad.		七、五、二五	同		一三・五	七七・五	五四	不完全
♂ ad.		七、五、二八	同		一三・五	七六	五五	二一
♂ ad.		七、六、一	同		一三	七六・五	五五	二〇・五
♂ ad.	基型	七、六、二	同		一三・五	八〇・五	五九	二一

備考 右表の五標本に於ける各個的相異は下の如し。額、顔側及後頭の縦線の色は淡色(殆んき白色)より稍濃色(淡褐赤色)迄の變化をなす、此個體的相異は内地産の標本中にありても普通に見出さるることなり。蕃殖期を経過せし羽衣のものにありては特に白味多くなるが如きもサイシウヤマガラにありては白味多き方一層普通なるが如し。然れどもこは尙ほ多數に就て充分調査を要するなら

(6) *Zosterops talpebroa jimna* Kuroda.

イ、ジマメジロ

本島在住内地人は内地に棲息するメジロと異なり鳴聲甚だ佳なりとして珍重し籠養せらるゝものあり。體色及び體の大きさはイ、ジマメジロと異ならず。

(7) *Zosterops sinica clarki*, subsp. nov.

マツシマカハラヒワ(新亞種・新稱)

記載——内地産オホカハラヒワに似たるも體の下面にありて喉・頭側及び耳羽特に胸の中部に黄色を帯ぶること、翼角・翼の淡色部及び下尾筒は一層美黄色を呈すること、背は寧ろ淡色なること、翼及び尾の短かきを以て區別せらる。

某型標本は大正九年四月十九日鬱陵島(一名松島)南面道洞にて高橋永造氏の採集せる雄成鳥にして黒田の標本中に藏せらる。

測定次の如し。

雌	雄	採集年月日	採集地	喙	峰	翼	尾	跗	趾
♂ ad.	基型	九年四月十九日	道洞		一三 <small>mm</small>	八五・五 <small>mm</small>	五四 <small>mm</small>	一八 <small>mm</small>	
♂ ad.		九、四、二二	沙洞		一二・五	八六	五四・五	一八	
♀ ad.		九、四、二九	苧洞		一二・五	八二・五	五一	一七・五	

雌の記載——右表中の一個にありては他の雄よりも測定上小形(特に翼及び尾)にして一般の羽色はオホカハラヒワ及びテウセンカハラヒワの雌に酷似するも前者よりは一體に淡色なること及び腹並びに下尾筒が殆ど白色なることにありて相異し、又後者よりは大形なること及び體の下面に少しも黄色を帯びざることにあつて相異せり。

備考——此新亞種は明かにオホカハラヒワとテウセンカハラヒワとの中間に位ひする種類にして此亞種の雄は後亞種の雄よりも大形なること及び翼の黄色部が稍々淡きことによりて區別せらる。一般の色彩は前亞種並びにコカハラヒワよりも後亞種の方に近し。

オホカハラヒワミコカハラヒワミコは此新亞種及びテウヒンカハラヒワよりも一層暗色なるべし。

クラーク氏は松島に極めて普通に棲息することを報告せるも一九〇六年七月廿八日觀摩氏はこれをテウヒンカハラヒワと誤りたりと云り、恐らく此新亞種に相當すべきものなるべし、因て余等は同氏の名譽を爲め氏の姓を取り此新亞種名となせり。但し和名は松島鷺なるによりマツシマカハラヒワと命じたり。

次に本島の鳥界に就き高橋氏の今回の採集物及び觀察報告を基礎として概説すれば本島には朝鮮半島に普通なるケサ、マ、メ、カウライキジの如き鳥類は棲息せず。之れに反しニウナイス、メは人家の軒より山間の岩層樹木の空洞に至る迄巢を築り、メに代り至る所に見出さる。之に次ぎ多きはハシブトガラスにして先年カサ、ギ六一一七羽暴風に吹き飛ばされ来りしものならんか本島に發見されしハシブトガラスに害せられ飛翔の力も失せ鮮童に捕へられ遂に死滅せし事あり。屯に角本島にてはハシブトガラスも勢力を逞ふし農家に害を與ふる爲め鳥廳にては捕獲を奨励せりこの事なり。尙ほ朝鮮半島に産せざるゴキサギ又稀なるバン等も本島に棲息するは注意すべき事と云ふべし。本島特産鳥類も比較的多く前記のシマオホアカゲラ、ウツリヤウシジロカ、シバ、マカハラ、マツシマカハラヒワの四種類あり。尙ほ採集せざりしも目撃又鳴聲を聞きしものにオホヨシゴキ(標本蔚陵島小學校にあり同島にて採集せしもの)ケアシノスリ、テウゲンボウ、マゲラチウヒ、キジバト、アマツバメ、ヒヨドリ、ツグミ、コシアカツバメ、ツバメ等あり。

採集鳥類目録 (名稱、雌雄、採集地名及月日)

名	種	雌雄	採集地名	月日	名	種	雌雄	採集地名	月日
1. <i>Nycticorax nycticorax</i> (L.)		雌	南面亭洞	四・二三	4. <i>Uryzapus leucotis tulabushiki</i> , subsp. nov.		雄	南面亭洞	四・二〇
2. <i>Gallinula chloropus javirens</i> Blyth.		♂	南面道洞	五・二			雄	南面道洞	四・三〇
3. <i>Charadrius dubius euronicus</i> Gm.		♂	南面沙洞	四・二二			雄	南面沙洞	四・二〇

11.	<i>Troglodytes troglodytes peninsularis</i> (Clark)	♀	北面竹洞	五・三
12.	<i>Tarus major daggeddensis</i> subsp. nov.	♀	彌 勤 峯	四・二六
13.	<i>Tarus arvensis ussuriensis</i> , subsp. nov.	♂	同 上	四・二〇
5.	<i>Motacilla cinerea melanope</i> Fall.	♂	南面道洞	四・一九
6.	<i>Motacilla alba leucopsis</i> (Gould).	♂	南面沙洞	四・二二
7.	<i>Cyanophtila cyano-melana</i> Temm.	♂	南面芋洞	四・二八
8.	<i>Turdus pallidus</i> Gm.	♂	西面臺段洞	五・一
9.	<i>Monticola solitaria mergula</i> (La Touche)	♂	彌 勤 山	五・四
10.	<i>Phoenicurus auroreus auroreus</i> (Pall.)	♀	南面道洞	四・二二
11.	"	♀	南面通久味	四・二二
12.	"	♂	南面道洞	四・二六
13.	"	♀	南面芋洞	四・二五
14.	"	♀	南面芋洞	四・二三

11.	♀ <i>Troglodytes troglodytes peninsularis</i> (Clark)	♂	西面南陽洞	四・二二
12.	♀ <i>Tarus major daggeddensis</i> subsp. nov.	♂	西面南陽洞	四・二二
13.	♀ <i>Tarus arvensis ussuriensis</i> , subsp. nov.	♀ ?	彌 勤 山	四・二五
14.	♂ <i>Tarus arvensis ussuriensis</i> , subsp. nov.	♂	彌 勤 山	四・二〇
15.	♂ "	♂	彌 勤 山	四・二三
16.	♂ "	♂	彌 勤 山	四・二五
17.	♂ "	♂	彌 勤 山	四・二七
18.	♂ <i>Corvus coronoides japonensis</i> Bonap.	♀	彌 勤 山	四・二七
19.	♂ "	♂	南面道洞	四・二五
20.	♂ "	♂	南面道洞	四・二五
21.	♂ <i>Zosterops palpebrosa rjima</i> Kurroda.	♂	南面道洞	四・二五
22.	♂ "	♂	南面道洞	四・一六
23.	♂ "	♂	南面道洞	四・一六
24.	♂ <i>Tascer rutilans rutilans</i> (Temm.)	♂	南面道洞	四・一六

”	”	”	♀	南面遼瀋	四・一六	”	”	”	♀	南面遼瀋	四・二二
”	”	”	♀	南面遼瀋	四・二二	”	”	”	♀	南面遼瀋	四・一九
”	”	”	♀	彌勒山	四・二七	”	”	”	♀	南面遼瀋	四・一九
18.	<i>Chloris sinica darki</i> , subsp. nov.	スツシムカハラヒツ	♀	南面遼瀋	四・一九	19.	<i>Emberiza rustica</i> Pall.	カシラダカ	♀	南面遼瀋	四・一九

附記 樺陵島(松島)の鳥類に關する文獻甚だ少なく吾等は左の報告あるを知る。

Clark, A. H. — The Birds collected and observed during the Cruise of the United States Fisheries Steamer "Albatross" in the North Pacific Ocean, and in the Bering, Okhotsk, Japan, and Eastern Seas, from April to December, 1903. Proc. U. S. Nat. Mus., Vol. 28, pp. 55-74, 1910. クラーク氏が樺陵島にて觀察せし種類は十二種なり一つも採集せしに非らざれば此報告中に誤りある如し參考の爲め左に列記す。(同氏は松島の名にて記述す。學名は其儘出す)

1. *Taurus crassirostris* Vieillot. ヲモネロ (普通)
 2. *Tuffinus lacunellus* Temminck. オホヒラズナギドリ (見る)
 3. *Haliastur oritur flaviventris* L. & S. カハハ(ミヅツ) (甚だ普通)
 4. *Alcedo*, species アチサギならん (見る)
 5. *P. Futeo futeo japonicus* (Sundin) ノスリ (甚だ普通)
 6. *Micropterus gacchicus* (Latham) マヅメ (甚だ多し)
 7. *Zosterops sjingeri* (Scholm) マチヌウメジロ (普通)
 8. *Corvus corone orientalis* (Eversmann) ノミホソガラス(數羽を見る)
 9. *Chloris sinica ussuriensis* (Ferrero) Hartert. テウセンカハラヒツ (甚だ普通)
 10. *Passer montanus montanus* (L.) スヅメ (普通)
 11. *Hirundo rustica gutturalis* (Scopoli) スズメ (普通)
 12. *Petrophila mauii* (Boddaert) イソヒヨドリ (普通)
- 右の内(7)はイ、マヅメジロの誤り(9)は今回余等が新亞種となせし *C. s. darki* なること殆ど疑ひなし、(10)のスヅメは高橋氏は全く見ずと云ふニウナイスマメのみなりと前記の如く報告す、採集鳥類中にも後者のみあるを以て恐らくクラーク氏の觀察の誤りならん。(12)の種名は前記の方正し、其他(5)を除き恐らく誤りなかるべし。

DESCRIPTIONS OF FIVE NEW FORMS OF BIRDS FROM
DAGELET AND QUELPART ISLANDS.

BY

NAGAMICHI KURODA, *Pigafetta*, M. O. S. J.

AND

TAMEZŌ MORI, M. O. S. J.

Dryobates leucocolos takahashii, subsp. nov.

Characters.—Near to *D. leucotos subcivris* Stejneger of Japan, but with distinctly less stout and smaller bill and shorter wing and tarsus; the spots on wing feathers larger and pure white; the ear-coverts whiter almost without buffy colour; rump somewhat whiter; the black streaks on both side of breast wider and more distinct; the width of tail-feathers narrower; the throat and other pale parts of body silvery white, is not shaded with a buffy colour; the front patch white and only very faintly tinged with buffy.

Type.—Collection of the Seoul Higher Common School (specimen no. 2). Adult male. Yakinzan, Dagelet Is. or Matsushima or Utsuriotō, one of the easternmost islands of Corea in the Sea of Japan. April 20, 1920. Collected by Mr. Y. Takahashi, collector of the same school.

Measurements:—

No.	Loc.	Date	Entire Culmen	Wing	Tail	Tarsus	Sex
1	Yakinzan, Dagelet Is.	29/IV, 1920	40 mm.	141 mm.	87 mm.	—	♂ ad.
2 (Type)	do	do	40 "	142 "	90 "	24 mm.	♂ ad.
3	do	do	39 "	143 "	90 "	24.5 "	♂ ad.
4	Chiknulo, Dagelet Is.	3/V, 1920	38 "	146.5 "	89 "	24.5 "	♀ ad.
5	Yakinzan, Dagelet Is.	26/IV, 1920	35 "	144 "	89 "	23 "	♀ ad.
6	do	29/IV, 1920	33.5 "	143 "	90 "	23.5 "	♂ ad.
7	Dodo, Dagelet Is.	16/IV, 1920	40 "	143 "	90 "	24.5 "	♂ ad.

Remarks.—The new subspecies is obviously intermediate between *D. leucotos undulensis* and *D. leucotos subcyrus*. It differs from the former subspecies by the bill being less stout, by the rump less white, by the white spots on wing feathers distinctly smaller, by the throat pure white, and by the black streaks on side of breast distinct, more numerous and wider. From *D. leucotos manijici* and *D. leucotos quelpartensis* it is manifestly distinct by the paler colouration of the entire body.

The subspecific name is given in honour of the collector.

***Parus major dageletensis*, subsp. nov.**

Characters.—Similar to *P. major minor* T. & S., but the edge of all gills has no olive colour; outer edge of primaries clear slaty bluish and that of the apical parts whitish; the white band on wing and the edge of secondaries

almost pure white and broader; the olive-yellow patch on upper mantle somewhat in restricted area; entire lower parts, except the median black patch, pure white only very obsoletely tinged with greyish on flanks.

Type.—Collection of N. Kuroda. Adult male. Nanyōdō, Dagelet Is. or Matsushima in the Sea of Japan. April 22, 1920. Collected by Mr. Y. Takahashi.

Measurements:—

Loc.	Date	Total length	Entire Outlines	Wing	Tail	Tarsus	Sex
(Type) Nanyōdō, Dagelet Is.	22/IV, 1920	140 mm.	11 mm.	75 mm.	69.5 mm.	10.5 mm.	♂ ad.
Yakinzan, Dagelet Is.	25/IV, 1920	133 "	10.5 "	67.5 "	62 "	18.5 "	♀ ad.

Parus varius saisiuensis, subsp. nov.

(Plate V, fig. 5).

Parus varius varius (nec. T. & S.), Kuroda & Mori, "Tori," Vol. II, No. 7, p. 87.

Characters.—Very similar to *P. varius varius* T. & S. from Hondo, but with the broad frontal band continued down the side of neck including lores and ear-covers, and with the longitudinal streak on occiput and nape as well as the irregular spot below the black throat generally paler and much whiter; tarsus average longer (tarsus 20.5–21 mm. instead of 16–19 mm.).

Type.—Collection of N. Kuroda. Adult male. Kamrasan, Quelpart Is. or Saisintō, one of the southern islands of Corea. June 2, 1918. Coll. by Mr. Y. Takahashi.

Measurements:—

Loc.	Date	Bill culmen	Wing	Tail	Tarsus	Sex
Kamisan, Quehart Is.	20/V, 1918	13.0 mm	78 mm.	54 mm	21 mm.	♂ ad.
do	25/V, "	13.5 "	77.5 "	54 "	—	♂ ad.
do	28/V, "	12.5 "	76 "	55 "	21 mm.	♂ ad.
do	1/VI, "	13.0 "	76.5 "	55 "	20.5 "	♂ ad.
(Type) do	2/VI, "	13.5 "	80.5 "	59 "	21 "	♂ ad.

Remarks.—Variation in colouration among the five specimens examined were as follows, *viz.*, the colour of the broad frontal band, side of face and the longitudinal streak on occiput varies from very pale colour (almost white) to rather deep colour (pale rufous). This variation is commonly observed among specimens of the typical form from Hondo.

***Parus varius utsurioensis*, subsp. nov.**

(Plate V, fig. 2).

Characters.—Resembles *P. varius nannyi* Kuroda or *P. varius oustoni* Tjima, but it differs from the former by the bill much longer and stouter, by the upper parts distinctly tinged with olive colour and by the broad frontal band, side of face and the longitudinal streak on occiput and nape as well as the irregular spot below the black throat much paler. It differs from the latter by the somewhat shorter bill, by the upper parts less deep olive, and by the paler area on head and face of distinctly paler colour instead of chestnut.

Type.—Collection of N. Kuroda. Adult male. Yakuzan, Dagelet or Utsurikō in the Sea of Japan. April 25, 1920. Coll. by Mr. Y. Takahashi.

Measurements:—

Loc.	Date	Entire culmen	Wing	Tail	Tarsus	Sex
Yakuzan, Dagelet Is.	20/IV, 1920.	15 mm.	81 mm.	56.5 mm.	20 mm.	♂ ad.
do	23/IV, "	15 "	81 "	58 "	22 "	♂ ad.
(Type) do	25/IV, "	15 "	79.5,	55.5 "	20 "	♂ ad.
do	27/IV, "	14.5,	81 "	58.5 "	20.5 "	♂ ad.
do	27/IV, "	15 "	77.5,	53 "	20.5 "	♀ ad.

The single female examined by us is of smaller dimensions than the males, the upper parts less olivaceous tone and the under surface of body pale greyish rufous like female of *P. varius oustoni*.

Remarks.—Variations in colouration among the five specimens examined were observed to amount to the following, *viz.*: the olive colour of the upper parts varies from very deep tone to a very pale one and the pale colour on head and face also varies from paler to deeper, but the latter variation is not so very marked as in the case of *P. v. satsumensis*. The new subspecies is very remarkable one and one of the largest forms of *P. varius* from Japan, Corea and the neighbouring islands.

***Chloris sinica clarki*, subsp. nov.**

Chloris sinica ussurianus (error) Clark, Proc. U. S. Nat. Mus., Vol. 38, p. 65 (1910).

Characters.—Resembles *C. sinica kawarabibe* (Temm.), but distinguishable from it by the under surface of body including the throat, side of head and ear-coverts distinctly tinged with yellowish, especially on the centre of breast, by the edge of wing, the patch on remiges and under tail-coverts brighter yellow, by the back rather paler, and by the shorter wing and tail.

Type.—Collection of N. Kuroda. Adult male. Dōdō, Dagelet Is. or Matsushima in the Sea of Japan. April 19, 1920. Coll. by Mr. Y. Takahashi.

Measurements:—

Loc.	Date	Entire cubimen	Wing	Tail	Tarsus	Sex
Dōdō, Dagelet Is. (Type)	19/IV, 1920.	13 mm.	85.5 mm.	54 mm.	18 mm.	♂ ad.
Shadō, Dagelet Is.	22/IV, "	12.5 "	86 "	54.5 "	18 "	♂ ad.
Dagelet Is.	29/IV, "	12.5 "	82.5 "	51 "	17.5 "	♀ ad.

The single female examined by us is of smaller dimensions than the males, the general colouration much resembles that of females of *C. sinica kawarabibe* from Japan and *C. sinica ussuriensis* from Corea, but distinguishable from the former by the paler colour of the body, and by the abdomen and under tail-coverts almost white. It differs from the latter by the larger size, and by the absence of any yellowish tinge on the under parts.

Remarks.—The new form is obviously intermediate between *C. sinica kawarabibe* and *C. sinica ussuriensis*. The male differs from that of the latter subspecies by the decidedly larger dimensions of body and by the yellow patch on remiges less bright. In general colouration it is much nearer to the latter than to the former or *C. sinica*

minor. The last two forms—*kawarubiba* and *minor*—are much darker than the new form as well as *ussuriensis*. Clark (*l. c.*) mentioned that *C. s. ussuriensis* (error) [*ussuriensis*] Hartert was very common on Matsushima, July 28, 1906, but it probably belongs to the new form.

The subspecific name is given in honour of Mr. Austin H. Clark.

長門佐々並地方の鳥類の初鳴期「渡り」及び蕃殖に就て

兼 常 彌 富

長門阿武郡佐々並村地方に於ける鳥類に關し余が調査の結果を報ずべし。

初 鳴 期

ウケヒスの初鳴期

明治三十四年三月十四日	晴	暖	同	四十年三月十三日	晴
同 三十五年二月二十二日	晴	暖	同	四十一年三月五日	快
同 三十六年二月二十七日	快	晴	同	四十二年二月二十五日	晴
同 三十七年三月七日	晴		同	四十三年三月八日	晴
同 三十八年三月九日	晴		同	四十四年三月十二日	快
同 三十九年二月二十八日	晴		同	四十五年三月五日	晴

大正二年二月二十八日 晴

同 三年三月十日 晴

同 四年三月十五日 晴

同 五年三月六日 晴

十一月下旬乃至十二月上旬暖かき小春の頃微聲にて鳴く。

ホトトギスの初鳴期

明治三十六年五月二十三日

同 三十七年五月十二日

同 三十八年五月二十五日

同 三十九年五月十八日

同 四十年五月十六日

同 四十一年五月二十三日

同 四十二年五月十二日

同 四十三年五月二十七日

クワタコウの初鳴期

明治三十九年五月十七日

同 四十年六月五日

同 四十一年五月二十三日

同 六年三月二十二日 晴残雪あり

同 七年三月二十九日 晴、雪あり

同 八年三月十三日 晴

同 四十四年五月二十日

同 四十五年五月十二日

大正二年五月二十九日

同 三年五月二十三日

同 四年五月十八日

同 五年五月二十四日

同 六年六月一日

同 七年五月二十日

九月十二日以後に於て鳴聲を聞きたるこゝなし、五月乃至六月・七月頃鳴聲最も甚だしく、晝夜の別なく鳴聲を放つ。

同 四十二年五月十四日

同 四十三年五月二十五日

同 四十四年五月三十日

明治四十五年六月七日
 大正二年五月二十日
 同 三年五月二十二日
 同 四年五月十八日
 九月下旬頃迄鳴聲を聞く、梅雨中殊に鳴聲甚だし。

「渡
 リ」

ツバメの渡來期

明治三十二年三月二十日
 同 三十三年三月二十二日
 同 三十四年三月十八日
 同 三十五年三月十六日
 同 三十六年三月二十日
 同 三十七年三月二十二日
 同 三十八年三月二十五日
 同 三十九年三月十八日
 同 四十年三月二十六日
 同 四十一年三月二十二日
 同 四十二年三月十七日

同 五年六月二日
 同 六年六月九日
 同 七年五月二十七日
 同 四十三年三月十九日
 同 四十四年三月二十二日
 同 四十五年三月十八日
 大正二年三月二十日
 同 三年三月二十三日
 同 四年三月二十一日
 同 五年三月十八日
 同 六年三月二十五日
 同 七年三月二十三日
 同 八年三月十七日

以上は最初日撃したる日を記したるもの

コシアカツバメの「渡り」は前種に比し数日後れて来るもの、如く、去期に際しても前種より後れて去る様なり。

蕃 殖

ウグヒスの蕃殖

明治三十四年五月二十二日 巢立後間もなき雛を見る。

同 三十五年五月二十二日 巢立後間もなき雛六羽を見る。

同 三十六年五月二十三日 巢立後間もなき雛を見る。

同 三十九年四月二十三日 巢發見、四卵あり、五月十二日雛さなり居たり。五月二十二日巢立ちす。

同 四十一年五月十八日 雛を見る。

同 四十二年五月二十日 上。

同 四十四年五月二十五日 上。

大正二年五月二十七日 雛を見る。

同 三年四月二十二日 巢を發見二卵あり。

同 五年五月十六日 雛を見る。

同 六年五月十日 上。

同 七年 八月三日 巢發見、地上三尺五寸の高所にあり、卵四個あり。

前記の例に徴するに蕃殖期は四月下旬乃至八月中旬頃迄を見るを得べし。

キセキレイの蕃殖

明治三十九年六月二十一日 瓦屋根へ構巢するを見る。

同 四十年六月二日 巢中に卵四個あり、石垣間。

同 四十四年五月十八日 同卵五個あり、瓦屋根。

大正二年五月十二日 雛四羽巢中にあり、瓦屋根。

同 四年六月七日 雛居たり、草屋根の空所。

同 六年五月二十六日 雛五羽居たり、瓦屋根。

同 七年五月二十二日 孵化後約五日の雛五羽居たり、瓦屋根の間。

同 年 八月三日 瓦屋根に營業せるを發見し檢するに孵化後十日斗りの雛三羽居れり、翌々日檢したるに二羽死し居たり思ふに炎熱甚だしき爲めに死せるものならん、親鳥は残れる一羽が巢を出て、屋根の上を、飛び歩

くより、頻りに鳴きながら守る様子、然れども遂に之れも死し、翌日地上に落ち居たり。

同 八年四月十一日 瓦屋根に營業を始む。

シジフカラの蕃殖

明治三十三年四月十六日 庭園内梨樹の空洞に營業を始む、四羽。

同 三十五年四月十一日 前年の空洞へ營業を始む。

同 三十六年五月八日 原野栗樹の空洞へ營業し居れり。

同 三十七年四月十日 庭園内梨樹の高所へ、曾て山雀の構巢せしこころある、空洞を吊し置きたるものへ、營業し始む。

同 三十八年四月十七日 同上の吊したるものへ營業を始む。

同 三十九年四月十五日 同上の吊したる空洞へ營業を開始す。

同 四十年四月二十二日 庭園内梨樹の空洞へ營業を始む。

同 四十一年四月二十日 梨樹へ吊したる空洞へ營業を始む。

同 四十二年四月七日 同上の空洞へ營業を爲すを見る。

同 四十四年四月五日 同上營巢を始む。

大正三年四月二十七日 同上へ營巢するを見る。

同 五年四月十七日 同上へ營巢するを見る。

同 六年五月八日 同上へ營巢するを見る。

同 七年五月十二日 同上。

同 八年三月二十五日 同上の空洞を表庭の櫻の木に吊したるものへ營巢を始む。

同 年四月二十五日 検するに八卵あり。

同 年四月二十六日 山地栗の空洞に發見せるものは九卵あり。

附言 此の空洞は毎年營巢雛の巢立せる後、中の巢を除き置きたり以上の例に徴するに殆んど毎年此人工に吊したるものへ營巢せり。

ヤマガラの蕃殖

明治三十四年三月二十四日 樫の空洞(地上十二尺)へ營巢を始む。

同 三十六年五月七日 原野栗の空洞にて巢を發見す、孵化後一週間位の雛五羽居たり。

同 年 五月 八 日 原野栗の空洞へ營巢中のものを發見す。

オホルリの蕃殖

明治三十四年六月五日 巢發見、土の堀り小口、孵化後約十四日位の雛五羽(雄三雌二)居たり。

同 三十六年六月三十日 巢發見、土の堀り小口、四卵あり。

同 年 八 月 十日 土の堀り小口にて巢を發見す、孵化後約十日位なる雛五羽居たり(内雄三雌二)。

同 三十八年五月二十二日 巢發見、卵五個あり、巢は炭焼の小屋の内に吊されたる、湯沸しの蓋の上。

同 三十九年六月十二日 巢發見、構巢中、巢は炭焼小屋の外壁、笹を立て列ねたる側面の凹所。

同 四十二年六月二十日 巢發見、土の掘り小口、孵化後約五日位の雛三羽居たり。

コゲラの蕃殖

明治三十四年四月八日 巢發見、袖の枯木へ構巢中、五月十日檢す卵五個あり。

同 四十二年四月十八日 巢發見、雜木の枯木へ構巢す、卵三個あり。

大正八年三月二十七日 梨の枯木へ構巢すべく、穴を穿ち始む。

同年 四月 十二日 殆んど完成す。

附記 此地方に産するものは恐らくキワシッコゲラならん(黒田記す)。

ホホジロの蕃殖

明治三十五年五月十八日 原野の樽の山樹に營巢を始む。

同年 五月 二十二日 田畦畔の繁れる小樹に營巢を始む。

同 三十六年五月二十五日 巢立せる雛を見る。

同 三十七年六月三日 原野の松の枝に營巢し居るを見る卵五個あり。

同 三十九年五月二十二日 巢發見す、松の枝にあり雛三羽居たり。

大正六年六月十八日 原野小松の枝に營巢せるを發見、雛四羽居たり。

同 七年 七月 九日 原野ウツギの株間に營巢せるを見る、雛三羽居たり。

同年 七月 十二日 原野小松の枝に營巢せるを發見、卵四個あり。

カケスの蕃殖

明治三十三年四月二十八日 森林中の樵の約一丈餘の高所に營巢せるを見る、卵六個あり。

大正七年五月十日 巢立せる雛を見る。

同年 五月 三十一日 同上。

同年 六月二十日 杉の木に營巢せるを發見、地上約二丈餘、孵化後約五日の雛五羽居たり。

コノハヅクの蕃殖

明治四十二年五月十二日 空家の天上の上に營巢せるを發見、雛三羽居たり。

大正五年五月二十五日 空家の軒に吊したる鶏の巢箱に營巢す、二卵あり。

メジロの蕃殖

明治三十四年五月二十八日 櫛の枝(地上二丈餘)に營巢せるを見る。

同 三十五年五月十日 櫛の枝(地上約一丈餘)に構巢せるを發見。

エナガの蕃殖

明治三十七年四月二十一日 雜木の枝に營巢す、卵あり。

同 四十年五月七日 杉の枝に營巢せるを發見す。

同 四十二年四月十八日 杉の枝に營巢中を見る。

同 年四月二十六日 松の枝に營巢せるを見る。

大正三年五月二十二日 雜木に營巢せるを見る、雛あり。

スズメの蕃殖

明治四十四年五月三日 瓦屋根の間へ營巢を始む。

同 年 六月十三日 同上營巢せるを見る。

大正二年六月一日 同上營巢せるを見る。

同 七年四月二十七日 同上營巢せるを見る。

ツバメの蕃殖

明治三十二年三月二十七日 構巢を始む、五個産卵。

大正四年五月十八日 巢立せる雛を見る。

同 五年五月十五日 巢立せる雛の集り居るを見る。

同 六年五月十三日 巢立せる雛の集り止まれるを見る。

同 七年五月二十日 雜木に營巢せるを見る卵三個あり。

同 年 五月十六日 同上營巢せるを見る。

同 年 五月二十九日 同上營巢せる巢を見る卵三個あり。

同 八年 五月五日 巢立せる雛を見る。

同 三十三年四月十日 構巢を始め四個産卵三個孵化す。

同 三十四年四月三日 營巢を始め四個産卵。

化せず)

同 三十五年四月五日 營巢を始め五個産卵。

同 四十五年五月六日 營巢を始め六個産卵。

同 三十六年四月十二日 營巢を始め三個産卵。

大正二年五月十日 營巢を始め五個産卵。

同 三十七年四月十五日 營巢を始め五個産卵。

同 三年 四月五日 營巢を始め五個産卵。

同 三十八年四月八日 營巢を始め六個産卵。

同 年 五月二十七日 營巢を始め五個産卵。

同 三十九年四月五日 營巢を始め五個産卵。

同 四年 四月十二日 營巢を始め四個産卵。(内一個解

同 四十年四月十二日 營巢を始め六個産卵。

化せず)

同 四十一年五月七日 營巢を始め五個産卵。

同 五年 四月二十二日 營巢を始め六個産卵。

同 四十二年四月二十三日 營巢を始め五個産卵。

同 六年 五月一日 營巢を始め四個産卵。

同 四十三年六月二十日 營巢を始め四個産卵。(二番仔な

同 七年 五月十六日 營巢を始め五個産卵。

らん)

同 八年 四月七日 營巢を始め五個産卵。

同 四十四年四月十八日 營巢を始め五個産卵。(内一個解

右は一部落内に於ける最も早きものにより調査せしものなり。

コシアカツバメの蕃殖

本種に就きては實驗したるこの手記なきも、前種に比し稍後れて、營巢するなり、四月下旬乃至五月上旬頃より、早きものは營を始め、八月下旬頃育雛中のもの數多あり。

カハセミの蕃殖

明治三十九年五月十八日 赤土の堀り小口にある、小さき穴に頻りに出入し居るを見る。

大正三年五月八日 同上を發見し檢したるに、三卵あり。

ヨタカの蕃殖

明治四十三年六月二十三日 原野雜草の間にあるを發見す、二卵あり。同 四十四年七月五日 同上を發見す、二卵あり。以上は余が多年日誌調査したることを、一々手簿に記載して置いたものの中から抜載したのである、記載したる事項は極めて不完全ながらも佐々並地方の鳥類の、初鳴期、「渡り」、蕃殖の一端を知る事が出来やうと思ふのである。

宮城縣下に於ける二三鳥類の蕃殖期

熊 谷 三 郎

宮城縣の西北部なる若柳町を中心とせる平原地域と伊豆沼・長沼附近の湖沼地域に於て觀察し得たる鳥類中蕃殖するものは比較的多数にして六十種内外あり。されども盡くを明らかに知るを得ざりし故先づ最も普通に知り得たる數種の鳥類の蕃殖期を次に報告せん。

田中牛 *Troglodytes sinensis* (Gmelin).

本種の構巢及育雛期は次の如し。

- (一) 大正四年七月 一日 迫川畔竹藪中に笹葉にて扁形に造れる巢中帶着白色の卵一顆を藏する巢あり。
- (二) 大正五年七月二十九日 一巢中二雛あり巢立未し。
- (三) 大正五年八月二十八日 巢立せる雛一羽を捕ふ。

ササコ牛 *Turdoides strickus amurensis* (Schrank).

本種の蕃殖期は次の如し。

- (一) 大正五年五月十二日 川畔の杉の木のの上に樹枝を連搬するを見る。
- (二) 大正五年八月二十四日 田圃にて雛(巢立後)一羽を捕ふ。

(三) 大正六年八月二十八日 巢立せる雛三羽を見る。

ウグヒス *Hortetis cantans cantans* (F. & S.)

本種の「囀り」を聞くは三月中旬乃至四月上旬頃にして其の時季の平均温度は六・六一八度なり而して七月下旬乃至八月上旬頃まで其の「囀り」を聞くを得但し山地域にては八月下旬頃まで「囀り」を聞く

「囀り」ヲ聽キタル日	平 均 温 度	停 鳴 期	平 均 温 度
大正四年四月十三日	九・八	大正四年七月二十九日	一九・五〇
大正五年四月十一日	一〇・〇	大正五年七月七日	二〇・三〇
大正六年四月十日	七・六	大正六年七月二十五日	二七・五五
大正七年四月八日	五・九	大正七年七月二十日	二一・三〇
大正八年三月十一日	〇・六	大正八年八月二日	二四・〇五
平 均	六・六一八		二二・五四

カラス類(ハシブトガラス・ハシボソガラスの二種を含む)

此二種の蕃殖期は三月上旬より七月頃迄にして其の期節の平均温度は三・三二五乃至一九・一三度なりき。

樽巢ヲ初メタル日	平 均 温 度	育 雛 最 晩 期	平 均 温 度
大正四年三月十日	一・四五		
大正五年四月七日	二・四五		
大正七年三月十一日	一・七〇	大正六年六月二十二日	一八・七五
大正八年三月九日	七・七〇	大正七年七月五日	一九・五〇
平 均	三・三二五		一九・一三

スズメ *Passer montanus sibiricus* Temminck

本種の構巢を始むるは二月下旬にして巢中に雛を見たる最晩は九月上旬なりき、而して其の気温は平均〇・五乃至二四・六八五度なり又保温のためにや十月頃羽毛等を巢中に運ぶを見る。

構巢ヲ始メタル日	平 均 温 度	育雛ヲ見タル最晩期	平 均 温 度
大正四年三月七日	三・八五	—	—
大正五年三月八日	一・七〇	大正五年八月二十五日	二四・二五
大正六年二月廿三日	(一) 二・一〇	大正六年八月三十日	二五・四〇
大正七年二月廿四日	一・五五	大正七年八月六日	二五・三〇
大正八年三月五日	一・一五	大正八年九月六日	二五・八〇

ヒバリ *Amica correntis japonica* I. & S.

本種の「囀り」を聞くは二月下旬乃至三月上旬にして其の平均温度三・一八度にして秋季に於て再び「囀り」をきくは十月上旬頃にして平均温度一七・三五度なりき、而して第一期の「囀り」は八月上旬に於て休む。

「囀り」ヲ聴キタル日	平 均 温 度	二期「囀り」ヲ聴キタル日	平 均 温 度
大正四年三月七日	三・八五	—	—
大正五年三月四日	〇・九〇	—	—
大正六年三月十四日	六・四〇	—	—
大正七年二月二十六日	四・一五	大正七年十月十一日	一八・〇〇
大正八年三月四日	〇・六〇	大正八年十月九日	一六・七〇
平 均	三・一八	—	一七・三五

キセキレイ *Motacilla cinerea melanope* Pall.

本種の營巢及び産卵期は次の如し。

- (一) 大正五年四月十七日 構巢中なるあり。
 同 四月二十二日 本日より産卵し始む。
 (二) 大正五年五月三十一日 構巢中なるあり。
 同 六月三日 産卵し始む。
 同 六月五日 三顆卵を藏す。
 (三) 大正六年五月三日 營巢完了せるあり。
 同 五月六日 三顆卵を藏す。
 同 五月十日 二顆加はり五顆を藏す。
 右の五例に據れば四月中旬より産卵し始め雛のある巢を見たる最晩例は七月下旬なりき。

ムクドリ *Spodiops tr. cinereus* (Temm.)

本種の當地方にありて越冬せるものは常に樹洞又は家屋内に棲息しその最も早きは三月上旬乃至中旬頃に至れば構巢材料を運ぶを見る、而して其の卵及び雛を見たるは次の如し。

- 大正四年四月十五日 卵一顆ある巢あり。
 同 五年四月二十二日 三顆卵あるあり。
 同 年四月二十七日 四顆卵あるあり。
 同 上 五雛ある一巢あり。
 同 六年四月二十四日 二顆卵あるあり。
 同 四年五月十一日 二雛及一顆卵ある一巢。
 同 年六月八日 五雛ある一巢。
 同 上 二顆卵ある一巢。
 同 七年六月十五日 四雛あるあり。
 同 年七月一日 二雛ある一巢。

同 八年六月十八日 巢立せる雛一羽を挿ふ。

これに據れば四月中旬より七月上旬に至る間に蕃殖す。蕃殖後には五羽十羽と次第に群をなし七、八月の候にても數百の群を見ることあり。

コムクドリ *Sturnia violacea* (Bohlaert).

本種は當地方にありては多からず僅に左の例を知るのみ。

大正四年四月十五日 樹洞中一卵あり。

大正七年七月十六日 巢立に近き雛三羽あるあり。

ホノヅロ *Kathartes cinerea* (Bonaparte).

本種の巢卵を見たるは次の如し。

大正四年五月二十六日 五顆卵ある一巢。

大正六年六月四日 雛巢立せるを挿ふ。

大正六年五月二十八日 三顆卵あるあり。

セウロセキレイ *Melanitta alba grandis* Sharpe.

本種は當地方に常棲するものにて左の期日に於て巢卵を見たり。

大正四年六月十五日 巢立に近き五雛ある一巢。

大正六年六月二十五日 五雛の巢立せるを見る。

大正五年四月二十七日 營巢中なるあり。

コカハラヒワ *Chloris sinica minor* (T. & S.)

本種の蕃殖期は次の如し。

(一) 大正四年四月二十七日 構巢完了せるあり。

(四) 大正六年五月二十七日 抱卵中なるものあり。

(二) 大正五年五月二十四日 構巢終りたるものあり。

(五) 大正七年六月十五日 巢中にて雛の鳴聲す。

(三) 大正八年四月六日 構巢始めたものあり。

(六) 大正七年六月二十二日 雛三羽本日巢立せるあり。

(七) 大正四年七月 八 日 雛巢立せる多し。

(八) 大正七年七月 十五日 雛 (巢立後間もなきもの) 一羽を捕ふ。

これに依れば三月下旬より八月頃までに及ぶ。

カハセミ *Atedo isipida bengalensis* Grm.

本種の蕃殖期は次の如し。

(一) 大正五年四月二十二日 一顆卵ある一巢あり。

(二) 同年 四月二十六日 巢中卵なし。

(三) 同年 五月二十六日 雛巢立に近き五羽あるあり。

オホヨシキリ *Acrocephalus cradinaucis orientalis* (T. & S.)

本種の構巢・産卵及育雛期は次の如し。

(一) 大正四年六月 十五日

a. 一巢中五顆卵を藏す。

b. 一顆卵ある巢あり。

c. 竹藪中に構巢を始めたるあり。

(二) 大正五年六月 十二日

d. 五顆卵を藏せるあり。

(三) 大正六年六月 五日

e. 一顆卵ある一巢。

(九) 大正八年八月 二十日 雛五羽巢立せるあり。

(四) 同年 五月三十一日 二顆卵ある一巢あり。

(五) 大正四年七月 二日 雛四羽巢立に近き一巢。

f. 營巢を始めたるあり。

g. 孵化後五日目位の雛三羽ありたる巢。

(四) 大正七年六月 十七日

h. 構巢完了す卵なし。

(五) 大正八年六月 十三日

i. 孵化後四日日位の雛四羽ニ無精卵一顆を藏するあり。

これに據れば五月下旬頃より構巢を始め六月に至れば普通に見出さる而して育雛の最晩例は次の如し

大正七年八月 六日 巢立に近き三羽の雛ある巢あり

(六) 大正六年七月 九日 巢立せる雛三羽を挿ふ

これに依れば四月よりの七月に至る。

キジバト *Streptopelia turtur orientalis* (Latham).

本種の鳴聲をききたる期日は次の如くにして二月下旬乃至四月上旬なりき、而して十月中旬頃まで鳴聲をききたる。

大正五年	大正六年	大正七年	大正八年
四月七日	三月十四日	二月廿八日	三月廿三日

而して卵及び雛を得たるは四月上旬より十二月上旬に至る間なりき(但し蕃殖期はドバトの場合も含む)

バン *Talimula chloropus parvipes* Blyth.

本種の巢卵及び雛を採集せるは次の如し。

(一) 大正六年七月二十九日 巢立せる雛三羽。

(三) 大正六年六月二十日 四顆卵ある一巢。

(二) 大正四年六月二十七日 三顆卵ある一巢。

これに依れば六・七月の候が蕃殖期なり。

以上の諸例に據れば最も早く蕃殖を始むるはスズメにして早くも二月下旬頃より始む、而して最も晩くまで蕃殖を營むものはハト類(キジバト・ドバト)にして十二月上旬に至る。其の最盛期は四月より七月の候にして大くは此の期間に於て蕃殖を終へ八・九月に及ぶものは極めて少なし、次に最も長期に亘るものは、ハト類の二百五十日内外に及ぶを最としスズメの二百日、ツバメの百三十日、カラス類の百二十日之れに次ぎ、オホヨシキリの六十日内外にて終るは最も短き例なりき。

アチバヅクの蕃殖の經過

法 學 士 川 口 孫 治 郎

池 村 平 太 郎

大正八年五月廿七日、若松市藤の木字赤嶋なる神社跡に、フクロウのやうな鳥が夜分頻に來り鳴く、この報を得た。

同廿八日午後三時、木村好郎、同繁敏兩君に案内されて其附近を觀察し、シ井の老樹二本、ホソバガシの老樹一本が鼎立せるに大凡の見込をつけ、更に其細葉樫の老樹の地上約五間なる太き枝の切斷面に、若しや上向きの空洞のあるに非ずや、と考へ、試に登り驗せしに、果して斜上向けに空洞あり、縁より僅に一尺許にして底部に達す。其處に何等の設備なく唯一顆の白色球形の卵を發見す。卵の短徑三、五センチメートル、長徑三、六センチメートル。

廿九日午後五時過ぎ觀察、卵二顆、こなれるを確かむ。登攀の際突如として親鳥逃げ去る。背後の林中に入る。アチバヅクラし。

三十日兩觀察者共に觀察に行くを得ず。

三十一日午後四時半、實驗、卵三顆、こなれるを確かむ。初め觀察者等は今日は大方四顆、こなり居るなるべしと豫想せしに、聊か意外の事實なりき。此實驗の爲梯子を架けし際、其響に依りて巢洞より親鳥飛出で背後の椎の密林に入る。アチバヅクに相違なきを確かむ。卵を熟察する中、親鳥其隱匿所より飛來つて觀察者を攻撃すべく掠めて翔ける。此時意外にも傍のシ井の老樹の枝に雌親の靜止し居るを發見す。觀察者樹より下る。兩親鳥相前後して例の密林に入り、巢の方向に面して、互に相近き枝にこまる。兩鳥間の距離遠からず殆んど同一レンズに收め得べき程度なり。従つて雌雄の形態を自然のままに比較觀察するを得。雌は稍小型にして總じて褐色に富み、雌は比較的稍大型にして頭背部は色濃く胸腹部の褐白の地合比較的鮮かなるを認む。(「鳥」第七號頁八九參照)而して雌は開眼し居れども雄は眠むさうに眼を殆んど閉ぢ居るを認む。

右觀察後、觀察者等が巢の所在を去り、樹陰より双眼鏡にて観察中、十分以内に親鳥歸來入巢す。

六月一日午後四時、觀察、卵四顆となる。

二日同様、乃ち暫く此後の繁登觀察を見合はす。

十日午後五時、觀察にかゝる、梯子を樹幹に任せども其響に依りて親鳥飛び出づ。仍て繁登にかゝる、雌親攻撃し來る、小枝を振りて其攻撃を制しつゝ、漸く巢孔に近づくや、雌親急に孔内より脱出し、雌雄交互に攻撃し來る。攻撃より返りて枝にこまれる雄は明に開眼し居るを確かむ。去る三十一日に於ける同雄の眼の殆んぞ閉ぢ居たりしに比して無度の稍々異なるを認む。此事實は抱卵の經過するに従ひ雄親の愛情も亦濃厚となり自づこ防禦に努むる度合の増し來れるを示すものに非ざるか。此日彼等が觀察者を攻撃し來る毎に、附近のツバメ集り來りて、チキーチキーと叫びて其附近を掠め翔ける。觀察者去れば、兩親鳥鎮靜し、ツバメ等亦分散す。

十二日小雨午後五時半梯子を架く。雌親早や隱匿所より飛來つて觀察者を攻撃す。彼等の攻撃は主として後趾にて行はるゝもの、如く、單衣を透して内部に擦過傷を負はしむる程度なり。漸く巢に接近するに及び始めて雌親巢内より飛出づること例の如し。觀察者等交代して熟察中、雌雄共に交互に攻撃し來れども、雌よりの攻撃度數稍々減じ雄よりの攻撃著しく頻繁となるを認む。

十七日午後五時半、幹の半はを登る頃、雌親攻撃し來ること早や二回。次で雌親巢より飛出で、交互に觀察者を攻撃す。巢内の卵四顆依然たり。但し、卵の表面汚れて斑狀となる。之は巢底の朽木の細末粉の附着せしものなり。觀察終りて降り始むること僅に五尺、最早や攻撃し來らず。全く降れば兩親鳥背後の密林の枝にこまり、雌は羽蟲をこりつゝあり。雌雄共に明に開眼し居るを認む。十八日午後五時半、今日は或は孵化し居らずやと多少期待しつゝ登り驗す。樹下にては細竿の先きに手巾を着けて之を挿つて親鳥の攻撃を牽制す。依然として卵なり。

十九日午後五時、池村のみ觀察に行く。異狀なし。

二十日午後五時二十分共に觀察、矢張卵のまゝなり。親鳥の攻撃あれども其度合著しからず。下より發聲牽制せば攻撃の中途より引返すまでに緩和さるゝに至れり。漸次に觀察者に敵意を抱くことの減じたるものゝ如し。

廿一日細雨午後四時半、川口のみ觀察に行く。異状なし。

廿二日午後五時半共に觀察す。尚ほ卵のまゝなり。木村(繁敏)が四五日前より心付きしところに依れば、夜に入りて一羽が何物が餌食を運び來り他の一羽に與ふるを認めしが、昨夕の如きは巢孔内に入りて、與ふるやうにて、與へ終りて巢孔の縁より直下に降りて後、斜に地上數尺の空を掠めて飛ぶを見しこあり。

廿三日午後四時半過池村のみ觀察に行く。未だ孵化せず。

廿四日共に赴く。到着に先だつ數分、雄親東方よりへびを銜へ來りて巢の所在の近傍に落す。長さ二尺餘にして墜落に怯ます活に動く兩木村等之を捕へんとして石孔内に逸せしめたりといふ。雄鳥の携帶運搬力の一斑を推すに足る。此日尚ほ卵のまゝなり。

廿五日午後四時半登り檢す。幹を敲けども尚ほ雌親出でず。漸く怪みつゝ、巢の側壁部を敲く。始めて飛出づ。或は既に孵化せしかこ一同の期待に反して依然卵なり。此日雄親毫も攻撃し來らず雌親亦然り。

初め觀察者等は此鳥の體軀の割合其他の事情を考慮して、之を何の鳥についての經驗に徴して、此鳥は抱卵後十七八日位にして孵化するならむかと豫察するに、今や廿四日を経たる今日尚ほ何等變化を認むるを得ず。

斯く雌親が根氣強く抱卵を續け居る以上は、別に懸念する必要なきに拘らず、聊か氣遣はしげに感ぜしめらるゝに至れり。

廿六日午後五時四十分、川口のみ木村(繁敏)と觀察にかゝる。二顆始めて孵化し居るを發見す。白色の綿毛ムクムク立つ。嘴は鉛色、蟬膜は黄色、眼は閉ぢたるまゝ、喙の邊黒み勝なり。ビイ／＼と微かに鳴く。孵化せし殻片は巢内に存せず。又未だ孵化せざる二顆には異状なし。去る六月一日抱卵にかゝりし後滿廿五日にして孵化し始めしを確かむ。斯日親鳥共の觀察者に對する攻撃の鈍りしを認む。

廿七日午後三時半過ぎ共に觀察す。親鳥一回も攻撃し來らず。雛三羽となる。其一は綿毛尚ほ濕氣を帯びて他の二雛の側に力無げに横はる。孵化後程經ざるものらし。但し卵殻なし。残りの一顆尚ほ孵化せず。

廿八日午後共に觀察す。親鳥の攻撃唯一回ありしのみ。雄親近傍のシ井の樹にこまりて監視し、雌親容易に巢孔内より出でざるこ

ミ例の如し。矢張り三雛一顆のまゝなり。

廿九日午前十時木村のみ觀察す。残りし一顆も遂に孵化せしを確かむ。

七月四日午後四時、雨中觀察、雌親濡れて飛翔常の如くならず。巢孔を出て、斜に下りつゝ飛去る。斯日、雛のみ開眼せり。巢内にトゲアリ出入して、雛の糞を運べるを認む。雄親のみ觀察者に攻撃し來る。

六日午前十時木村巢底にタガメの前翅の片を見出す、哺育材料の殘片なるべし。

午後四時三十分相共に觀察す。異狀なし。雌親例に依つて容易に出でず。觀察者巢縁に手をかくるに至つて飛出づ。親鳥の急に飛出でし爲、雛共不規則に散在し、細く開眼し、五十秒餘を経て漸く半ば開眼す。最長雛は翼の羽軸生じたれき最幼雛は唯綿毛のみ。長幼の著著し。巢孔内生臭さし。甲蟲の肢の破片一つ、雛の側に在り。雛の糞は稀に巢内に存す。多くは親鳥の持去るものらし。親鳥等が觀察者に對する攻撃著しく鈍ぶし。

九日午後四時半共に觀察に赴く。巢内一雛を留めず、一同痛く打撃を感じず。本觀察開始以來、了解ある援助を寄せられつゝありし持主木村竹吉氏も深く憂慮せられ、昨夜さる造船所の職工某竊に雛を取出し飼養し居れる由を探知し、即ち觀察者二人と同道して、其者の住所に至り、事情を諭して、再び全四雛を盡く返さしむることゝなし、斯夜木村氏の手にて無事巢内に復歸せしめたり。

十日午後五時四十分共に觀察す。各雛共に明に開眼し、ポツポツと響く小聲を發す。更に觀察者の顔の接近するを嫌ひて嘴をブチーブチーと鳴らし、互に押合ひつゝ逡巡して隅に寄りかゝる。全體羽毛葡萄色を呈し、周囲の黒褐色に對して著しく目立たず。糞一個あり、蝸牛狀に渦巻き、大さ大豆の稍々小さく且つ押潰せし程度のものなり。褐色部と黒色部とあり。尚ほ巢孔内には、チツチセミ、カミキリムシの一種なごの破片あり。餌食の一部なるべし。

十二日午後五時川口のみ觀察す。カハホリ類の足一本、アブラムシの翅の如き片一つ。

十四日午後七時四十分、兩觀察者は月明の夜を徹して觀察すべく定地位に就く。此時刻は其夜の給餌の開始期なるが故に、極めて頻繁に出入するを認む。午後八時迄二十分間に十八回運餌す。多くは飛翔せる小昆蟲なり。其中タガメの飛べるを捕へて一旦枝にミ

まりて之を痛めて後に巢に運ぶを認む。其後暫く運餌を休む。唯一回低くフルーウミ鳴く。

午後八時三十五分、月、東の方、山の端に現はる。九時五分親鳥再び運餌を始む。同廿分、卅分、三十五分、五十分、五十五分、同十時十分、廿分、廿三分、同十一時二十分（此時月極めて朗なり）、五十分、五十五分、巢に通ふ。斯くて十五日に移る。

午前〇時廿五分入巢す。頓がて縁に出てゝこまる。雄來りて餌を渡す。程なく共に去る。四十分、何物が稍々大なる物を運び入る洞内にて雛の震え聲す。三分を経て飛び出づ。斯く長く巢内に留るは稀にして、出入は概ね短く、通常は入りて後長くとも一分以内に出づ。四十五分、入りて出づ。

一時四分運び入る。同十分餌を銜へずして入る。一分を経て出で其後出入絶ゆ。

二時廿分、三十分、出入す。夜氣冷たく濕氣の泌み渡れるを覺る。四十五分、五十五分出入す。

三時二十分來り遊ぶ。全く給餌の働をなさず。

著しく冷氣を感じ四顧漸く曉の近づきしを覺ゆ。四時十分なり。親鳥尙ほ少しも働かず。同廿三分入巢、例に依つて程なく出づ。廿四分低くホイノ、三四聲、三十分、三十一分、三十二分、入りて程なく出づ。終りの二回も巢内にて雛の鳴く聲す。三十五分何物かを含み出す。四十七八分頃より著しく頻繁となり五十四分に至る間、専ら池村の觀測にて十七回を數ふ。五十五分に至つてチーセミ鳴き始む。此頃は早や親鳥共巢に全く通はず。

廿二日午前九時川口のみ觀察す。雛共の型に頭を搖かしてギチノ、ミ嘴を鳴らす。

廿三日共に觀察に赴く。稍々後れて午後八時半より九時迄附近を靜察す。夜は暗く親鳥の行動分明せず。

廿四日午前七時四十分觀察、親鳥攻撃し來る。巢内に二雛のみ留る。仍て親鳥の常に隱匿所とせるシ井の密林を觀察して、雄親に近く枝上に靜止せる他の二雛を見出す。胸部の斑粗にて且つ褐色淡く、頭背部總じて親鳥よりも葡萄酒色を帶ぶ。

木村の實見にては、昨午後〇時半頃一雛が附近の櫻の樹に出てこまれるを見出し、近寄りしに、手を觸れしめず飛去れりといふ。即ち本例は廿三日より巢立を始めしものらし。即ち去六月廿六日始めて孵化してより滿廿七日を経しを知る。

午後の觀察を木村に託す。二雛尙ほ巢内に在り。既に巢を出でし他の二雛も夕方に至つて巢の縁に去來す。さまり方拙くして、バタバタ打ちまわすこと多し。熟視するに一の親鳥は既に巢立せし兩雛に咄し、他の一の親鳥は専ら巢内なる兩雛に咄するもの、如く認めらる。(此、項木村繁敏の觀察)

廿五日池村徹憲入院せし爲、川口のみ觀察に赴く。午前七時三十六分、シ井の林に雌親のみこまれるを見出す。巢立せし雛共飛翔力を増して稍々遠く移りしが、附近に見當らず。巢に登り驗せしに、二雛尙ほ在り。左右に頭を搖かすこと例の如く觀察者の接近を忌むもの、如し。此時親鳥一回も攻撃し來らず。

午後四時木村のみ登り驗す。親鳥攻撃し來る。巢内の兩雛に異狀を認めず。夕方以後に既出の雛共巢の近傍に出現す。飛翔漸次に巧みこなれるを認む。

廿六日午前七時五十分觀察、雛一羽のみ巢内に残り。権の林を觀察するに、雌親及び二雛を見出す。他の一雛及び雄親の所在分明せず。

午後五時觀察、巢内空しくなれるを認む。夜禽なれど晝間にても巢立するものなるを知る。木村、此夕方親子六羽相交りて飛翔するを認む。

廿七日午後七時半觀察にかゝる。四境閑靜なり。念の爲に登り驗す。親鳥一回攻撃し來る。但し巢内を覗くに勿論空し。此空巢に接近する觀察者をば親鳥が、何の動機に依つて攻撃せしか、分明ならず。或は二ヶ月に亙る過去の陪勢か。親鳥頗に低くフルー、フルーと咄く。

巢を距る六七間なるシ井の枝間に夕蜘蛛が廣く網を張れるあり。其附近を産卵以後殊に孵化以後、親鳥共盛に縱横に飛翔しつゝありしに、今日迄少しも此クモの網を破らず、常に避けつゝありしは注意に値す。

午後八時頃まで兩親と共に四圍林間より出現し、賑かに古巢所在の木立を中心として飛翔するを認む。

因に云、本實驗の前年即ち大正七年初夏にも此附近に巢くひしにや毎夜盛に徘徊し、夕涼みの人々の中に肩を搔かれし者もありた

りこいふ。

實驗に徴するに、飛驒のアナバツクよりも人を憚る度合の薄きは確なり。聊か意外の感なきに非ず。

彼が餌食の處分につき巧に其趾を使用すること(「鳥」第七號參照)は勿論、餌食の捕獲にも、餌食を狙つて飛び行き、之に接近するや否や、體を起して趾を以て餌食を攫むものなるを、本觀察中、心付くに至れり。

孵卵器で駝鳥の卵孵化

米國マヂソン動物園の看守は、駝鳥の卵を孵化しやうとして、他の小さい卵と一緒に孵卵器の中に入れた、所が孵卵器の中の温度の加減が非常にむづかしく、他の卵には冷くても、駝鳥の卵には熱過ぎること云つたやうな譯で、さうしても成功しなかつた、其處で看守はこれを州立農業大學の鳥類科に相談すること大學では早速一つの孵卵器に駝鳥の卵だけを入れ、駝鳥の體温と同じ温度を保たせて置く、六週間で巧く孵化した、雖は沙漠で自然に生れたものと同様に至極丈夫であるさうだ。(本年十一月十六日萬朝報による)



日本産ガランテウの種名に就て

獸醫學士 内田清之助

ペリカン(ガランテウ)が本邦に稀に渡來することあるは古くから時々記録が残つてゐて確實に知れてゐたが果して何種類のものなるかは不明であつた所が近年臺灣で捕獲された一標本(臺南博物館所藏)及朝鮮で捕獲せられた一標本(李王職博物館所藏)を黒田理學士が調査せられた所に依るに何れも *Pelecanus erythrus* Burch. であつた(動物學雜誌第二十八卷一八二頁及同卷一八九頁参照)。

余は今春沖繩旅行の途鹿兒島に立寄つた際縣廳の濱田徳次氏から同縣下で昨年一羽のペリカンが捕獲され目下志布志中學に標本になつてゐるに云ふ事を聞いたので其詳細を知りたく思つてゐた所同氏の好意に依つて今回茲に掲げた寫眞及詳細の記載

を接写する事が出来た其中心必要の點を摘録するに次の通りである

採集地 鹿兒島縣嚙啖郡志布志町宇安樂安樂川口

採集月日

大正八年

十月初旬

より當地

八三羽來

の十一月

上旬去る

十月十一

日右三羽

の内一羽

捕獲す

食餌

胃中多數



第四十四圖

鹿兒島縣下にて獲られしガランテウ

の小鰓ありたり

測 定 體重一貫九百目 翼の全長左右各四尺(翼長ノ記)

嘴長一尺二寸五分 尾長六寸

載テ缺ク

足 長 六 寸 趾 長 四 寸

尾羽の數 二十一枚 先端二・三寸淡黒色なり

右の記載及寫眞に依るこ

一、翼長一尺二寸五分なるこ

二、上嘴羽毛の生え際は凹狀なるこ

三、尾羽二十二枚なるこ(無論一枚は脱落せるものなるべし)

四、上嘴側面に顯著なる斑點なきこ

が明瞭である即是等の諸點から考へて本種は前二標本と同じく

Talpacotus crispus Bruch である斯く最近捕獲せられた朝鮮臺灣及

九州の三標本が何れも同一種類であるこから考へるこ從來本

邦に渡來せるものは此種類と見て差支なからうと思ふ。

ヤマドリの尾羽に就て

熊谷三郎

ヤマドリの尾羽(中央一枚)に就て調査し得たる結果を左に報

告せんこす、材料は陸前・陸中國産の *Troglodytes sumi pvt-*

ni scutillans Gould なり。

尾羽の長さの節

尾羽の長さは一尺六寸五分乃至一尺六寸内外にして其幅は八分乃至一寸三分内外なり、而して其の長さの節の數及其の一節の長さの平均を調査したるに次表を得たり。

節ノ數	最長		最 短		全長ノ差	節ノ長サノ差
	ノ長サ	ノ平均	ノ長サ	ノ平均		
七	一尺八寸	〇・二六八強	一尺六寸	〇・二六強	〇・二三	〇・〇三二
八	一尺八寸	〇・二四弱	一尺五寸	〇・一九四弱	〇・四三	〇・〇五四
九	一尺七寸	〇・二四七弱	一尺五寸	〇・一七七弱	〇・六三	〇・〇七〇
一〇	一尺四寸	〇・二四〇	一尺六寸	〇・一六五	〇・七五	〇・〇七五
一一	一尺四寸	〇・二一八強	一尺三寸	〇・一〇三弱	〇・一八	〇・〇一六
一二	一尺三寸	—	一尺三寸	〇・一九四強	—	—
一三	一尺六寸	〇・二〇〇	一尺三寸	〇・一八一弱	〇・二五	〇・〇一九

×最長と思はるるものを得ず

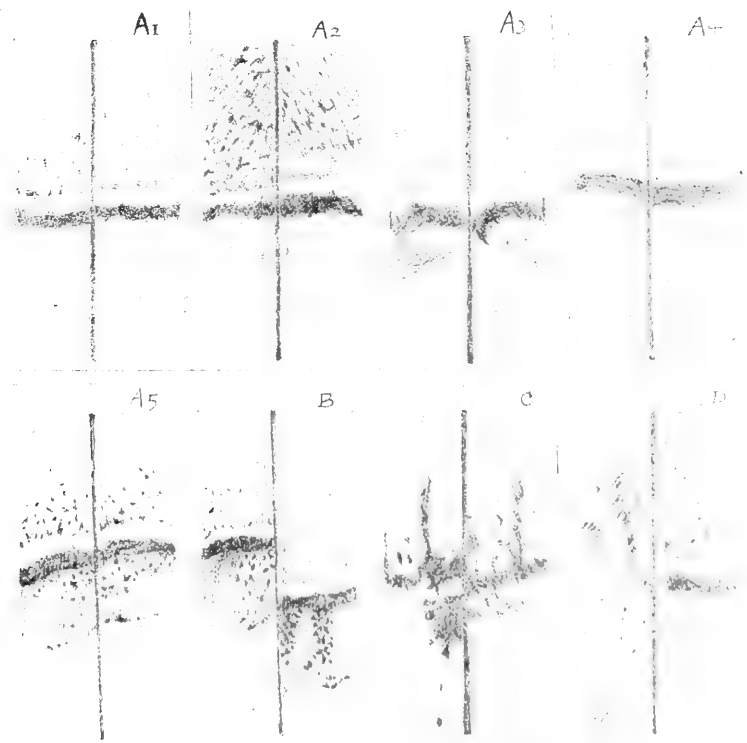
これに依れば長き尾羽には從つて節多く、節と節との間の長さは之に反して短(平均上)し而して其の長短の差の大きさは八乃至十節あるものにして七寸九分乃至四寸三分の差あり。

次に節の數は余が調査し得たる二百四十六個の材料にては七乃至十三の節ありき即ち次表の如し

合 計	節ノ數	數	個
一三	七	六	一〇・四三
一	八	二四	九・七五
九	九	八六	三・四九六
一	八	八一	三・五二
一	四〇	一六〇	一・六二六
一	七	二・八四	〇・八一
二四六			一〇〇・〇〇

本種の尾羽の斑紋は同一地方に産せしものにて色彩の濃淡、斑紋の形状、多少、大きさ等にありては各個的差違を認めらる、而して其の節の形状に就ても一定せず、最も普通なるは竹節狀（A圖）にして稀には交互に生ぜしもの（B圖）あり又は（C圖）に示せし如く斑紋の混雜せるものもあり、尙（D圖）に示せるは雌の雄變せるもの（黒田理學士の判別による）の尾羽の斑紋なり。

余の調査に依れば竹節狀の中にて細別せは次の如



第四十五圖 尾羽の斑紋の變異を示す

(A1) — 正型
 (A2) — 斑紋密なるもの
 (A3) — 斑點は少なく痕跡のみ
 (A4) — は (A3) より更に斑點少なきか又は缺く
 (A5) — 黑色の細點栗色部に散在せるもの

以上の型別と其の割合は次表の如し

D	C	B	A					型別	數	%
			5	4	3	2	1			
一	三	二	三	四	一六	七九	二二	一六〇九		
〇・七〇	二・三〇	一・五八	二・三〇	三・〇七	一・二三〇	六〇・七六				

この調査に依れば普通のヤマドリ尾羽の節の斑紋並に形状は各個的變異にして分類上何等値なきものゝ如し。

鴉類雜記

榎山徳太郎

(一) ナナガフクロウの新分布地



第四十七圖
 ナナガフクロウ腹面



第四十六圖
 ナナガフクロウ背面

(北千島産)

ナナガフクロウ *Ninox japonica pallasi* Burt. は邦領内にては稀種

に屬し、作て故村田庄次郎氏が樺太よりの蒐集中に只一個ありたるを「樺太動物調査報告」中に掲げられしが（同書四八頁及び附圖第七圖版第三圖大正三年）其後再報ありしを識らず、然るに今回偶々北千島幌筵島産 大正九年二月十五日採集の一標品を檢するを得たれば茲に掲ぐる事とせり。標本は性不明なれど充分に完全せる成鳥なるは確實なるが如く各部の長さ左の如し。

嘴長一八・五、合線二四・五、翼二三三、尾一六七、跗蹠二〇・五耗。

今回の標品は「樺太動物調査報告」の圖版に比する時は體の上面の暗色部は稍淡色、前胸部に不明瞭にして幅狭き暗色帯を通じ其下方に接し幅廣き淡色帯を認む、後胸部以下の下面に塵斑を有する事挿圖の如し、此等は總て該圖版より一層判然たるものなり。尙該圖のものは虹彩を黄色に畫きあれども今回の標品の採集者に従ふ時は淡褐色なりと謂ふ。

(二) 朝鮮産フクロウは何れの亞種歟

ドレ、サー氏は朝鮮及び滿洲に *Stricruulensis* Pall. を産する由を記されしも黒田理學士高著「鮮滿鳥類一斑」附録朝鮮鳥類目錄中には掲げらわらず只同書滿洲鳥類目錄にドレ、サー氏の云はれし事に對して「若し正しとせばその學名は恐らく *Syrnium uva*

uua (*chank*) を以て示すべきものなるべし（後者は *Syrnium nikolskii* *Burtoni* を以て示すべきものなるべし）（後者はシベリア東南部及び樺太島に産する種類なり）に附記せられしのみ。今回朝鮮産のフクロウ種を入手し此れを檢せしに色彩に於ては北部本州産のもの——即ちエツフクロウ *Stricruulensis jingoo-*



圖類(淡色)
ハロク
十フク
四産産
朝鮮後
朝越(昔
右左
テテ
向向

uua (*chank*) より尙一層淡色なるも測定上キタフクロウ(新稱) *Syrnium nikolskii* *Burtoni* に比し翼短かくして二九五——三二八耗あるに過ぎず、即ち翼長にありては寧ろエツフクロウに近き觀あり、或は此地方産のもの、總てががる傾向(淡色)にして翼短かき

事)を具有するものこそは新亞種として分つべき價值を充分に認むるも目下標本に乏しきを以て遽かにこれを斷定し得ざるを遺憾とす。因にキタフクロウにありては翼長大にして三三〇

—三五〇耗に達す。

朝鮮産フクロウ類三標品各部の測定を左に掲ぐ(總て乾標本に據る)

所藏	番號	産地	採集年月	會合線	翼	尾	跗蹠	成幼	測定者
田	4535	朝鮮	Jan, 1920	mm 33.5	mm 295	mm 2.3	mm 41	Ad.	田
電學士	1317	咸鏡道	"	"	307	215	37	Ad.	榎山
榎山	1318	"	"	32	318	252.5	39	Ad.	"

備考——朝鮮半島に普通に見る種類はクラークフクロウ *Syrnium aluon* (Clark) にして前掲のものに比し翁は遙かに暗色、下面には縦線の他に尙蠕蟲狀線を有し、翼は短小にして三〇〇耗を超えざる等の諸點を異にせるを以て區別至難ならず。

(三) エゾフクロウの南方分布

エゾフクロウ *Syrnium japonicus* (Clark) は埼玉縣下に迄達する事あるは嘗て報ぜし處なるが(鳥)第八號一八三——一八四頁・大正八年)頃日千葉縣下千葉町附近にて採集せられし一標品を見たり。故小川弘太郎氏がシロフクロウを同縣下船橋附近より

報ぜられたる事(鳥)第三號三二頁・大正五年)に照しても此附近迄北部本邦産の鴉類の南下するの事實を疑ふの餘地なきもの如し。

(四) 樺太産シロフクロウの一標品

都下某標本店々頭に總身殆んき純白色を呈せるシロフクロウ



第四十九圖
樺太産シロフクロウ(老鳥?)

Syrnium nigricans L. の一標品あるを見、其産地を問ひしに樺太真岡産にして本年一月中旬獲られしものなりと、餘りに珍らしき「ステューヂ」なるを以て乞ふて其寫眞を撮る、該標品は挿圖の如く

極めて美しきものにして恐らく老鳥なるべしと信ず。從來かゝる「ステージ」の邦文記載見當らざるを以て右の標本に就き其羽色を詳記すべし。

體各部の羽毛は殆んじ純白色にして左の諸部にのみ些しく他色を混ず、即ち右側耳羽の上側に添へる數翮の先端近くに極めて小なる褐黒點各一個(合最大六・五耗)。左側耳羽の同箇所には二——三翮の内瓣先端近くに極めて微かに此れを見る。右翼々角の一翮に一小褐黒點あり(二×一耗)。同小雨覆二翮に帯褐色なる各一小點を見る、一は内瓣先端近くに、他は内瓣に小外瓣に極めて小、兩者は連続し居れるものなり。左翼小雨覆にては唯一翮の内瓣にのみ帶褐色なる一小點を有す。左翼初列風切第二羽にありては先端より約一五耗程離れたる内外瓣に斜に不整形圓形なる小褐點各一個、同外瓣中軸に添ひて極めて幅狭き一小帶褐部有り。第二羽は第一羽に同じきも點斑は稍淡色且内外兩點の位置斜角ならずして併置せり。次列風切及び三列風切各羽中には或は極めて小なる一點より三點迄を見るも多數なるもの程其色淡くして淡「セピア」色を呈す。右翼初列風切第二羽は左翼の夫れに比し點斑稍濃色にして且外瓣中軸に添ひ四個内瓣先端近くに一個を見る(内瓣のものご外瓣先端第一斑ご

は併列す、其等は總て左翼初列風切第二羽のものに比し稍濃色にして暗褐色を呈せり。

因に稍乾きたる標本にありては嘴は極めて微かに暗褐色を帯びたる淡「コロニー」黄色なり。而して該標品各部の長さ次の如し。

嘴峯二八・七、合線約四二、翼三八七、尾三六、跗蹠四五、中趾(爪を除く)二五・五、中趾の爪三二耗。

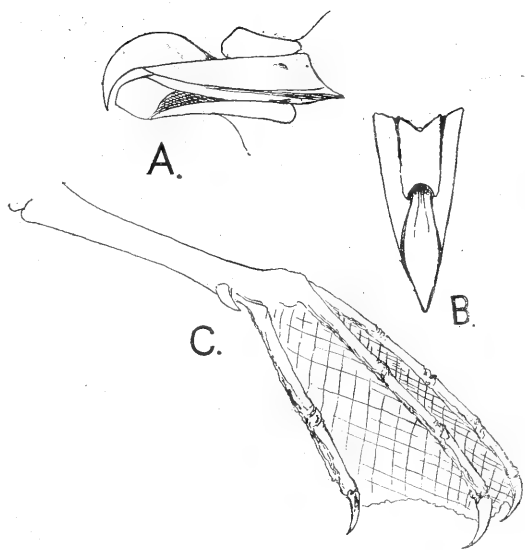
フルマカモメにつきて

中村 正雄

去る二月二十七日當地(越後柏崎)の海岸より一海鳥の屍體を拾ひ得たり蓋し前日の暴風により所謂北海怒濤の厄に逢ひしものなるべし腹中より魚鉤の出でしを見れば或は他に死因のありしならんかとも思はる黒田長禮氏の考定によりて其のフルマカモメなる事確定せられたれば左に其の記述を試む。

翼は狭長にして其長二九、四(セ、メ以下同じ)第一風切最長なり尾長一三・六、尾羽數十四枚にして圓形なり、嘴には此科特徴の管鼻を有し口角より先端まで四、五、嘴峰三、六、口蓋の兩側に鋸齒狀の板齒あり跗蹠五、〇、中趾長爪共六、五、爪長一、二而し

て爪の發音内側に偏し中趾の爪に於て著し而して其の内趾には一關節中趾には二關節外趾には三關節あり遞次其數を増す、體色は頸頸部灰黑色、背及兩覆は薄茶色の斑を雜ふ。拾得當時は



第五十圖 フルマカモメ
A 嘴ノ側面 B 嘴ノ上面 C 左脚(乾標本ノ寫生)

海水に濕潤せし爲め黒褐色に見へしも乾燥するに従ひ其羽色を確むるを得たり下腹面は破損せし故不明なり然るに幸にして當地七八年前に獲たる一完全の標本の保存せらるゝものニ比較す

るを得たり此種は體の羽色前記のものに能く一致し下腹面は灰色なるを認め得たり但し其種名にはウミバトを記されありたり蓋し其の管鼻より來りし誤ならんか。

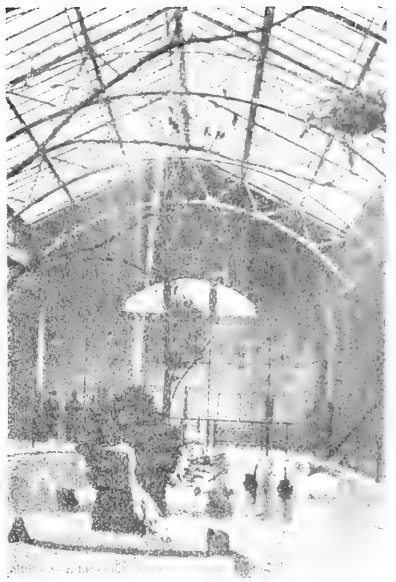
而して此種の學名につきては *Fulmarus glacialis glacialis* は邦領内に産せざるを以て *Fulmarus glacialis rostr. psii* Cassin の方正なるものこは黒田氏の新説なり。

猶今冬三月の初めに於てコウミスズメ (*Simoniphynchus pacificus* (Farrall)) の漂死體をもち二三拾ひ得たり前年ウトウ (*Cerorhinchus monocerata* Pall.) ウツアウム (*Phalaris pusilliventris* (Pall.)) エトロフウミスズメ (*Simoniphynchus cristatus* (Pall.)) をも獵師の手によりて得たる事あり、寒流の爲ならんか北寒帯の鳥類を當地に見得るは蓋し分布上面白き事なるべし。

リンコンパーク飼養水禽名

在シカゴ 水野 誠

余は一昨年暮渡米し當シカゴ市に滞在中なるがリンコンパーク建物内に掲載せる鳥類の名稱を寫し取り本誌に報告せん考へなるも未だ充分の時を得ず。單に水禽名丈けを列記せば左の如し。第五十一圖の水禽檻中の種類なり。



Key to Flying (c. 99)

第五十一圖

リノホンパーク飼養水禽舎

1. *Herring Gull* (Common on Lake Michigan).
2. *Gannet* (North Atlantic coast. Winters from N. Carolina to Gulf of Mexico and on coasts of N. Africa).
3. *Sooty-bird or Salsinga* (Tropical America).
4. *Double-crested Cormorant* (Eastern N. America. A summer resident in Ill.).
5. *European Pelican*.
6. *White Pelican* (Temperate N. America. Not an uncommon migrant in Illinois).
7. *Brown Pelican* (Atlantic coast of Tropical America).

8. *Mallard Duck*.
9. *Cayuga Duck Duck*.
10. *Sybil's-billed Duck*.
11. *European Widgeon*.
12. *Pallid Duck or American Widgeon* (N. America).
13. *Japanese Teal*.
14. *Green-winged Teal* (Whole of N. America. A common migrant in Illinois).
15. *Bronze-winged Teal*.
16. *Cinnamon Teal* (S. & S. America).
17. *Chestnut-breasted Teal*.
18. *Ruddy Sheldrake*.
19. *Typpian Goose*.
20. *Shoreline Duck* (N. & Central America).
21. *Pintail Duck*.
22. *Bahama Duck*.
23. *Wood Duck or Tree Duck* (Temperate N. America).
24. *Mandarin Duck*.
25. *Ked-crested Partridge*.
26. *Redhead Duck* (N. America in general).

27. *Cathartes Duck* (N. America at large).
28. *Red-billed Pochard* (S. America, northward to Chili and S. Brazil).
29. *Ring-necked Duck* (N. America).
30. *Australian Black Duck*.
31. *Upland Goose* (S. America).
32. *Snow Goose* (N. America).
33. *Blue Goose* (Eastern N. America).
34. *Bar-headed Goose*.
35. *White-fronted Goose* (Central and N. America).
36. *Canada Goose* (Formerly resident in Mississippi Valley).
37. *Black Brant* (Summers in Alaska, winters in California and the Gulf States).
38. *Bernacle Goose*.
39. *Black-bellied Tree-duck* (Found in the U. S. only in the southern parts of Texas).
40. *Pudown Tree-duck* (Range-Texas and Louisiana, casually to Kansas and Nevada; winter in Mexico).
41. *White-faced Tree-duck* (S. America and Africa).
42. *Semipalmated or Magpie Goose*.
43. *Mate or European Swail*.
44. *Black Swan*.
45. *Rosette Spoonbill*. (N. and S. America from Texas, Louisiana Florida and Georgia south to Patagonia).
46. *White Ibis* (Tropical America. Sometimes seen in S. Ill.).
47. *Scarlet Ibis*. (Northern S. America).
48. *Snow-necked Ibis*.
49. *Great Blue Heron* (N. America in general. Common summer resident in Ill.).
50. *Snowy Heron or Little Egret* (Gulf states. Sometimes strays to north after the breeding season).
51. *Louisiana Heron* (S. Atlantic and Gulf States).
52. *Little Blue Heron* (S. Atlantic and Gulf States wanders to north after the breeding season).
53. *Black-necked Night Heron* (Northern S. America. Breeds in Ill.).
54. *Coot* (Practically all of North America).
55. *American Magpie* (Western North America east to the plains and north to Alaska).

アウムの習性

荒木彦助

(A)キバタン(黄巴旦) (*Vantha galericus*) 全身が白色で、冠羽の十

二枚は鮮麗な硫黄色、耳羽に當る邊が淺黄色を呈するも、生殖期には羽毛が白粉を多量に分泌するので、稍其色を薄くなすやうである。翼の内側は黄色で、嘴と脚は黒く、大きな鳥ほごの鳥です。世間に普通なれば、都會の人は能く知つて居る。私は其雌雄を久しく飼つて見ました。此鳥は動作が快活で、例令異性のものでも、一所に寄せますと、すぐ弱い方をいじめます。私の所有しますのは、子飼にしたものらしく、尤も能く馴れて、雄は五種の言葉と、口笛と、鶯の鳴音をまね、又雞の聲も現物同様にやります。是は餌で仕込まれたので、其好みの物を見せるに記憶したゞけの言語をしやべりますが、若し食べ物をやらないと、腕白な子供のやうに、餌器の中にある粟を撒き散す事を知つて、人こまらせに悪戯をします。其雌は一年位の時でしたが、最初の一語を記憶するに困難で一ヶ月費した。しかし其後は忽ち彼よりも一年位の老鳥が、まね得るだけを二週間に記憶してしまいました。幼鳥のためか雄よりも、能く騒ぎ立てる癖があ

ります。

(B)タイハクアウム(大白鸚鵡) (*Myiophanes*) 全身は純白で、冠

羽は平常頭に伏せて、一向そんなのがあるとも見えませんが、驚た時や、敵を威嚇する場合、又は兩性互に歡心を示すやうにするに、夫の上に逆立てまして、恰も花の如くに、立派であります。

翼の内側、尾羽の内面が硫黄色で、嘴は其體がキバタンに少し小さく見えるのに反して、丸味を帯びた頑丈な構造で、脚も黒く心持大きい、是れは高く、低く、優く、強く、大きく、小さく、異種多様の聲を發し、鏝で切るやうな、或は叩くやうな鳴方もする、朝夕は殊に騒しいが、非常に靜な時も多い、棲木を攫みながら、前後左右に身を動して、舞踊のやうな舉動をする、(テナガダルマインコウも同じ動作をする)此場合には常に様々の鳴聲を發します。私の飼養するのは、まだ言語はまねませんが、こちらの呼び聲で、何か食物を與へられる事だけは、能く理解します。鳥自身でも聲を發すれば、食物をもらへると云ふ事もわかり、一種の聲を發するのです。是はキバタンもちがつて大邊に雌雄の睦ましい鳥で、四季を通じて同棲を好みます。若し別居させるに、如何にして一所にならうかとする、一方を放しますれば他方へも、亦た異つたキバタンにも寄りますが、

庭へ飛び下りても、常住してゐる架上を慕ふて歸る、キバタンは決して斯様ではありません。雌雄の仲は能くても、時に弱い方の嘴を捻つて、いじめる事もあります。互に羽虫を取合つて、強い方の鳥は相手に虫取をやらせ、應じない時は直に嘴を捻つてです。私のはキバタンで、雌雄を冠羽の長短と鳥體の大小で區別することが出来ましたが、タイハクは未だ其區別に自信がありません。しかし之れも大小と、耳後から後頭の背に向た方へ、稍羽毛が發達して冠羽の兩側に展び、鳥體に大小がある、普通體の大きく、頬羽の長い方が、下になつて居るので、一寸雌らしくもあるが、亦反對な生殖の動作を試みやうとする時もあります。就巢の念があつて、營業しやうとして居ますが、大きな設備を與へませんので、昨年は失敗しました。本春も今に同様の状態を見受けます。彼等は小さい箱で満足して、繁殖の念を生じますけれど、産卵をしないので、特別の設備は致しません。

(C)アカビタヘムデアウム(赤額無地鸚鵡) (*Cuculus sanguinea* 全)

身は表面が白色で、額が赤色になり、兩眼の周圍が分銅型の鼠色になつた、裸出部を有して居ます、頭と頸の上部、下腹部の肛門の附近は、下地が紅色の綿羽を持つて居る、私は幼鳥を飼

ひました、至極人馴れて、棲木から放せば、直に飼主の方に寄り附きます、嘴は脚共に小さくて白い、他のアウムに比べて、木をかちることなく、従つて破壊がありません。性質は甚だ氣弱く、他の鳥が寄り附ても、如何にも恐しがりがやうがひさい、雛から人手にかかつて育つたので、飛ばうとも逃げやうとも、決してしないのでした。

(D)コバタン(小巴厘) (*Cuculus schhura*) キバタンの有色部の色彩が濃くなつています、鳥體の小さいだけ、舉動も性も小さく、特に興味を引く所はありません。身長は鳩位の鳥ですが嘴が丈夫ですから、可なりの破壊力を有して居ます。雌雄の不明白な二羽を飼つて、之れも相當の觀察をしました。夫れが、食物を利用する時は、嘴を双方から合せて、上下に振ります。夫れで居るのです。是れは子供の鳩笛に似た、單純の鳴音を發します。總じて飼養せられたのは、降雨には水浴を好みます。見へ外出しやうと騒ぎ立るやうです。

京都御所御苑内に於ける夏の鳥類

藤木常隆

大正八年八月中に京都御所御苑内にて目撃したるもの左の如し。温度は京都測候所の報告に依るもの。

日	天候	最高温度	観 察 せ し 鳥 類
一	雨	八一・三	キジバト、ドバト、スズメ、カラス類、ツバメ、フクロウシ
二	晴	九一・二	同上
三	同	九一・二	同上、カハセミ
四	同	八九・六	御苑内にては一日と同様の鳥類を目撃し尙ほ仙洞御所御苑内にヒナガ、ムクドリ、カハセミ、ヒヨドリ、ヒバリ、ゴキサギ、セグロセキレイ
五	同	八七・四	御所御苑内にてホ、ジロ、御苑内にては一日と同種類を見る
六	同	八八・五	エナガ他は一日と同様
七	同	八八・二	一日と同様
八	同	九二・七	同上
九	同	八八・五	ゴキサギ他は一日と同様
十	同	九一・六	一日と同様
十一	同	九一・二	同上
十二	同	九三・五	同上
十三	曇	八九・八	同上
十四	雨(強)	七八・一	同上

十五	曇	八四・九	同上
十六	同	八八・七	ゴキサギ他は一日と同様
十七	雨	八一・一	同上
十八	曇小 あり	八八・〇	一日と同様
十九	晴	八七・六	同上
二十	晴	八四・七	一日と同様
二十一	同	八八・三	同上
二十二	同	八八・七	同上
二十三	同	九〇・三	ムクドリ他は一日と同様
二十四	同	九一・二	一日と同様
二十五	同	九一・〇	同上
二十六	同	九〇・〇	同上
二十七	曇	八八・七	エナガ他は一日と同様
二十八	晴	九一・四	同上
二十九	同	九〇・七	一日と同様
卅	同	九一・四	同上
卅一	同	九一・〇	ゴキサギ他は一日と同様

尚ほ四月には欄内に記入せし外一種の小禽を見たるも名稱判

明せず其形状色彩恰もマキノセンニウに似たり。以上觀察せし種類は殆んど四季を通じて棲息するものゝ如し。

イスカ本州にて蕃殖せる魮

叔山徳太郎

先頃群馬縣吾妻郡嬭戀村附近を旅して歸つた都下の某標本店主に依れば同地方の小鳥採集者は此地の奥山でイスカが子を引く(雛を育てるの意)と謂つて居るに余に語つた。川口法學士に據れば飛驒の高山附近ではシロハラやウソが盛夏を通じて見らるゝと謂ふ事もあるから前記の地方でイスカの蕃殖する話も其儘信じて誤りなかりさうに思へる。一つ暇があつたら實地踏査に出掛けても見やう、確報は其折に譲り只聞いた儘を珍らしいと思つたから餘白に掲げて置く。

朝鮮産ヲガハコマドリ

森 爲 三

本鳥は朝鮮にて始めて採集せられたるものと思考するを以て形態を記して報告す。

Cyanocitta stuebeli robusta Butorlin 雄 背面暗褐色、腰・上尾筒

稍赤褐色、前頭黒色を帯ぶ。眼先、眼下部、耳羽は黒褐色、肩斑は淡褐色なり、風切羽全部、中央尾羽の二枚及其他の尾羽の外半は黒褐色にして中央尾羽の基部少許及其他の尾羽の内半は橙紅褐色なり。腮、喉は中央白色(稍黄味を帯ぶ)其の兩側に著しく目立つ青色あり。胸部には著しき三横帯あり、上部喉に接する部は橙紅褐色、中部青色、下部黒色にして羽縁灰色なり。腹部の上部と境する邊には又橙紅褐色の横帯あり。夫以下は汚れたる白色、脇羽、下尾筒は淡紅褐色なり。嘴及脚は黒褐色にして虹彩は褐色なり。

雌 雄に比し背面の色淡く、下面喉の兩側及胸部に青色、橙紅褐色の部分無くして黒褐色なり。胸部と腹部との境邊は淡橙褐色以下の腹部は白色なり。脇羽は汚れたる淡褐色、下尾筒は淡赤褐色なり。

體の測長 雄翼長二寸五分、尾長一寸八分、跗蹠九分、嘴峯四分
雌同 一寸四分、同 一寸八分、同 八分、同 四分

採集 大正八年十月十八日京義線水色驛附近の漢江江畔

觀察 本鳥はオホヨシキリ・コヨシキリ・ノゴマ・シマアブラジ等と共に水邊の葦或は灌木叢林の間を轉々徘徊し食をあさりつゝあるを採集せしなり。胃中に小蟲・穀類等存せり。

筑前鳥信

脇山三彌

大正八年九月二十四日朝メボソ一羽硝子障子に嘴を打付けて傷き居たるを廊下にて捕ふ前夜二十五燭電燈を室内に點じ置きしにメボソ先生白玉山表忠塔之間違へて障子に衝突し嘴を傷け鮮血嘴を染めて紅嘴の如し脳震盪を起して飛ぶこゝ能はず廊下を歩みつゝあるもの老婆に捕へられ嘴の紅色なる愛らしき鳥にて籠に入れて餌を與へられてをりしなり。メボソなるかムシクヒ類なるか手に取りて調べ見んせしときお彼岸の中日殺生は禁物なりとて老婆に取り返へされて隣家の樹林中に放たれたり老婆は是れより直ちにお寺詣りの事。

十一月十日屋後の畑中にモズの喧しく鳴くを聞く十一月十一日畑の中の櫻樹の棘(新しき芽)にヒオドシテフの磔にせられあるを見るモズの喧しく鳴きし跡には何か仕事を爲してをるものあり今年初めてモズの鳴聲を聞くヒオドシテフは未だ全く死せず惨酷なるはモズなりけり。

狩獵天狗の垂涎地たる縣下糸島郡今津半島は愈狩獵地となりしよし宗像郡大島も亦狩獵地となりし旅順の狩獵狂等は今頃

ヒシクヒ及鴿の攫取に狂奔してゐるならん鴿は山七面鳥と稱するに坂かず鳥肉中の最美味なるもの如し。或は後年に到らば九州地方にも渡來するに到らんかと思はれ玄界灘を横ぎりて今津半島に少憩する様になるかも知れず或は若し狩獵家が細心注意をなせば鴿の分布地は瀨洲・朝鮮・筑前となるかも知れず野雁云ふ語は何より山來せるにや昔時鮮満を知らざる人にもノガンを知れるにより其九州又は長州邊に渡來せしことあるべきを想像せしむるなり然らば將來に於ても亦渡來するなるべし。沙鷄は飯塚博士の關係のものこれも亦ノガンと同じく北九州の地に渡來する時期あるならんを考ふ。

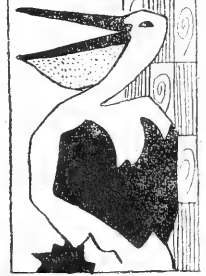
コシアカツバメの巢にスズメ

營巢す

兼常彌富

昨年七月下旬長門佐々並村々役場廳舎、二階軒天井の裏面に營巢し始めた、コシアカツバメの巢が、未だ七分通り出來上つた頃、雀が來つて遂に之れを追ひ退け、雀が其の跡を占領して頻りに材料を運び、産卵、育雛した。コシアカツバメは其れ切りに全く來なくなつたのである。

質疑應答



一 質疑者 宮城縣 熊谷 三郎

問 一 鳥類の「渡り」の理由として(一)食物の關係(二)蕃殖の目的(附)蕃殖の目的を達するに適當なる氣候風土の關係並に氣候の變化に對する體質の關係にあるべしと思考す如何なるものに御座候や。

答 鳥類の「渡り」の理由は食物の關係が最初の原因にて同一地方に定住しては食物の充分の時期に不充分の時あり(主として北方)故に「渡り」をなして食物の豊富なる地方に赴くものなり、然し現今にては候鳥は食物の關係のみにあらず古くよりの「渡り」の習性が本能的に經續し一定の期節には南北に「渡り」をなす。若し蕃殖の目的なりせばその同一地方に定住してもよきことなる故之れは直接の關係なきことならん。現今は本能的に毎年同様に行はれ時として多少の早遅あるは温度の變化其他氣象

上の變化に左右せらるゝならん。體質の強弱も直接に關係あるべし。

二二三 質疑者 大分縣 上 泰 治

問 二 標本として鳥卵の保藏法。

答 先づ鳥卵の中央に小なる一つの鑽孔を穿ち之に細き管

を挿入して卵液を吹き出して空卵となすべし。此空卵を綿を敷ける小箱に入れ箱の蓋にガラスを張るべし。成るべく一腹の卵を一箱に收むるを可ます。こは比較をなすにきに使なるが爲めなり。箱内にナフタリンを入れ置く方可なり。蓋し匪卵後のものにして卵内已に變化をなし居るときは單に管にて吹きしのみにては空卵ならずこの場合には細き針の先端に小鉤あるものにて卵内の胚鰭を引掛けて出すべし。これは訓練を要し卵を破損せしめ易し。茲に注意すべきは兩極に孔を決して穿つべからざることなり。若し之れをなすときは卵の長徑を測ることを得ず即ち標本としての値なきものとなる。

問 三 多くの場合ヒバリの一巢中の卵一個孵化せざるものあるは如何なる譯なるや。

答 恐らく其二個は無精卵の爲めなるべし。

四 質疑者 埼玉縣 高野 利治

問 四 鳥卵の長徑及び短徑を測定するには如何なる道具が便

利なるか、又重量(多くは小鳥の卵)を測るには如何なる種類の秤量器が最も便利なるか(卵のみならず小鳥の體重をも測定し得は甚だ便なり)。

答 鳥卵を測定するには測徑器 (caliper) を用ふるを可

す。此器には種々の形のものあり。重さを測るには皿坪(二百匁位迄)が最も便利にして小鳥なれば大抵のもの、重量を知ることを得るなり。

五 八 質疑者 東京 梶山徳太郎

問 五 *Turdus laevis* (B. nuptae) 与 *Turdus prasinoceros* Swinhoe

とはシノニムなりや。

答 質問の通りシノニムなり。即ちアカマシラサギ(カラ

サギ)の學名としては *Turdus laevis* (B.) なり。

問 六 コカリガネの邦領内の分布地並に其學名、該種に *Fusca cythropsis* L. を用ひて可なる様なるも如何なるものなら

ん歟。

答 此種の邦領内にて現今知らるゝ採集地は北海道、本州

(陸奥小河原沼、常陸鹿島、横濱)及び朝鮮にす。學名は

質問の通りにて可なり

問 七 *Bonasa* 屬の基型種名

答 基型種名は *Bonasa orientalis* なり

問 八 ルリカケスをウケス屬より分つことは如何なる屬名を用ふべきか。

答 ルリカケスの屬には *Lalotia Reichow* を用ふるべし。即ち學名は *Lalotia rubri B. nuptae* となすことを得。

(以上八件黒田長禮回答)

行かへりこもかしこも旅なれや

くる秋ごごにかり／＼こなく

よみ人しらす

なるみがた沖にむれるるあぢむらの

すだく羽風のさはくなる哉

中宮權大進仲實



□表紙寫眞説明 寫眞中最も前方(右向)なる一羽はヨシガモシ
ヒドリガモシの自然に生じたる雜種 (*Kan-ta fureta* × *Mura*
yaudayu) 雄成鳥にして大正九年一月廿三日東京府下羽田鴨場に
て捕獲せられ現今東京赤坂福吉町に飼養中のものなり。此雜種
は「世界の鴨」六三頁に記載せるものと全く同一にして只一層完
全なる生殖羽のものなり。同鴨場にて三回目には獲られし稀品に
して三者の測定左の如し。

採集年月日	嘴峰	翼	尾	跗蹠	性
明治四十年三月廿二日	四二耗	二五五	九四	三八	♂生殖羽
大正三年十月十日	四三	二六〇	九〇	四〇	♂夏羽
大正九年一月廿三日	四一	二六〇	八四	三九・五	♂生殖羽

右の如くにして何づれも六乃至七年目毎に獲られたるを知る。
即ち極めて稀なる雜種なり。

此雜種の外寫眞内に現はれたる白色のものはナキアセルの白

變種(形マガモより稍小)、前向の一羽(嘴の先端淡色)はカルガ
モ左向の二羽(一羽は白味多く一羽は暗色に見ゆ)はヒドリガモ
の雌雄なり。最も遠くに不判明に現はるゝ小形のものはシマア
ズの雄なり。大正九年四月八日撮影、黒田記す。

□新著紹介 「實驗廿年養鳥秘訣」(佐藤磯吉著)實驗廿年を銘を
打つてある丈け内容も充實して居るのは確かな處、此點は本書
を読むものをして非議を謂はしめないだらふと思はれる、が併
し此本の著者は整い學術云々を些し計り振廻し過ぎた嫌ひが無
いでもない、一層の事實實驗廿年は矢張り實驗廿年丈けの内容に
して置いて學術的の事は全く抜きにして欲しかつた、そうした
方が丁度此本の中の挑戰的な處や缺點や紙數も減じた上却つて
實際の價値も尙一層あつたらうものをと聊か残念に思ふ。さう
せ著者から逆怨みを受ける事でもあらふから書中の短所を摘發
する事こしやう、さもないとかういふ向きの本はさうさう鳥學
專攻者にはかり讀まれるものでないから此本も學名を列舉した
り稍學術めいた事を記してある以上、學術書の一部を誤まられ
て此本の眞價でない處の學名等を其儘鵜呑みにして仕舞ふ人が
全く無いとも謂ひ得まいから。

大體此書は校正がしてあるか如何か疑はしい、だから學名其

他に誤所(敢て誤植と謂はぬ)が非常に多い、之が全書中を通じて大なる缺點であつて殊に學名等を取扱つたものとしては頗る輕卒と謂はねばならない。次に各種の項下に掲げてある學名は大半誤りだと謂ふも過言でない寡くとも完全なのは唯一部である、著者は誤植と遊けられるかも知れぬがそれにしては又あまりに夫れが多過ぎる勿論「萬國動物命名規約」第十三條——人名より導來せられたる種名は花文字を以て書き初むる事を得れども他の凡ての種名は小文字を以て書き初むるものとす——に據る誤りも大分に多いけれど此等も假借なく誤りの内に含めた。此本の著者自身も分類學者だとは自認して居まいし又此く謂ふ評者もさうは思つて居らない、だからかう謂ふ事を殊更謂ひ度くはないけれど著者のあまりに分類學上に迄手を延して大言を放つから數矢を報ひる事とした。即ち書中菱食雁の項に「或學者は此を二種に別ちて大菱食、小菱食と云ふは甚だしき誤りにして決して二種に區別するものではない」(二六頁)と公言して居られるが著者も反證をば舉げて居らぬ、次は鶴雉の項に「學者は此を區別して腰白鶴、腰赤鶴の名を附して居るが(五六頁)とあるが腰白鶴は、ミあれ腰赤鶴及び前記の小菱食に到つては恐らく著者自身が命じた和名ではなからうか。フォームサン・トリー・パートツ

ヂ(最後はパトリックの誤植であらふ)と謂ふ恐ろしく長い名の項に「臺灣では此を深山竹鳩と稱して居る」(一七頁)とあるけれどミヤマテウケイは鳥學者の命じた標準和名であつて臺灣では普通に廣くアンカトウケイを用ひて居る即ち脚竹鷓でなければならぬ。銀鳩の項には「或る學者は此の鳩を白子鳩の變種と稱して例へば孔雀に於ける白とか、鶴に於ける白と同一の意味に解して居られる。著者は此の見解を絶対に否定するものである。彼が澎湖島に澎湖鳩と稱して此の銀鳩が無數に棲息して居る事を未だ御承知なきか。元來變種と云ふものは、決して多く野生するものではない。白子鳩の變種などと云ふ人には白七面鳥は青銅色の變種であるかと御尋ねたいのである」(二八頁)尙「如何となれば此の白子鳩と銀鳩と交配すれば出来たものはすべて銀鳩になる。白色の勝つのは其の種類が白子鳩の變種でない事を證明して居るのである(中略)もし白子鳩の變種であらば出来るものは白子鳩でなければならぬ」(二九頁)と全く此説は滅茶滅茶であつて根底が無いとも謂へやう、變種對原種の例證として共に訓養變種である處の七面鳥を引張つて來るに到つては全く論外であつて又著者の謂つて居られる白子鳩は代々小禽商の籠の中で生れて居る訓養變種の白子鳩を意味して居られるのは極めて明白な事實である。澎湖島のものですら輸入後蕃殖した

家禽であつて野生の種類ではない。原種に似た變種ミ白色變種ミ掛け合はして偶々原種に似ないものが出來たミ謂つて白色變種は原種ミ同一種でないミ謂ふ理論は成り立たぬ實際其飼養せられた親鳩がぎの位白變種の方に片寄つて居つたものかも解らぬから。茲に特に一言添へて置くが飼養變種のジュズカケバト(著者の謂ふ白子鳩)ミギンバトミの雜交兒は必ずしもギンバトでない、雌がジュズカケバトである場合は却つて大半がジュズカケバトになつて仕舞ふ、だから前の様な説は全々打毀す事が出来る。此點は生憎ミ(著者に取つて)評者も經驗を有して居る——但し廿年はやらぬが——であるから充分に反論を御贈りする事を敢て辭せない。

以上は分類に關係した點であるが尙ほ其他の場合にあつて氣付いた處を掲げて見るミ「子が二十幾年間の實驗は、今迄の學者先生の調べた殆んど總ての鳥の卵子の數なるものを見事に打ち壞して居る。自然に棲息して居る時はいざ知らず、人手に養はれた場合には、學者の説よりも幾十倍も多く産卵するのである」(五〇——五一頁)ミ書てあるが鳥學者の調べた卵數は決して人爲的の飼養鳥類の場合ではなく野生に於けるとき一腹幾個を普通ミするミ云ふ正確なる數であつて飼養ミ云ふ不自然な状態に於ける産卵數の意味で

はない、即ち學者の説を見事に打ち壞したことは云へぬ。飼鳥にあつては野生の場合よりも多産なることは一般に認められて居る事實で少しも著者の御自慢にはならず寧ろ當然のこころ云ふべきである。次に「鶉は如何に發情しても鳴聲を有たぬ」(五七頁)ミか「日本の鶉は絶對に鳴かぬが」(六五頁)ミか又は帝雉の項に「此は鶉と同じく鳴聲は全く無くして」ミあるが鶉も帝雉も雌雄共にクウ、クウ、クウ、クウ、ミ鳴くことは、確かで又蕃殖期になれば雄はチャイ、チャイ、チャイ、チャイミ連聲を發するのが常であるミ思ふ。

以上の總てが大脱線ではないけれど尙幾多の改修を要する個所も寡くない、だから吳々も申添へて置くが本書は内容は充溢して居るけれど學者の説を全く打ち破らうミする點や其他の學術的の事項だけは盲信する事は頗る危険であるミ。

終に此本の著者は近頃「杜鵑は夜は啼かぬ」てふ迷論を發表して名を揚げた人である事を附言して置く。(根山徳太郎)

□蜂須賀正氏渡英 本會會員蜂須賀侯令嗣正氏(たかよし)は去る七月十八日東京出發伊豫丸にて渡英の途に就かれたり。氏は政治方面の研究を主とすれど鳥學にも極めて趣味を有し、特に獵鳥方雉類の人工蕃殖等を研究せらるゝミ云ふ。最近本會々員某氏の

許に達せる書信中左の如き面白き通信あり茲に掲ぐ。

(前略)小生は九月四日無事當地に着し(中略)十月始めにはケンブリッジの方に參る豫定に候。動物園、博物館も見物致し候。動物園には中々温室の完全なるには驚き候。極樂鳥、犀鳥、南米の *Tyrannus* 等居り候。博物館の方には各種の白變及人爲的の雜種の標本等も有之候。雜種は種類ばかりにて普通の雉、金雞、銀雞、尾長雉、Silver Pheasant 等様々にて male-plumage by the female sex の雉も有之候。

^{4) 4) 4)}帝雉も十年程前に得し物有之候。中には生活の状態を造り counting の姿勢まで有之候。week-day には講話等も有り殆んど完全とも申さるべく候。九月よりは當地にても獵期にて好都合に御座候、その中何か報告も出來申すべく(中略)小生各所にて友達を持ち候故先づ *game preservation* 及巢箱等を研究致すつもりに候。

□『鳥の會』の設立 飼鳥に關し『鳥の會』と稱する會新設せられたり其の主旨會則役員等左の如し。

鳥の會の主旨

吾國の飼鳥の起原は中々古いもので御座います。が古來から行れて居ります飼養の方法等は多くは傳統的の事が多く今日の科學と調和さ

れたものは少ふ御座います。尙又私達の如く鳥や飼鳥に興味と關係を持たるゝ方々は決して少くは御座いますまいが、從來此等の方々御集りになり何かと御話し合ふ如き機會は誠に稀で御座います。純鳥學方面には日本鳥學會が御座いますが飼鳥の趣味的方面の御集りとしては只今の所、鳥屋さん達の催す江戸時代の遺物の様な日會又は鶯會などより以外には餘り無い様で御座います。此れとても飼鳥の純趣味的の御集りとしては如何で御座いましょうか、要するに鳥屋さん達の商賣本位と云ふ事が大部分合れて居る様に思れます、其で今少し現代に適應した即ち今日の趣味と學術とを淳化した飼鳥者の集りを得たいと存じ即ち外國の *Aviculture Society* (Car. Birds Club) の如きものを得たいと云ふ希望を持つて此會を起す事になりました、つまり此道の好きな方々に御集りをお願い其進歩を計り又何にかと御懇親を得ましたなら得る所大であらうと云ふ譯で御座います、鳥好きが集ると云ふ事が主なる目的で御座いますから只今は別に設備も計劃も御座いませませんが將來は種々の計劃も致したいと存じます。此集りに由て得らるゝ興味と便益は多々あらうと信じます、便宜上別紙の如く會の規定を定めました、同好諸君の御入會を希望致します。

鳥の會定め

一、本會は『鳥の會』(The Japan Cage Bird Club) の稱を主旨

とする所は飼鳥の趣味者の集りにして其進歩を計るにあ
り、

内田清之助
柳澤保承

一、會員中若干名の役員を設け會務の總てを執り行ふ、

□會員名簿 本號には大正九年六月現在の會員名簿を附録とし
て別冊添附せり。

一、本會の事務所は當分の間左記に置く

□會員名簿訂正

東京府豊多摩郡代々幡町代々木山谷二八三

本號附録會員名簿中左の通り訂正す

柳澤保承氏方

誤

正

一、會は當分の内隔月に集會を開く豫定にして期日等は其都
度御案内申上ぐべし、

第一頁六行目

熊本市

熊本縣

一、入會を欲せらるゝ人は會員二名役員一名の推薦に由り申
込れたく入會の許否は總て役員會の決定に由るものと御承
知ありたし、

第二頁十行目

小石川區

牛込區

一、會費は年額金二圓にして毎年度初めに前納さるゝものこ
す、

第二頁十四行目

蜂須賀正

蜂須賀正氏（まきらじ）

一、此定めになき事柄は總て役員會の判斷に任せらるゝ事、

第八頁十行目

麴町區上二番町二五

麻布區本村町一〇六

□會員轉居

渡邊登美次

一、會費は年額金二圓にして毎年度初めに前納さるゝものこ
す、

福岡縣立中學明善校

川口孫治郎

す、

一、此定めになき事柄は總て役員會の判斷に任せらるゝ事、

□新入會者 六月以降の入會者左の如し

大正九年十一月

名古屋市東區安房町一九

黒田莊次郎(乙種)

南多摩郡多摩村農商務省鳥類實驗場内

上遠野秀松(乙種)

長崎縣對馬嚴原對馬中學校

歌野吉甫(乙種)

東京市外代々木山谷二八二

柳澤保承(甲種)

役員

黒田長禮
松永安衛
鷹司信輔
高野鑿藏

□外國雜誌交換

本會雜誌其の他の印刷物は今回左記二ヶ所の

要求により同所發行の諸刊行物と交換せらるゝ管なり

Cooper Ornithological Club.

Feld Museum of Natural History, Chicago.

【南洋鳥類】に關する御斷り 本會臨時刊行物第九編榎山徳太郎氏同書は挿畫圖版及内容等當初の計畫より非常に増大し且黒田長禮氏の南洋鳥類に關する新種の記載等を追加せる爲め刊行期間及定價を左の如く變更せり

四色コロタイプ原色版三葉コロタイプ寫真版四葉地圖二葉其他挿畫數個約四百頁、定價七圓半、出來期限大正十年三月

【會員小川弘太郎氏の訃】 本會々員鳥津製作所支配人小川弘太郎氏は本年四月五日胃瘡瘍の爲め京都に於て死去せらる行年五拾歳誠に哀惜の情に堪へず。氏は本邦標本業界の先覺者にて初め動物標本社主米山米吉氏と共に斯業を計畫し其後獨立して小川標本店を經營せしが大正二年二月其事業を鳥津製作所に合併し同所に入りて支配人たり、氏は稀に見る温健着實なる人格者にして常に同業者間に重んぜられつゝありしに云ふ可惜。

【第十三回總會】 大正九年四月廿六日午後五時より春季總會を神田淡路町多賀雜亭に於て開會し左の十二氏の出席あり

- 飯 島 魁 齋 司 信 輔 黒 田 長 禮

内田清之助 田子勝彌 蜂須賀正氏
 榎山徳太郎 高野靈藏 松永安衛
 葑 精 一 間 島 謙 一 岡 田 喜 一

會場には左記標本類の陳列をなし、午後九時三十分散會す、陳列標本左の如し。

奄美大島産鳥類	數十個	齋 司 信 輔氏出品
同 上	四一五三個	内 田 清 之 助氏出品
北米産燕雀類標本	二〇七種 四二八個	黒 田 長 禮氏出品
北海道産シロハヤブサ標本	一 個	黒 田 長 禮氏出品
臺灣産ミカドキジ標本	一 個	黒 田 長 禮氏出品
石垣島産ノドグロツグミ <i>Zonotrichia querula</i> Temm. 標本	一 個	内 田 清 之 助氏出品
雉類ホーンビル類及び風鳥類のモノグラフ	四 冊	齋 司 信 輔氏出品
鳥津重家公著「鳥類便覽」	一 冊	黒 田 長 禮氏出品

【第十四回總會】 大正九年十二月一日午後五時より秋季總會を神田一ツ橋學士會假會館に於て開會し左の十七氏の出席あり、

- (來會順)
- 黒 田 長 禮 内 田 清 之 助 葑 精 一

大岩 紀 鹿 岡田 喜一 柳澤 保 承
 鷹司 信 輔 間島 謙一 靱山 徳 太郎
 菊池 米 太郎 森 爲三 簔 篤 麿
 飯 島 魁 丘 淺次郎 松 永安 衛
 幸 岡 直 高野 鷹 藏

會場には壹岐、對馬、及南洋産鳥類標本並書籍圖書の陳列あり
 晚餐後内田幹事より會計の報告あり引續き會則の變更本會十週
 年記念に關する件、雜誌『鳥』定價値上の件等を議決し(別項參
 照)後、靱山徳太郎氏の出品鳥類標本二新屬十新亞種に就きて
 の説明あり又黒田長禮、寺岡直兩氏の壹岐、對馬に於ける採集
 報告談等あり午後十時散會、同日の陳列標本左の如し。

種類	個數	出 品 者
對馬産鳥類	六〇	黒田 長 禮氏
壹岐産鳥類	一三	黒田 長 禮氏
南洋産鳥類	一八	靱山 徳 太郎氏
ヨシガモのバフ變種	一	黒田 長 禮氏
小笠原島産絶滅鳥類寫生圖	二	内田 清之助氏
埼玉縣野田村鷺山の記	一卷	内田 清之助氏

尙最近本會宛寄贈の左の雜誌を供覽せり

The Condor. A Magazine of Western Ornithology, Cooper Ornithological Club, Vol. XX, Nos. 1-6; Vol. XXI, Nos. 1-6. Vol. XXII, Nos. 1, 3-5.
 Ornithologisches Jahrbuch Organ für das palaearktische Faunengebiet. Herausgegeben von Viktor Tschusi-Schmidhofen.
 XXIX. 1919.

□會則の變更 別項記載の如く秋季總會の際左の如く本會々則の一部を變更せり。

第四條 第一項

一 當分一年に二回雜誌『鳥』を出版すること

第五條 本會々員を分ちて甲種會員乙種會員の二とす

一 甲種會員は會費として一ヶ年金五圓を納むること

一 乙種會員は會費として一ヶ年金貳圓五拾錢を納むること

第六條 甲種會員には雜誌『鳥』及臨時刊行物を配布す

乙種會員には雜誌『鳥』を配布す、臨時刊行物は配布せず定價の三割引を以て講讀するを得

渡り鶴

琉球近き島に屋久島といふ島、大なる島にて、むかしは日本の外なる一ヶ國として、國史などにも、屋久國人宋朝するなど見たり、此島に八重嶽とて、高さ十三里の高山あり、(中略)すべて南國の鶴、春に至り北方に渡らんとする時は、數千里の北海を一飛に越へ、行事ゆへに、羽がかりて海中に落ちんことを恐るゝゆへにや、此屋久島の八重嶽を廻りて、空高く飛上り、虚空に至りて、それより北に向ひて飛渡るなり、中途にて羽がかりて、次第に落るといへども、高くより、飛事ゆへに、容易に海面まで落る事なくして、朝鮮の地方へ付く事とぞ、此八重嶽の絶頂より猶々舞々して虚空に入事なれば、人の目も及ばざる高くに入りて、はじめて北に向ふなり(古事類苑動物部五五頁(西遊記三)より)



日本鳥學會規則

第一條 本會ハ日本鳥學會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ハ東京帝國大學理學部動物學教室内ニ置ク

第三條 本會ノ目的左ノ如シ

一鳥類ニ趣味ヲ有スルモノ、懇親ヲ計ルコト

一鳥類ニ關スル學術ノ進歩ヲ促スコト

一鳥類愛護ノ思想ヲ普及セシメ鳥類ノ保護増殖ヲ計ルコト

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ評議會ノ決議ヲ經テ隨時種々ノ事業ヲナス

一當分一年ニ二回雜誌「鳥」ヲ出版スルコト

一臨時出版物ヲ刊行スルコト

一毎年春秋二回會合シ鳥類ニ關スル講演談話ヲナシ同時ニ鳥類ニ關スル圖書標本其他ノ展覽會ヲ催ス

一鳥學の探檢ヲ舉行スルコト

第五條 本會々員ヲ分テ甲種會員ト乙種會員ノ二トス

一甲種會員ハ會費トシテ一ケ年金五圓ヲ納ムルコト

一乙種會員ハ會費トシテ一ケ年金二圓五十錢ヲ納ムルコト

第六條 甲種會員ニハ雜誌「鳥」及臨時刊行物ヲ配布ス

乙種會員ニハ雜誌「鳥」ヲ配布ス、臨時刊行物ハ配布セ

第七條

ズ定價ノ三割引ヲ以テ講讀スルヲ得
本會ニ入會セント欲スルモノハ住所氏名職業ヲ記載シ
本會ニ申込ムベシ但シ甲種會員ノ入、退會ハ評議員會
ノ決議ニヨル

第八條 本會ニ會頭壹名ヲ置ク

第九條 本會評議員會ハ會頭幹事及ビ會員ノ互選ニヨル評議員
若干名(甲種會員)ヲ以テ組織ス

東京帝國大學理學部動物學教室内

日本鳥學會

役員

會頭 理學博士 飯島 魁

幹事 内田清之助

評議員 理學博士 飯塚 啓

理學博士 丘 淺次郎

公 爵 鷹司 信輔

黑田 長禮

子爵 松平 賴孝

投稿及質問規定

(一)鳥類の習性、「渡り」、方言等に關し廣く各地方會員の投稿を歓迎す

(二)既掲原稿は返戻せず、但し挿畫に使用せる寫眞及び圖畫は希望により返戻すべし

(三)原稿は紙の表丈を使用し一行二十五字詰に認められたし、假名は平假名を用ゐる動物名及び外國語は片假名とす

(四)挿畫は寫眞以外のものは墨汁にて認められたし

(五)原稿は東京赤坂區福吉町黒田長禮氏宛郵送せられたし

(六)本會は鳥類に關する質疑に應答す、質問の事項は返信料封入東京帝國大學理學部動物學教室内本會宛郵送せられたし

(七)質問解答は一般讀者に有益なりと認むるものは本誌に掲載するも其他は質疑者に直接解答するものとす

大正九年十二月廿五日印刷

大正九年十二月三十日發行

定價金壹圓

禁轉載

編輯兼發行者 木下憲
東京市日本橋區兜町二番地

印刷人 神谷岩次郎
東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社
東京市日本橋區兜町二番地

發行所

帝國大學理學部
動物學教室内

日本鳥學會

振替口座東京六五九九番

發賣所

東京日本橋區
十軒店町

裳華房

振替口座東京一七番

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 內田清之助著
第一篇 鷓類圖說

絶版

獸醫學士 內田清之助著
第二篇 海産保護鳥類圖說

原色版三枚
定價四圓十錢
附錢

理學士 田長禮著
第三篇 世界の鴨

絶版

理學士 田長禮著
第四篇 世界の雁と鶴

原色版四枚寫眞版五枚付
定價金貳圓八錢

仁部富之助著
第五篇 郭公の蕃殖に關する研究

コロタイプ版一枚地圖一個
寫眞版五枚挿畫數個
定價金卅五錢郵稅四錢

理學士 田長禮著
第六篇 臺灣鳥の鳥界

附 菊池米太郎述 臺灣鳥類の習性

原色版四枚繪數個
寫眞版四拾錢郵稅四錢

理學士 田長禮著
第七篇 鮮滿鳥類一斑

原色版十枚繪一個
寫眞挿畫十數個
定價一圓五十錢郵稅十二錢

理學士 田長禮著
第八篇 千鳥類の「渡り」

寫眞版口繪二葉
定價七拾五錢郵稅六錢

叔山德太郎著
第九篇 邦領南洋諸島産鳥類

原色版三枚コロタイプ版四葉
地圖二葉挿畫數個約四百頁
定價七圓半郵稅十二錢

房 華 裳 町店軒十區橋本日 番七百京東替振 所 捌 賣

告豫編九第物行刊時臨會學鳥本日

日本鳥學會員 靱山徳太郎君著

大正十年三月發行

邦領南洋諸島産鳥類

原色版三葉コロタイプ版四葉
菊版紙 數約四百頁
定價七圓五十錢 郵稅十二錢

本書は本會臨時刊行物第九編として目下印刷準備中のもので、大正十年三月出版の豫定で

あります。内容は昨夏本會員靱山徳太郎君が約半歳に亘つて我南洋諸島に鳥類採集を試み

られた結果を記述したもので、主としてカロリン群島其他諸島の鳥類に就て分類學上の考

察、習性の觀察竝新亞種の發表等に加へて以上諸島の鳥類既知種全部の目録が添えてあり

ます。寫眞版は著者撮影の生態寫眞其他を四葉十數個、三色版は小林重三氏寫生の南洋鳥

類十數種を三葉に收めてあります。本書は雜誌「鳥」に掲載せられた應司黒田兩理學士の論

文と相俟て我南洋の鳥に關する缺くべからざる文籍であります。

本書は本會甲種會員には無代配布、乙種會員には規定の割引を以て配布しますから豫め御

申込を願ひます。

房華裳 町番 店七 軒百 十京 區東 橋本 替 日振 所捌賣

鳥

第二卷

自第一〇號
至第六號

日本鳥學會

『鳥』第二卷(自第六號至第一〇號)總目錄

口 繪

第一圖版	海豹島に於けるウミガラス	田子勝彌氏原圖	六號
第二圖版	故波江元吉君肖像		七號
第三圖版	東京麴町三宅坂下氷上の水禽群集	東京朝日新聞社原圖	八號
第四圖版	羽田鴨場に於けるチウサギの蕃殖	黒田長禮氏原圖	九號
第五圖版	ヤマガラ類各亞種	黒田長禮氏原圖 杉山徳太郎氏原圖	一〇號

論 說

我國にて初めて捕獲せられし大盜賊鷗に就て	理學士	蜜司信輔	六號
カムムリツクシガモ <i>Pseudofuldoma cristata</i> Kuroda に就て	獸醫學士	内田清之助	六號
アカゲラの尾羽の斑點に就て	獸醫學士	熊谷三郎	六號
臺灣總督府殖産局採集鳥類目錄	獸醫學士	内田清之助	六號
種子島の鶴及び附近の二三鳥類	理學士	黒田長禮	六號
朝鮮鳥類の習性觀察	理學士	荒木彦助	六號
濟洲島採集の主なる鳥類に就て(附濟洲島産鳥類目錄)	理學士	黒田長禮	六號
アラバツクの蕃殖の觀察	法學士	川口孫治郎	七號

オホトウゾクカモメニサケイニに就て……………理學士 黒田長禮……………七九三

沖繩及び奄美大島の採集鳥類……………堀井榮吉……………七九五

勸察加半島西海岸採集鳥類目錄……………榑山徳太……………七〇〇

札幌博物館所藏樺太産鳥類數種に就て……………榑山徳太……………八四〇

京城附近に於ける主なる鳥類の「渡り」に就て……………黒田甚保……………八四八

ツ、ドリノ習性及び雌雄……………川口孫治……………八五〇

四國地方に於けるツバメ類の「渡り」並びに習性等に就て……………榑山徳佳……………八五六

埼玉縣入間郡産鳥類……………野村宗太……………八五八

臺灣産花鳥類に就て……………黒田長禮……………九二九

濟洲島採集の主なる鳥類に就て(第二回報告)……………森爲三……………九三五

カンムリツクシガモの雌雄に就て……………黒田長禮……………九三九

ツバメ及びゴシアカツバメに就て……………兼常彌……………九四二

讃陵島採集の主なる鳥類に就て(附讃陵島産鳥類目錄)……………兼常彌……………九四五

長門佐々竝地方の鳥類の初鳴期「渡り」及び蕃殖に就て……………兼常彌……………九六五

宮城縣下に於ける二三鳥類の蕃殖期……………熊谷三郎……………九八二

アラバヅクの蕃殖の經過……………池田孫治……………一〇九九

講 話

野外鳥學の一資料(其二)……………理學士 石井重美……………六二六

江戸時代將軍家の狩獵(承前)……………永井礫……………六二九

雁鴨類の夏冬の棲息地.....	理學士	黒田長禮	六三五
猶太民族の古代に於ける禁獵鳥類.....	理學士	荒木彦助	六四六
鶴龜長壽傳説.....	理學士	黒田長禮	七一〇
徳川時代の薩摩に於ける動物園.....	理學士	荒木彦助	七一五
「チージュボン」運動の回顧.....	理學士	内田清之助	八二〇
鳥類籠養の沿革.....	理學士	荒木彦助	九二四

雜 纂

パン・ヒクキナ類の新分類(理學士黒田長禮).....	六四九	マガンの下面變り(森爲三).....	七三〇
アカツクシガモの「渡り」(獸醫學士内田清之助).....	六五一	本郷區内にて見たる鳥類(鶉の家).....	七三一
アメリカカヒドリとミコアイ(理學士黒田長禮).....	六五二	大分縣八坂地方の鳥類(上恭治).....	八二〇
コホリガモの最南分布例(靑山徳太郎).....	六五三	再び種子島の鳥類に就て(荒木彦助).....	八二四
ハシブトイカルに就て(森爲三).....	六五三	鶉・千鳥類の方言其他(靑山徳太郎).....	八二五
美濃にて獲られしトキに就て(柳原要二).....	六五四	鳥類名纂(脇山三彌).....	八二六
東京市内にて見たる鳥類(靑山徳太郎).....	六五四	今は昔鶴に舞を教へしふる事(森爲三).....	八二八
琉球産鳥類の方言(尙景).....	六五八	ムケドリとウヅラの交接卵か(靑山徳太郎).....	八二九
下總印旛郡地方の鳥類方言(齋藤源三郎).....	六六〇	長門佐々竝地方鳥日記(兼常彌富).....	八四八
埼玉縣下に渡來せし鶴群の眞相(靑山徳太郎).....	六六〇	朝鮮にて獲られしハジロクロハラアツサシ(森爲三).....	九五三
高野山の一年(榎本佳樹).....	七一八	平壤鳥信(土居寛暢).....	九五三
旅順の雀と筑前の雀(脇山三彌).....	七二四	ツルシギ及びゴカハラヒロに就て(熊谷三郎).....	九五三
コシアカツバメの蕃殖(理學士黒田長禮).....	七二四	鳴類の蕃殖(藤木常隆).....	九五四
雪中の農作物鳥害例(仁部富之助).....	七二六	靑山雀演技記(脇山三彌).....	九五五
飼養鶉の胚卵と雛の體量とに就て(鶉の家).....	七二七	鶉のハヤニエに就て(齋藤源三郎).....	九五七

ウツの紅色と尾羽の斑とに就て(理學士黒田長禮)……………九二五七
 日本産がランテウの種名に就て(獸醫學士内田清之助)……………十三〇六
 ヤマドリの尾羽に就て(熊谷三郎)……………十三〇七
 鶉類雜記(榎山徳太郎)……………十三〇九
 フルマカモメにつきて(中村正雄)……………十三二二
 リンコンパーク同養水高名(水野誠)……………十三三三

質 疑 應 答

鶯類の雌雄の區別に就て(答黒田)……………六六二
 雁鴨の「渡り」及び蕃殖に就て(答黒田)……………六六三
 海苔旗場の海苔を食する機能に就て(答黒田)……………六六三
 海苔を最も好む雁鴨の種類及び習性(答黒田)……………六六三
 雁鴨が海苔を食する機能に就て(答黒田)……………六六三
 雁鴨類の食量に就て(答黒田)……………六六三
 鳥類(死のまゝ)送附處理方法に就て(答黒田)……………六六四
 剥製上の注意事項及參考書に就て(答黒田)……………六六四
 雜誌「太陽」の表紙同案に就て(答黒田)……………六六五
 信天翁の布及び高麗鷲の營業に就て(答黒田)……………六六六
 ヒヨドリとエゾヒヨドリとの區別に就て(答黒田)……………七二三
 ヤイロテウの雌雄鑑別法に就て(答黒田)……………七三三
 鶴類の(習性に就て)體量・卵數・卵量孵化日數及「渡り」に就て(答黒田)……………七三三
 鶴は千年龜は萬年の由來に就て(答黒田)……………七三六
 眞孔雀産卵數に就て(答黒田)……………七三六

アウムの習性(荒木彦助)……………十三六
 京都御所御苑内に於ける夏の鳥類 藤本常隆……………十三七
 イスカ本州にて蕃殖せる鶉(榎山徳太郎)……………十三九
 朝鮮産チガハコドリ(森爲三)……………十三九
 筑前鳥信(陽山三彌)……………十三〇
 コシアカツバメの巢にスバメ營巢す(兼常彌富)……………十三〇

カイツグリの學名に就て(答黒田)……………八二〇
 ハイタカの學名に就て(答黒田)……………八二〇
 エリカモメの學名に就て(答黒田)……………八二〇
 ホト、ギスの學名に就て(答黒田)……………八二〇
 コゲラの「タイブ」に就て(答黒田)……………八二〇
 邦産ビンズイの學名に就て(答黒田)……………八二一
 (Turdoides)の「タイブ」及學名に就て(答黒田)……………八二一
 モツの屬名に就て(答黒田)……………八二二
 カヤクギリの屬名に就て(答黒田)……………八二二
 ノビタキの屬名及年號に就て(答黒田)……………八二二
 ノジコの屬名に就て……………八二二
 エリカモメの成鳥及幼鳥の羽毛に就て(答黒田)……………八二三
 コサギの學名に就て(答黒田)……………八五五
 ハリチアマツバメの屬名に就て(答黒田)……………八五九
 チウサギの學名に就て(答黒田)……………八六〇
 コサギの學名に就て(答黒田)……………八六〇

最小體重及最小卵量鳥類に就て(答黒田).....	九二六〇
Cowbird (Molothrus ater(Bald.))に就て(答黒田).....	九二六〇
鳴類シヤクナギ(方言)ニ就て(答黒田).....	九二六一
鳥類の渡りに就て(答黒田).....	十三二一
標本としての鳥卵の保存法(答黒田).....	十三二一
ヒバリ卵の孵化に就て(答黒田).....	十三二二

雜

報

本會第九回總會.....	六六六
鶯千鳥類圖說の發刊.....	六六六
鳥類の「渡り」及蕃殖期.....	六六六
臨時刊行物第七編「鮮滿鳥類一斑」正誤.....	六六七
「鳥」第五號中郭公の繁殖とオホヨシキリとの關係正誤.....	六六八
會員名簿.....	六六九
本會第九回總會.....	七三六
本會第十回總會.....	七三七
ミカドキシ生鳥の獻上.....	七三六
何鳥共進會.....	七三六
鶯・千鳥類圖說.....	七三六
「鳥」第六號正誤.....	七三九
第十一回總會.....	八三三
會則の變更.....	八三四
ミカドキシ再び獻上せらる.....	八三四
北米通信.....	八三四

鳥卵の測定に就て(答黒田).....	十三二一
アカガシラサギの學名に就て(答黒田).....	十三二一
コカリガネの分布並に學名に就て(答黒田).....	十三二一
Banta 屬の基型種名(答黒田).....	十三二一
ルリカケスの屬名に就て(答黒田).....	十三二一

第十二回總會.....	九二六二
評議員會.....	九二六二
英米兩國鳥學會員推選.....	九二六二
狩獵鳥類圖解.....	九二六三
南洋鳥類の獻上.....	九二六三
會員堀井榮吉氏の計.....	九二六四
「鳥」第八號正誤.....	九二六四
表紙寫眞說明.....	九二六四
新著紹介.....	九二六四
鳥の會の設立.....	九二六四
外國雜誌交換.....	九二六四
會員小川弘太郎氏の計.....	九二六四
第十三回總會.....	九二六四
第十四回總會.....	九二六四
會則の變更.....	九二六四

FEB 8 1921
National Museum

“TORI” THE AVES

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. II. No. 10. December, 1920.

Frontispiece in colour :

Subspecies of the Varied Titmouse, *Parus varius* T. & S.

Contents :

A list of the birds of the Dagelet Is, Corea, with detailed reference to some species. By *N. Kuroda* and *T. Mori*.

Ornithological notes from the neighbourhood of Sasanami, Prov. Nagato. By *Y. Kanetsune*.

On breeding seasons of some birds in Pref. Miyagi. By *S. Kumagai*.

Notes on breeding habits of *Ninox scutulata scutulata* (Raffl.). By *M. Kawaguchi* and *H. Ikemura*.

Miscellaneous notes.

Queries and Answers.

Proceeding of the Society.

ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

c/o Science College, Tokyo Imperial University.

PRESIDENT.

I. Ijima, Ph. D., *Rigakuhakushi*.

SECRETARY.

S. Uchida, C. F. A. O. U.

COMMITTEE.

The President }
The Secretary } *Ex officio*.

A. Izuka, *Rigakuhakushi*.

A. Oka, Ph. D., *Rigakuhakushi*.

Prince N. Takatsukasa.

N. Kuroda, F.M.B.O.U., C.F.A.O.U.

Viscount Y. Matsudaira.

The exact dates of publication of all the numbers of “Tori” are as follow :—

Vol. I. No. 1. May 26, 1915.

„ „ No. 2. Dec. 10, 1915.

„ „ No. 3. Dec. 31, 1916.

„ „ No. 4. April 15, 1917.

„ „ No. 5. Dec. 7, 1917.

Vol. II. No. 6. May 31, 1918.

„ „ No. 7. Dec. 31, 1918.

„ „ No. 8. July 21, 1919.

„ „ No. 9. April 14, 1920.

W. 2 - m. 10

Dec. 1921

FEB 8 1921

HOUSTON TEXAS

ds



Y

青森縣師範學校
 神戶縣桑通市二丁目九番地
 福岡縣福岡市博多馬場新町六丁目
 和邊田 干登美次彌
 渡邊山 脇三彌

W

福島縣福島市柳町三三
 網走縣京極町二〇〇
 赤坂區青山北町七ノ一
 内庭軍市助
 内田清之助

U

長崎縣大工町四
 大分縣外灘尾村下野三〇三三
 三重縣阿山郡上野大字西
 廣瀨市本町四ノ六
 埼玉縣大里郡吉岡女學校
 埼玉縣越前郡高塚女學校
 東京市外寺島村一ノ二
 小石川區西原町二ノ四
 殿村政 野義之助 次彦
 高野 繼之助 義之助 次彦
 筒井 義之助 義之助 次彦
 高野 鷹治 鷹治
 高野 利太郎 利太郎
 富田 杉太郎 杉太郎
 竹田 家勝 家勝
 田子 勝 勝
 内海 忠 忠
 内馬庭軍市助 軍市助
 内田清之助 清之助

樽本龜太郎
朝鮮京城本町三丁目

鷹羽貞富
臺灣南投埔里街三三三

○ 戶高松
麻布區本村町一〇一

良吉
長野縣立商業學校

中誠
茨城縣多賀郡助川驛前

寺岡
橫濱市太田町一〇〇小林方

○ 寺尾
四谷區大番町一九代松方

○ 應司信輔
麴町區上番二町二五

丁

齋藤武正
千葉縣長生郡一宮町

三齋枝
千葉縣警察部

砂子澤次郎
北海道廳內務部

末吉猪峯
盛岡市川原町一〇一

重松峯義
山口縣吉敷郡小郡町

會田義太郎
愛媛縣伊予郡南伊豫村八倉五

庄村助太郎
島根縣松江市殿町二六二

重安郡片田中四六

鳥取市栗谷町二

德島縣德島市市所町

兵庫縣明石市右手塚町五一

岐阜縣大垣市垣宮森本幸吉方

山梨縣内

神戶市加納町六一

大阪市東區南本町一丁目

千葉縣夷隅郡上野村荒川小學校

廣島縣廣品郡立實科高等女學校

福島縣石城郡湯本村大字湯本

岡山縣兒島郡除村大字骨根

臺北農事試驗場

朝鮮京城博物館

沖繩縣喜里

S

埼玉縣立熊谷高等女學校

神田區駿河臺紅梅町二

白根 豐治

佐藤 實一

佐藤 三治

末永 貞重

坂本 保重

坂井 長三

酒井 彌之助

齋藤 三郎

佐藤 龜一

關東 東一

妹尾 惠太

素木 得一

○ 下 郡山 誠一

○ 尙 景

小澤 國亭

一 岡田 國亭

兵庫縣川邊郡伊丹町

圖田利兵衛 大岡 費一 大澤 保平

鹿野 紀四喜 岡 費一 澤 保平

大岡 費一 大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

大澤 保平

U. S. Nat. Mus. Washington D.C. U.S.A

名古屋市東區中野町三八

朝鮮平壤步兵第七七聯隊

淺草區小島町四五

山口縣立豐浦中學校

石川區大塚坂下町四〇

石川區小日向臺町三〇一七

石川區小日向臺町一〇一四

0

東京帝國大學農科大學植物學教室

福井縣內

關東州旅順市博物館

廣島市南竹屋町樋小路

中尾春雄

名倉宗勝

野村貫一

中島庸三

○川孫治郎

福國縣若松市松中學校

○近藤他喜

本郷區龍岡町二七

○米山吉次

神田區五軒町一

○河上才次郎

熊本縣高等女學校

○熊谷三郎

宮城縣栗原郡若柳町五五

○小池米太郎

横濱市大田町一〇一

○菊川義太郎

臺灣總督府殖産局博物館

○黒川長禮

下谷區上野動物園

○黒田長禮

赤坂區福吉町

K

○石村健夫

本郷區台三三五美券館方

○池澤平太郎

福岡縣立若松中學校

○石川章三郎

朝鮮全北江津市探木公司

○池田岩治

香川縣高松市下松町五

○伊藤和貴郎

滋賀縣大津市出柳町一五

○伊藤育太郎

神奈川縣小原町二

○飯塚啓

新加坡小坡區維多利亞街一〇一

〇 飯島 魁

豐多摩郡千駄ヶ谷町九〇九

I

〇 邊見 十郎

富山市橋北古傳町一五

〇 蜂須賀 正次

岩手縣三田郷町九

〇 濱田 德次

鹿兒島縣內

〇 蓮沼 薰市

Sungei Papan Estates M. G. K. Singapore

〇 堀川 安市

臺灣臺北師範學校

〇 林 保壽

小石川區原町三〇六

〇 林 壽祐

千葉縣長生郡鶴枝村

H

〇 五斗 俊夫

岐阜縣加茂郡東白川村

G

〇 藤波 龍惠

府下大崎町字上大崎中丸四四四

〇 藤原 雅明

朝鮮全北原公立小學校舍宅

〇 船津 雅雄

沖繩縣警察部保課

〇 藤田 昌隆

高知縣幡多郡毛町丸島

〇 福島 世策

埼玉縣秩父郡槻川村大字坂本二四四九

○藤木 隆
京都御所宛堺町内門官令

F

○榎木 佳樹
和歌山縣伊都郡高野山

E

○土居 寛暢
熊本安南道平壤府泉町三

D

千葉 經三郎
長崎縣東彼杵郡竹松寺高等小學校

C

麻生 竹幸六治
北海道札幌市北五条西三丁目三々木末吉方

福岡縣福岡市警固赤坂

荒川 五郎子
秋田縣秋田市北ノ丸新町四

荒木 百合子
熊本市人吉町天公會内

東 榮 信助
新潟市白山浦一丁目一〇三一

荒木 彦代
鹿児島市西田一町九八

朝倉 喜代松
臺灣南投縣埔里社

A

會員名簿

○大正九年
甲種會員
六月現在

W. J. 1911, 2, no. 10

會 學 鳥 本 日

月 六 年 九 正 大

簿 名 員 會



鳥

第
九
號

大正九年四月發行

日本鳥學會

鳥 第二卷第九號目次

口 繪

羽田鴨場に於けるチウサギの蕃殖(第四圖版)……………理學士 黒田長禮氏原圖

論 說

臺灣産花鳥類に就て……………理學士 黒田長禮

濟州島採集の主なる鳥類に就て(第二回報告)……………森 爲三

カンムリツクシガモの雌雄に就て……………理學士 黒田長禮

ツバメ及びコシアカツバメに就て……………兼常 彌富

南洋諸島産アブロニス屬の一新亞種(英文)……………萩山徳太郎(後附)

講 話

鳥類籠養の沿革……………荒木彦助

雜 纂

長門佐々並地方鳥日記……………兼常 彌富

朝鮮にて獲られしハジロクロハラアジサシ……………森 爲三

平壤鳥信……………土居寛暢

ツルシギ及びココハラヒワに就て……………熊谷三郎

鳴類の蕃殖……………藤木常隆

觀山雀演技記……………脇山三彌

鴟のハヤニエに就て……………齊藤源三郎

ウソの紅色ミ尾羽の斑に就て……………理學士 黒田長禮

質 疑 應 答 七 件 (黒田長禮回答)

雜 報 七 件

羽田鴨場に於けるチウサギの蕃殖 (口繪解説)

理學士 黒田長禮

此口繪第四圖版に掲げたのは東京府下羽田鈴木新田の予の鴨場内で昨年六月八日に撮影したチウサギ *Meophaga intermedia* (HASSLEH.) の蕃殖状態の一部である。此日子の見た處ではゴ井サギ *Nycticorax nycticorax* (L.) が約二千羽、チウサギが約二——三百羽、それとコサギ *Gracula japonica japonica* (L.) が約五——六十羽で中々多くの鷺類が蕃殖しつつあつた。從來當鴨場ではゴ井サギの多數の外極めて少數のコサギが蕃殖する位ひであつたのに昨年は如何なる爲めかチウサギが斯く多數來つて營巢して居るのは誠に珍らしいことと思ふ。チウサギはコサギよりも明に大形で脚も長く又生殖期に生じて居る背の糞羽も長く尾羽よりも延長しているから是等のものと群飛して居る様は誠に美しく見られた。圖に現はれて居る如く特に人の方に氣を付けているときなきは頸が著しく延長して居るのが見られる。然し此種類は一般に他のコサギの様に敏捷でなく比較的鷺類としては容易に接近することの出来る種類で一般の習性はダイサギに似て居る。

チウサギの巢は主として松樹に營まれ他の近似種のものと同様簡單に木の枝で造られる。卵は一腹大概四個を普通として大さは長徑四七・五——五二・耗、短徑三四——三七・五耗あつて色は一樣に蒼色で濃淡二様のものがある。大抵は一腹のものは淡色のみの卵で又他の一腹は濃色のみの場合が普通の様である。卵量は五——六匁である。

コサギも勿論松樹で蕃殖するが昨年はチウサギの多かつた爲めか五——六十羽が一ヶ所に群れて然かも竹林のみに營巢した。卵はチウサギと同色であるが稍々小形であるのこ一腹大概五個を普通とするの相違がある。大さは長徑四三・五——四八耗、短徑三〇——三四耗あるのみである。卵量は四——五匁である。

東京附近では今より二十年前頃迄は可なり多かつた云ふアマサギ一名セウゼウサギ *Buteo japonicus* (Bonn.) が昨今殆ど影を止めなくなつた。羽田鴨場では去る明治三十三年——四年の頃夏季松上に一番來たこゝがあつたが終に蕃殖するに至らなかつた。其後も全く渡來しなかつたのに昨年は六月六日より珍らしくも二羽來り終に四羽となり且つ營巢・蕃殖するに至つたのは近來稀れな事實と思ふから一寸書き添へて置く。

序に當鴨場に來る鷺類の名稱を列記して見ればコモ、ジロ(極めて稀)、アチサギ(稍々稀)、サ、ゴ井(規則正しき夏鳥、蕃殖するも數少し)、ヨシゴ井(夏季普通、蕃殖す)及びミヅゴ井(一回來る)の五種の外前記のものを加へ九種類となる。此内で留鳥として見られるのは單にコサギ、ゴ井サギのみでチウサギなきは冬季は關西地方に避寒する云ふ人もあるが恐らく尙ほ以南に赴くのは事實であつて印度、セイロン迄も分布して居る。

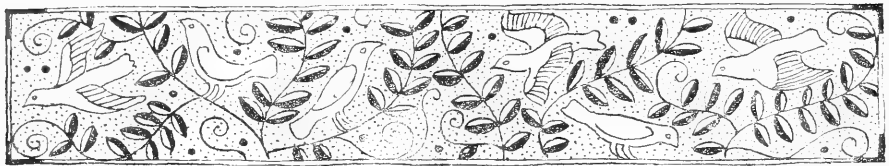
第一圖



第三圖

第二圖

羽田鴨場に於けるウチサギの蕃殖
 第一圖 第二圖 第三圖
 上二羽はウチサギの
 下はウチサギの卵
 卵の



論 說

臺灣産花鳥類に就て

理 學 士 黒 田 長 禮

從來臺灣島から花鳥屬 (*Dicaeum*) の鳥類が發表せられたことは極めて少なく其第一回としては内田學士が動物學彙報一九二二年二〇三頁に臺灣嘉義廳中埔にて菊池米太郎氏の採集した雌の幼鳥に *Dicaeum* として報告せられたのが初めて、其後オギルビーグラント氏はグールドフェロー氏が阿里山で獲た雄鳥を新種として *Dicaeum formosum* と呼んだのである (Bull. O. B. C., 1912, p. 109) としてグラント氏は (Ibis, 1912, p. 658) 内田學士の前記の鳥は此種の雌であらうと云ふ意味を附加して居る。次で内田氏及び余は動物學雜誌第三百一號五四七頁にグラント氏の雌の記載を邦文として紹介し前記菊池氏の採集した標本の雌の記載をも附加した。大島氏と余とは臺灣の臺北博物館に藏せられた第二回目に菊池氏が南投廳ウライタウラにて採集した標本を *D. formosum* の雌として發表した(動物學雜誌第三百二十四號二一九頁) 次に内田氏と余とは更に素木博士及び菊池氏が南投廳北山坑で獲た雌を又も *D. formosum* として發表した(鳥類第六號一六頁)。是れより以前に南投廳埔里社の朝倉喜代松氏から花鳥類の標本を十數個送られた其内には雄も雌も含まれて居つたが雌の色及び嘴の形狀等がさうしても一種類の鳥とは思はれないので種々調査した結果下面に赤色のある雄は疑のないグラント氏の種類であるが雌と思はるゝ内には下面の赤き種類に屬すべきものと全く別のものとあることが明かされた。且つ別の種類の方は皆な雌の様ではあるが雌雄其色彩の相違せぬ「グループ」に屬する種類であることを確め得た。夫故左の名稱を以て

新亞種として本誌上に報告する(シミ)した。

Dicaeum minullum uchidai, subsp. nov.

和名 アヲハナドリ (新亞種・新稱)

「記載——成鳥(亞種の基型) *D. minullum olivaceum* Ward. に極めて似たるも尾短かく體色は一層暗色なることによりて區別せらる。即ち上面は濃橄欖色、腰及び上尾筒は多少淡色。體側及び脇は其色濃く、尾は黒褐色にて微かに金屬綠色光を有す。露出せる嘴峰一〇耗、翼四八・五耗、尾二三耗、跗蹠一一耗あり。」



第三十六圖 ハナドリ類 頭部

1—2. Head of *Dicaeum formosum* ♂ (Nat. size)

ハナドリ 雄 頭部 (實物大)

3—4. Head of *Dicaeum minullum uchidai*, subsp. nov. (Nat. size)

アヲハナドリ 頭部 (實物大)

此基型標本は南投廳埔里社附近の蕃地にて朝倉喜代松氏により大正六年一月に獲られ今余の所藏せるものである。他の標本の測定は英文記載中にある故略する。

幼鳥の記載は内田氏及び余が動物學雜誌第三百一號五四七頁に發表した通りであるから略す。但し嘴は基部淡色であることを附加して置く。アヲハナドリミハナドリの雌は次の點で區別が出来る。體の小形なこゝ、嘴は著しく長く且つ下方に曲る傾向あるこゝ、上面に金屬光のないこゝ(但し尾羽を除く)及び下面には一層橄欖色を帯びたこゝ等である。此亞種名は第一に報告せられた内田學士の名譽の爲めに同氏の姓を取りしものである。内田氏の檢せられた標本は二個共不幸にして雌の幼鳥であつた爲め新名を附せられなかつたのである。

附記、從來ハナドリと云ふ和名は内田氏が前記の *Dicaeum* 等に附せられたつてであるが其後同氏著「日本鳥類圖說續高臺灣之部」其他にも *D. formosum* に

ハナドリと附せられて居るから今之れを變更せずして今回のものを上記の様にアチハナドリと命名したのである。

序にハナドリの雄はグラント氏の記載があるが未だ眞の雌に就ては其記載がないから左に附加することとした。又ハナドリの雄の各個的相違を發見したがそれは英文記載中にあるから茲には略して置く。

『ハナドリ雌成鳥の記載——頭は暗橄欖色にして各羽縁は金屬綠色を有し且つ是等の羽毛の中央は暗色なり。上背より下背迄は橄欖綠色にて肩羽及び上背には多少の金屬綠色光を帶ぶ。腰及び上尾筒は一層橄欖黃色を帶ぶ。小雨覆及び初列雨覆は金屬蒼色を呈す。大中兩雨覆は暗褐色にして多少金屬光澤あり各羽縁は橄欖綠色なり。風切羽は暗褐色にして多少金屬光あり。外縁は橄欖綠色なり但し第一初列風切を除く。尾羽は褐色にて明に金屬蒼色を呈す。外側尾羽には此光澤なく先端は淡色なり。顔側は帶灰色。下面及び下尾筒は黃軟皮色。喉及び胸の中部は白味勝ちなり。上胸及び脇は橄欖綠色を帶ぶ。翼角、下雨覆及び腋羽は白色にて微かに黄色を帶ぶ。嘴の色は雄成鳥と同様なり。』

『ハナドリ雌幼鳥の記載——上面は暗灰鼠色。頭頂は著しく暗色にて不判明なる金屬的光澤の縁を有す。腰は橄欖色を帶ぶ。雨覆には金屬光澤少なく、初列風切の橄欖色の外縁は著しからず。顔側及び喉は帶灰色。胸の中部は黃軟皮色。上胸及び脇は灰色を帶ぶ。下尾筒は白味勝ちなり。下嘴の基部及び上嘴の縁は明に淡色なり。其他は成鳥の雌と同様なり。』

ハナドリの幼鳥ミアチハナドリの幼鳥とは前者は上面が暗灰鼠色であることによつて直ちに區別が出来る。

Notes on and Descriptions of the Flower-peckers of Formosa.

By

NAGAMICHI KURODA, *Rijyūshūshi*.

DICAEUM MINULLUM UCHIDAI, *subsp. nov.*

Dicaeum sp., Uchida, Ann. Zool. Japon., 1912, p. 203; *D. formosum* (nec Grant), Uchida & Kuroda, Zool. Mag., 1913, p. 547 (part.); Oshima

A. Kuroda, op. cit., 1916, p. 299. Uchida & Kuroda, "Foris," Vol. II, No. VI, 1918, p. 16.

Ad. (type of subspecies). Very similar to *D. mindanensis*, but the tail shorter and the general colouring of body darker. In fact, the upper parts are of a deep olive colour somewhat paler on rump and upper tail-coverts; sides of breast and flanks tinged with olive colour; tail blackish brown, faintly tinged with steel green. Exposed culmen 10mm., wing 48.5mm., tail 23mm., tarsus 11mm. in length.

The type specimen was obtained by Mr. K. Asakura near Horisha, Nantō District, in January 1917. It is preserved in my collection.

(Other specimens measured as below:—

Loc.	Date	Exposed culmen	Wing	Tail	Tarsus	Sex	Preserved in:
Chūho, Kagei Distr. Horisha, Nantō Distr.	10/8, 1907	8.6 mm.	45.0 mm.	21.5 mm.	11.0 mm.	♀ juv.	Zool. Mus., Set. Col., Tokio
do	Jan., 1917	9.0 "	46.0 "	23.0 "	11.0 "	Ad.	Kuroda collection
do	Jan., 1917	9.4 "	48.0 "	22.0 "	11.0 "	Ad.	do
do	20/1, 1917	9.0 "	43.5 "	19.5 "	10.5 "	Juv.	do
Hokuzankō, Nantō Distr.	22/5, 1917	10.0 "	45.0 "	21.0 "	11.0 "	♀ ad.	Yachiaku Museum

The young bird from Chūho, Kagei District is much duller in colour than adult birds; without the dark centre to feathers on the crown of head; under parts less olive yellowish, and throat tinged with ashy; basal half of lower mandible and basal edge of upper mandible pale yellowish instead of plumbeous as in adults.

The above young bird is the first discovered specimen of the flower-pecker in Formosa. It was collected by Mr. Y.

Kikuchi and is now preserved in the Zoological Museum, Science College, Tokio. The second specimen of the form was obtained by the same collector at Uraizama, Nantō Distr., Jan. 12, 1908, and is preserved in the Taihoku Museum. Both the specimens were examined by Mr. S. Uchida, but as the specimens were young females, he hesitated to call them by a new name (Ann. Zool. Japon., 1912, p.203). Mr. Ogilvie-Grant opined that the said specimens represented the female of *Dicæum formosum* (Ibis, 1912, p. 653).

D. m. uchidai differs from the female of *D. formosum* in the smaller size; in the bill being distinctly longer and curved; in lacking a metallic lustre on the upper surface except on tail-feathers; and in the lower surface being of a more olivaceous tinge.

The subspecific name is given in honour of Mr. Uchida.

DICÆUM FORMOSUM Ogilvie-Grant.

Grant, Bull. P. O. C., 1912, p. 109, *id.*, Ibis, 1912, p. 653; Uchida & Kinoshita, Zool. Mag., 1913, p. 247 (part.)

Of this species I have examined seven adult males, one adult female and two young females, all collected by Mr. K. Asakura in central Formosa.

Some points of individual variation are noticeable in the adult males. In two of the specimens the white patch on throat shows a considerable admixture of red, while in the others the red is much less represented. Sides of breast and flanks are of an olivaceous colour in four specimens, but distinctly yellowish buff in three. All the specimens agree in the colour of back.

Description of the adult female: Head dark olive, the feathers being margined with metallic steel green and possessing dark centre; upper back down to lower back olive green, with some glossy steel green on scapulars and

upper back ; rump and upper tail-coverts yellowish olive ; lesser wing-coverts and primary-coverts metallic steel blue ; median-coverts and greater-coverts dark brown with a slight metallic lustre, the feathers being margined with olive green ; quills similarly coloured, except the first primary which lacks the lustre as well as the olive green on margin ; central tail-feathers brown and distinctly glossed with steel blue ; the lateral tail-feathers without the gloss, tipped with whitish ; sides of face greyish ; lower surface, including under tail-coverts, yellowish buff ; throat and centre of breast whiter ; chest and flanks tinged with olive green ; edge of wing, under wing-coverts and axillaries white with a slight tinge of yellow ; colour of bill and feet as in the adult male.

Description of the young female : Upper surface dark ashy grey ; crown of head distinctly darker, the feathers with fringe of indistinctly metallic lustre ; rump tinged with olive ; wing-coverts with less metallic lustre than in adult female ; external olive margin to the first primary indistinct ; sides of face and throat greyish ; middle of breast yellowish buff ; chest and flanks tinged with greyish ; under tail-coverts whiter ; basal parts of lower mandible and edge of upper mandible distinctly paler than in adult female. In all other respects of colouration the young female is similar to the adult of the same sex.

The young bird of *D. formosum* is easily distinguished from that of *D. mintham-achidai* by the upper parts being of a dark ashy grey colour instead of dark olive.

The measurements of *D. formosum* examined by me are as follow :

Loc.	Date	By posted children	Wing	Tail	Tarsus	Sex
Horishu, Nanto Distr.	Jan., 1917	8.5mm.	50.0mm.	26.0mm.	14.0mm.	♂ ad.

do	Jan., 1917	9.0	♀	50.5	♀	2.60	♀	11.0	♀	♂ ad.
do	2/2, 1917	8.4	♀	48.5	♀	25.0	♀	11.5	♀	♂ ad.
do	10/3, 1917	8.0	♀	49.5	♀	26.0	♀	11.5	♀	♂ ad.
do	20/1, 1918	8.5	♀	49.5	♀	25.5	♀	12.0	♀	♂ ad.
do	25/1, 1918	9.0	♀	50.0	♀	25.0	♀	11.5	♀	♂ ad.
do	10/2, 1918	8.5	♀	48.5	♀	24.0	♀	11.5	♀	♂ ad.
do	Jan., 1917	7.9	♀	48.0	♀	24.5	♀	10.0	♀	♀ juv.
do	5/1, 1917	7.9	♀	48.5	♀	23.5	♀	10.5	♀	♀ juv.
do	12, 1917	7.9	♀	47.0	♀	23.5	♀	11.0	♀	♀ ad.

濟州島採集の主なる鳥類に就て (第二回報告)

森 爲 三

濟州島産鳥類の研究は「鳥」第七號にて報告せし通り興味多きを以て京城高等普通學校に於ては更に高橋永造氏を該島に出張せしめ同氏は大正八年一月五日京城出發約五週間該島に滞在専門に鳥類の採集をなし四十九種百九羽を得二月十六日京城に歸着されたり。今其の採集品目録を左に記さん。

1. *Columbus faicaltis philippensis* (Bonaparte). カイツブリ
2. *C. nigricollis* (Brand). ハシロカイツブリ
3. *Phalacrocorax carbo sinensis* (Shaw & Nodd). ウツウ
4. *Phalacrocorax pelagicus* Pall. ヒメウ
5. *Troglodytes sacra* (Gm.). クロサギ
6. *Anas platyrhynchos platyrhynchos* L. マガモ

- *7. *Chaetasma streperus* (L.). ラカヨシガモ
8. *Emetia fulvata* (Tokonai). ヨシガモ
9. *Nelion crecca crecca* (L.). コガモ
10. *Spatula djipoda* (L.). ハシビロガモ
11. *Mergus serrator* L. ウミアイサ
12. *Anser albifrons* (Scop.). マガン
13. *Haliaeetus* sp.
- *14. *Falco timnehatus japonicus* F.N.S. チヨウゲンボウ
15. *Phasianus colchicus kurozumi* BARR. カウライキジ
16. *Syngnathus signatirostris* (L.). ダイゼン
17. *Agallitis alenarchia deblatus* SWINHOE. シロチドリ
- *18. *Turdus rufellus* (L.). タゲリ
19. *Tringoides hypoleucos* (L.). イソシギ
20. *Hydrodomus ocyphus* (L.). クサシギ
21. *Actitis leucophaea tridactyla* Pall. ミコシシギ
22. *Perdix alpina schublerae* (VIEILL.). ハマシギ
23. *Callinago gallinago rufulae* (BIRT.). タシギ
- *24. *Tarus crassirostris* VIEILL. ウシネコ
- *25. *L. marinus schistsivagus* Stejn. オホセグロカモメ
26. *Dryobates leucos quepurtensis* KUROHARA Monn.
- *27. *Uus hallemonni camthogus* F.N.S. オホコノハヅク
28. *Haude arvensis pekinensis* SWINHOE. オホビバリ
29. *U. intermedi* SWINHOE. チウビバリ
30. *Motacilla cinerea melanope* PALL. キセキレイ
31. *M. alba lugens* KIPPET. ハクセキレイ
32. *Anthus cervinus* (PALL.). ムネアカタビバリ
33. *A. spinoretta japonicus* (F.N.S.)タビバリ
34. *Hippopates amurensis amurensis* (TEMN.). ヒヨドリ
- *35. *Turdus rufonans* Temm. ツグミ
- *36. *T. obscurus* Gm. マチヤジナイ
37. *Monticola solitarius philippensis* (F.L.S.MILLER). イソヒヨドリ
- *38. *Tarsiger cyanurus* (PALL.). ルリビタキ
39. *Phoenicurus auroreus auroreus* (PALL.). シヤウビタキ
- *40. *Phylloscopus borealis anthodryps* SWINHOE. メボン
- *41. *Lanius laccophalus* F. & S. モズ
42. *Zosterops pallidirostris hima* KURODA. イノジメシロ
- *43. *Prothonotaria melanura migratoria* HAER. シロカモメ

*44. *Coccyzus erythrophthalmus japonicus* T. & S. ヌメ

*47. *Emberiza hortulana* PALL.

ホ、アカ

45. *Chloris sinica minor* (T. & S.). コカハラヒハ

*48. *E. pusilla* PALL.

コホ、アカ

46. *Fusseria ruficeps* (Temm.). ニウナイス、メ

49. *M. ruficeps* Temm.

イ、ジマホ、シロ

備考 *印は濟州島に於ては新發見の鳥類なり

Haliastur sp. の記載

頭部及頸部黃褐色にして基部は何れも白色、上面淡黃白色にして各羽毛の先端及び中軸は暗褐色、尾羽黒褐色に混じり、而して中央尾羽の二枚は先端に近く灰白色の横帯あり。雨覆赤褐色、初列風切羽黒色、次列風切羽は黒褐色なり。喉・胸部は色上面に似たれども各羽毛の央より先は赤褐色を呈す。腹部は白色にして各羽毛の先は赤褐色なり。脛部の羽毛は黒褐色を帯ぶ。蠟膜及嘴は蒼黄色、跗蹠の裸出部及趾は蒼黄色を呈す。虹彩は褐色なり。

嘴峯二寸一分、翼長一尺八寸九分、尾長一尺二分、跗蹠二寸九分。

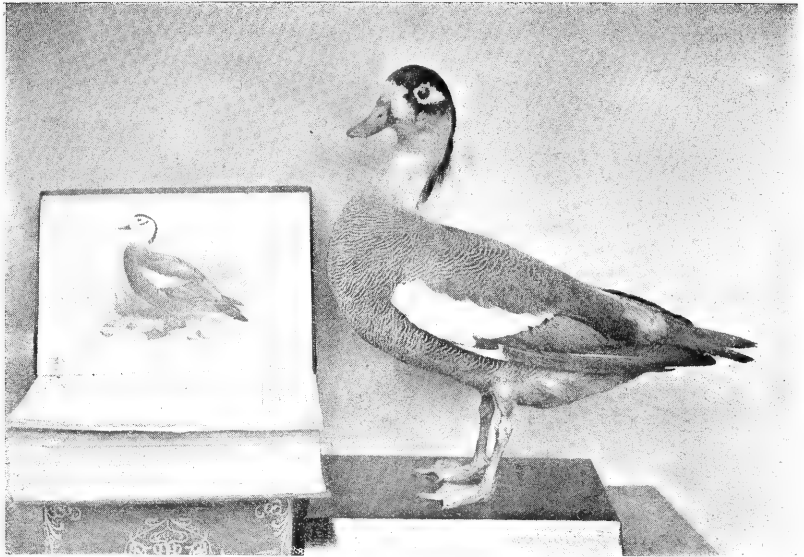
- 一、チジロワシに似たれども蠟膜・嘴・虹彩の色及び主として頭部頸部の體色に於て異なり、又體の測定に於て長さの比例を異にす。
- 二、テウセンオホワシに似たる點あれども蠟膜・嘴・虹彩の色に於て異なり、又上下の兩尾筒及尾羽は白色に非ざるにより異なる。
- 三、イヌワシとは跗蹠の基部迄羽毛にて被はれざるこゝにより異なる。
- 四、*Haliastur leucopygus* は跗蹠の裸出部の少なきこゝ及び裸出部及虹彩の色に於て異なる。

本鳥は大正八年一月二十日濟州島南海岸慕慈浦に於て採集したるものなり。(黒田記す—此標本を見ることを得たるがチジロワシ幼鳥ならんと思はる)。

濟州島産主なる燕雀目鳥類の體の測定

鳥名	番號	採集年月日	雌雄	嘴峯 寸分	翼長 寸分	尾長 寸分	跗蹠 寸分
オホヒバリ	一	八年一月二十日	♂	四	三四五	二一五	七
全	二	八年一月十二日	♀	四	三六	二二一	七

イ、ジマホ、ジロ	コホ、アカ	ホ、アラヒ	コカハラヒ	シマイカ	シマイカ	ムクド	モクド	メボ	ルリビタキ	全	シヤウビタキ	マミチヤジナイ	ツグ	全	全	タヒバ	全	全	ムネアカタヒバリ	ハクセキレイ	キセキレイ	全	チウヒ	全
										二	一			三	二	一	三	二	一			二	一	三
八年一月七日	八年一月二十七日	八年二月九日	八年二月十日	八年二月十二日	八年二月十三日	八年二月十五日	八年二月十七日	八年二月十七日	八年二月一日	八年一月十二日	八年一月十四日	八年二月二日	八年一月三十日	八年二月十日	八年二月五日	八年二月二十七日	八年一月十九日	八年一月廿八日	八年二月十一日	八年二月二十日	八年一月二十日	八年一月十二日	八年一月二十日	八年一月十二日
全	早	全	全	全	早	早	早	早	早	早	早	全	全	全	全	早	全	全	全	早	早	早	早	
四	三	四	三	五	五	八	五	四	五	五	五	四	七	六	四	四	四	四	四	四	四	五	五	五
二、五	二、三	二、三	三、六	三、四	三、一	四、三	二、八	一、九	二、六	二、三	二、三	四、〇	四、三	二、八	二、八	二、七	二、七	二、七	二、七	二、七	二、六	三、三	三、五	三、五
二、三	一、八	二、一	一、六	一、七	二、二	二、二	三、〇	一、七	二、〇	一、九	二、一	二、九	三、一	二、一	二、一	二、一	一、八	一、八	一、八	二、〇	三、九	三、九	一、九	二、六
六	六	六	五	六	六	九	七	六	七	七	七	九	五	六	六	七	六	六	七	八	六	六	五	七



第三十七圖 カンムリツクシガモ 雌

向つて左 ロンドン動物學會會報一八九〇年第一圖版（浦鹽産）
右 カンムリツクシガモ 基型標本（朝鮮産）

カンムリツクシガモの 雌雄に就て

理學士 黒田長禮

余が所蔵しているカンムリツクシガモ (*Anas cristata*) の一標本は雌雄不明であつたが假に♀として記載したが内田學士（『鳥』第六號六——八頁）によつて松平子爵家の朝鮮鷺鷥の圖と比較の結果及び觀文禽譜の記載によつて余の標本が雌であらうと結論せられ大なる興味を吾々に感ぜしめられた。

之等のものは雜種に近き點にあると云はねばならぬこの意味の報知を得た。

此種の余の記載は其當時英國トッリントン動物博物館のハルテル博士に送附して置いた處同氏からの書信によれば此種は新種に非らずして恐らくアカツクシガモとヨシガモとの雜種らしく思はれ且つ此鳥と同様の雜種が浦鹽斯德にて獲られロンドン動物學會々報一八九〇年第一圖版として發表せられて居る。若し此鳥が新屬新種であるとするれば數個が採集せられねばならぬ、而してその凡ての個體が同様で且つ余の基型標本と一致せば余は正しく、若しも之等の個體が凡て相違し變化に富み且つ又稀れる場合には

余は同氏の通知により前記會報一八九〇年の第一圖版に余の標本を比較して余は其相違なきに驚いたのである。第三十七圖參照此種類が所謂雜種にして此會報に左の學者により次の表題の下に學界に始めて發表せられたのである。即ち

P. T. Schaler: Exhibition of and remarks upon a hybrid Duck. (Plate I, Proc. Zool. Soc., 1890, pp. 1-2)

今此記事を抄録して見るに左の如くである。

Schaler 氏は明に *Tadorna* 屬の一個の鴨類標本を展覽した。此鴨類はコペンハーゲンの Dr. F. Tatten 博士より同氏に種類同定を依頼せられたもので此標本は一八七七年四月に東北亞細亞浦鹽斯德附近で F. Timmer 大尉によつて捕獲せられたものである。Timmer 氏は充分なる調査をした結果恐らくアカツクシガモとヨシガモとの雜種ならんとして左の如き名稱の下に記載した。

Tadorna casarca × *Querquedula fimbata* (?)

同氏の記載は余のものに大差ないから再録を略する只體の測定を比較して見るに

全長	嘴	峰	會合線	翼	尾	跗	蹠	中趾	爪	共	測定者
四五・七耗											シユレーター
一八吋											
五三五耗	四一・五	六六	三二〇	二九九・七耗	一一一・七耗	四・四吋	四七	五四	黑	田	

シユレーター氏は時で記載してあつたから右表の様には耗に直したのミ兩方を掲げるにこゝした。此二標本では跗蹠を除き余のものの方が少し大形であるに云ふのみで全く同一種類であることが確め得られる。嘴は浦鹽産のものでは褐色、脚は帶黄色と記載せられて居る。茲に注意すべきことはシユレーター氏も確に上記二種の雜種であることは思はなかつたに見え、印を附してある點である。

余はハルテルト氏に好意を謝すに同時に此上記の比較の結果及び内田氏の記事を附記し此種は確かに新種に相違ない若し雜種であるとするならばアカツクシガモもヨシガモも共に嘴は黒色であり又脚も前者は黒く後者は鉛色であるから決して褐色乃至帶黄色褐色の嘴となる筈がなく黒色でなくてはならず、脚も亦帶黄色乃至帶黄角色となる理由がないと記して通知した處同氏も亦余の説を了解



第三十八圖

カンムリツクシガモ 雌 (向つて右) 雄 (向つて左)

したごの書信が来て且つ雜種なるものは野生鳥類には甚だ稀れである故同氏は常に新しき珍鳥は雜種とするよりも新種とする方針であるが之れと同時に珍奇な雜種は獵鳥並びに鴨類に特に生じ得るものなることを懇篤に報知せられたのは誠に感謝すべきである。

扱て是れで此カンムリツクシガモは雜種でなく新種たることに決したが未だ必ずしも余の基型標本が雌と決するところは出来兼ねる點が無いでもなかつた。處が今回自家所藏の古き鳥類寫生圖の整理をしたとき今迄余の見ない一巻を開き見たるに其内に計らずも第三十八圖に示した様な圖を發見した。此圖は最早何等の疑ひもなく全くカンムリツクシガモの雌雄に相違ない。此寫生圖は恐らく鳥津重豪公時代に集められたものらしく思はれる。夫故今より約百年以上のものである。只名稱が記してなかつたのは物足らぬ心地がする。今此雌雄を「鳥」第六號の圖と比較して見るに兩者共全く同一であることが知られる。只白色の過眼線あることと腹の色が濃色であるのみの差である。嘴及び脚は「鳥」第六號七頁による桃色で黄を帯びるものがあるが此原圖では嘴は黄色であるが脚は同様で只一層濃く書てあつて先

づ濃紅色を呈している丈の差である。この二つの例によつて最早此種の嗜脚の色は黄色か赤味がまるか、恐らく後者の方が正しいと思はれる。シレーター氏のものも余の標本も共に乾いた爲め嗜脚も赤味が褪めて褐色乃至黄色のみとなつたと思はれる。此點に於て黒嗜のアカツクシガモミヨシガモミの雜種でないことが確然と決することを得るのである。

ツバメ及びコシアカツバメに就て

兼 常 彌 富

「鳥」第七號黒田氏「コシアカツバメの蕃殖」の記事を讀みて、該記事に因める余が現住所（長門阿武郡佐々並村）地方の、燕類に關する觀察を照會する事とせん。

佐々並地方に渡來せる燕類はツバメ、コシアカツバメ、イワツバメの三種にして、ツバメ最も多く、コシアカツバメ之れに次ぎ、イワツバメ最も少なし。イワツバメの「渡り」、蕃殖等審かならず、僅かに四五月、八九月頃他の燕類に混じ、上空を飛翔するを見るのみなり。「渡り」燕類の渡りに就ては、明治三十三年頃より觀察に着手せるが、毎年殆んど定りたる如くにて、春季彼岸を中心とし、其前後數日内に必ず姿を現はし、秋季彼岸頃に姿を没するを常とす。

ツバメの渡來期は前述の如く、毎年三月中下旬には必ず姿を現はし、四月に入る事は稀なり、昨年殊に早く、三月十七日には宇市區の中空にて、飛翔せるを認め得たり。

コシアカツバメの渡來は、前者より少しく後れ、四月上旬に出現するは稀にて、通常四月中下旬乃至五月上旬なり。

渡來當時に於ける状態は、初め部落の中空に只一羽姿を現はし、數日にして二羽となり、三羽となり、漸次其の數を増加す。去 期 里方にてツバメの姿を認むるは九月下旬迄にして、十月に入りて認むる事は稀なり。

コシアカツバメは少しく後れ、十月上旬乃至中旬頃まで、里方にて群飛するを認む。

去期に於ける状態は、高空に多数群集飛翔す（高山の頂上等に多し）故に、里方にては全く姿を認め得ざるも、高山に登れば尙多数の群燕を認め得べし。

九月中旬乃至下旬頃迄は、ツバメ、コシアカツバメ混交して、里方の上空に認め得べきも以後は山頂に集まり去るものゝ如し、故にツバメの去期は十月上旬、コシアカツバメの去期は、十月中旬乃至下旬と見て大差なかるべし。

蕃殖 ツバメは普通人工巢臺（人工巢臺とは臺又は板にて圓形の物を作り、三本の緒を付し、屋内、若くは軒等に吊したるもの。又板片を天井裏、軒、其他適宜の箇所へ工合よく打ち付けたるもあり）上に營巢す。巢臺以外に營巢せるものは少数なり。（巢臺以外に少なきは燕巢を營めば幸福あり、營巢せざる家は、其の年何か凶事ありて、各家つこめて巢臺を吊し、早く營巢せしを喜ぶの風習あるにも起因すべし）百雛は四月上旬乃至七月下旬にして、八月に入りて雛を見るもの少なし。

コシアカツバメは巢臺上に營巢せるは稀にして、通常屋外、軒下隨所に營巢す、多きは一個所に數個乃至七八個も並列營巢せるあり、亦草屋根の軒口等にも營巢せるものあり。蕃殖期は五月上旬乃至八月下旬にして、晩生には九月に入りて尙雛の存するものあり。

ツバメは前年の古巢を使用せるものあるを見ざるも、コシアカツバメは古巢を使用し、破損せるものは繕ひ、内部の材料を更新し營巢す。一ト年營巢せる家には、毎年來りて營巢す。これ全く古巢を應用するが故なり、コシアカツバメの營巢せる家は殊に福運來るゝ噂す田舎には彼の營巢すべき軒少なく（草屋根多く瓦屋根少なきが故なり）軒壁の家少なし、營巢せる家は何れも大家富豪の家多きが爲めに、福運云々の迷説も適合するなり。

佐々並地方にては屋内にツバメ、屋外にコシアカツバメと同一の家に兩者營巢せるもの稀ならず。

ツバメの方言、 ツバクラ、ツバクロ

コシアカツバメの方言、 ミヤマツバメ、ミヤマツバクロ、ミヤコツバメ

イツツバメの方言、 ヤマツバメ（知らざるもの多し）

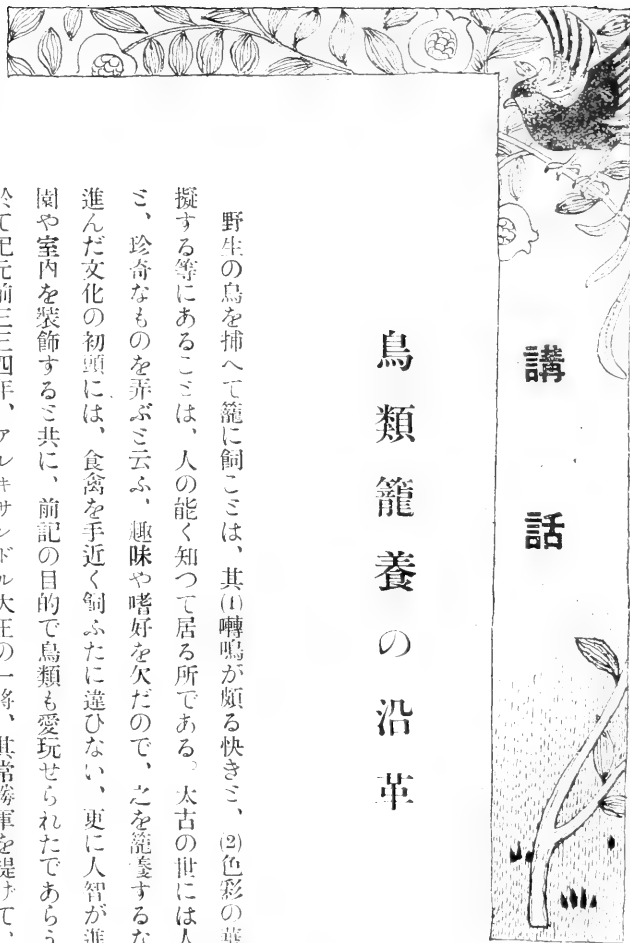
講 話

鳥類籠養の沿革

荒 木 彦 助

野生の鳥を捕へて籠に飼ふことは、其(1)囀鳴が頗る快きこと、(2)色彩の華麗なること、(3)姿態の奇なること、(4)人語を模擬する等にあることは、人の能く知つて居る所である。太古の世には人智も至て開けず、鳥獸は殆ど雜居したること、珍奇なものを弄ぶこと云ふ、趣味や嗜好を欠たので、之を籠養するなどは夢にも思はなかつたのだ。併し時世が進んだ文化の初頭には、食禽を手近く飼ふたに違ひない、更に人智が進み、種々の慾望も複雑になつた時代は、庭園や室内を裝飾すること共に、前記の目的で鳥類も愛玩せられたであらう。其文字に記された、鳥の籠養は、海外に於て紀元前三三四年、アレキサンドル大王の一將、其常勝軍を提けて、印度を侵した時に、オホ、ンセイインコを

持歸つたことあるのが、蓋し最早の記録の一である。ローマ帝國ではアウムの如きは、奴隸一人の値よりも多くの金錢を拂つた。斯様にして幾多の時世を経た後、彼等は鳴禽として、*Wren*, *Woodcock*, *Nightingale*, *Song Sparrow*, *Blackbird*, *Starling*, *Blue Jay* の如きを愛玩し、可憐な囀禽には *Bullfinch*, *Linnet*, *Goldfinch*, *Siskin*, *Canary* 等を有して居る。美觀鳥には主として鸚鵡類 (*Parakeets*) 及び *Parrots* (鸚鵡類) (*Cockatoos*) が其主なる物であつて、アメリカでは *Mockingbird*, *Virginian Nighthingale*, *Blue Jay*, *Peking Nighthingale*,



Canary, 等を能く飼ふが、其他にも歐洲方面より、籠鳥が輸入されるのは疑ふべからざる事實なのだ。是を食餌で區別すること、大體四部になるのである。(1)小穀粒で養ふ所の鳥に Canary, Tinnet, Pineses, Siskin, Redpoll があり、(2)小穀粒の昆虫を食ふ鳥に Tarks 及び Tits があり、(3)イチゴの如き果實の昆虫で養ふ、Nightingale, Thrushes, Blackbird, Blackcap があり、(4)全く昆虫を食ふ鳥に Martin, Warbler, Redstarts, Hedge warbler, Redbreast, Wrens のやうなものもあるのだ。

夫れが日本になると、垂仁天皇（紀元前二九一—七〇年）の朝に、山邊大鶴が御意を奉じて、播磨から越後まで追ひかけて、遂に生擒して奉つた、鶴もお殺しにはならなく、ある期間は飼養されたと思ふ。降つて雄略天皇の十一年十月、紀元四百六十六年、宮廷の鳥官が養つて居る物を、菟田人の犬が啗殺したので、天皇唄りたまふ事甚しく、其面に黥して鳥飼部とされたこと見えたのも、隨分に古い記録である。是は恐らく供御に召される、御料の鳥でしたらう。併し鳥類を愛玩の意味で飼つたのは、椎古天皇の御宇六年八月、即ち紀元五百九十八年に、百濟から孔雀一隻を献納し、翌年八月にも亦白雉を献じて居るが、孝徳天皇の大化三年十二月（紀元六百四十七年）には、新羅より孔雀ミアウムを献じた。本邦産の白雉も、支那の迷信を受けた、太平の兆、或は聖人世に出るの兆なきに信ぜられ、朝廷に献せられるので、天智、天武、稱徳の諸帝の時に記録を止て居る。兎に角白變せし諸鳥は朝廷と幕府に納め、之を捕獲し得なかつた場合は、其報告を等閑にせないで、明白な記録がある。朱雀天皇に至れば、天慶五年四月七日（紀元九百四十二年）神祇少祐正直云ふ者が、白鳥の雛を藏人所に奉り、之を籠に收て置たさある。其雛は正直の庭木に營巢したのを捕へたのだから、今日の白鳥でない、單に白色の鳥と云ふのであらう。白鳥即ちの *White* は樹上の營巢でない、習性が違ふのもわかる。堀河天皇の寛治五年（紀元千零六十一年）九月六日、内裏に小鳥合の遊戯が行れ、十月六日にも殿上に小鳥合があり、燭を秉つて鳥籠を持參す、人數は十二員、籠は風流を盡すなき、記録の文字も飾つてあるが、なか／＼裝飾に注意を凝した物らしくある。其後に源平二氏の覇を争ふて、平氏に非ずんば人に非ずとも云れた、高倉帝の時には、實に平氏全盛の有様で、承安三年（千百七十三年）三月二十一日、中將定能來りて院中に鴨合ありと記す、併し夫れは鷄も鴨もあつて、必ずしも一致して居ないが鴨の方正しからう。是等を記したものを抄録すれば、

(玉海) 公卿殿上人己下、北面上下、僧、入道等、左右の念人其数は繁多なり、(中略)、左の方に錦の帷を打たせ、右のかたは黒木の假屋を作り、各々風流にして善美を盡す、但し禁制あり、金、銀、錦等の類を用ひず、(中略)、凡そ此經營は其費勝けて計るべからず、(中略)、左の頭は大納言重盛卿、右の頭は中納言國綱卿、(中略)、左右の念人の外は見る可らず。

承安三年五月二日、上皇(六條)御所に於て、鴨合(鴨)の事あり、近習、月卿、雲客及び北面下藤等が、左右に分れて念人となりぬ(原漢文)。

土御門院の御歌に

籠の中にまだすみなれぬひえきりは心ならでも世をすこすかな。

こあれば、鴨が籠養された事が確である。

(竟物名案) 春村曰く、右の鴨字は或は鴨に作れり、鴨に従ふべきか、されど寛喜二年(紀元千二百三十年)六月二十二日、明月記に一日比、信盛前相公宅に於て鴨鳥を遊ぶこも見ゆれば、ひたぶるに左も決め難し。(云々)。

順徳天皇の御宇、將軍源實朝が幕府を占め居たる、建曆二年(紀元千二百十二年)七月十日、前大納言が坊城の泉邸(原文に泉下の一字を缺ぐ)に、鳩合を行つた、又同年十二月十日に馬場殿に鳩合があり、左金吾の經營だこもあるが、此時代は大に華美驕奢を極めたもので、只だ金銀と錦緞にて善を盡し、美を盡すこもあれば、當時も小鳥の飼養せられたのこ、漸く世の風尚が華美になつて来たのはわかつて居る。

(尺素往來) 加茂競馬、深草祭に上下の見物は、鶯鴨の闘鳥、此時にある可きか、略。

後花園天皇の御宇、足利義教の永享七年(紀元千四百三十五年)五月一日、早朝に鶯合の事を記し、一方鴨す不興なり。又三日朝に鶯合、行豊朝臣、重賢持參す、行豊朝臣勝こあり、鶯も盛んに飼れたのは云ふまでもない。後土御門天皇の御宇、將軍義政の時には、土岐殿へ鴨一羽まるるこ見え、後奈良天皇の御宇、天文七年(紀元千五百三十八年)五月二日、將軍義晴の時に當り、道運と云ふ者が鳥鴨を見せたこしてあり、又鶯の捕獲を禁じた事があれば、其濫獲を半面に立證して居るこ共に、従つて飼養する者も、血腥い戦争

の多い時代にあつたこと云ふも差支へない。豊臣氏の晩期、朝鮮再征の頃以後、即ち慶長からは鴉も飼れた事が、嬉笑遊覧の記者に記されて居る。尚ほ明和、安永の頃には、盛んに外國の禽獸が輸入されし事が知られるのだ。(前々號徳川時代の薩摩に於ける動物園を参照あれ)、當時に於て普通であつたのは、インコ類、アウム類、カナリヤ、ジウシマツ、キンバラ、ブンテウ、キウカン、シマヒヨドリ、ソウシテウ、ハト類のやうである、大型の鳥では、ツル、クヤク、ハクカン、キンケイ等より、甚だ稀にバリケン^{Barakent}の如き、珍種も輸入された事もあつた。此の他に狩獵用として、仁徳天皇四十三年(紀元三百五十五年)九月一日、鷹が宮中に獻ぜられて以來、徳川時代まで不斷に飼養されて居る。明治になつてからは、通商貿易の發達に従ひ、多種多様の鳥類が輸入せられ、殊に動物園から縁日商人の見せ物を挙げたら、其種屬は幾百種にも及ぶであらう。公爵鑑司信輔氏の「飼ひ鳥」に掲げられし所でも、左の數になつて居る。

(A) 撒餌鳥一六七の内。雀科二八。金腹科二八。其附録一〇。雲雀科四。四十雀科五。鸚鵡科四二。緋鸚鵡科七。鳩鴿類一二。鶉雞類一二。涉水鳥一三。游水鳥六。

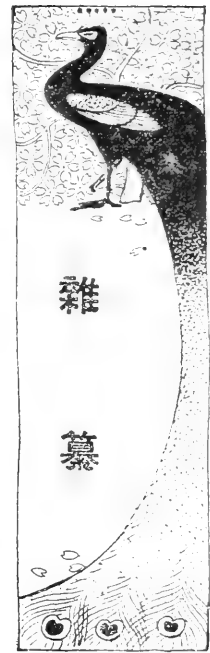
(B) 摺餌鳥六二の内。鶉科一五。鶯科六。四十雀科一。鷓鴣科一。河鳥科一。鶉鴿科五。鶉科三。連雀科二。知目鳥科四。鴨科四。黃鳥科一。椋鳥科一。鴉科五。啄木鳥科三。

前後を推算して二百十三位の鳥が、現代に人工飼養を受けて居るのである。(完)

鶴の棲息地 (動物學雜誌第二卷一三九頁より)

明治二十二年十一月發兌の動物學雜誌十三號雜錄欄内に鶴の蕃殖地といへる題にて該鳥の最も多く棲息して屢々人目に觸るゝは膽振國勇拂郡と千歳との間にオサツ沼と云へる泥沼地近傍にして是迄屢々舊土人等の獵獲したることもありと記載しあるに予は之を讀みし當初には別段注意もせざりしが此頃徒然の餘り何心なく阿部喜任の纂述に係る蝦夷行程記(安政三年刊行)といへる書の下卷を一讀したるに裕富津(今は勇拂と改正)の條に窪山^{ユウツ}をこえ美々^{ユウツ}より石狩^{シヨツ}へゆく道あり此シヨツといふ地名唱へあしくとて文化三年山田某申立鶴の多く居る所なりとて千歳と改らるゝと見へたりされば千歳近傍には古より鶴の多く棲みたるものにや見るがまゝにここに記しつ

(野村彦太郎)



長門佐々並地方鳥日記

兼常彌富

長門阿武郡佐々並村地方に於ける鳥類の、蕃殖、「渡り」、初鳴期等に關し、調査したる日記、大正八年二月より八月までのものに就て、左に記述することとせり。爾後に屬するものは、更に報道する所あるべし。

二月十七日 字田の原の山林中に於て鶯の初鳴を聞く。

三月十七日 字市附近の中空にて、ツバメの飛翔せるを見る。唯一羽のみにて未だ低く下らず。

三月二十四日 ツバメ數羽となり、字市附近鳴聲を頼りに放ち、低く下りて人家に入らせるを見る。

三月二十六日 字深瀬附近の中空にて、コシアカツバメの飛翔せるを見る。

四月二日 字開作余が宅地庭園内櫻樹の枝に吊したる空洞、栗の木の空洞にして、曾て山野にて、マガネの營巢せしことありしが、後に持ち歸り營巢すすべき目的にて樹上に吊したるものを假りに第一空洞と呼ぶこととす。ハシ

ジウカラ營巢を始め、巢材（苔類）を運び始む。雌雄共に巢材を運ぶも主として雌多く運ぶ。

附言 本空洞は余が樹上に吊してより數年の間、毎年シジウカラ營巢せり。

四月十三日 字開作余が居室の屋根、棟瓦の間に、キセキ

レイ營巢を始め、巢材（田畑に於けるスズメノテツバウ、ノミノフスマ其他雜草の引き捨てある枯れたるもの）を運び始む。雌雄共に運ぶも主として雌なるもの多し。

字田の原附近の路傍の山林にて、オホルリの初鳴を聞く。

四月十三日 字田の原の山林にてコマドリの鳴聲を聞く。

四月二十六日 第一空洞に於けるシジウカラの巢を検す八卵

あり。

同

明木村字釘布（佐々並村字落合に近接する村境）にて、エナガの巢立せる雛を見る。

四月二十七日

字開作原野に於ける栗樹の空洞（此の空洞はアカゲラの穿ちたるもの）に構巢せるシジウカラの巢を發見し、檢したるに九卵あり。量三分五厘乃至四分二厘。

五月十六日

字中の原附近にてホト、ギスの初鳴を聞く。

五月十七日

居宅棟上のキセキレイの巢を檢す六卵あり、量五分乃至六分。

四月二十八日

字長小野佐々並鑛山事務所（西風翔山中腹）敷地の石垣にヤマガラ營業し居れり、五卵を有す。

同

字高津路傍溝の上土手、土の堀り小口に營業せるオホルリの巢を發見す、一卵あり。

五月四日

同

字市にてホ、ジロの巢立せる雛を見る。

五月四日

同

字市附近にてオホカハラヒワの巢立せる雛數羽を見る。（編輯者曰くコカハラヒワにはあらざる歟）

五月七日

同

庭園内第一空洞のシジウカラの雛午前中に全部巢立ち去る。

同

四月十三日余が居宅棟上に營業を開始せるキセキレイの巢を檢す、二卵あり。

同

庭園内柿樹の枝に吊したる第二空洞（此れは同月初旬、原野に於て栗樹の空洞を持ち歸り、營業さすべき目的にて吊したるもの、假りに第二空洞と呼ぶ）にシジウカラ營業を始め、巢材（苔類）を運び始む。

五月八日

同

字高津に於けるオホルリの巢を檢す、二卵あり。

五月十日

同

余が居宅棟上のキセキレイの巢を檢す、五卵あり。

五月十四日

同

字落合にてヤマガラの巢立せる雛を見る。

巢せるあり、檢したるに一卵あり。余が居宅棟上に營巢せるものに比し、濃色にして形大なり。

五月二十日

宇開作原野にて巢立後一、二日のホ、ジロの雛數羽を見る。

同

宇市、竹林にてモズの雛（巢立後約十日）數羽を見る。

五月二十四日

宇高津、オホルリの巢を檢す、四卵あり、量七分乃至七分五厘。

五月二十五日

第二空洞に於ける、シジウカラの巢を檢す。二卵あり。

同

宇開作原野に於て、小松（赤松）の地上一尺五寸位の枝上に、禾本科植物の枯草二三本、圓形に載せあるを見る、余は多分ホ、ジロの營巢を開始せるものと認め、後日檢すること、せり。

五月二十七日

宇田の原の少しく上深林内、炭竈の土手なる石垣の空間に、營巢せるオホルリの巢を發見す。孵化後約五日位の雛三羽あり。炭焼人夫の

言に依れば、五卵ありしが一個腐敗し四個孵化せり、然れども余が檢したる當時は三羽のみなりき。

同

宇開作原野平面なる草間土上にて、トタカの卵二個を發見す、一卵は短く圓し量二匁六分

同

一卵は長く細くして量二匁八分あり。

同

第二空洞に於けるシジウカラの巢を檢す、五卵あり。

同

宇下開作にて巢材を運びつゝあるホ、ジロを見る。

五月三十一日

宇田の原一農家、納屋瓦屋根の棟上に營巢せるキセキレイの巢發見、五卵あり、余が居宅棟上に營巢せるものに比し、少しく小形にして、濃色なり、量五分。

同

五月二十五日宇開作原野に於て、小松の枝に營巢せんとする鳥巢に至り檢す、果せる哉ホホジロの巢にて、最早完整し居りて三卵を有せり。

六月三日

五月二十五日發見せる開作原野のホ、ジロの

同 巢に至り検す、五卵あり、量八分乃至九分、
字田の原の上荒谷山中腹の深林、アカガシの
樹、地上約一丈の高所に營巢せる、ヒヨドリ

の巢発見、巢はハリガネワラビを下敷こなし
内部には光澤ある草根、蔓性植物の細き蔓等
を用ゐる、四卵を有せり、量五分五厘乃至六分。

六月五日 字市小學校々舎の軒に巢造れるツバメの巢を
六月一日検したる時は、二卵なりしが、本日
検したる時は、完全なるもの二卵、破損せる
もの二卵あり、多分兒童の傷けたるものなら
んと思はる。

六月八日 字開作原野小松（アカマツ）地上約四尺の枝
上にて、ホ、ジロの巢を発見す。卵なし、古
びたる材料の如きも多分本年の巢と認め、他
日検することとせり。

六月十四日 六月八日発見せる字開作原野の、ホ、ジロの
巢を検す、卵三個あり。

六月十五日 六月八日発見のホ、ジロの巢を検す、三卵あ
り（午後五時）。五月二十五日発見のものに比

し、少しく小形にして濃色なり。
同 余が居宅屋根瓦の間に營巢せる、キヒケレイ
の第二巢を検す、孵化後間もなき雛二羽あり

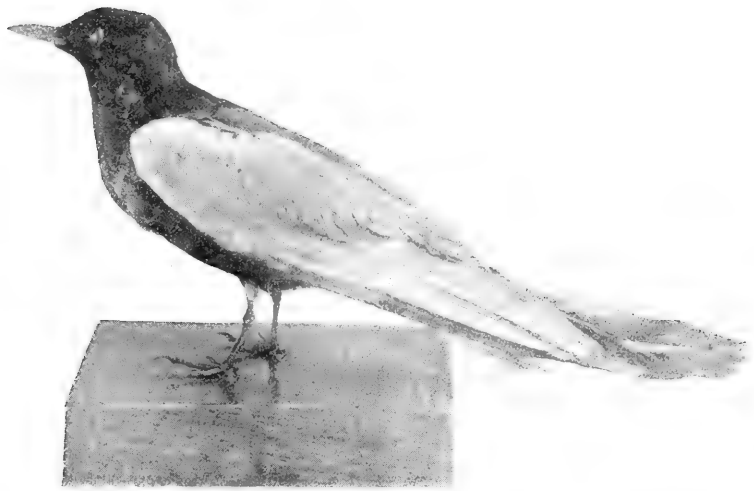
（多分本日孵化せるものならん）外に三卵あり
同 第二空洞に營巢せるシジウカラの雛七羽本日
巢立し去る。

同 字高津一農家宅地五垣空間にて、オホルリの
巢発見、雛五羽居れり、孵化後約十日。

七月十二日 字黒ヶ谷水田中にて、ヒメクヒナの巢発見。
巢は水面上八九寸の所に在りて、巢材は稻葉
を引き寄せ、内部も亦稻葉を用ゐる粗造なり。
八月一日 八卵あり、量二匁六分乃至二匁七分。

八月一日 字市某邸宅庭園内、柿樹の梢に、靜止せる、モ
ズの雛三羽を見る、巢立後約二日位にて、親
鳥は頻りに虫を運び居たり。

八月二日 字火の原一農家屋内巢臺上に巢造れるツバメ
の巢を見しに、雛五羽居たり、最早成育し巢
立近し。（大正八年八月三日稿）



第三十九圖

ハジロクロハラアジサシ 雌 (生殖羽)

朝鮮にて獲られしハジロクロ
ハラアジサシ

森 爲 三

Hydrochelidon leucogaster (Zelinka).

雄 頭部・頸部・體の上面及下面は黒色殊に頸部・頭部は光澤強し腰部上下の尾筒及び尾部は白色なり。翼は小雨覆白色、中及大雨覆は灰色、初列風切羽は最外側の二枚は灰色其の他は灰色、次列及び三列風切羽は薄き灰色なり。小雨覆及駁羽は黒色を呈す。嘴は黒色にして稍赤味を帯び、跗蹠は鮮やかなる赤色なり。虹彩は暗褐色を帯ぶ。

雌 雄と比して異なるは

1. 頭部・頸部及び體の下面は黒色なれども、上面は黒色に灰色を帯ぶること。

2. 尾羽中央三對は稍灰色を呈すること。

3. 初列風切羽の最外側の三枚が灰色なること。

4. 次列及三列風切羽は色薄くして灰色なること。

測定 喙峯六分、翼長六寸八分五厘、尾長三寸四分、跗蹠六分

♀同七分五厘、同 六寸九分五厘、同 三寸四分、同 六分

♀同八 分、同 六寸九分、同 二寸五分、同六分五厘

右の三個は大正八年五月二十四日京畿道水邑に於て初めて採集せられしものなり、分布極めて廣く歐羅巴の中央及南部、亞弗利加は遙かに南方のトランスバールまで、亞細亞は小亞細亞より東は滿洲・蒙古・ビルマ・錫蘭島等に至るまで其の他濠洲及ニュージールランド北亞米利加のウ井スコンシン東印度諸島のバルバドス島等にて獲られしこゝあり。

習性、本鳥は水邑に於て數十羽の群をなして飛翔し、其の中に於ても尙二三羽づゝ小群をなして相伴へり、地上の餌を視るや急轉直下して水田の虫魚を捕ふる様コアジサシニ異ならず。其の飛翔せるを地上より見るに實に輕快なり。而して翼は白く胸腹の邊は黒く見えて美觀を呈す。

平壤鳥信

土居寛暢

大正八年五月二十四日平壤高等普通學校構内に於て同校西村教諭は一羽の珍鳥を捕へたり。予は「鮮滿鳥類一斑」によりてヒメインヒヨ (*Monticola gularis*) なるものを知るを得たり。該著

には本種は朝鮮にては龍岩浦にて大正四年九月と同六年五月との兩度採集されたりとありしを以て朝鮮にては珍らしき方の鳥

ならんことを信じ報告す。

ツルシギ及びココハラヒワに就て

熊谷三郎

「鶉・千鳥類圖說」中のツルシギの方言に加ふべきものあり、宮城縣伊豆沼方面にてはチョヘイコミ云ふ。昨年は三羽を得、その以前も二羽(余の所有せるもの)獲られたり故に左の如き測定表を作るを得たり。然るに予のものは測定不完全なる故にや黒田理學士のものより少しく大形の如し。

ツルシギの測定表

番號	嘴長	翼長	尾長	跗蹠長	中趾長(爪生)	性別	採集地	採集月日	測定者
1	59 mm	159	65	59	38	♀	伊豆	大 5.3.20	Kunigata
2	56	164	64	53	36	♀	伊豆	大 7.3.19	〃
3	50	167	67	56	38	♂	伊豆	大 8.3.20	〃
4	56	170	71	53	35	♀	伊豆	大 8.3.20	〃
5	39	170	71	58	39	♀	長沼	大 8.3.25	〃
	54—59.5	156—165	63—70.5	53.5—59	—	—	—	—	Kuroda

本種は例年三月中下旬僅に半ヶ月内外の期間當地方に一時滞在するが如し其時の鳴聲は黒田氏の如く chawee 又は chawee wa

聞こゆる故にや前記の如き方言あり。而して體の重きは昨年獲たるもの、みにて計れるに四十五匁二羽、三月二十日採集。乃至五十九匁(三月二十五日獲たる雌)にして黒田氏の三五・二四七匁より少しく重き様なり、又その胃中には豆娘科トンボの若き虫數尾、カハエビ *Allyghia compressa* (The Haan) の數尾並びにミヅスマシの類數尾あるものを確に見たり。次に此鳥を捕ふるには前記のエビを魚針に通して數尺の長さにして竹に結びつけたるを數十本作り置かば翌朝一、二羽は容易に獲らるゝ、このこなり。

次に當宮城縣下に於けるカハラヒワ類に就て記さんに此類は明に當地にて繁殖するこを知れり。十一月、十二月及び一月の候に至れば二、三十羽の群を見受くるこ從來の報告の如し然れどもカハラヒワ類には二亞種あり當地のものは何づれなるかを知らんが爲め特に黒田氏より報ぜられたるオホカハラヒワ及びコカハラヒワの測定ミ予の標本を比較せしに左の如き結果となり。(1) (4) 迄は予の標本なり。

種	類	喙	峰	翼	長	尾	長	跗	蹠
オホカハラヒワ	(1)	一一二	一一三	八七—九二	六〇	一七—一八	五〇	一八	
		耗		七九					

四個の平均	一一二	耗	八一—八四	五二—五三	五五—五六
コカハラヒワ	一一二	耗	八一—八四	五二—五三	五五—五六

予の標本中にてコカハラヒワの測定よりも其翼及へ尾の長きに於て短きものもあり。測定の不完美なるやも知れざれども其の平均の長に於てはコカハラヒワに近き様なり。

榎山附記(コカハラヒワにても稀に喙峯の一、二、五に達するものあれど喙高は九耗以下なるを常とす、オホカハラヒワに於ては喙高一〇耗)

鳴類の蕃殖

藤木常隆

大正八年八月上旬府下愛宕郡宮倉村地内に於て鳴の營巢、産卵、孵化したる噂を聞きたるに依り或は地鳴の營巢したるものなるべしと思考したるも爲念其の土地の所有者に就き取調べ概略左記事項を知ることを得たり。

六月十八日 植付

七月七日 一番草 此の時營巢産卵四個を發見す。

同十六日 二番草 其の儘

同 二十一日 三番草 此の時二個既に孵化し居たるを以て

自宅へ持歸る。

同 三十日 四番草 此の時は親雛共に最早棲息せざる模

様に付巢を除去す。

右七月二十一日巢に近寄りたるときは親は遠く離れず其の周圍に於て兩翼を張り羽毛を膨らましつゝ恰も敵を脅威するものゝ如き姿勢なりしと云ふ而して持歸りたる雛は二羽共に翌朝既に斃死し居たれば棄てたりと、尙ほ其の附近に水鶏(方言クロドリ)の營巢もありしが共に除去せりと云ふ。

而して親の形狀色彩等は何分素人の言なれば確かならざるも小生数年間の經驗に徴するに此の附近にて嘗て地鳴を見たることなく毎年田鳴は少數ながら獵獲す。

觀山雀演技記

成嶋柳北(成嶋復三郎)

脇山三彌

嗚呼教育の人生に切要なる我れ之を山雀の演技に於て悟れり頃日小兒淺草公園に遊んで歸り報して曰く山雀の藝は奇妙なる哉と寢て猶言ふ明日漁史大兒復をして往て之を觀せしむ亦歸

り報して曰く真に奇妙なり大人觀場の猥雜なるものを好まずと雖も請ふ一觀を試めと漁史近日異聞の録して以て看客に報道す可き者無きに困しむ乃ち親ら往て其場に臨み其技を觀る實に六

月二十九日なり場極めて矮小僅に看客三十人許を容る場師一人小奴一人鼓を過つ者絃を鳴す者各一人のみ山雀十餘隻あり一禽一籠雜居せしめず場中の器械百其皆小にして禽鳥と相副なふ首に三番叟を演ず場師四個の籠を啓けば一禽出て喙を以て鼓を打ち一は大鼓を過ち一は三絃を鳴らす一は中央に出て小鈴を口にして舞躍す細かに之を視聽すれば毫も其聲調態度を失はず人をして驚嘆せしむ曲畢る場師歸れ々々叫べば衆禽皆退て籠に入る次に那須與一の射扇を扮す場師弦に箭を挿めば一禽出て、喙を以て弦を引く其箭飛て扇の中心に中り撲然聲有り次は縁繩の技なり繩に小梯を架す一禽梯を攀ち登り口に小傘を啣み繩に縁て左右に歩す歩々規矩を失せず次は骨牌數個を小机上に列す牌に伊呂波の字を寫せり觀客波の字と命すれば禽飛て机上に登り第一第二の牌を抛ち去り第三なる波字の牌を啣み我が籠中に歸る次に一鐘樓を出す小鐘寸挺を安せり場師呼びて曰く十時なり時を報せよと禽鐘樓に上ほり挺を敲して撞く其數を算すれば十なり場師又曰く昔の時を報せよ禽又之を撞く其數四、次に演

するは住吉詣なり住吉祠前に一の賽錢箱あり上に小孔を穿つ針よりも細し小錢六七枚四方に散亂す塲師賽錢を拾へし命ずれば禽其錢を口にし盡く之を針大の孔に投し了り進んで祠前に到り小鐸を鳴らし拜祈の狀を寫す塲師土産を携へ歸れし命ずれば祠傍に置きし住吉師(玩物)を啣んで飛去る漁史覺へず手を拍て妙こ呼べり塲師高く呼て曰く次に演ずるはこ雀の技なり是れ難事なり汝勉めよやこ一禽籠を出て、小机上に在り五牌あり一二三四五の文字を寫せり塲師更に扇子五握を出す亦一二三等の字を

之を致ふる者の辛苦こ禽こ雖ども人を驚かすの技藝を有する人として恥つるなきか嗚呼漁史が二兒は犬豚のみ如何ともすべからざるに幾し希くは世の子弟を有する者幸に教育の忽にすべからざるを覺り早きを趁ふて學に就かしめ人にして鳥に如かざるの嘆を發せしむる勿れ自ら警め併て諸君に忠告す亦た一片の婆心なるのみ

曰く汝窠して看客が撰ぶ所の扇號を知れし禽窠竹を啣み細かに左右に分排す傍に小匣あり喙を以て蓋を開けば中に算木あり之を啣みて地に移し合すれば則ち卦を成す或は地天泰こなり或は水雷屯こなる禽退て籠に入り黙して思ふ所あるが如し塲師曰く汝善く卦に就て熟考せよ考へ得たらば疾く我れに知らせよこ少頃にして喙を以て籠を敲き既に判斷し得たるを告ぐ塲師籠を啓けば直に飛んで机に上り一二三四の牌を蹴て落し其五の牌を啣んで還る塲師曰く汝誤るこ無きやこ禽喙を敲して牌面を突き其誤らざるを示す客僕にする所の扇を出して觀れば則ち亦五の字あり衆喝采す漁史家に歸り二兒を召て曰く山雀の技の妙なる

三彌曰く以上は柳北居士の明治七八年頃朝野新聞社にありし時の文章なるべし山雀は文人柳北の爲めに名を擧げたる蓋し鳥界の一美事と云ふべし再び懷ふに明治十二年頃筑前光雲神社祭禮の時山雀の藝を見たるここあり鐘樓住吉詣等の數曲を演じ如何なる故にか山雀の臺の下に跳り入りて容易に出づらす興業主大に焦心せしを目撃したるここあり山雀の類は技藝を演せしむべし鳩も亦然り鳩は馴らして通信を爲さしむべく又寫眞を撮らしむべし是れ今日人の多く知る所なり山雀も亦馴致して軍用に使し得らるべし山雀を馴致するの法或は廢絶するこ無きか史蹟名勝天然紀念物調査會の事業の一つとして山雀の藝當を調査するここ或は邦家に關係深きここにはあらざるか若し軍用に供し通信に供するここあるに到らんか鳥界の大革命なるべし史蹟名勝と同じく山雀の藝當の調査

すべきものにして馴養法の研究を要するものなることを信ずるものなり鳥界の向上發展の爲めに動物虐待を痛論する人に反對して鳥類の優待を絶叫するものなり。

山雀に技藝を教ふる法、鶯を放つて諸鳥を捕ることを教練するの法の如きは人文の進化に従つて漸く人に忘れられんことを鳩を通信に使用するの法は無線電信の發明以來將に世に忘れられんことを歐洲の大戦によりて鳩も亦大に軍用として貴ばれんことを禽獸類を利用することは人文の進むと共に益々精に至るべきものなり誰か動物虐待を口實として禽獸の藝術を葬り去らんとする者ぞ。

鴟のハヤニエに就て

齋藤源三郎

大正八年十月二十六日午前十時一羽の鴟カヘルを啣え余が庭園の高さ六尺許の梅樹に來りしを見付けたる故其行動を觀察せしに再び枝を更へて後、嘴ミ脚にて力をこめてカヘルを小枝に刺し其より一二回他の枝に移りて後飛び去りたり此飛び去りたるは別に他のものを驚かしにはあらずして殆も自分の用が濟ん

で満足である様な氣振りに見えたり。其後幾日經過するもカヘルは其まゝにて乾き固まり居たり、其は只一回の觀察なれど鴟のハヤニエ云ふは鴟が刺すことは明なり。然し其目的は後日の餌とするものにや否や此點は不明なり。其後又も同一庭園に十一月二十三日午前十時一羽の鴟が雨蛙をくはへ來りしを以て書齋より其行動を看守せしに二三回他の樹に移り最後に高さ三尺許りのカラタチの樹に移り地上二尺許の處の刺に刺し通し嘴をなめて直に飛び去りぬ此度も更に食する氣色はなかりき。

ウソの紅色と尾羽の斑とに就て

理學士 黒田長禮

ウソミ所謂アカウソミは最早全く同一種類で亞種としてさへ區別せられぬものであること云ふことは疑ひない。即ちスタインゲル、ハルテルト、川口法學士、余及び艮山諸氏の見解に於て決せられた。然しウソに二様の色彩の相違あることは云ふ迄もない事實である。この色の相違に關してこゝに左の三説がある

(一)ウソの下面灰色と紅色とあれども同種二色にして

Pyrrhula roseocaerulea は單に灰色のものゝ紅色型を云ふ外なし。

(Stejneger, Proc. U. S. Nat. Mus., 1887, pp. 107—110)

(一)下面灰色のウツは老鳥にして紅色なるは幼鳥なり(川口法學士、動物學雜誌第二十九卷二二頁)。

(二)幼鳥は胸腹部灰色にして老鳥になるに従ひ紅色の度を増すならん。されど飼養越年せば紅色部は灰色に變ず即ち飼料其他に原因するならん(杵山徳太郎氏、「鳥」第八號一六三頁)。

以上三説の内で余は第一及び第三説の内を正しいと考へるが第二説は誤りであるを信ずる。余も亦杵山氏と同様紅色のものを飼養していた處が次第に灰色に變じて來て最早紅色を現はさぬ様になつた經驗を有している。イスカ類特にシロハライスカにあつても雄の赤色は飼養して長き内には消失してしまふ。然しスタイネゲル氏はフクロウ類及び恐らくベニヒワ屬(*Turdus*)並びにオホマシコ屬(*Carpodacus*)の種類に此同種二色があるのミウソの場合は同一であらうと云つて居る。そして同氏は灰色型のものが嘗て想像せられた様に赤味を帯びるか否うかは知らぬがこれは疑はしいことで恐らく同種二色の一型であるを記して居る。尙同氏によれば此紅色を帯びる傾向は歐洲産の種類に於けるよりも日本産の場合の方が著しく日光及び越中立山にて

獲られた二個の雄鳥は極端な例であつて腰の白色中に迄も美しい淡紅色を帯びて居るを記述せられた。

扱て上記第一及び第三説中何づれが正しいかは多くの紅色及び灰色のものを別々に長年月飼養して見るこゝに、幼鳥の羽色の變化を實驗するこゝで大體の見當だけは付くであらうが其外野外に於ける食物の調査等も必要であらう然し今の處では左の結論に達するのである。

(一)下面の灰紅兩色は雄成鳥の同種二色の現象による場合。
(二)下面に紅色あるは雄成鳥にして長く飼養せば漸時灰色に變ずる場合。

(三)幼鳥にも下面灰紅兩色ありや否やは不明 従て幼鳥の灰色が老鳥となるに従て紅色の度を増すや否やは不明

(四)下面灰色のものに老鳥あるこゝは確實なるも紅色—川口氏の幼鳥)のものは幼鳥に限らるゝこゝは恐らくなきこゝ

尙ほ想像を逞くすればウソの下面灰紅兩色あるのは完全な同種二色でなく其一種の現象であつて灰色型が基型で紅色型はその變型であるを見られる然し此紅色型は固定性が稍少ない爲めに何にか外界の相違又は生活状態に變化ある時には此型を維持するこゝが出来ず變化を來たす者と考へられるであらう。夫故

紅色にも種々程度があつて或者は眞に紅色が多いのに又或者は灰色型との差が至つて少ない程度のものさへあることが屢觀察せらるゝのである。此研究は一寸面白いことであるから地方の諸君の調査せられんことを希望する。

因に雌にも上下両面の色の濃淡あることを茲に報告して置く。次にウソの尾羽に就て一言すれば普通は一様の色であるが屢外側尾羽に白色の縦斑のある個體が発見せられる。之れに關してスタインゲル氏によるミウソ類の外側尾羽の白斑は北方の他種類に於けるよりも日本産のものにあつては普通ではないが見られる。例へば東京、越中立山及び九州の標本で二雄、二雌のものに此現象あることを記述せられている。余も亦日光（雄）北海道、伊豆、大和の三雌に此白斑あるものを所藏する。此斑は無論部分的白化現象の一例たるに過ぎぬものであるが常に（♀）左右對に生じてをる。白化現象には對に生じる場合は寧ろ稀れならざるのである。未だ中央尾羽迄も白變した例を知らない。但し臺灣産ウチダウソの場合は雄の中央尾羽の白斑が明瞭であるのみか殆んど全部の尾羽には白斑があるものと雌も中央尾羽に此斑がある特徴を有してをるから部分的白變とは相違した現象と思はれる。

質疑應答

一 一四 質疑者 東京 梶山徳太郎

問 一 ハリヲアマツバメの兩屬名 *Charus* 及び *Jentaglis* の内にて何づれを採用すべきものに候や。

答 *(Charus Steph. (1826) 及び Jentaglis Boie (1826) 又は同年號に發表せられしも後屬の方は屬の記載を缺くを以て前屬を採用すべきなり。*

問 二 コサギの學名は *Egretta garzetta garzetta* (L.) にて宜敷候や。

答 *Egretta* Bp. (1830) は *Heronias Boie (1822)* のシノニムなるにより用ひられず。且つ *Egretta* の「タイプ」は *Heronias egretta* (米國産) なり。而してコサギに *Heronias* を用ふるは不適當なり因て他の屬 *garzetta* Kamp (1829) を使用すべきなり此屬の「タイプ」は即ち *garzetta garzetta* なるが故なり。コサギの學名としては *Garzetta garzetta*



imparis (L.) が正當なり。

問 三 チウサギの學名は *Mischocyttarus infirmus* (Wagler) にて

宜敷候や。

答 質問通りにて然り。但し命名者は (Macz. の) の方可なり。

問 四 ゴ井サギの學名として *Nycticorax n. nycticorax* を採用

すべきか或は *N. nycticorax* を採用すべきか尙又他に *Nycticorax* 屬も有之何れを採るべきか御教示願度候。

答 屬名としては *Nycticorax Rafin.* (1815) を使用すべく

Nycticorax Swains. (1837) はそのシノニムなり。種名とし

ては *nycticorax* も *grisea* も共に 1766 年に發表せられしものなれども前者は二三五頁にありて後者は二三九頁にあるが故にゴ井サギの學名は *Nycticorax n. nycticorax* (L.)

ならざるべからず。

五 質疑者 埼玉縣 高野 利治

問 五 現存せる鳥類中體量最小なるは何種なりや或は卵量最

小なるは如何 (本邦産鳥類のみについて云ふも可なり)

答 現存鳥類中最小の種類は恐らく蜂鳥科の (*Hirundo*)

屬の鳥類なるべし従て其卵も亦最小なるべし。本邦内地

産にしてはキクイタビキが最小にて雄成鳥の體量僅に一

匁一分あるに過ぎず。

六 質疑者 秋田縣 仁部富之助

問 六 A. R. Dugmore — Bird Hunter なる著述中にある

(*Ceryle (Mallotus) alba* (Baill.)) なる鳥は本來他鳥の巢に産卵し其卵は巢の底部へ隠し置く習性ある旨記載あり然

も本邦産杜鵑類に大體類似の習性のやうに思はれ候、該種は本邦には同屬又は同科の鳥ありや或は全く本邦に

は類似の種なきや及び其習性は郭公等と同一又は大同小異と認めて差支へ無之候哉。

答 質問の鳥類は米國特有のものにて杜鵑類とは全く縁遠き種類なり。鳥學上の位置は燕雀目中の亞米利加黃鳥科

(*Ceryle*) に屬す。其習性は郭公と大體同様なれども仁部氏の研究せられし如く一雄一雌の制なき點に於て相異す

但し近似種中には此制のものありと云ふ。又他鳥の巢に産みし卵を其底部に隠し置くや否や余は二三の書を見た

るも終にその記事を發見するを得ざりき。鳥類中にて斯くの如き寄託性を有する種類は少なく最も面白き習性な

り故に左に此カウバードの蕃殖に關する記事を附加すべし。(Thapman 氏によれば歐洲産郭公ミカウバードとは

同様な寄託性を有すれど前者は一旦適當の場所に産卵

し嚙にてそれを他鳥の巢に入るれど後者は豫め積み置き

し他鳥の巢に産卵する點に於て相異せり。雄は雌に比し

其數多しと考へられ雌雄の關係は複雑せる多配制なりと

又 F. M. Bailey 氏によれば多配制中の一雌多雄制なりと

曰へり。Major Bendire 氏によれば此種は九十一種類の

他鳥の巢に産卵せりと云ひ而してその種類は啄木鳥科、

亞米利加鶉科 (Tyrannidae)、亞米利加黃鳥科 (Icteridae)、鶉

科、雀科、綠鳥科 (Vireonidae)、鷓鴣科及び亞米利加蟲喰

科 (Mniotiltidae) の鳥類なり。Chapman によれば北米の

殆ど百種の鳥類の巢内に此種の卵が発見せられたるも其

四分の一は亞米利加蟲喰科のもの、巢内にありしと云ふ

を見ても如何に自己より小形の鳥巢を撰ぶかを知るべし

此亞米利加蟲喰類は地上又は地上より八吋位の高さに營

巢するものなり。カウバードの營巢せざる本能に關する

諸説あるも尙ほ結論に到着せず。米國熱帶地方産の七種

の近似種中には一雄一雌制に進みしものもあり特にアル

ゼンチイナの *Molothrus indicus* にては常に自ら孵卵し且

つ時として營巢するところをへありと云ふ。

七 福岡縣 安部 幸六

問 七 筑前の海岸に棲む鷓鴣類中方言シヤクナギと稱するもの

の學名及び和名御教示被下度候。

答 質問の鷓鴣類の方言は左記三種の總稱なり。即ち

學 名 標準和名

Numenius elegantus Vieill. ホウロクシギ

Phalaropus lobatus (Scop.) チウシヤクシギ

Limosa lapponica borealis Temm. オホソリハシシギ

右のホウロクシギは常にシヤクナギと稱すか又は特にダイシ

ヤクナギと稱すか呼ばるゝことあり。他の二種はチウシヤク

シギ又はチウシヤクナギと稱すゝことあり。以上七

件 黒田長禮(回答)

南洋諸島産三新鳥類

Isobrychus sinensis moorei Wetmore.

中部カロリン群島産

Glaucoceryx leucorhynchus Wetmore.

ボナペ島産

Myciophaga rubrata dichromata Wetmore. (以上オーグ本年一月號より)



第十二回總會 大正八年十一月十七日午後五時より秋期總會
を神田淡路町多賀羅亭に於て開會し左の諸氏の出席あり(來會順)

- 梶山徳太郎 内田清之助 林 保吉 大岩 紀麿
 葛 精一 齋司 信輔 松永 安衛 伊藤 和貴
 田子 勝彌 飯島 魁 小林 桂助 寺岡 直
 丘 淺次郎

會場には別記標本類の陳列をなし晩食後會員梶山徳太郎氏の南洋採集に關する講演に移り一々實物標本に就きて詳細に説明あり。午後九時半散會す、陳列標本左の如し。

南洋諸島産鳥類

- 梶山徳太郎氏出品
 ト ラ ツ ク 島 産 二十八種 五十二個
 ボ ナ ベ 島 産 二十二種 三十七個
 ク サ イ 島 産 十三種 十八個

- ヤ ッ グ 島 産 二十四種 三十七個
 サ イ バ ン 島 産 九種 十二個
 オ レ ア イ 島 産 五種 七個
 バ ラ ウ 島 産 一種 一個
 小 笠 原 島 産 一種 一個
 其 他 鳥 卵 鳥 巢 十四種

南洋諸島産鳥類

書 籍 數 冊 齋司 信輔氏出品

鳥類寫生圖(約百年前のもの)三冊黒田 長禮氏出品

ミヤコセウビン *Hirundo nipponensis* Kimura 標本一個

チ ヤ ボ 活物雌五本趾一羽 動物學教室出品

鶉卵斑紋變異標本十八個及其說明 近藤 他喜氏出品

黒鶉白變標本 一個 内田清之助氏出品

評議員會 十二月八日午後七時華族會館に於て齋司、松平黒田の三評議員及内田幹事集會々務並會計上の打合せをなし大正

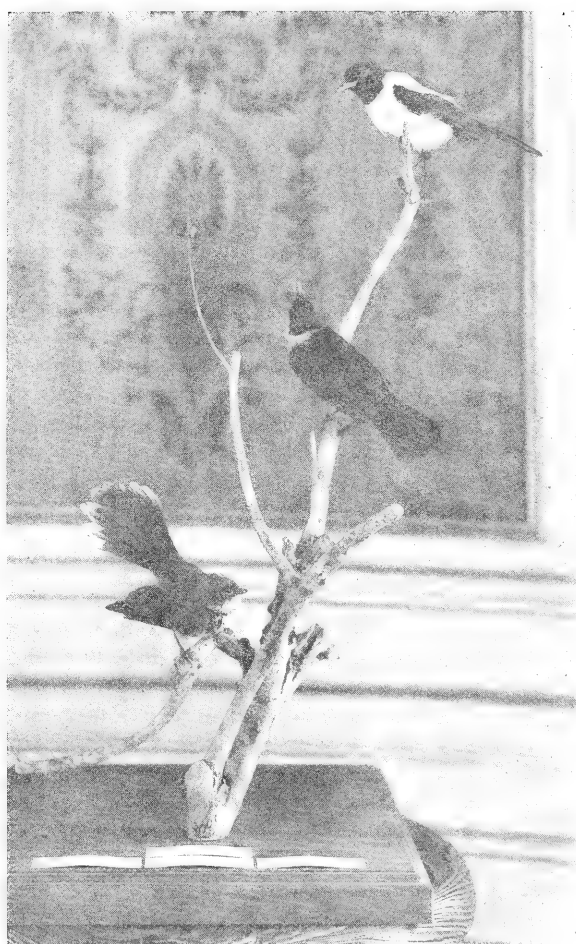
九年度の豫算を決議せり。

英米兩國鳥學會員推選 本會評議員黒田長禮氏は大正七年三月

月英國鳥學會外國會員(Portent Member, F. O. C.)に又大正八年

十一月米國鳥學會外國會員(Corresponding Fellow A.O. U.)に推選せられ又本會幹事内田清之助氏は大正八年十一月の總會に於て米國鳥學會外國會員に推選せられたる旨夫々報知ありたる由

にして三色版及寫眞圖版三十五葉を添附せり。本書は元非賣品なるも中央畜産會にて複製せるものは麴町内幸町の同會に申込まれるば二圓五十錢の實費を以て頒布せらるゝ由。



第四十圖 南洋諸島產鳥類

南洋鳥類の献上 過般南洋諸島の鳥類採集に従事せる會員稲山徳太郎氏は其の採集品中色彩の美麗なる次のものを本製として謹製の上天覽に供せり上圖はその寫眞にして其種類次の如し

カササギヒタキ

Motacilla godwini

雌雄 ヤップ島ルル産

大正八年四月採集

アフギヒタキ

Thyridia versicolor

雄 ヤップ島ルル産

大正八年四月採集

□狩獵鳥類圖解 農商務省農務局にては昨年改正せられたる狩獵法の參考用として標題の書籍を出版せり。本書は同規則に規定せる狩獵鳥類に關し農商務技師内田清之助氏の解説せるもの

□入會 大正八年六月以來の入會者三十餘名あるも近々改正名簿調製の筈なるを以て掲載を省略す。

□次號原稿締切期日 大正九年四月末日限り

〔會員堀井榮吉氏の訃 長崎縣保安課技手堀井榮吉氏は本年一月十九日流行性感冒の爲め死去せらるる誠に哀惜の情に堪へず。氏が鹿兒島高等農林學校助手たりし當時南洋諸島に(二回大正四年)、鹿兒島地方に鳥類採集を行ひ又沖繩及び奄美大島(大正六年にも渡航し鳥學上有益なる資料を蒐集せり)「鳥」第七號)次の二種は同氏新發見のものにして鷹司理學士によりて記載せられたるものなり

Picus aulicera hepti Takatsukasa, カゴシマアチゲラ(大正七年)

Tarsus major legos imo Takatsukasa, カゴシマガラ(同 八年)

「鳥」第八號 正誤表
「埼玉縣人間郡産鳥類」正誤表

頁	行	誤	正
156	2	觀察をものすを	なすを
160	2	(括弧内の總てを除く)	
162	4	少数のものは	ものい
162	4	なるべし	あるべし
162	4-5	減じる	減ずる
163	13	意味	意味
163	8	胞腹部	胸腹部
173	14	數少しく減ずる	數著しく減ずる
176	2	即ち白斑一個	即ち裏面に白斑一個
176	10	(Mockingbird, Thrush)を括弧より出し學名の前を置く	
182	8	<i>Micropus puctica puctica</i>	<i>Micropus puctica puctica</i>
183	12	壁上	岸上
183	19	和命	和名
189	19	河原の梢高く	稍高く
192	3	<i>Craophopastanus</i>	<i>Craophopastanus</i>
193	10	<i>Philo</i>	<i>Philo</i>
199	13-14	(括弧内の總てを除く)	

日本鳥學會規則

第一條 本會ハ日本鳥學會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ハ東京帝國大學理學部動物學教室内ニ置ク

第三條 本會ノ目的左ノ如シ

一鳥類ニ趣味ヲ有スルモノ、懇親ヲ計ルコト

一鳥類ニ關スル學術ノ進歩ヲ促スコト

一鳥類愛護ノ思想ヲ普及セシメ鳥類ノ保護増殖ヲ計ルコト

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ評議會ノ決議ヲ經テ隨時種々ノ事業ヲナス

一當分一年ニ二三回雜誌「鳥」ヲ出版スルコト

一臨時出版物ヲ刊行スルコト

一毎年春秋二回會合シ鳥類ニ關スル講演談話ヲナシ同時ニ鳥類ニ關スル圖書標本其他ノ展覽會ヲ催ス

一鳥學的探檢ヲ舉行スルコト

一鳥學的探檢ヲ舉行スルコト

第五條

本會々員ヲ分チテ甲種會員ト乙種會員ノ二トス

一甲種會員ハ會費トシテ一ケ年金三圓ヲ納ムルコト

一乙種會員ハ會費トシテ一ケ年金一圓五十錢ヲ納ムルコト

第六條

甲種會員ニハ雜誌「鳥」及臨時出版物ヲ配布ス

乙種會員ニハ雜誌「鳥」ヲ配布ス、臨時出版物ハ定價一

第七條

本會ニ入會セント欲スルモノハ住所氏名職業ヲ記載シ本會ニ申込ムベシ但シ甲種會員ノ入、退會ハ評議員會ノ決議ニヨル

ノ決議ニヨル

第八條

本會ニ會頭壹名ヲ置ク

本會評議員會ハ會頭幹事及ヒ會員ノ互選ニヨル評議員若干名「甲種會員」ヲ以テ組織ス

東京帝國大學理學部動物學教室内

日本鳥學會

役員

會頭 理學博士 飯島魁

幹事 理學博士 内田清之助

評議員 理學博士 飯塚啓

理學博士 丘淺次郎

公 爵 鷹司信輔

子 爵 黑田長禮

子 爵 松平賴孝

Dr. Ernst J. O. Hartert stated that the length of wing in males from the island of Guam measures 118-131 mm. (usually 125-128 mm.); the birds from the island of Saipan have higher bill and wings measure 122-133 mm; these two birds can not be separated from each other even subspecifically. The birds from Pelew and from Ruk Islands have a trifle shorter wing. Wigglesworth also found that the difference between the western and eastern birds are as follows :

“ Examples from Uap are bigger than those of Ualan, but are otherwise similar.”

It was with Mr. N. Kuroda's help that enabled me to do this work for which my best thanks are due. It is with pleasure that I dedicate the subspecies in honor of him.

252	Yap Is., Caroline	20/VI	mm. 200	mm. 24	mm. 9	mm. 115	mm. 79.5	mm. 29	♂ juv.	T. Momi- yama
269	„	22/VI	209.5	24	9	103	72.5	30	♂ juv.	„
158	„	10/VI	208	24.5	9.5	112	79.5	28.5	♀ juv.	„
174	„	12/VI	217	24	8.5	116.5	71	30	♀ juv.	„
190	„	13/VI	159.5	19	...	97	50	24	Young	„
18	Saipan, Mariana	5/V	229	24	10.5	127.5	88.4	30.5	♂ ad.	„
5	„	4/V	214.5	24	9.5	125	85.5	33.5	♂ juv.	„
6	„	„	218.5	24.5	10	125	84	32.5	♂ juv.	„
20	„	5/V	229	23.5	9.5	122.5	86	31	♂ juv.	„
19	„	„	225.5	23	9.5	121	82.2	30	♀ juv.	„

Remarks.—The figures in gothic type are according to dried specimens.

Differential measurements of the typical subspecies and the new subspecies may be tabulated as follows:—

Subsp.	Loc.	Sex (ad.)	Depth of bill at base	Culmen	Wing
<i>A. kittlützi kurodai</i>	Yap	3 ♂ s	mm. 10-10.5	mm. 25.5-27	mm. 119-128
		4 ♀ s	9-10	25-26.5	119.5-122.5
	Saipan	3 ♂ s	10.5 (only one)	24-25 (only two)	127.5-133+ (only two)
<i>A. littlützi littlützi</i>	Wolea	1 ♂	9	23	125.5
	Ruk	3 ♂ s	9 9.3	23-24	124-125.5
		2 ♀ s	8.5 9.5	23-23.5	119.5-120
	Ponapé	3 ♂ s	7.5-10+	23-25.6†	128.8-133+
		1 ♀	9	23.3	116.8
Kusaie	1 ♀	9	21.4	118	

† mark is an exception.

It seems probable that the distribution of this new form is restricted to Yap Is., in the western group of Caroline Islands and the Saipan Is., one of the Marianne chain.

DESCRIPTION OF A NEW SUBSPECIES OF *APLONIS* FROM THE ISLANDS OF THE WESTERN MICRONESIA.

BY

TOKUTARŌ MOMIYAMA, M.O.S.J.

***Aplonis kittlitzii kurodai*, subsp. nov.**

♂ ad. (type of subspecies). Very similar to *Aplonis kittlitzii kittlitzii* (FINSCH & HARTLAUB) from Kusaie (Ualan), Ponapé, Truk (Ruk, Hogolu) and Wolea (Ulie, Oleai) in Caroline Islands, more especially by the higher bill; distinguished from it by much longer dimensions of exposed culmen and wing. Total length of body 232 mm., exposed culmen 26 mm., depth of bill at base 10.5 mm., wing 128 mm., tail 89 mm., tarsus 32.5 mm.

The type specimen from Yap Island, one of the western Caroline Islands: June 22, 1919. It was collected by myself, and preserved in my collection (sp. no. 268).

Other specimens of the subspecies examined measure:—

Momiyama's Collection from Pacific Isls. Sp. No.	Locality	Date (1919)	Total length	Culmen	Depth of bill at base	Wing	Tail	Tarsus	Sex & Age	Measured by:
209	Yap Is., Caroline	14, VI	mm. 227	mm. 25.5	mm. 10.5	mm. 123	mm. 85.5	mm. 28.5	♂ ad.	T. Momiyama
305	"	4, VII	211.3	27	10	119	83.5	30	♂ ad.	"
199	"	14, VI	221.5	25	9.5	119.5	81	28	♀ ad.	"
220	"	17, VI	226.5	26.5	10	122.5	87	29.5	♀ ad.	"
251	"	20, VI	214.5	26	9.5	120	80	30	♂ ad.	"
300	"	20, VI	206	25	9	120.5	83.5	29.5	♀ ad.	"

投稿及質問規定

(一)鳥類の習性「渡り」、方言等に關し廣く各地方會員の投稿を歓迎す

(二)既掲原稿は返戻せず、但し挿畫に使用せる寫眞及び圖畫は希望により返戻すべし

(三)原稿は紙の表丈を使用し一行、二十五字詰に認められたし、

假字は平假字を用ゐる動物名及び外國語は片假字とす

(四)挿畫は寫眞以外のものは墨汁にて認められたし

(五)原稿は東京赤坂區福吉町黒田長禮氏宛郵送せられたし

(六)本會は鳥類に關する質疑に應答す、質問の事項は返信料封

入東京帝國大學理學部動物學教室内本會宛郵送せられたし

(七)質問解答は一般讀者に有益なりと認むるものは本誌に掲載

するも其他は質疑者に直接解答するものとす

大正九年四月十日印刷

大正九年四月十四日發行

定價金參拾五錢

禁轉載

編輯兼
發行者
木下憲

東京市日本橋區兜町二番地
印刷人
神谷岩次郎

東京市日本橋區兜町二番地
印刷所
東京印刷株式會社

發行所

帝國大學理學部
動物學教室内
日本鳥學會

振替口座東京六五九九番

發賣所

東京日本橋區
十軒店町
裳華房

振替口座東京一〇七番

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 內田清之助 著
第一篇 鵜類圖說

絶版

獸醫學士 內田清之助 著
第二篇 海産保護鳥類圖說

原色版 三枚 附錢
 定價 四錢
 郵稅 四錢

理學士 黑田長禮 著
第三篇 世界の鴨

絶版

理學士 黑田長禮 著
第四篇 世界の雁と鵠

原色版 四枚 寫真版 五枚 附錢
 定價 四錢
 郵稅 八錢

仁部富之助 著
第五篇 郭公の蕃殖に關する研究

コロタイプ版 一枚 地圖一枚
 寫真版 插畫數個
 定價 卅五錢
 郵稅 四錢

理學士 黑田長禮 著
第六篇 臺灣島の鳥界

附 菊池米太郎述 臺灣鳥類の習性

原色版 口繪 一枚
 寫真版 插繪 數個
 定價 四拾錢
 郵稅 四錢

理學士 黑田長禮 著
第七篇 鮮滿鳥類一斑

原色版 口繪 一個
 寫真版 插畫 十數個
 定價 一圓五十錢
 郵稅 十二錢

理學士 黑田長禮 著
第八篇 六郷川口鵜千鳥類の「渡り」

寫真版 口繪 二葉
 定價 七拾五錢
 郵稅 六錢

斯界稀有の新著

理學士 黒田長禮先生著

最新刊

鶉千鳥類圖説

四六二倍版總布製美裝
三色版五葉寫真版五葉
挿畫百五十個
正價金 八圓

本編は種類の識別最困難なる鶉・千鳥類 Charadriidae の全世界に産するもの二百三十七種類を圖説せるものにして何れも各種に就きて雌雄・夏冬羽・老幼の記載及び分布・習性等を記述し特に本邦産の種類に就きては最詳述せり 尙各亞科より亞種に至る迄細密なる索引を具備し總論としては本科鳥類の形態・習性・「渡り」・分類法・參考文書等を記述する事二十三項に亘り其他分布表・學名索引等を附録として添附せり
圖版は鳥類寫生圖に最堪能なる横山慶次郎畫伯の筆に成り十葉約八十種の邦産種を圖し本文挿畫には内外種の寫真、寫生圖等百五十圖を挿入せり

電話本局一千
七百京東替振

裳華房書店發行

東京日本橋
十軒廬町

告 豫 編 九 第 物 行 刊 時 臨 會 學 鳥 本 日

日本鳥學會員 靱山徳太郎君著

大正九年六月下旬發行

カロリン群島の鳥類

三色版三葉寫眞版三葉
菊版紙數百數十頁
定價貳圓半稅六錢

本書は本會臨時刊行物第九編として目下印刷準備中のもので、大凡六月末頃出版の豫定であります。内容は昨夏本會員靱山徳太郎君が約半歳に亘つて我南洋諸島に鳥類採集を試みられた結果を記述したもので、主としてカロリン群島其他諸島の鳥類に就て分類學上の考察、習性の觀察並新亞種の發表等に加へて以上諸島の鳥類既知種全部の目錄が添えてあります。寫眞版は著者撮影の生態寫眞三葉十數個、三色版は小林重三氏寫生の南洋鳥類十數種を三葉に收めてあります。本書は雜誌「鳥」に掲載せられた鷹司黒田兩理學士の論文と相俟て我南洋の鳥に關する缺くべからざる文籍であります。

本書は本會甲種會員には無代配布、乙種會員には規定の割引を以て配布しますから豫め御申込を願ひます。

房 華 裳 町 店 軒 十 區 橋 本 日 所 捌 賣
番 七 百 京 東 替 振

農商務
省編纂

狩獵鳥類圖解

鮮麗三色版二枚
寫真版圖版三十四枚
本文百四十頁裝禎優美
定價貳圓五拾錢、送料八錢

改正狩獵法に據る狩獵鳥類の分類形態習性等を詳にしたるもの未だあらざるは我
學界並に狩獵界の遺憾とする所なり而して農商務省が多年の日子と勞費とを投じ
て調査せられたる本圖解は蓋し本邦に於ける此の種資料として唯一のものにして
鳥學の參考書として缺くべからざるのみならず狩獵界に關係ある士の必携を要す
るものなるを思ひ本會は請ふて之を上梓し汎く世に提供せんとす若し學術研究の
一助と爲り狩獵家の好同伴たるを得ば幸なり

東京市赤坂區溜池町一番地

中央畜産會

電話芝(四)八四四番
番(五)二五八番
振替口座東京三一四五九番

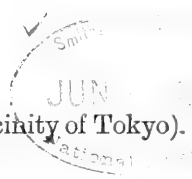
"TORI" THE AVES

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. II. No. 9.

Frontispiece:

A favorite nesting-place of the plumed egret (Haneda, vicinity of Tokyo).



Contents:

Notes on and descriptions of the Flower-peckers of Formosa. By
N. Kuroda.

On some birds from the Quelpart Island, Corea. By *T. Mori.*

On the sexual differences of *Pseudotadorna cristata* Kuroda. By
N. Kuroda.

Notes on *Chelidon rustica gutturalis* and *C. daurica nipalensis*. By
Y. Kanetsune.

Description of a New Subspecies of *Aplonis* from the western Micro-
nesia. By *T. Momiyama.*

History of aviculture. By *H. Araki.*

Miscellaneous notes.

Queries and Answers.

Proceeding of the Society.



鳥

第
八
號

大正八年七月發行

日本鳥學會

鳥 第二卷第八號目次

口 繪

東京麴町三宅坂下氷上の水禽群集……………東京朝日新聞社原圖

論 說

札幌博物館所藏樺太産鳥類數種に就て……………靱山徳太郎

京城附近に於ける主なる鳥類の「渡り」に就て……………黒田甚三郎

ツ、ドリの習性及び雌雄……………法學士 川口孫治郎

四國地方に於けるツバメ類の「渡り」並びに習性等に就て……………榎木佳樹

埼玉縣入間郡産鳥類……………靱山徳太郎

講 話

「チージュボン」運動の回顧……………獸醫學士 内田清之助

雜 纂

大分縣八坂地方の鳥類……………上 泰 治

再び種子島の鳥類に就きて……………荒木彦助

鶺鴒・千鳥類の方言其他……………靱山徳太郎

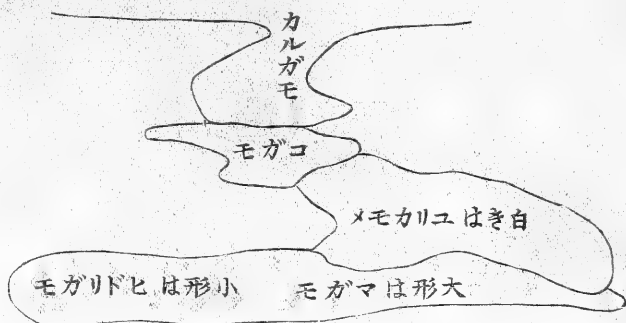
鳥 類 名 纂……………脇山三彌

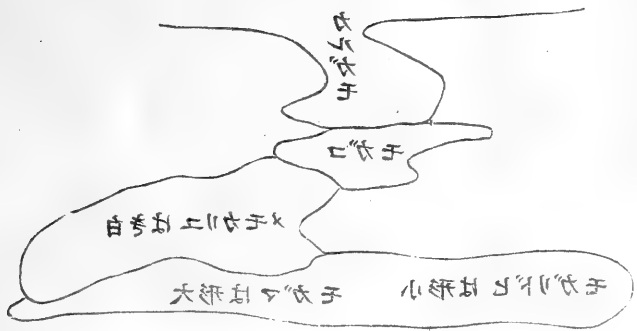
今は昔鶴に舞を教へしふる事……………森 爲 三

ムクドリミウヅラの交接卵か……………靱山徳太郎

質疑應答 十二件 (黒田長禮回答)

雜 報 六 件



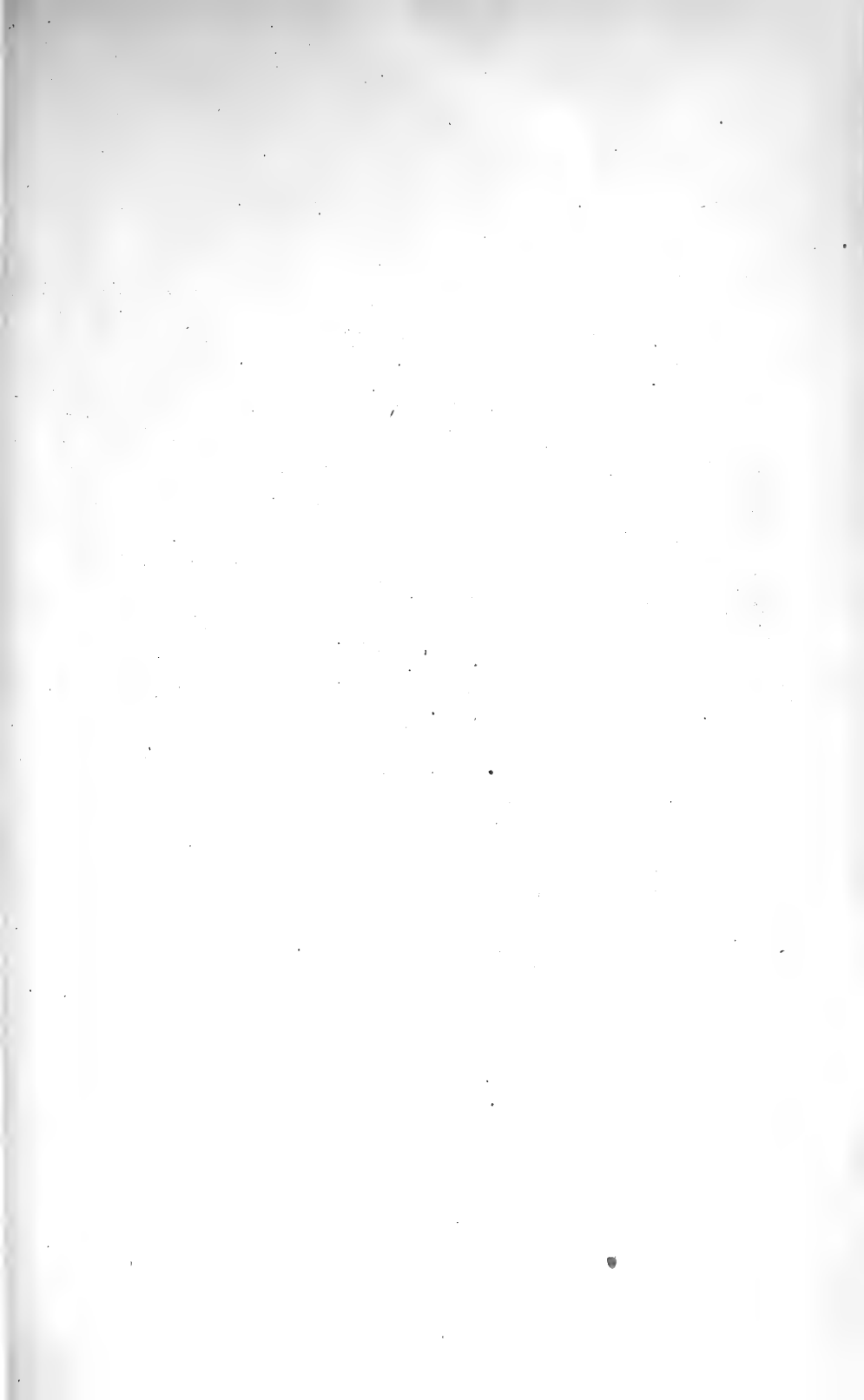


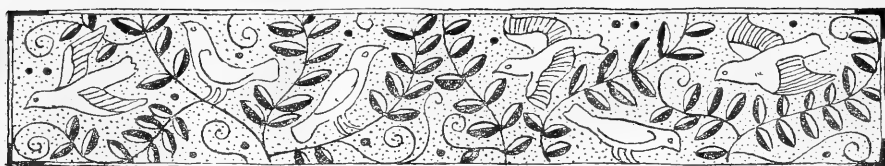


東京麴町三宅坂下水上禽群集

大正七年一月六日攝影

(東京朝日新聞原圖)





論 說

札幌博物館所藏樺太產鳥類數種に就て

叔 山 德 太 郎

故村田庄次郎氏が邦領樺太に於ける明治四十三年及大正元年兩度の採集物を記載せられたる「樺太動物調査報告」(大正三年三月)中に二二三の疑種ありたり、而して同氏が樺太島にて採集せられたる標品は多分札幌博物館に所藏せらるゝ處ならんと思ひて昨夏同博物館所在地に赴きたる際同館を訪じ會員岡田信利氏の好意に依り村田氏採集の標品を檢する事を得たり、尙同館には有名なるブラキストンの集蒐標本を初め幾多の珍奇なる種も尠からず所藏せられありたれども旅中の寸暇を以て一部の疑問種の調査をなさんさせし余には目的の種類の全部をだに見出する事能はずして尙若干の種は他日に譲るの止むなきに到れり、今茲には同館に於て調査し得たる數種を村田氏の報告と對照して其結果を掲げんこす。

本篇を草するに當り黒田理學士は教示の勞を取られ且貴重なる圖書を貸與せられ又岡田信利氏は博物館所藏標本の調査に多大の便宜を與へられたる等の兩好意を深く感謝する所なり、

Puffin *Cichloschys sibiricus davisoni* (Hume)

樺太動物調査報告三頁マミジロの欄に「本島に産するものは普通種と色彩上異なる所あるに依り本州産の亞種とせらる(中略)採集地明治四十三年六月喜美内山道及び轟山道、大正元年八月東海岸樫保」にあり即ち記載に依る時は樺太産のマミジロは本州産のもの *Cichloschys sibiricus davisoni* (Hume) と異なるものゝ

如く見受く(但し學名に於ては變更せずして前掲亞種名を記されたり)。近似亞種シベリアマシロ *Sibiricus sibiricus* (PALL.) はハルトルト氏に依る時は前亞種に換りて同島に分布せらるるかも思はるれど樺太に産すは特記し居らず、而して兩亞種の相違點は *Sibiricus* に於ては下腹中央は大部分白色にして *arvensis* は下腹に小白部あるか又は全く之を缺くにあり(以上雄) 札幌博物館所藏標品中のマシロ各部の測定表を左に記さん

番 號	採 集 地	採 集 年 月 日	嘴 長 (mm.) (about)	翼 長	尾 長	跗 蹠 長	雌 雄	測 定 者
1	札 樺	26/VI, 大正 3	20.5 (about)	125.5	92.5	26	♂ ad.	榎 山
2	九 次 崎	22/IX, 明 41	20.5	120	76	27	♂ juv.	同
3	同	22/IX, 明 42	19.5	120	74	27	♂ juv.	同
*4	樺 太 君 内	10/VI, 明 43	21	121.5	91	27	♂ ad.	同
5	樺 太 西 樺 内	16/VIII, 明45	19	119.5	92	26	♂ juv.	同
*6	樺 太 君 内	10/VI, 明 43	19	118	78	24	♀	同
*7	同	„	20	121.5	78	26.5	♀	同
*8	樺 太 藤 森	29/VI, 明 43	21	116	74	27	♀	同
*9	樺 太 樺 保	26/VIII, 大正 1	19	112	69	25	juv.	同

注 同館所藏標品中には無番號のもの多し上記番號は便宜上測定者が附せしにあり尙採集年月日の如きも種々の様式を以て記さる例せば 26—5—15, 9, 22, 1909, 23nd. Sep. 明 42 等の如し、かゝるものは一致せしめて上記の如く變更せり

- *印あるは村田氏報告中のものニ採集地、採集日全く一致するものなり恐らく同一標品と推定するも誤あらざるべし而して (3) (6) (7) (8) (9) の各標品は雌鳥及幼羽のものなれば左に餘の四雄の標品の腹部の羽色を記さん

番 號	採 集 地	成 幼	羽 色
1	札幌	Ad.	成羽のもの、下腹中央に小白部あり。
2	尻 矢 崎	Juv.	幼羽より成羽へ更變中のもの、中腹部以下中央には白色羽多し。
* 4	樺 太 君 内	Ad.	成羽のもの、下腹中部に小白部あり。
5	樺 内 西 柵 内	Juv.	幼羽より成羽へ更變中のもの、下腹中央に小白部あり。

上記の事實に依りて樺太産のものは全く内地産のものと同じなる事確實となりたり、(寧ろ尻矢崎にて獲られたる(2)の標品に少しく疑あり、こは後日尙調査の上報告する事ごなさん)レーンベルグ氏も樺太産のものを *Cinclus (Petrochelidon) sibirica darvoni* (Hume) として報告し下腹中央の羽毛の中部に白斑あり、下尾筒は羽端白きも *sibiricus* よりその巾狭しご記述す、而して同氏の標本は三個共幼鳥にして全部成鳥ならざるものご記さる、純然たる幼羽のものにて下腹に白斑ある時は内地産のものごは異なるも恐らく札幌博物館のものご如く幼羽より成羽へ更變中のものご認むごも差支へあらざるべし。

シマセンニウ *Loxia ochotensis* (Midd.)

「樺太動物調査報告」一二頁シマセンニウの項に下の如く記せり「樺太に産するものは淡色にして下面は殆ど純白色なり恐らく本種の亞種なるが如きも未だ疑問に屬す(中略)採集地 明治四十三年六月灣内、留多加、貝塚、東海岸相濱、小田寒、大正元年九月西海岸鵜城、北名好」。札幌博物館所藏の村田氏の樺太にて採集せられたる標品は尙幾多ありたるものご如かりしも余は左の四個のみに就て調査せり

番 號	採 集 地	採 集 年 月 日	嘴 長	翼	尾	跗 蹠	雌 雄	測 定 者
1	樺太 ア イ	18/VI, 明43	14 mm.	68	53	23	—	榎 山
2	同	”	14	66	50	21	♀	同
3	樺太 豊原	大正元年 月二ナジ	14	63	49	23	♀	同
4	樺太 豊原	大正元年 月二ナジ	12	62	41.5	23	—	同

尚上記四標品の附箋に記されたる鳥名並に色彩を記せば

番 號	「樺太動物 調査」番號	附 箋 記 名 載	羽 色
1	142	シロハラシマセンニウ	下面は殆んど白色。
2	141	<i>Loonstella certhiola</i> (Pall.) ?	同 上。
3	ナシ	シマセンニウ (シロハラ シマセンニウ)	同 上。
4	ナシ	シマセンニウ	下面は淡黄色、上胸部は稍濃色の横斷線を認む。

以上の如く種々なる鳥名を以て記しあれども全く同一種にしてシマセンニウを認む、下面の色彩を異にせるは成幼の差にしてシロハラシマセンニウなる新稱を附せられしものはシマセンニウ成鳥に他ならず、尙 *Loonstella certhiola* (Pall.) を附せられしもあれども(? 印あるも) *certhiola* の *ochotensis* には前種は上面に明なる縦斑あるに反し後種は不判明なる縦斑あるか又は一樣にして縦斑を認めざるを相違點となす。レーンベルグ氏は樺太産として *Loonstella pleskii* Tacz. の *L. ochotensis* (Midd.) の二種を記述し居れどもハル

テルト氏に依る時は右二種は同一種なるべしと謂ふ(前名には?印あるも)タイヤー及バングス兩氏に依れば同く樺太にて *ochotensis* の獲られたる事を記載し居れり、*peskei* なるものが異種なる時は樺太産シマセンニウを二分すべき必要あるべきも村田氏採集標品中のシロハラシマセンニウとシマセンニウとの區別はそれとは全く關係なきものと認む。

ペキンヒガラ *Parus ater pekinensis* DAVID

「樺太動物調査報告」一七頁にヒガラなる和名を以て記載せられあるものは札幌博物館所藏標本中より遂に見出す事を得ざりき、同書には「本島に産するものは其の羽色に於て支那産の一變種なるが如し」とあり同島産のものはレインベルグ氏、タイヤー及バングス兩氏に依るも *Parus ater pekinensis* DAVID なるものと如ければ村田氏採集のものも同亞種と認むるも誤りあらざるべし、尙同書には和名をヒガラと記しあるもペキンヒガラを改むべく種名は其儘にて可なれと命名者は SEEBOLD にはあらずして DAVID とすべきものなり、ペキンヒガラはヒガラに比し頭羽長くして十六耗若くはそれ以上あるを違點とす。因に本亞種は樺太以外の邦領内にては獲られたる事なれども旅順にては獲られたるの報告あり。

ツバメ *Chelidon rustica gutturalis* (Scop.)

「樺太動物調査報告」三七—三八頁ツバメの項に「樺太に産するものは本邦南部に産するものと著色上少しく異り歐洲産に近し、本島に於ては極めて稀に見る鳥にして從來捕獲せしを聞かず。採集地 明治四十三年六月平野。」とあり、而して札幌博物館所藏標品中右の記載と同一なるものと思はるゝ標本の測定表を左に掲ぐ。

採集地	採集年月日	會合線	翼	尾	雌雄	測定者
樺太 クヌスセソヌコイ	31 V, 明 43	14 mm.	114	73	—	山根

而して色彩並に尾長に依り雌成鳥と認む、村田氏報告に記さるゝものゝ採集年月と本標品とは一箇月の差あるもそれは村田氏が便宜上

五月三十一日を次月分へ編入せしものなるべしと推考す、如何となれば六月採集せしもの、以前尙一羽を獲たるなれば採集日を並記すべき筈なればなり。

ヨウロツバツバメ (*Chelidon rustica rustica* (L.)) ツツバメ (*Ch. rustica gutturalis* (Scop.)) の相違點は前亞種は翼長二二〇—二二七耗にして胸部の黒帯の完全なるに對し後亞種は翼長二一〇—二二〇耗にして胸部の黒帯の中斷せられ居るにあり。札幌博物館所藏樺太産のツツバメは翼長に於ては疑なき *gutturalis* なるも胸部の黒帯は中斷せられずして連続せる點は *rustica* に近し、これら *intermedia form* となすべき程のものにあらず依て *gutturalis* と同定し置く事せり。乍併今後同島に於て純然たる *rustica* の獲らるゝ事ありせば或は兩亞種間に於ける雜種とも認むべきものならん歟。

ヲナガフクロウ *Surnia ulula pallasi* Bern.

「樺太動物調査報告」中に村田氏が初めて邦産鳥類として記載せられたる種にして同氏は該報告中に和名をヲナガフクロウと附せられしが前記の如く余が變更せり。札幌博物館には本亞種の標本二個を所藏す一は村田氏の樺太にて採集せられしもの、他は報効義會の勘察加にて採集せるものなりとす、左に兩標品各部の測定表を掲ぐ

札幌博物館 標本番號	採集地	採集年月日	嘴	會合線	翼	尾	跗蹠	雄雌	測定者
2943	樺太	12/IX, 年不明	19 mm.	25	218.5	182	20.5	—	梶山
2707	勘察加	11/XI, 明 42	19	26	236.5	179.5	21	—	同

右二標品は各部の長さ殆んど等しく又羽色に於ては全く同じ、村田氏は樺太にて採集せられしものを報告中には *Surnia ulula* (L.) として記されしがそは *ulula* の誤植なるべし而して余は其亞種なる *S. ulula pallasi* Bern. となす方可なるべしと信ず。クラーク氏は勘察加東海岸ペトロパウロスキイにて採集せる由を記述す。但し *S. ulula dohrata* (Parr.) として報告す。

以上にて調査し得たる數種の記載は終りたるも『樺太動物調査報告』中の和名に就て少しく記さん。該報告中には新稱九種を算す、左に該新稱と『日本鳥類圖說』中和名とを並記すべし

	樺太動物調査報告、新稱	日本鳥類圖說、記載和名
一	マダラセンニウ	マキノセンニウ (新稱)
二	アカチカケス	カラフトカケス (新稱)
三	ユキヒバリ	ツメナガホ、ジロ
四	ミュビゲラ	ミュビゲラ
五	チナガフクロ	カラフトフクロウ (新稱)
六	ラブランドフクロ	
七	スツメフクロ	オホライテウ (新稱)
八	カラフトライテウ	カマバネライテウ (新稱)
九	クロライテウ	

従來一般に『日本鳥類圖說』は活用廣きを以て可成同書に従ひて『樺太動物調査報告』中の新稱は異名となす方可なりと信ず。而して尙二三ものは死名となして再用なきしめたくなきものあり即ち(三)ユキヒバリは雲雀科と類縁遠きものなるにもかゝらず該和名を併用するは好ましからず(八)カラフトライテウは他に *Lagopus lagopus albus* (Gm.) にも附せられ居るものなれば *Fritao vogelius* の方に附せられたるカラフトライテウは死名となし以後は *Lagopus l. albus* のみに用ふべく(九)クロライテウなる和名は *Lepusus terrie* (L.) にも附せられ居るを以て *Tetrao fulcipectus* HARRI. に附せられたるクロライテウなる和名は死名となし専らカマバネライテウを用ふべし(五)チナガフクロはチナガフクロウと改め(七)スツメフクロも共にスツメフクロウと改稱せん。

即ち表中和名の下に●印を附したるものは死名となし今後一切用ひざる事とし*印あるは改め用ふべき事と爲したき希望なり。

318	314	12	309	308	299	294	293	292	290	289	287	286	283	282	281	275	
ア ト リ	イ ス カ	シ メ	ム ク ド リ	ミヤマカケス	ヲウテウ	コテウ ガ セン ラ	ヒ ガ ラ	ヤマ ガ ラ	シ ジ ウ カ ラ	キマ ハ リ	テウ セ ン	ゴ ジ ウ カ ラ	オ ホ カ ラ モ ズ	モ ズ	ヒ レ ン ジ ヤ ク	キ レ ン ジ ヤ ク	ッ バ メ
				府内の殿宙の軒に營巢することあり									春期末だ當地方にて見す		府内所々に營巢す		朝鮮人の謠に三月三日燕来り雁歸り九月九日雁来り燕歸ると此期最も兩鳥の群を見るなり

ツ、ドリ of 習性及び雌雄

法學士 川口孫治郎

飛彈の高山附近では、毎年、遅櫻の花の未だ謝し去らず、杏の花の尙ほ眞盛りの四月の末つ方、早やツ、ドリ of 軟らかきボン／＼を聞く。その後、約三週許も過ぎて、漸くクワツコウ of 幽邃な響を耳にする。ホトトギスは之の前後し、寧ろ少し後れて啼き始むる。即ちツ、ドリ of 毎年の啼き始めは、他の同類よりも著しく早い。而してホトトギスは蕃殖期の酣なる頃には場所を交替しつゝも晝夜を分たず啼くが、ツ、ドリもクワツコウも夜は啼かない。

特定ツ、ドリ of 徘徊する區域は、概ね一定してゐるが随分廣い。道筋は概ね峰續きである。殊に獨特のボン／＼は峰の梢近くに於てのみ發せらるゝ。容易に人を近づけないが、常に去來する樹の近くに隠れて待つてゐるゝ、割合に近距離で聽かるゝ。近距離の割合に其聲が強大には響かぬ。又そのボン／＼の止んでゐる間に折々、グチュ／＼／＼／＼の響く低聲を發する。

發聲する際は前述の如く峰近くで而かも容易に人を近づけない位、警戒してゐるが、食を漁る際には、意外にも沈黙のまゝ山裾の粗林孤木に來てゐるゝが少くない。而して此場合には割合に人を避けない。粗雜な觀察眼には動もすればエッサイこても見誤られさうである。

五月中旬頃、日中に盛に、雌を追ふ。追はるゝ雌は逃げ廻りながらも遠く去らない。向ひの峰の梢などを指して逃けて行つたり逃げ還つたりしてゐる。雌のこまつた樹に、雄が追ひつきこまつた時、頻りに例のグチュ／＼／＼／＼の相呼應する。程なく復た逃げける。復た追ふ。之を半日も反覆する。斯くて雙方とも非常に疲れしものゝ如く、飛翔力甚しく鈍ぶり、枝にこまりし際にも兩翼の末端が著しく下がつてゐる。就中それが雌に著しい。クワツコウ及びホトトギスが雌を盛に追ふのは、少くとも二週間あまり後のこゝである。



（面背）雄リド、ツ 圖三廿第



（面側）雄リド、ツ 圖四廿第

六月に入るこ、ツ、ドリノ聲が聞こえぬやうになる。其後十日許を経る間に、ツツコウの聲も漸く収まる。ホトトギスは其後尚ほ暫くは續く。即ちツ、ドリは、逸早く啼き始め、又逸早く其聲を收むる。

所掲挿圖の第廿三圖、第廿四圖に表裏を示せる實體は、大正六年五月十二日午前十時半大八賀村宇三福寺なる山裾の畑の桑の梢に現はれしを獲たものである。先是彼が時々附近に竊に降り來るこに心付き、注意觀察中なりしが、斯日、觀察者は先づ彼の姿を認め、田圃に餌を認めては颯ミ下り、直に梢に戻り復た下りては戻るを確認し、遂に忍びて遙に隔てたま、發射せしに、下腹部の小さき羽毛一二葉の飛散りしのみにて、低く逸して其所在不明なる。靜察五分餘、意外にも再び近傍の別株の梢に現はる。銃聲については全く無經る。狙ひ茲に定まり、負傷のまゝを入手した。圖の眼の尙ほ張れるは、驚れしより僅に十數分後の撮影なるが爲である。實測左の如し。

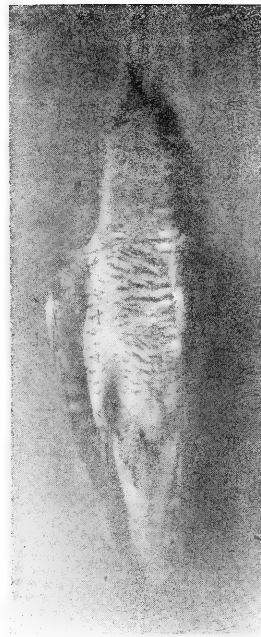
翼長六寸七分、尾長五寸二分、嘴峰八分、跗蹠六分。

尾羽の各白斑の、ホトトギスに比して、著しく小さきこと、就中、中央なる兩羽の白斑は、末端の二個を除きたる他が皆羽軸の外側に微小に存するのみなること、共に注意に値す。

腹部の黒横條斑の幅はホトトギスのそれと大差なし。

念の爲に右解剖せし結果、雌なるを確かむ。

二挿圖第廿五圖は、同月十八日、同郡宮村山林中にて、何故にや辛うじて數間を飛びて人を避け得るまでに、疲勞困憊せしを、里人の捕獲して飼養しつゝありしを、大江浩君の盡力にて貰受くるを得たものである。實測左の如し。



雌 第 廿 五 圖、ツ、ド、リ 雌 (圖 面 下)

の捕獲して飼養しつゝありしを、大江浩君の盡力にて貰受くるを得たものである。實測左の如し。

翼長六寸六分、尾長五寸一分、嘴峰七分二厘、跗蹠五分六厘。

總體、前實例よりも蒼黒色遙に鈍ぶく、稍淡灰褐色を帯び、

且つ腹部の黒横條斑至つて細く五厘を越えず。

念の爲に右解剖の結果、雌なるを確かむ。

本例について更に注意を惹きしは、寫真に見らるゝ如く其口

吻に近き羽毛に血塊の大豆大の黒化したるが固着しるたりしことである。捕獲者の言ふところによれば捕獲當時より生々しく凝り着きたりしあり。ホトトギス吐血説については拙著「杜鵑研究」頁九四乃至一〇二に、彼此解釋したれども、今ツ、ドリに就き、此現

状を目撃し、其何故に斯くなりし乎、を解するに苦しむ。或は雄に追はれて物に衝突して吐血せし乎。否、吐血するまでに衝突せば

其後一週間も生存する筈なし。或は雄に追はれに追はれし、丈けにて吐血し、爲に疲勞困憊して、人に生擒せらるゝに至りし乎。

因に云ふ、圖の腹部のいたく瘡せてみゆるは、生擒後約一週間飼養せられし中、餌食の量及び質が彼の自然の要求に合せざりし

爲なるべきこといふ迄もなし。

四國地方に於けるツバメ類の『渡り』並びに習性等に就て

榎 本 佳 樹

我國に於けるツバメはコシアカツバメの渡來及飛去の時期に關する從來の諸説には前者の方渡來及飛去共に早しきもの之に反するものとの二説あり、之は兩種共我國の大部分に互り渡來するものなるを以て精密なる調査を遂けたる上にあらざれば何れが早しき斷定し得ざるべきも余が永年住居せし四國地方(主として香川、徳島兩縣下)にての觀察によればツバメの方渡來飛去共にコシアカツバメよりも早きが如し。因て左に同地方に於ける兩種渡來及飛去時の狀況並びに其他二三の件に就て少しく述べん。但し余の觀察には詳細なる統計的記録を伴はざるを以て不確實なる點あるを免れざるも前後を連じ少くも二十年間の實見に基くものなるにより大なる誤なかるべしと信ず、尙不備誤謬等の點に就ては自己將來の研究と諸賢の高致とに待つ處あらん。す。

一、ツバメに就て

渡來の時期 早き柳の新芽少しく緑を帯び畑の麥も稍伸びてヒバリは空に囀るも高山雪を冠して西北の風尙寒き三月上旬思ひがけなく其年初めての燕を見て最早寒さも甚しかるまじき寒がりの人安堵するを常とす、斯くて三月上旬には極めて少數にして靜なるも其後逐次到着し且漸次喧噪となりて或は雌雄空中に相戯れ或は電線、樹木、屋上等に止まりて特異の囀聲を發するに至れば茲に初めて何人もツバメの渡來を知るこゝに成るなり、而して三月中旬には著しく其數を増し下旬に至らば殆ど大部分渡來し終り、四月に入りて渡來するものは甚少く同月中旬以後には渡來するもの極めて稀なるが如し。

飛去の時期 八月中旬頃より群集し始め九月初に至れば一群の鳥數頗る夥多となり同月上旬より中旬末の間に於て去る、而して其去るや渡來の時の如く少數づゝにあらずして多數一時に於てし多くの場合に於て黄昏迄大群を目撃せしに翌曉には最早其姿を見ざるなり、斯く去りたる後には極めて少數の幼鳥殘留するこゝにありて是等は大概十月上旬に去るも時として同下旬迄目撃するこゝ

あり。

二、コシアカツバメに就て

渡來の時期 ツバメの初渡來より約一ヶ月半乃至二ヶ月を経たる四月末乃至五月上旬に至り漸く本種來り同月中には殆んど全部の渡來を終るが如し、而して本種はツバメに比すれば一時の渡來數多きもの、如く初めて之を見る日には到る處にて之れに遭遇す。飛去の時期 八月末頃より集合し始め九月中旬頃に至れば其數頗る多大となり屢二三丁間の複行電線上に隙間なく占居するを見る、斯くなれば最早出發期に近づきたるものにして九月中旬乃至同月末迄の間に於て前種の如く一夜の間に其姿を没するなり、但し本種は前種に比すれば殘留數比較的多くして十月下旬乃至十一月中旬頃迄之を見尙極めて少數のものは同月下旬、時として十二月初迄も之を見ることあり。

三、兩種差異の點に就て

羽色の差異 之は多くの人の熟知する處なるが少しく距離を隔つる時雖ツバメは腰に赤褐色無く背に一様の黒色にして腹面純白を呈し翼裏面の暗黒なることにより、又コシアカツバメは腰に顯著なる赤褐色部あり腹面及翼裏面は淡赤褐を呈することにより夫々識別するを得べし。

習性上の差異

(a) ツバメの飛ぶ平均高度はコシアカツバメのそれよりも低し、即ちツバメは地面に接近して飛ぶこと多けれども

コシアカツバメは斯の如きことなし、又コシアカツバメは著しく高空に翔ること多けれどもツバメには斯の場合比較的少し。(b) 飛行中翼を張りたるまま翔る時間に於てはコシアカツバメの方ツバメよりも遙かに長し。又ツバメは屢電光形に飛ぶもコシアカツバメは斯ること無し。

(c) コシアカツバメは田舎に少く都會地に多けれどもツバメには斯る差異少し。(d) ツバメは屋内(戸締内)に營巢すること多けれどもコシアカツバメは戸締内に營巢せるを見たること無し。(e) コシアカツバメの巢は下方より之を支ふるもの無

き位置に造りツバメの巢は多少之を支ふるものある場所に於てするを異なりす(徳島地方にてはツバメの營巢するは一家の吉兆なり)し殊更に小形の棚を造り與ふる家少からず。(f) ツバメの幼鳥はコシアカツバメの幼鳥よりも外側尾羽の發達遅し。(g) ツバメは屢樹木に止れどもコシアカツバメの樹木に止れるを見しことなし。(h) 兩種は全く鳴聲を異にす。

右の外尙兩種間に於ける差異の點多々あるべきも他日一層研究の後に讓ることとせり。

埼玉縣入間郡産鳥類

榎山徳太郎
 野村宗重

大正六年二月初旬より翌七年十二月下旬に到るの間埼玉縣入間郡地方に於て斷續的に行ひたる鳥類採集の傍各種に就て差少なからぬ觀察をもつを得たり、採集地並に觀察地は殆んど高麗村附近に限らるゝも又數日づゝの各所に於ける觀察をも加へ尙可成採集するあたはざりしものは標本にても入手する様勉めたり而して掲載せる各種に就ても今回の採集に掛るもの採集せざりしも標本となりたるを入手せるもの、本郡産なる標本を見たるも入手する事を得ざりしもの、採集若くは入手する事を得ず只觀察せしに過ぎざるもの等を明かに分ち説明を附したり、郡内各地にて聞きたる諸種の分布、習性等も各種の説明中に記入せり、而して産する事殆んど確實なりと思はるゝ種にして且産する事ある由を聞きたる種にても活物死物若くは標本羽毛を検する事あたはざりしものは只附記せるに止めたり、掲載せる種數は全部にて百三十二に及びたれど尙幾多の掲載洩れのものもあるべく又掲載せる種にも充分なる觀察の足らざるもの等あり、其等は尙今後觀察を續行して(殊に不充分なりし東部地方の)他日改めて追加せん事を茲に約す。

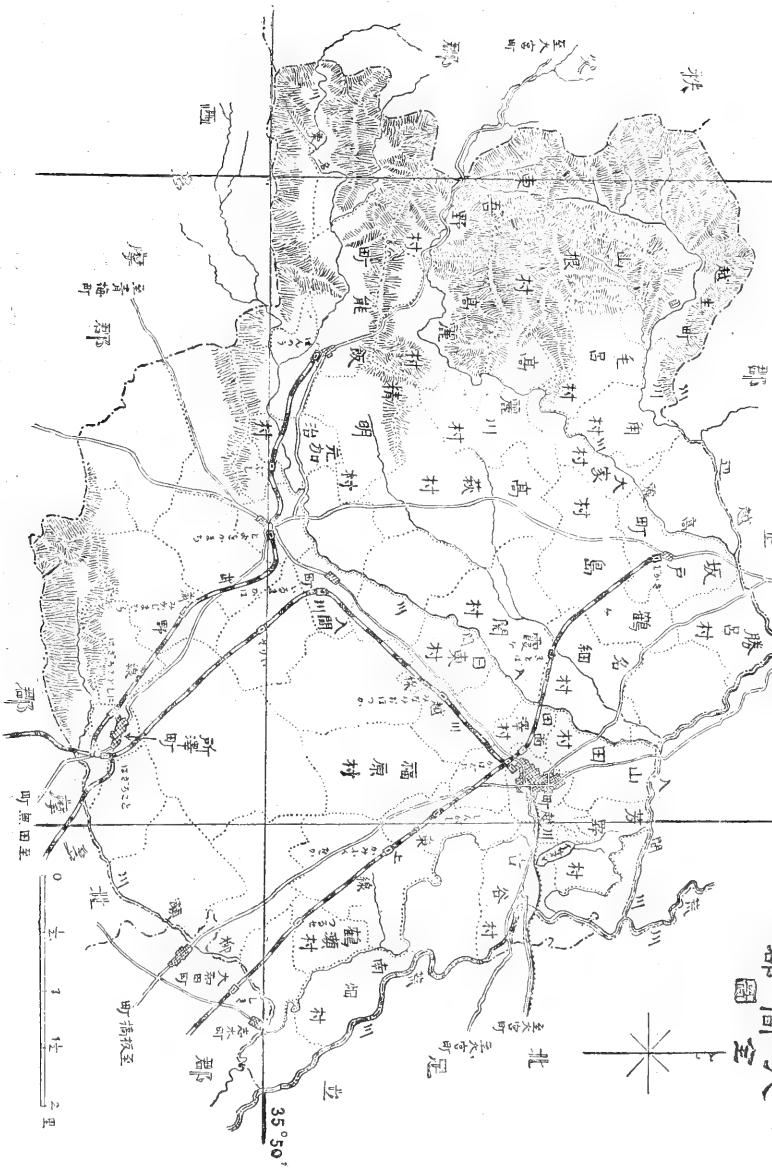
本郡の地勢の概略を述べれば西は有名なる秩父山地に接し東南部より中部に掛け武藏野の一端を容す、東部並に東北部には荒川、入間川、越邊川、^{オッベ}高麗川等の諸川の灌漑便にして豊饒なる水田地方其大半を占む(後記三川は下流地方のみ)故に本郡を分ちて東部並に東北部の水田地方、西部の山地々方、東南部及中部の平野地方の三大別をなす事を得、西部の山地は各種の夏鳥の好蕃殖場にして東部の水田地方は各種の水棲鳥の群集地たり加ふるに東部に伊佐沼なる一池沼あり、長徑約十二町短徑二二三町周圍約一里弱に過ぎざれど水底淺くして慈姑、萍蓬草、マコモ等茂生し其他幾多の水草類極めて多く加ふるに淡水産魚虫類の繁殖も亦夥し故に夏季は諸種の水棲鳥類の好蕃殖場たり即ち該沼にて疑なく繁殖をなすものにはカイツブリ、カルガモ、バン、オホヨシキリ等あり、尙此附近には稀に海鳥の飛來するの事實あり(該沼は最近海面なる東京灣隅田川河口に到るの里程尙十數里あり然れども該沼附近に飛來

139° 15'

139° 30'

36°

縣志 增入 全圖



第廿六圖

したる海鳥は隅田川河口——東京灣内等にては見るを得ざるもの尠しとせず、即ちシロアジサシ、アカチネツタイヤウ、ハナジロフ
ルマカモメ等によりてす（此海鳥の渡來に就ての愚見は動物學雜誌二十九卷六月號に掲げ置きたればご一覽）。

大正六年度及七年度の諸觀察を比較するに一般に七年度の方、夏鳥の渡來多かりしは確實なるものゝ如し。

靱山が該地に於て行ひたる觀察は六年度に八回、七年度に四回出張したるに過ぎず而して六年度に於ては各回平均七日弱七年度にありては各回平均六日間に於ては後年度に於ては五月初旬以來九月末日迄は他用の爲専ら野村に全任せる處なりとす、野村は該地に在住し靱山のなすあたはざりし間を補せしにあり今左に靱山の該郡下に出張なしたる年月を記し此間を明瞭にせん

大正六年二月九日着發、四月五日——同十八日、四月廿四日——五月二日、五月十日——同廿四日、六月十一日——同十二日、十月卅一日——十一月三日、十一月十九日——十二月五日、十二月十五日——同廿五日、

大正七年一月卅一日——二月七日、二月十二日——同廿日、四月廿七日——五月三日、九月三十日——十月三日、

觀察地名並に採集地名を擧ぐれば下の如し、高麗(コマ)高麗川(コマガハ)高萩(タカハギ)霞ヶ關(カスミガセキ)田面澤(タモザハ)名細(ナグロシ)山田(ヤマダ)芳野(ヨシノ)古谷(フルヤ)南畑(ナンバタ)鶴瀬(ツルセ)福原(フクハラ)日東(ニットウ)元加治(モトカヂ)精明(セイメイ)東吾野(ヒガシアガノ)山根(ヤマネ)毛呂(モロ)川角(カハカド)大家(オホヤ)鶴ヶ島(ツルガシマ)勝呂(スグロ)の諸村並に川越(カハコイ)所澤(トコロザハ)飯能(ハンノウ)入間川(イルマガハ)坂戸(サカド)越生(オゴセ)の諸町、加ふるに荒川(アラカハ)入間川(イルマガハ)越邊川(オツベガハ)高麗川(コマガハ)飯能川(ハンノウガハ)等の諸河川等となす。

本篇を草するに當りて各種の援助を與へられたる黒田理學士の好意に對し衷心感謝に堪はず、尙採集に際して諸種の便宜を計られたる内田獸醫學士、埼玉縣知事岡田忠彦兩氏の好意を厚く鳴謝する處なり、各種蒐集其他に多大の助力を附與せられし高麗村在住諸君の勞を謝す。(靱山記す)

以下各種に就きて記述すべし

備考 番號の頭に※印あるは採集若くは入手せる處の種並に亞種名にして他は然らざるものとす。

(1) *Cyclusmus yessensis* (SWINH.) コシユリン

方言 ジョーリン (川越町附近)

本郡の東境荒川堤の叢間に冬間普通に見らるゝ所のものなりされど次種に比し尠きものゝ如し。

(2) *Cynchramus schenckius pyrrhulius* (SWINH.) オホジユリン

方言 ジョーリン (川越町附近)

前種と混じて同所に見受くる所のものなり本種の方多きものゝ如し兩種共に雄鳥成羽のもの即ちナベカブリは尠くして雌羽若くは幼羽のものを見る事多し、川越町の捕鳥家は同地附近にて冬間本種を多数捕獲する由。

※(3) *Emberiza sulphurea* T.S.S. ノ ジロ

飯能町附近(六年十月)にて捕獲せられたる二羽を入手せり同町内にて飼養鳥をも見たり高麗村地内にも渡來する事ある由を聞けざ未だ目撃せる事なし一般に尠きものなるが如し。

※(4) *Emberiza rustica* PALL. カシラダカ

方言 カシワダカ、カシワドリ(共に高麗村) タホ、ジロ(川越町)

高麗村(六年十一月廿二日)にて二羽、越生町(六年十二月廿四日)高麗峠(同月廿八日)にて各一羽を採集す、本種の渡來期は明かならざれど十一月初中兩旬内なるものゝ如し、高麗村にては主として山地にのみ見るも越生町及び飯能町にては桑畑にても見受けたり。

※(5) *Emberiza hortulana* TEMM. クロジ

方言 アチシト、(川越町——アチツの誤りにあらず同町にては次種は同じくアチツと稱す)

高麗村(七年四月廿五日、五月二日)にて三羽を採集せり越生町上野山(六年十二月廿四日)にて二羽を目撃す、川越町にて同町附近にて獲られり云ふ標本を見たり、高麗村新堀山にては四月廿五日(大正七年)に初めて見、以後は普通に見受けたり夏中を通じて留棲するものゝ如けれど未だ卵雛を發見せし事なし七年九月廿五日高麗村地内なる新堀釜淵に二羽の渡來を見たるも以後山地其他

に一影だにもなし。因に川越附近にては冬間見受くるものなる由

※(6) *Emberiza spodiopelta personata* Temm. アヲジ

高麗村（六年十二月一日、廿二日、廿三日、七年二月六日、四月廿二日）にて五羽を採集す。冬間は本郡内の各所に最も普通なるものなれども四月下旬以後は蕃殖の爲山地に入る、高麗村の山地にては五月にも尙見受たり恐らく少数のものは留りて蕃殖するなるべし。

※(7) *Emberiza cioides ciopsis* BONAP. ホ、ジロ

高麗村（六年二月九日、六月十二日、七年二月十四日）にて五羽を採集せり尙同所にて數回採卵せり（六年四月廿七日一個、同廿九日四個、同三十日二個、五月六日四個、同十二日五個、同十七日三個、同十八日五個、同十九日二個）本郡内各所に極めて普通のものなれども深山には全く見ざる處のものなり。夏季は稍其數を減せるものゝ如く見ゆ、各所の灌木茅藪等に茅葉、草根等を用ひて構築し内部に帶青白色若くは微紅白色の地色に暗褐色の線條を有する卵（稀には暗色の斑紋あり）を四―五個稀には六個を産す、晚期蕃殖例として十月一日（大正七年）尙構築中のものを見たり。

※(8) *Emberiza fucata fucata* PALL. ホ、アカ

方言 タホ、ジロ（川越町——カシラダカにも同稱ありされど本種を意味する事多し）

芳野村（年月不明）産の一標品を川越町にて入手せり、川越町附近にては冬間は稀ならず、本種は本郡西部地方にては見たる事なし。

※(9) *Passer montanus sibiricus* STRAN. ス、メ

郡内到る所の田畑人家附近にては極めて普通のものなり各所の屋上、檐下、樹洞、橋材の間隙等に營巢し三月下旬以後産卵す、農家の屋上に構築する時は葺屋材料を搔撥し被害尠ならず本種は稀に晩秋構築材料を運搬するの事實あり蕃殖の用意にあらざる事は確實なる處なれば或は嚴寒中巢内保温の爲修繕をなすにはあらざる歟。

(10) *Pyrrhula pyrrhula griseiventris* LAMPRO. ウ ソ

高麗村新堀山（六年二月九日）にて雄鳥一羽を目撃せり以後二―三回特有の *Pos. Pos.* を聞きたり同村内にてはあまり多からざるものなり川越町にて同町附近にて獲られたる雄雌二羽の標本を見たり郡内の各所に籠飼せられ居るものを見る事あり一般に其数は多からざるものゝ如し。

附記 本亞種の雄鳥は胸腹部の灰色なるもの即ちホ、デリ（豊後方言）ホウテレ（長府方言）チウテル（函館方言）ホ、アカ、ニホヒウソなるものと胸腹部の微紅若くは淡紅色を帯べるテリウソ（豊後方言）アカウソ、ソウテレ（長府方言）ヒウソ（若柳方言）ホンテル（函館方言）等稱するものとの二別すべきものあり川口法學士に依る時は前者は老鳥にして後者は幼鳥なりとの説明ありたれど（動物學雜誌二十九卷二三頁）余は是を反對に幼鳥は胸腹部灰色にして老鳥になるに従ひ紅色の度を増すものかと考ふる處なり、されど胸腹部の紅色なるものも籠飼越年する時は灰色と變ずるは確實なり、かゝる現象は他の類似種マシコノ類（*Uruba*s）にも見らるゝ處なり恐らく飼料の變化並に運動等の野生時代と多少の差異あるが原因なるにはあらざる歟、記して識者の御高教を仰ぎ度し。

※(11) *Chloris sinica minor* T.A.S. コカハラヒワ

方言 カハラヒワ、カハラッピワ（高麗村）

高麗川村（七年二月五日）にて一羽高麗村（七年二月六日）にて三羽を採集せり、高麗村附近にては年を通じて見るも冬間は群居し四月中下旬より一番づゝこなり蕃殖時は稍山地へ入るものゝ如く數少しく減する處なり本亞種は本郡内各地にて蕃殖す營巢するに杉樹を好め松林中にも構巢せざるなきにしもあらず、籠飼せらるゝものを見る事あり。

※(12) *Chloris sinica kawarabita* TEMM. オホカハラヒワ

方言 ダイコヒワ（川越町） 又は前亞種と共にカハラヒワ

川越町附近にては冬間（一―二月頃）は前亞種と共に捕獲せらるゝもの多き由、同町にて雌一羽（五年一月？）の標本を購入せり該標本は少しく疑あるも本亞種と認むべきものなるべし各部の測定左の如し、嘴峯一二耗、嘴高一〇耗、翼長八〇耗、尾長四八・五耗

跼蹠一五・五耗、因に本亞種は本郡西部にては未だ見たる事なく東部に於ても前亞種に比し妙きものゝ如し、

(13) *Leucis spinus* (L.) マヒコ

方言 ヒ ヲ

高麗村（七年二月廿日）にて疑なき本種一羽の聲を聞きたり秋季少数のものゝ渡來する事ある由、籠飼せらるゝ事ありき。

※(14) *Fringilla montipingilla* L. アトリ

方言 アトリ（入間川附近）

高麗村新堀山（六年十二月十八日）に於て雌一羽を採集せり同地附近にては甚だ珍らしきものゝ一なりされど入間川町附近の入間川河原には極めて普通なるものゝ由。

※(15) *Tringus sibirica sanguinolenta* (T.K.S.) ヌニヤシコ

方言 マシコ（川越町、高麗村）マヒコ（高麗村）

高麗村地内の山地にて捕獲せらるゝ事ある由、川越町にて採集地不明の——されど本郡内産の——雌雄二羽の標本を見、毛呂村（五年一月）産の一標品を入手せり。郡内にて間々籠飼せらるゝものありき、一般に多からざるものなるが如し。

(16) ? *Larus curvirostris albirivris* SWINH. シロハライスカ?

方言 イスカ

高麗村（六年五月十二日、同月下旬）に少群をなしつゝ飛來せるを目撃せりイスカなるか本亞種なるか詳ならざれども大概本亞種なるべしと想はるゝを以て前記學名を掲ぐ。

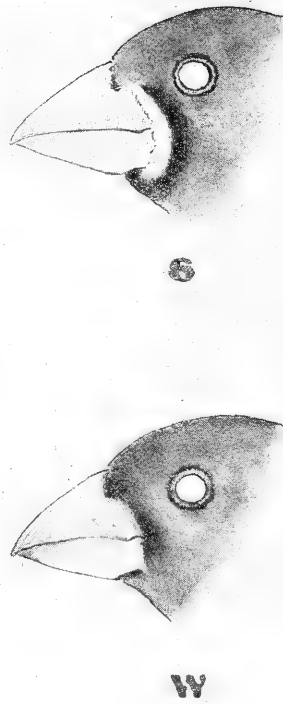
※(17) *Eophona melanota nigricollis* HARR. コイカル

方言 シマイカル（高麗村、飯能町）

高麗村新堀野口（六年十月廿九日）にて雌一羽捕獲せられ後余の入手せる處となり約一箇年間飼養を續行せり該鳥はイカルの媒鳥

にて簾に掛かりたるものなり而して同所にて約十五年以前木亞種雄鳥一羽捕獲せられし事あるのみにて前後二回以外には本郡内に於て捕獲せられたるを聞かざる程のものなり、飼養の結果左の事實を識るを得たり即ち木亞種雌鳥の鳴聲は *Pyritchore-chuhhi* (sho-gho) *gijugunju* *kpi-z-kpi-z* (*Ply-n-kyot-kyto* *gho-gho*) 等を普通に鳴けども三月下旬より(飼養鳥に於ける結果なれば野外にても同じ)は斷言するを得ず) イカルの如く *Tsuky-hoshi-hi* に聽かるゝ囀音をも發す、されど前述の各鳴聲に比し甚だ稀なり、嘗て飼鳥商より本種は「鶉鳴き」をなすものなりと聞きたる事ありしが靱山の飼養せるものはかゝる事なし或は本種の雄鳥のみに於て「鶉鳴き」は聽く事を得べき歟、三

コイカル雌鳥口邊夏冬の變化



圖七廿第

四月に到れば嘴に接する口邊の羽毛は白色及黑色と變じ口邊に各一線の三日月型の白色部並に黒色部を現出するも(第廿七圖S)九月以後に到る時は消滅し只他の部に比し稍幾分薄黒き色彩を呈せるに過ぎず(第廿七圖W)此は恐らく木亞種雌鳥に於ける夏冬の羽の變異なるべし。

※(18) *Tophoua personatus personatus* (T.A.S.) イカル

方言 エ、コホシイ(高麗村)——前掲和名と共に並び用ふ)

高麗村(六年五月十四日)にて一羽を採集せり同所にては十一月下旬より五月中旬に至るの間は少數のものは普通に見らる秋期小群をなして渡來する折は多く高狹を用ひて捕獲し籠飼するもの稀ならず、方言の出所は鳴聲に依りたるものなり。

※(19) *Coccythraustes coccythraustes japonicus* (T.A.S.) シメ

方言 マメブチ(高麗村) ドホウネンスバメ(高麗川村)

鶴ヶ島村（六年十一月廿六日）にて二羽、高麗村（六年十二月一日、廿一日、七年二月四日）にて三羽を採集せり、六年度には十一月廿一日高麗村地内にて初めて四羽を見たり以後は普通に群居せるものを目撃せり而して七年四月廿三日同村新堀山にて一羽を見しは最晩例ミナす、冬間は郡内各地に稀ならず。

※(20) *Zosterops palpebrosa japonicus* T.&S. メ ジ ロ

高麗村（六年十二月十八日、二十日）にて二羽を採集す、初秋より晩春に到るの間各所に稀ならず以後は蕃殖の爲山地に入る、西部地方の山地にても構巢するものもあるも多くは隣郡秩父方面へ移行するもの、如し、而して多く樗の木に構巢するを見る、初秋媒鳥を以て捕獲し籠飼せらるゝもの郡を通じて尠からず。

※(21) *Spytopisar chinensis* (Temm.) ム ク ド リ

大家村（七年二月十六日）にて二羽を採集す、川越町、芳野村、所澤町、飯能町、高麗川村等にて目撃せり、本郡東北部東部南部の耕地附近に於ては極めて普通のものなれども西部の山地方面にては極めて稀なるもの、如し高麗村地内にては未だ見たる事なし、東部及び東南部地方にては恐らく蕃殖するものあるべしと信ず。

※(22) *Cyanopicus cyanus japonicus* Parrot. チ ナ ガ

古谷村（七年二月）にて採集せられたり云ふ標本一羽を購入せり、七年八月廿八日高麗村地内の桑畑にて本種三羽を初めて見たり翌廿九日同所にて一羽、九月に入りてより同じく高麗村地内にて本種の聲を聞く本種は西部に於て冬間は全く見る事を得ざるものナす。

※(23) *Turdus glandarius japonicus* T.&S. カ ケ ス

高麗村（六年四月七日、十日、十一月廿八日、七年二月一日、三月三日）にて五羽、高麗峠（七年十月三十一日）にて一羽を採集せり、九月下旬以後より四月下旬に到るの間各地に稀ならず高麗村附近にては五月上旬に到るも尙少數のものを見る事あり、大部分のものは隣郡秩父方面にて蕃殖するならんも少數は本郡内にも構巢する事あるべし。本種は秋季栗の實等を畑の一隅其他に埋め置

く奇習あり。

※(24) *Corvus corax orientalis* EVERS.

ハシボソガラス

方言 ホソガラス(川越町) 又は單に カラス

高麗村(六年五月十二日、七年二月五日)にて成鳥二羽を採集す尙雛卵も數回發見せり(六年五月十二日巢出後一―二日の雛一羽採集、七年四月廿三日雛三羽一孵化後約一週間經過一及卵一個、同月廿九日當日孵化の雛三羽、孵化途中の卵一個、五月十三日巢出近き雛一羽採集、以上は皆高麗村に於ける觀察なりとす)最早産卵日として七年四月中旬採卵せる事あるを聞きたり。本種は郡下到處の所に多く各所にて蕃殖す夏季は散棲するも冬間は大群をなして山林に棲所を定む、冬季中は桑畑或は麥畑に見る事多し。

(25) *Corvus macrorhynchos japonensis* BONAP.

ハシブトガラス

方言 ハシブト(川越町) 又は單に カラス

川越町、飯能町、所澤町、高麗村等にて見たり高麗村地内にては極めて尠きものなれど飯能町附近には稍多く所澤町附近にては尙一層多きものなるが如し然れども一般に前種に比して尠き事は疑を容れず、高麗村地内にては蕃殖するものあるが如し。

(26) *Regulus regulus japonensis* BLAKIST.

キクイタ、キ

方言 コガラ(高麗村)

晩秋より冬間は稀ならず他のカラ類と混群し居る事多し四十雀科中最も遅く出で最も早く去る處のものなり、高麗村、精明村、高麗峠、飯能町等にて見たり

附記 最近の分類に従ひ菊戴亞科(*Regulinae*)を四十雀科(*Paridae*)中に加ふる方可なるべしと信ず。

(27) *Acrida caudata hirtigata* (T.N.S.)

エナガ

方言 コガラ、ヲナガ(共に高麗村後者は甚だ稀に)

高麗村、精明村、飯能町、芳野村、鶴ヶ島村、越生町其他各所にて見たり十月初旬より四月下旬に到るの間各所に稀ならず多く他

のカラ類と混群せる事多けれど、春期は本種のみの大群を見る事あり、高麗村新堀山(七年五月二日)にて一巢を發見せし松樹の地上九尺餘なる横枝の基近き個所に細き樹苔、軟き蘇類等を蜘蛛の絲並に昆虫幼虫の繭糸を以て固着せしめありて一見本種(?)の如し而して内部には各種の鳥類の羽毛を集めありたり左に其鳥名並に羽毛の別を記さん、

ゴ井サギ成鳥

腹羽八

ヤマドリ雌

上脊羽二、胸羽六、脇羽二、

ヤマシギ

雨覆羽一、腰羽一、

オホコノハヅク

頭羽一、肩羽八、脊羽二、三列風切羽一、腹羽二二三、

ヒヨドリ

肩羽一、胸羽七、腰羽二、腹羽二、

トラツグミ

胸羽二、脇羽五、腹羽九、下腹羽四、脊羽二、腰羽二、三列風切羽二、

シロハラ

脊羽及腰羽十三、腹羽約二十、三列風切羽二、雨覆羽(?)三、

シヅカカ

次列風切羽二、大雨覆羽一、尾羽三、

カケス

脊羽、腰羽並に腹羽四一五十、三列風切羽一、次列雨覆羽三、

カシラダカ

脇羽二、腰羽三、

クロジ

次列風切羽三、

尙種名の詳かならざるもの中には

鷺亞科(?)

脊羽一、腹羽一、

不明鳥A(小型の梟類?)

初列風切羽三、

同

下尾筒羽(?)一、

同

肩羽二、腹羽三、下尾筒羽(?)一、

以上は構築材料中の羽毛の全部にして十枚以上を見たる鳥種名を多きものより掲ぐればカケス、シロハラ、トラツグミ、オホコノハヅク、ヒヨドリ、ヤマドリの順なる、構築材料となりたる諸羽毛の持主即ち各種の鳥類は皆該地に普通にして別記せる數種以外のものは總て余等が該山中にて目撃せるものゝみなり、而して該巢の製作者一即ちエナガは構築に用する羽毛は總て該山中に於て蒐集せるものなるべく且全部を拾得せしならんを考察す如何かなれば其羽毛中に頭部頸部並に上脊部のもの少くして腹面のもの及翼羽、腰羽等の多きは各種の鳥類の羽繕ひ等に依りて脱落せしものなるを證するに足るべければ、因に該巢は一部を破壊せられ内部に卵無し、尙同山（六年四月九日）にて本種の巢なるべしと思はるゝものを一個拾得したる事あり該巢は構築半なりしものを墜されたるものゝ如く松林中の地上に在りたるものにして該時の構築材料も前記のものに略同じくして細き樹苔、軟なる蘇類、細き杉皮（數本）、羊齒類の新芽（一本）、枯松葉（一本）等に左の諸鳥の羽毛を用ひありたり

ゴ井サキ成鳥 脊羽三、腹羽三、

キジバト 腹羽一、

シロハラ 腰羽三、

カケス 腹羽三、

アヲジ 初列羽切羽二、

クロジ(P) 風切羽及尾羽六、

種名不詳鳥羽 二種各一、

以上にてエナガの構築材料に關する大略は終りたり而して此如く夥しき鳥羽を内部材料として使用するは該種の産卵數の多き事と大いに關係あるべき事を信す。

※(38) *Parus ater insularis* HELMAYR ヒガラ

方言 コガラ（高麗村）又は誤りてシツフカラ

高麗村（六年十二月一日）にて一羽を採集せり、高麗村、飯能町、遠生町、精明村等にて見たり、本種は前種より稍遅れて十一月旬以後より山地に普通に見受けらるゝ處のものにして去期も稍早く四月上旬以後は見へず、本種「渡り」の最早晩例として七年十一月三日高麗村にて見たるは最早日にして六年四月九日高麗峠にて見たるは最晩例なりとす、夏季は全く見る事を得ず常に他のカニ類と殊にシヅフカラ混群し居る事多し。

※(29) *Picus corvus* T.A.S. ヤマガラ

高麗村（六年四月十一日、十二月十七日）にて二羽を採集す同地にては本種の渡來期は詳かならざれど前種より稍遅るゝものゝ如く去期は前種より一旬程遅れ四月中旬以後なるが如し本種も前種と同じく平地にあまり多からざる處のものなれども山地にては稀ならず而してあまり大群をなさずして數羽のものゝ他のカラ類（主としてシヅフカラ、ヒガラ、エナガ）の群中に混じ見る事多し、鶴ヶ島村、霞ヶ關村、飯能町、精明村等にても見たり。

※(30) *Picus major minor* T.A.S. シヅフカラ

方言 チンチガラ（高麗村——甚だ稀に）

高麗村（六年五月二日、十二月十八日）にて四羽を採集せり本種は郡内到處に極めて普通のものにして四月頃樹洞其他の暗所に構築する事稀ならず盛夏中一時山地に入るも初秋に到れば再び何所にも見る事を得、高麗村（六年五月一日）にて桑株の空洞中に二卵を産せしを發見せり産卵途中なるものゝ如し、高麗村新堀山にて純白なるものを見し事あり。

※(31) *Sitta europaea amurensis* SWINH. ゴジフカラ

高麗村（六年二月九日）にて一羽を採集せり冬間山地附近にてエナガと混群せるを見る事あるも多からざるものゝ如し。

※(32) *Lanius lucophantus* (T.A.S.) ナス

高麗村（六年四月九日、五月二十二日）にて二羽を採集す五月二十二日に採集せしものは巢出後約一箇月以内のものなりき、尚同所にて雛卵を數回採集せり（六年五月一日巢立間近の灘六羽、七年四月六日抱卵半以上を経過せる六卵、四月二十一日抱卵後約十日

經過七卯（木郡内到る所に極めて普通のものにして三月中旬以後雜木茅藪等に架巢し蕃殖を營む盛夏の候に到れば著しく其數を減ずるも少數のものは留棲す、大正七年度に於ける本種初鳴日は二月十四日にして構巢に着手せる最早者を目撃せるは三月二十一日なりき。（高麗村）。

※(33) *Bombus japonica* (Sme.) ヒレンジヤク

高麗村（七年三月十七日）にて一羽採集す同地に於ける最早渡來日は三月十五日（大正七年）なりき約一旬程にして見ざるに到れり飯能町、川越町等にも殆んど同期に群來するものある由。

※(34) *Bombus terrestris* (L.) キレンジヤク

日東村（五年四月）にて獲られたる標本一個を川越にて購求せり川越町附近にも渡來するものある由なれど前種に比し尠きものなりし七年三月前種より稍遅れて高麗村附近にも群來せり。

※(35) *Peripoculus cinereus* Latr. サンセウクビ

高麗村新堀山（七年四月二十四日）にて三羽を採集せり、同地にては大正六年度には一羽も見ざりしが翌七年四月二十三日最初のもの、渡來を見以後暫くは稀ならざりき其後一時見へずなりしも八月十七日本年生の幼鳥のみよりなる一群を目撃せり。恐らく木郡内にて蕃殖するものあるべし。

※(36) *Hymenoptera* イハツバメ

高麗村（六年四月八日）にて一羽を採集せり同日初めて小群の渡來を見たるも以後は一影だに無し恐らく「渡り」の途路なりしならん。

※(37) *Chelidon rustica gutturalis* (Scop.) ツバメ

方言 ツバメ

中春より中秋に到るの間特に深き山地を除きたる地に極めて普通のものにして屋内に營巢する事は諸地皆同じ高麗村新堀に於け

る觀察を記せば大正六年度には四月六日一羽のものを渡來し翌七日には二羽となり三日目(八日)には尙多くのものに到着せり大正七年度には四月四日に二羽渡來翌々六日には到着數二十羽以上を算せり、大正六年度の去期は詳かならざりしも七年度の觀察に依れば九月下旬以後は南下しつゝあるもの非常に多く高麗村に在住せるものは九月末に全く渡去りたるも十月十五日高麗村を通過せるものを去期の最晩例となす、九月下旬同地に純白のもの一羽飛來せるも一日にして見へずなりたり本例並に前記イハツバメの例に照しても燕類の「渡り」は多く早朝到着せし地に一日を過ぎし夕刻より再び旅程を續くるものなる事を推察するに難からず

※(38) *Troglodytes troglodytes fuscigatus* Temm. ミソサザ、イ

方言 ミソツチョ、ミソツチョイ、ミソヌスミ、バカツチョ、バカ(皆共に高麗村——後四者は稀に)

高麗村(六年十二月一日)にて二羽を採集す十一月中旬以後は各地に稀ならず渡來の最早日は大正六年度には十一月十九日翌七年度には十一月十五日なりき(高麗村) 去期は詳かならざれども三月中なるが如し、川越町附近にて獲られたり云ふ標本を同町にて見たり芳野村、越生町、飯能町其他にても渡來日は略同期なるものゝ如し、本種は本郡西部の山地にて蕃殖する事あるべし。

(39) *Cinclus pallasi pallasi* Temm. カハガラス

方言 カーガラス(高麗村)ヤカンガラス(同所)

高麗村 清流(六年二月)の小川にて獲られしもの一羽を見たり同所にては冬間に稀に見受けらるゝ處のものなる由約半里を隔つ新堀山附近にては未だ見たる事なし。

※(40) *Acridotheres occipitalis coronata* (T.&S.) センゲイムシクヒ

方言 ムシクヒ(高麗村)メボン(飯能町、高麗村)

高麗村(六年五月十六日、廿三日、六月十二日、七年四月廿四日、五月二日)にて五羽を採集せり四―五月の候渡來し以後各所の林中に稀ならず大正六年度の渡來最早例は五月十一日の一羽にして翌七年度は四月二十日の二羽なりとす(高麗村)六月中旬以後迄は特異の囀聲を聞く事を得恐らく本郡内にて蕃殖するものあるべし、去期は詳かならず本種は他の蟲喰類と異りたる囀聲を發するを

以て外見及習性は酷似するも嘯聲に依る時は決して誤る事なし普通に *picnan picnan-tji* (聞) のる嘯聲をなすも稀には *piyo piyo* (嘯) のる嘯聲をなす事あり(一例のみ)

因に相模足柄上郡玄倉附近にては本種の方言をウシツビと稱す嘯言より採りたるものなりと云ふ。

※(41) *Cisticola cisticola brunneiceps* T.&S. セツカ

高麗村(六年六月十二日、十二月一日)にて二羽を採集す好んで小麦畑に營巢するも茅藪雜草等にも構巢する事あり産卵期として六年六月一日より四日迄に四卵を産せし一例を識るのみ該時のものは路畔の尺餘なるバタグサ(方言)の草株中に草根を蜘蛛糸を以て絡めたるものなり同月十二日小麦畑に發見せる構巢中のものは小麦莖の中途に細き草根及菊科に屬するもの(タンホ、の類?)の種子を集めたるものなりき一般に細き草根は必ず使用せられ居るを見る他に莎草科の花穂等も用ふる事多し本種は蕃殖期に入りてよりは *hiy hiy hiy hiy* 若くは *tja tja tja tja* の鳴きつゝ構巢地附近の上空を波上飛行をなす、夏中は畑地附近に散棲すれども秋季に水田地方に移行し可なり多數を見る冬間はあまり見當らざれども少數のものは留棲するものと如し。

※(42) *Horeites cantans cantans* (T.&S.) ウゲヒス

方言 チョッチャ、バカッチョ(共に高麗村——秋季のみの呼稱なり)

高麗村(七年一月十日、三月五日)にて二羽を採集せり晩秋より郡内各地に稀ならず高麗村附近にては五、六月の候産卵育雛し後山地へ入る但し山地へ入りてより蕃殖を營むものもあり大正七年度の最早渡來日は十一月廿七日にして初鳴日は三月九日、産卵初日は五月上旬なり。

(43) *Acrocephalus arundinaceus orientalis* (T.&S.) オホヨシキリ

方言 ヨシキリ

古谷村(六年六月)にて目撃せり初夏の候芳野村伊佐沼にて蕃殖するもの多し云ふ坂戸町附近なる越邊川堤にても蕃殖するものある由本種は西部の山地附近にては全く見る事を得ざるものなり。

(44) *Prunella rubrus* (T. & S.) カヤクヰリ

方言 カヤ、カヤモグリ (共に高麗村) オホサバイ (川越町)

高麗村新堀山 (七年四月廿二日) にて疑なき本種の囀聲を聞きたり川越町にて山根村にて採集せられたり云ふ二羽の標本を見た
り飯能町にて籠飼せらるゝもの二三を目撃す吾野村附近の山地より出づるものなる由、西部の山地には産するもあまり多からざ
るものゝ如し。

※(45) *Prunella torquata streperus* PARROT ノビタキ

高麗川村 (六年四月十三日) にて夏羽のもの一羽を採集せり該時のものは高麗川の岸邊の茅藪に棲止し居りたるものにして山地附
近にては此他には見たる事も聞きたる事もなし西部にては恐らく偶然に渡來するものと認むべきなるべしされど東部の水田地方に
は普通に見る事を得べしと信ず。

※(46) *Tarsiger caunurus* (PALL.) ルリビタキ

方言 バカスカシ (飯能町) バカツチョ、バカヤロー、バカ (皆共に高麗村——後二者は稀に用ひらるゝに過ぎず)

高麗村 (六年二月九日、四月十四日、十一月十九日、十二月一日) にて四羽を採集す、晩秋より中春に到るの間郡内各地に稀なら
ず夏季は隣郡秩父方面に移行するも本郡内にも少数のものは蕃殖する事あるべし渡來最早例として大正七年十一月十七日に高麗
村に飛來せるものを識るのみ、去期は六年度には四月十四日、七年度には四月十九日の二例あり、本種は次種に比し山地に多くして
平地には尠きものなるが如し。

※(47) *Phoenicurus auroreus auroreus* (PALL.) ジヤウビタキ

方言 ダンゴシヨイ (飯能町、高麗村) ヒツカチ (高麗村)

高麗村 (六年二月九日、七年一月廿日、二月六日) にて三羽を採集せり冬間は郡内各地に極めて普通のものなり、渡來期は前種より
稍早く十月廿八日 (大正七年) 頃にして去期は詳かならざれど前種に比し稍遅るゝものゝ如し夏季は隣郡秩父地方へ移行するも少数

のものは本郡内の山地に残留し蕃殖を営むものゝ如し、本種と前種との雌は近似し居りて遠距離より觀察する時は誤る事なきを保せずされど翼面に注意せば一目判明する事を得べし本種に於ては所謂ダンゴシヨイ即ち白班一個を認め得ればなり鳴聲もkata-kataの鳴くは同じけれど本種は又「ク」なる遠距離に響く清澄なる聲を發するに反し前種は「ク」の鈍き濁音を發するに過ぎず。

(48) *Leothurus akahige* (Temm.) ク ヲ ト リ

方言 ク ヲ

精明村附近の山地(六年六月十二日)及び高麗村新堀山(七年四月廿九日)の兩回本種の特有なる嘯聲を聞きたるを最早例とす夏季は山地附近にては見聞する事あれどもあまり多からざるものゝ如し、川越町、飯能町等にて籠飼せらるるものを見たり。

附記 尙本郡内にコルリ(*Troglodytes aedon*)も産する由なれど目撃せる事無きを以て確言する事あたはず。

※(49) *Turdus curvis* Temm. ク ロ ツ ゲ ミ

高麗村(六年五月二日)にて雄鳥一羽を採集す同所新堀山(七年四月廿五日)にて梟鵝類の餌食となりたるらしき個體分散せる雄鳥一羽を目撃せり前後兩回以外に見たる事なし恐らく「渡り」の途路のものたるべし、されど隣郡秩父には極めて普通なる由。

※(50) *Turdus poliochrous* Gm. シ ロ ハ ラ

方言 シ ロ ヲ バ ラ、 チ ヲ ウ マ ン (共に高麗村)

高麗村(七年一月廿日、三月四日)にて二羽を採集せり、來去期は詳かならず秋季は見たる事なく春季は少數のものを見る事を得

※(51) *Turdus chrysolaus* Temm. ア カ ハ ラ

方言 ア カ ヲ バ ラ、 コ ノ ハ ヲ カ ヘ シ (共に高麗村)

高麗川村(七年一月廿日)にて一羽、高麗村(七年一月廿二日、五月二日)にて二羽を採集す冬季より春季に掛けて稀ならずツグミ程多からざれども前種よりは明かに多し初鳴期は四月三十日(大正七年)を識るのみ本種の嘯聲の一節は *kyoro kyoro tse tse* の間ゆゑにして最初の二音は非常に遠隔の地に達する程のものにして後の二音は小音にしてムクドリに類似すれども該鳥程濁音なら

す本種は前種と共に未明時に農家の藁屋根に發生する所の昆蟲の蛹(幼虫?)を喰はんにて屋上に集り藁を搔搦して砂からざる被害を興ふ、夏季は見たる事なし。

※(52) *Turdus naumanni* Temm.

ハチジャウツグミ

方言 アカツグミ(川越町——稀に)

川角村(年月不明)にて獲られたる標本一個を川越町にて購入せり同町附近にても甚だ稀に獲らるゝ事あるに過ぎず、此郡を遁じて一般に稀少なるものなるべし。

※(53) *Turdus annuus* Temm.

ツグミ

方言 チョウマン

高麗村(六年十一月三十日、十二月廿三日、七年一月十日)にて三羽を採集す冬間は郡内各地に極めて普通のものなり來去期は詳かならざれど十月十五日に既に渡來せるものあり四月三十日(大正七年)に見たるは最晩例なりとす(高麗村)

附記

本種の學名は從來 *T. fuscatus* Pall. 1827を用ひたるも最近の學說に従ふ時は該名は *Citrala montana fuscata* (Mocking Thrush) シモノニ

ム中に *Turdus fuscatus* Vieill., 1808 として附せられたるものあるを以て Dusky Thrush (ツグミ)の方には *Turdus annuus* Temm. 1821 を用ふべきものなりと謂ふ(Lins, V. I. VI, 1918, p. 238)

※(54) *Geothlypis dauma aureus* (Holandree)

トラツグミ

方言 ヒョーソウ(高麗村)

高麗村(七年三月三日)にて一羽を採集す同所附近にては晩秋より初春に到るの間稀に見る所のものなり夏季は全く見る事なし。

※(55) *Cyanoptila cyanomelana* (Temm.)

オホルリ

方言 ルリ

高麗村新堀山(六年五月廿日、六月六日、七年五月一日)にて三羽を採集せり夏季は西部の山地附近に稀ならず四月下旬以後渡來

するも去期は詳かならず高麗村に於ける渡來最早日は六年度には五月一日、七年度には四月廿四日の兩回各一羽の雄鳥を目撃せるにあり飯能町附近は高麗村より稍早きものゝ如く四月十日頃（大正七年）雄鳥渡來せりと聞く一般に鶺鴒の雌鳥は雄鳥より遅れて渡來するものゝ如し、本種は本郡内にて蕃殖する事確實なるべきも余等は未だ巢卵を發見せし事なし。

※(56) *Zantopygia narisissima narisissima* (Temm.) キ ヒ タ キ

方言 オーシンツク(♂) バカッチョ(♀) (共に高麗村)

高麗村（六年五月十一日—十五日、十月廿五日、七年四月廿五日、廿九日）にて六羽を採集す、西部の山地附近には四月中下旬渡來し夏季は一時見えざるも秋季再び見る事を得、渡來最早日として四月十四日（大正六年）一雄鳥の鳴聲を聞きたるは四月廿二日（大正七年）に同じく一雄鳥の鳴聲を聞きたる二例あるのみ十一月廿四日（大正六年）一雄鳥を見たるは去期の最晩例なりとす本種の渡來後は山地附近到る所に彼の特種の聲を聞く即ち *piyo piyo piyo piyo* の續け鳴くもの尙他に *o-shin-tsuk-tsuk* *o-shin-tsuk* を續け鳴くもの二様にあり後者は蟬類中のツクツクボウシ (*Cosmogasteria opulifera*) の聲に類似し殆んど誤る程なるも季節の早きに過ぐるに尙又發音の少しく異りて二音目の *shin* の他の音に比し稍大音なる點に依りて區別する事を得、本種は又秋季山椒の實を好んで喰ふ少數のものは本郡内にて蕃殖するなるべし。

(57) *Ascoriae latipostis* (RAPPIES) コサメヒタキ

方言 バカッチョ (飯能町)

中春の候渡來し山地附近に暫し見る事を得れども夏季は見えざる高麗村に於ける渡來最早例としては四月廿九日（大正六年）に見たる雄一羽と四月廿三日（大正七年）に見たる二羽とを識る飯能町にては稍之より早きものゝ如く四月廿一日（大正七年）に二羽を目撃せり恐らく同日渡來せるものなるべし本郡内にて蕃殖の有無詳かならず。

※(58) *Tachyura atricapilla orientalis* (JOUY) サンクウツテウ

方言 サンコドリ (高麗村—稀に)

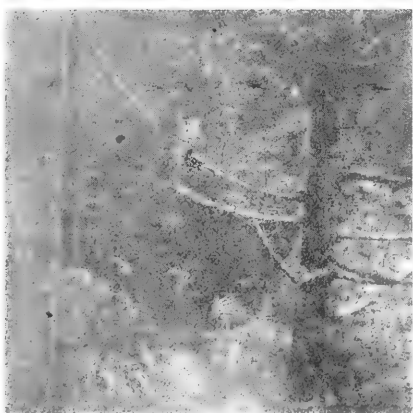
高麗村新堀山（六年五月廿四日、六月廿九日、七年五月十九日にて長尾の雄鳥三羽を採集せり、中春渡來し各所の林中に特有の鳴聲を聞く事を得れど旬日ならずして山地附近に移行し蕃殖を營む雛の孵育後間も無く山中深く入るもの、如し高麗村に於ける渡來最早日は五月廿四日（大正六年）に雄鳥二羽を見たるも五月十九日（大正七年）雄鳥一羽と六月四日（大正七年）雌鳥一羽を日撃せる三例あるのみ、飯能町にては稍早く大正七年度には五月上旬渡來を見たる由、高麗村附近の山地にては六月上旬以後構築するもの

サンクワテウの巢
落葉樹に構築せる實例（高麗村）



第廿八圖

サンクワテウの廢巢
常綠樹に構築せる實例（高麗村）



第廿九圖

は不定にして四尺以上二丈四―五尺に達する事あり「本朝食鑑」に巢を營む事鞠の如く綴るに馬尾を以てす口を兩端に開きて長尾をして自由ならしむ一方より入て一方に出る其性慧敏なりとあれども余等の發見せるものの中にはかゝるもの無く皆球形に近き杯状をなせるものにして兩端に巢口を開かず只他鳥に最も多く見らるる形狀のもののみなり、雌鳥の抱卵中求餌の爲に巢内より出づるや

稀ならざるが如く間々廢巢を見る事を得（第廿九圖）、産卵例として六年七月二日午前九時より構築に着手し同四日午前完成五日より九日に至る間に四卵を産したる一例を識るのみ營巢材料は檜の樹皮を細く割きたるものにて巢形を構し内部に棕櫚の毛、毛髮等を敷き外部には樹苔を蜘蛛糸其他昆虫幼虫の繭糸等を以て纏絡す、外面若くは下面より見る時は一見樹瘤の如し構築樹として檜杉等の常綠樹及樅其他の落葉樹何れにも見る事を得（第廿八圖）高度

雄鳥の一時之に代りて抱卵をなし居るを見る事あり雛の巢立後は間も無く附近に見えずなる。

※(59) *Hypisipetes amatoris amatoris* (Temm.) ヒョドリ

方言 ヒョー、ヒョードリ

高麗村(六年二月九日、四月十二日、四月十五日)にて三羽を採集せり中秋より中春に到るの間各地に極めて普通のものたり高麗村附近の山地にては少數の蕃殖するものあるべく五月一日(大正六年)及五月二日(大正七年)の兩度食餌を運ぶ雌雄のものを目撃せり夏季は隣郡秩父地方に移行するもの、如し渡來最早日として十月三日(大正七年)を識るのみ。

※(60) *Aethya japonica japonica* T.&S. タヒバリ

高麗村(六年四月九日、十一月廿一日)にて二羽を採集す尙他に高麗川村、毛呂村、越生町、飯能町、川越町、芳野村、坂戸町、勝呂村等にて見たり本種は十月中下旬以後郡内各地の河邊、水田等に極めて普通のものたり去期は詳かならざれど五月一日(大正六年)頃なるべし。

Aethya sp. タヒバリの類

飯能町中山(七年四月廿一日)にて疑なき本種のもの一羽を目撃せり乾きたる田面を歩し居るを數間内に近接し尙双眼鏡を用ひて觀察せしに體の上面灰鼠色、喉部黒味を帯びしものにして下面の色彩、飛翔時の鳴聲、飛行の狀態其他はタヒバリと殆ど同じ、異種なるべしと想考すれども採集せざりしものなれば前述の事實のみを茲に附記するに止めたり。

※(61) *Aethya trivialis maculatus* Jerdon キヒバリ

方言 ヤマヒバリ、ヤマスマメ(共に高麗村——稀に)

高麗村(七年二月十四日)にて一羽を採集す飯能町、精明村等にも見たり本種の渡來期は詳かならざれども前種より稍遅るゝものなるが如し森林中には稀ならず殊に松樹林を好むが如し去期は前種より尙遅れ五月上旬頃なれど高麗新堀山にては六月十七日(大正七年)一羽を見たる事あり恐らく西部の山地にては少數のもの、蕃殖を營む事はあり得べしと信ず、初鳴日として四月廿五日

(大正七年)を識るのみ。

(62) *Motacilla alba lugens* KIRRIEY ハクセキレイ

高麗村高麗川河原(六年十月三十日)にて幼羽のもの一羽を目撃せり西部に於ては該時以外に本亞種を見たる事なしされど東部に於ては恐らく冬間少數のものを見る事あるべし。

※(63) *Motacilla grandis* SHARPE セグロセキレイ

高麗村(七年一月廿日、二月七日)にて二羽の成鳥を採集せり郡内各地の河邊に極めて普通のものにして四季を通じて定住せり河原の石間、蛇籠、橋材の間隙等に藁、楡皮、棕櫚の毛、毛髪其他の諸物を以て構築し三、六卵を産す、高麗川河原に於て数回卵雛を發見せり(六年四月三十日孵化後約十日の雛二羽無精卵一個在中の一巢、五月九日四卵在中の一巢、同十一日孵出後約五日の雛五羽在中の一巢、同十二日六卵在中の一巢、同廿一日四卵在中の一巢、七年六月四日二卵在中の一巢——最後のものは産卵途中のものなるべし)入間川原、越邊川原等にて蕃殖するものある由。

※(64) *Budytes cinerea melanope* (PARR.) キセキレイ

方言 前種と共に單にセキレイ又はケツフリオカメ(高麗村)

高麗村(六年四月八日、五月廿一日、七年五月二日)にて四羽を採集せり、飯能町、精明村、元加治村、高萩村、坂戸町、高麗川村、川越町、芳野村其他にても目撃せり郡内各地の水邊に極めて普通のものたり四月、六月、屋上、水邊等に構築すれども就中農家の藁屋根に椀大の窩を穿ちて營巢する事最も多し蕃殖期には人家稠密せる所に多く見受くれど該期を過ぐれば其附近に暫し見えなくなるは育雛上必然の手段たるべし、卵巢の發見日として六年四月廿七日完成に近き廢巢一個を雛内より同五月六日農家の屋上より六卵ある一巢の二例あるのみ前例は非常に珍らしき事にて村落中の縣道に面したる杉の籬外地上四尺程の個所に營みたるものなり、本種の雄鳥は三月下旬に到る時は喉部黑色に變ず而して腹面の黄色の濃度も増加す。

附記 本亞種の學名を従來 *B. boarula melanope* = *Motacilla boarula melanope* PARR. を用ひたるも最近の學說に従ふ時は *Motacilla boarula* なる

名は *Motacilla flava* 群に用ふべきものにして *Grey wagtail* (キセキレイの原種) に *M. cf. erci Tunstall, 1771* を用ふべしと謂ふ (This, Vol. VI, p. 233) 依て其亞種たるキセキレイの學名も前掲の如く變更せり。

※(65) *Flandra avrensis japonica* T. & S. ヒ バ リ

高麗村(六年六月十一日)にて一羽を採集す郡内各所の耕地(殊に平野に於ける)荒野、河原の草生地等に極めて普通のものにして四月上中旬小麦畑、荒野の叢間等に營巢産卵す、卵雛を發見せしは六年四月廿七日抱卵半を過ぎたる一腹四卵を七年四月廿一日孵化後約一週間經過の一雛を無精卵三個在中の一巢の二例あるのみ、小麦畑に營巢するものによりては初期のものは多く麥株の根部に巢端の地表を平面となる程度に構するも晩期のものには麥莖の地表より稍高き個所に構巢する事あるを見る、本種雄鳥は多く空中に於て囀するは既知の事實なれども稀には河原畑等の地上若くは桑株上に棲り居る事あり、郡内各所に籠飼せらるるもの尠からず。

※(66) *Picus anokera anokera* Temm. ア ナ ゲ ラ

川越町にて本郡産のもの一羽の標本を購入せり高麗村地内にも獲たるものある由なれども余等は未だ見たる事なし、他のケラ類に比して最も尠きものなるべし。

※(67) *Ignipicus kizuki sedohuni* Hartert コ ゲ ラ

方言 キネズミ、オケラ (共に高麗村——兩ながら甚だ稀に用ひらるるに過ぎず)

高麗村新堀山(六年十二月三日、七年一月廿日、二月十四日)にて五羽を採集せり西部の山地附近にても晩秋より冬間稀に見る所のものにして來去期等も極めて不確實のものたり、一般にケラ類の通有性たる双棲は本種に於て特に著しく毎回必ず雄雌二羽のものを見受く未だ單獨のものを見たる事なし、ケラ類中最も普通のものにして主として蟻を食し居る事多し、一般にケラ類は銃聲を恐れざるものなるが如くかゝる特種のものにはヤマガラ、タケガラス等あり皆共に啄木性の鳥類たるを以て或は啄木性も聽神經さは何等かの關係あるにはあらざる歟を想考す。

※(68) *Dryobates leucotos suberivris* Steud.

オホアカゲラ

高麗村山口山（六年十二月二日）にて雄幼羽のもの一羽を採集せり、頭部紅色にして體黑白斑なるケラ類は山地附近にては間々見
る事ある由なれど本種なるか次種なるか詳かならず。

(69) *Dryobates minor japonicus* (Steud.)

アカゲラ

高麗村（七年三月十九日）にて雄雌二羽を自撃せり、高麗川村平澤山（七年二月廿日）にて見たる一羽は遠かりしかは斷言するを得
ざれども前種にはあらずして本種らしく見受けられたり、恐らく誤りあらざるべしと信ず。

附記 本郡内にてはケラ類を一般にキツ、キ又は單にケラと稱する事多し。

(70) *Micropus pacificus pacificus* (Laym.)

アマツバメ

方言 カリガネ

春秋の兩季中は空中を飛翔し居るものを郡内各地にて見らるゝ所なり高麗村、高麗川村、飯能町、川越町、霞ヶ關村、芳野村其他
東上、武藏野兩鐵道沿線附近等にて目撃せり、晴天にも見るも曇りたる日には殊に多數のものゝ群飛する實例あり、本種の休止する
の場所は大凡一定し居れり即ち峯上若くは壁上にある所のあまり細枝の繁生せざる高木にして多くは老松なり本種及次種は誤て地
上に下降するが如き事ある時は再び飛翔するの困難なるものゝ如し稀に山中の地上に旬旬し飛び得ざるものあるを見るかゝる時は
該鳥を空間高く投げ上ぐる時は平常に復し活氣に飛び去るを見る即ち高所の高木に棲止場所を撰ぶの原因も此邊より出づるものな
らん歟、聞く所に依れば嘗て高麗村清流なる山壁に營巢せし事ある由、本種の渡來最早例としては六年四月八日三羽を見たるこ七年
四月十七日一羽を目撃せるこの二例あるのみ六年四月廿九日午後二時高麗村に數十のもの一列となりて渡來し忽ち散開して終日附
近の空中を飛翔し居たるも翌朝は一影だにも無き奇現象を目撃せる實例あり四月下旬以後五月中旬に至るの間多數を見受くれき以
後は一時見えざる九月下旬以後十月中旬の間再見受くれき後は全く見るを得ざるに到る。

(71) *Chactura caudicincta caudicincta* (Laym.)

ハリチアマツバメ

方言 ハリヲツバメ (川越町)、カリガネ

高麗村、飯能町、川越町、霞ヶ關村等にて見たり木種の來期は詳かならざるも五月下旬に目撃せし事あり去期は前種より一箇月遅れ十一月廿六日(大正六年)高麗村を通過せる一群を最晩例となす十月下旬より十一月中旬に到るの間稀ならざるも前種程大群をなす事少くして數羽以上十數羽位の群を見る事多し(前種は往々五―六十羽若くは其以上の群をなす事あり)本種は前種より低空を飛行する事多く頭上數尺を羽音鋭く過ぐる事ありカザキリなる方言は前種にはあらで本種に附せられしにはあらざる歟、されどカザドリは疑なく前種の方言なり。

※(72) *Caprimulgus indicus joluba* T.A.S. ヨ タ カ

高麗村(六年六月九日、同十二日、十一月廿一日)にて三羽、精明村(六年六月十二日)にて一羽を採集せり、夏季は郡内各地に稀ならず晝間は森林中に潜み薄暮より夜間に掛け田畑、村落附近に出現し、盛に昆虫類を採食す本種は又毛虫をも喰ふものゝ如し、林中、屋上等に棲りて *eyoro eyoro eyoro eyoro* ヲ續け鳴く高麗村附近にては「ヨタカが味噌を搯る」と稱す尙山中等にて晝間 *em em em* と發聲する事あり是を「ヨタカの呻き」と謂ふ。來去期早晚例としては五月十七日及十一月廿一日(六年度高麗村に於ける觀察)を識るのみ、本郡内にて蕃殖するなるべしと信ずれど未だ卵雛を發見せし事なし。

(73) *Asio flammeus flammeus* (PONTOPPIDAN) コ ミ 、 ヅ ク

(74) *Asio otus otus* (L.) ト ラ フ ゅ ク

方言 トラミ、ヅク(川越町——兩種を混稱す)

川越町にて同地附近にて獲られたりと謂ふ兩種の標本を見たり、後者は高麗村地内にも産するものゝ如し、一般に前種の方稀なりと聞く。

(75) *Strix uralensis japonica* (CLARK) エゾフクロウ(新稱)

本州産フクロウは二亞種となす方可なるべし、一は北海道及び本州北部に産するものにして從來和命無きを以て新にエゾフクロウ

ミ命名せり、他は本州中部以南に分布するものにして舊和名を其儘用ふる事ミせり本郡内には上記兩亞種を産する事確實なり即ち本郡は南北兩亞種の分布境界地なるものゝ如し而して次亞種より本亞種——エゾフクロウの方普通のものなり、東吾野産の標品一個を飯能町にて見、越生町上野にて獲たる標品一羽を同所にて見たり高麗村にては間々見るものにして夜間鳴聲を聞く事稀ならず數年前同村新堀にて産卵育雛せし事ある由因に次種は高麗村にては未だ見たる事なし。

(76) *Salix virensis hondoensis* (CLARK) フククロウ

方言 ゴヘイ(越生町) フクロ(共に前亞種と混稱す)

越生町上野にて同所附近にて獲られたりミ謂ふ標品一羽を檢するを得たり前亞種に比し一體に赤味を帯び體型少しく小型なるの感あり本郡内にては前亞種より餘程尠きものなるが如し。

※(77) *Ninox scutulata scutulata* (Raffles) アチバツク

方言 タクッポ、ボウツク(共に高麗村——後者は稀に用ひらるゝに過ぎず) ヨシコ(越生町) アチバミ、ツク(川越町——甚だ稀に)

高麗村(六年五月廿日)にて一羽を採集す西部山地附近にては晩春より初夏に掛けて本種の鳴聲を聞く事殆んミ毎夜なり同所にて七年四月廿三日夜最初の發聲を聞きたり恐らく同日若くは其前日に渡來せしならん、高麗村地内にては間々蕃殖するものある由。

附記 アチバツクの鳴聲は *ockpo ockpo* と軽く聞ゆるものにして越生町の方言に *accat* を付し語尾を稍引き延したるが如きものなり、然るに茲にボーボードリ(高麗村方言)なるものありアチバツクの渡來の前後より發聲する所にして異種なりとも謂ひ又同種なりとも聞く高麗村にては兩鳴聲に各別の方言ありて異種と認むるもの多し余等も同じく異種ならんと想像すれども後者は何種に宛つべきやを斷言するに難し、記して識者の御垂教を乞ふ因にボーボードリなるものは其名の如く *too too* と二節づゝ鳴くもあまり長く引かずして二節にて約一秒に滿たざるものなり。

※(78) *Otus bakaonota scintorques* T.A.S. オホコノハヅク

方言 ミ、ヅク

高麗村（七年二月十八日）にて一羽を採集せり本郡内各所に稀ならざるものゝ如けれど夜鳥なるを以てあまりに目撃せず高麗村附近にては夜間に間々彼の *Chalcophaps indica indica* を聞く事あり後者は冬間のみに聞く所のものなり、恐らく本郡内にて蕃殖するものあるべし。

附記 川越町附近にては稀に前種よりも小型なる虹彩の淡黄色なるツクの類の獲らるゝ事ある由而して方言をコックと稱すと、該種はコノハヅク (*Otus japonicus japonicus* T.S.S.) なる事は殆んど疑なきも未見のものなるを以て茲に附記するに止めたり。

※(79) *Ceryle lugubris lugubris* (Gm.) ヤ ヲ ヤ ヲ

方言 カノコシウビン（川越町、飯能町、越生町）

高麗村なる高麗川（七年十二月廿四日）にて一羽を採集せり同地に同月廿二日初めて渡來せるものにして該鳥以外に同種のものを見たる事なし飯能町にては同町附近飯能川（年不明一月）産なる一標品を見たり越生町附近にも産する由而して何れも冬間のみに見らるゝものなり云ふ。

※(80) *Alcedo ispida bengalensis* Gm. カ ハ セ ム

方言 ヒービン、シュービン、ソナ（皆共に高麗村——後二者は稀に用ひらるに過ぎず）

高麗村なる高麗川（六年十一月廿一日、十二月一日——廿一日）にて六羽、芳野村伊佐沼（六年十一月一日）にて一羽を採集す、荒川入間川、越邊川、高麗川、伊佐沼其他其所の水邊に極めて普通のものたり各所に於て蕃殖するものゝ如く高麗川村、元加治村等にて本種の巢穴を目撃し飯能町、越生町、川越町、芳野村等にて蕃殖したる事實を聞き高麗村にては採卵せり（七年五月廿四日に新鮮なる四卵、六月廿日同じく新鮮なる四卵）本種は蕃殖期に入るや河流に面せる土壁、或は山腹の土壁、堤防等に二尺五寸乃至三尺の深さの巢坑を掘る巢孔の直径約二寸五分、坑道の構造は孔口より約一尺五寸程は稍上方に向ひ其以上は少しく下方に傾斜し五寸餘にして廣所に達す該個所は徑五寸内外にして高さも坑道に比し倍以上あり此中央に魚骨の綿状となりたるものを少しく敷き内部を窩状となして産卵するを常とす間々異例ありて直孔となさざるもの、魚骨を敷かざるもの等もあるが如し。巢坑は毎年新に掘るものなる

が如く雄雌交々作業に従事するを見る。尙眞巢坑の附近に偽巢坑並に作業初日程度の凹所をも多数に見受くる處なるも如何なる事に利するやは詳かにせず、本種の雌雄間の區別點は下嘴に橙赤部あるが雌鳥にして雄鳥は上嘴と同色なり對比する時は頭部の斑紋、脊面其他の色彩等にて判別に難からず。

附記 本邦産鳥類の巢と卵には本種の卵色を光澤ある白色と記しあれども恐らくそは殻色なるべく内容のある新鮮なる卵の色彩は光澤ある微紅白色を呈し内容を除きたる時は光澤ある陶白色 (Chinese White) となる。

(81) *Halcyon coromanda major* T.&S. アカセウビン

方言 トウガラシセウビン (越生町、川越町) ミヅホシドリ (高麗村)

高麗村 (六年七月) にて數回目撃せり山地及溪間等に出現するも甚だ稀なり同村内にて夜間土藏の白壁下に墜死し居りたるものなりと謂ふ一標本を見たり越生町附近の山地にても夏季稀に見る事ある由。

※(82) *Cuculus optatus optatus* Gould ツ、ドリ

方言 ムシバミ (高麗村——稀に) ポーポー (飯能町)

高麗村 (六年五月廿一日、七年四月廿四日) にて二羽を採集せり霞ヶ關村にても見たる事あり四月下旬以後渡來し各所の林中に特有なる「*Don*」を聞く事を得、渡來最早日として四月廿四日 (大正七年) を識るのみ初鳴期は渡來日と同じかるべく終鳴期は十月一日 (大正七年) を識れど去期終鳴期同日なるやは斷言する事を得ず、七年度の渡來最早日に本種の囀聲を聞きたり最初はサンクワウテウの如くに *ko, ko, ko* を發し次いで鶉科のオホルリ若くはサメヒタキの如き聲にて續け末に到りてはアラジの囀聲に極似せるものにして音調は高からざれども中々美音なりき余等は杜鵑類の囀音を發する事あるを初めて識りたるなり。

(83) *Cuculus canorus telephonus* Hume ク、クコウ

方言 カツホウ (高麗村) ? クイキ (高麗村——方言?)

五月上中旬以後は郡内各所の林中に本種の鳴聲を聞く事を得、大正六年度には五月十四日最早渡來者あり翌七年は數日早かりしも

の如し本種の渡來は夜間なるべく毎例未明より初聲を聞く、高麗村地内モズの構巢する事多き所に本種の盛に出没するを見るを以て恐らく同所附近に産卵する事あるべしと想考す二羽(恐らく雌雄なるべし)の従列飛行をも間々目撃する所なり。

附記 方言中に記したるクイキなるものに就て村老より左の如く聞きたり即ち該種は巢を營む事なくして他鳥の巢内に産し以て他鳥をして育雛なきしむと、而して營巢なりやと反問せしに營巢に容るゝは杜鵑なりと謂ひしかばクイキなるものはクソクコウ、ツ、ドリ何れかのものたるべし。

(84) *Cuculus intermedius intermedius* Vahl. ホト、ギス

方言 ボトツッキッチョ(高麗村、入間川村)ボトツッキッタ、チャフコウドリ、ホッチョ(後三者は稀に用ひらる)

四月中旬以後稀に本種の鳴聲を聞く事あり西部の山地附近にては晝間も聞く事を得、高麗村に於ける大正六年度の初鳴日は四月十五日夜にして翌七年度は五月十八日夜なりとす恐らく渡來日は之に伴はざるべし、本郡内にて本種の卵雛を獲たるものあるを聞かざれど西部山地附近に親不孝鳥なる方言あるより推考すれば或は産卵するものもあるが如し。

※(85) *Streptopelia turtur orientalis* (LATH.) キジバト

方言 ハト(本種に對しドバトをドバと稱す)

鶴ヶ島村(六年十一月廿六日)高麗村(七年二月十三日)にて各一羽を採集せり本郡内到的所に稀ならずされど群棲する事なく二羽若くは一羽のものを見る事多し、高麗村にて蕃殖する事ある由西部山地附近にては蕃殖するもの尠からざるべし。

※(86) *Sterna sinensis* GM. コアジサシ

方言 カモメ(芳野村伊佐沼)アイサシ(川越町)

芳野村伊佐沼(明治四十二年四月)にて獲られたる一標品を川越町にて購入す、同沼附近には四―五月の候群來する事ある由

※(87) *Gygis alba kintzai* HARTER シロアジサシ

芳野村伊佐沼(明治四十年五月?)にて獲られし一標品を川越町にて購求せり。

(88) *Chirocephalus ridibundus ridibundus* (L.) ユリカモメ

方言 カモメ (荒川附近、川越町)

大正六年十月一日暴雨後の増水せる高麗川(高麗村新堀)に本種三羽飛來せるを見たり西部にては該時以外に目撃せる事なし東境なる荒川附近にては間々下流方面より飛來せるを見る。

※(89) *Psorittacus capensis capensis* (L.) タ マ シ キ

大家村(七年二月七日)にて一羽を採集す、川越町にて同地附近にて獲られたる一標品を見たり、水田地方には稀ならざるべし。

※(90) *Sceloporus rusticola rusticola* L. ヤ マ シ キ

高麗村(七年二月一日)にて一羽を採集す越生町(六年十二月廿四日)、高麗川村等の山地にても目撃せり、冬間は郡内各所の山地、雑木林等に見るもあまり多からざるものゝ如し、高麗村地内にて雑木林中より飛出し雑木の細枝へ一時棲止せしを見たる事あり嘗て粗山は相模に於て杉の横枝に棲れる本種を見し事ありかゝる例は他の本邦産なる田鵲亞科(*Sceloporus*)に於ては全く見る事なし。

※(91) *Neospiza solitaria japonica* (Bonap.) ア ナ シ キ

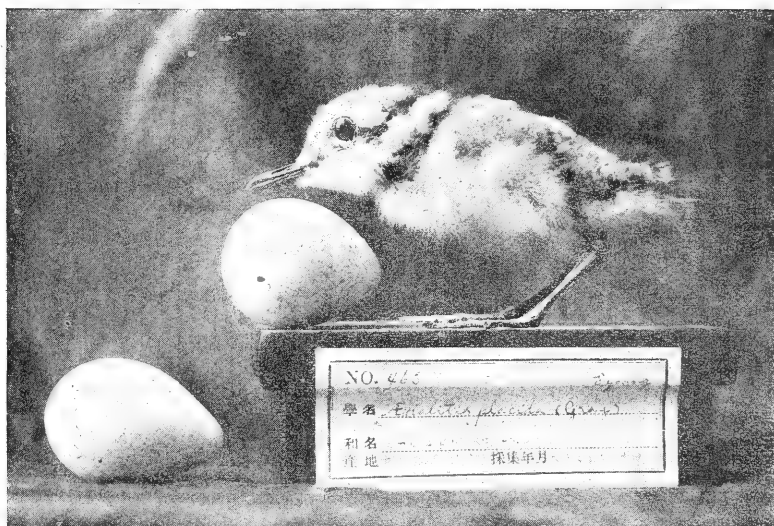
高麗村(六年十一月廿九日)高麗川村(七年二月一日)にて各一羽を採集せり西部山地附近にては冬間少数のものを見る事あり多くは單獨のものゝ山間の水田附近に下れるを見るも稀には平地の水田、川岸等にて見る事あり、採集せる二羽は共に雄鳥にして尾羽は各廿枚なり兩鳥の測定を記せば

全長二九九、三〇一、嘴峯七〇、七四、翼一五二・五、一四七、尾七一、六八、跗蹠一九・五、三三(糞なり)ミズ。

※(92) *Gallinago gallinago unclaus* Hodgs. タ シ キ

芳野村伊佐沼(六年十一月一日)にて一羽を採集せり同所附近にては冬間稀ならず高麗川村多和日の水田にても目撃せり兩所は、歸り鳴りの季節に殊に多し、東部の水田地方は何所にても珍しからざるべし。

※(93) *Heteropygia acuminata* (Horsfield) ウ ヅ ラ シ キ



卵雛のリドチルカイ産原川麗高 圖 冊 第

りな大同個二てに爲がる居りなと斜はの方右どれ見く如ののもるあ小大に卵注

川越町附近(六年十月三十一日)にて獲られたる一羽を同町にて購求せり、同町附近にては小川、水田等に稀ならざる由

※(94) *Tringoides hypoleucis* (L.) イソシギ

高麗村高麗川河原(六年四月六日)にて一羽を採集す該時は三羽の一群を目撃せしが其後全く見たる事なし川越町附近、入間川河原等にては春秋兩季に獲らるゝ事ある由、恐らく「渡り」の途路に立寄るに過ぎざるべし、本種は川流に沿ひて *di-pi-di-pi* と続け十數音鳴きつゝ飛行し下降するやセキレイ類の如く尾を上下すれども其振り方は彼程速かならずして稍緩なり。

※(95) *Fregata aquila* (Gray) イカルチドリ

方言 カハチ(高麗村、飯能町、坂戸町)

高麗村高麗川附近(六年四月、五月、六月、十一月、十二月、七年二月)にて十六羽、坂戸町越邊川河原(六年十一月廿五日)にて一羽を採集せり、本種は越邊、入間、高麗、飯能の諸川の河原に極めて普通のものにして蕃殖するもの尠からず、高麗河原にては四月十日前後より産卵し五月中旬に到るも尙卵を見る事あれき多くは四月中旬―五月上旬なり、卵雛を數回採集せり(六年四月廿六日)四卵、五月上旬三卵、同九日一雛、七年四月廿日四卵)河原の稍高き砂地に徑三寸深さ一寸程

の杯狀の凹所を造り産卵す附近に細かき小砂礫ある事もあれど特に小砂礫を敷くが如き事無し稀には二三の蘂を横たふるを見る事あり産卵個所の附近に同形なる凹所を數多見受くるも同一の親鳥の所作にして産卵以外に如何なる必要あるや了解に苦しむ、綿羽の幼鳥の色彩はコチドリ幼鳥に極似す而して該幼鳥は孵化後間も無く砂上及礫間を疾走するに到る他物の近接せるを識るや頭脚を縮め鳥體に觸るゝも尙石の如し、人之を指端にて撮む時初めて兩脚を動かし逃走せん事を企つ舊に復せしむるや再び石の如く掌上に置くも尙同じ又、指端を以て顛覆せしむるや反顛舊復「起上りこほし」に似たり、本種は四季定住せるものにして夏季は一番づゝになり河原に見受くる處にして雛の成育するに到て數羽の一群となり秋季よりは田畑に下降する事多し而して常に地上に停止する時も飛翔しつゝある時も *pyoi pyoi* に發聲するも歩行中は決して鳴く事なし二月初旬より *pyoi* の他に飛び立つ時の *みまこ、みまこ、みまこ……… piy-piy-piy-piy-piy-piy pio-pipi pio-pipi pio-pipi* にも發聲し夏夜は殊に盛にして終夜之を聞くも寒氣到れば休止し再び *pyoi* のみづゝなる。

(96) *Charadrius dominicus fulvus* Gm. ム ナ グ ロ

方言 アイグロ(川越町)

川越町附近(六年十月三十一日)にて獲られたるもの多數を同町にて見たり聞く所に依れば春秋兩季には同町附近の水田中に群來するもの稀ならざる由。

※(97) *Varellus varellus* (L.) タ ゲ リ

方言 クロケリ(川越町) ケツグロ(高麗村、高麗川村)

川越町(六年十一月二日) 大家村(七年二月十六日)にて各一羽を採集す芳野村(大正五年十月下旬)産の一標品を購入せり、本郡東部及东北部の水田附近にては冬間大群を見る事ありて往々百羽以上を算する事あり、高麗川村、高麗村(六年五月十九日、同廿一日、十一月一日)にても二羽以上數羽の群を目撃せり一村老に依れば高麗村にては毎年春秋の兩季にのみ見受くるものなりと謂ふ。

※(98) *Microsarcoptis cinereus* (BLYTH) ケ リ

芳野村(大正元年)産の一標品を川越町にて購入せり、川越町附近(七年十二月中旬)にて獲られし死鳥一羽を東京魚河岸にて見たり、川越町にて聞く所に依れば前種に比し甚だ稀なるもの、由。

附記 川越町附近にてはクサシギ(*Helodromas oerophilus* (L.))、キアシ、ギ(*Heteractitis incanus brevipes* (VIEILL.))、アチアシ、ギ(方言カネシギ)

(*Gallus nebularia* (GÜNNER)) 等の獲らるゝ事あり、又「歸り鳴」の季節には大久保村、南畑村附近の田面にキヤウシヨシギ(方言キヨウシヨウ) (*Arremonia interpres odhensis* (BROOKHAM)) のムナグロと混じて見られ尙稀にはツルシギ(*Tringa fusca* (L.)) をも見る事ありと川越町の捕鳥家より聞きたるが實見せし事なきものなるを以て附記するに止めたり。

(99) *Gallinula chloropus parvifrons* BLYTH バ ン

川越町四ツ谷(六年十一月二日)の水田中にて數羽を目撃せり、晩春初夏の候には同地附近及芳野村伊佐沼にて蕃殖するもの尠からざる由。

※(100) *Porzana fusca erythrorhynchos* F.&S. ヒ ク 井 ナ

方言 ク井ナ(芳野村、高麗村) グイナ(高麗村)

高麗村(七年八月三日)にて一卵を採集す稻株に架巢せるものなり恐らく産卵途中のものたるべし、同村内(年不明七月?八月?)にて獲たりと謂ふ一標品を見たり、芳野村伊佐沼にては夏季蕃殖するもの尠からざる由。

※(101) *Rallus aquaticus indicus* (BLYTH) ク 井 ナ

高麗川村(七年二月三日)にて一羽を採集す、高麗村附近にても小溝の岸邊等に本種らしき足跡を見る事稀ならず東部水田地方には冬間極めて普通のものなりと。

※(102) *Coturnix coturnix japonica* F.&S. ウ ツ ラ

高麗村(六年十二月十八日)にて一羽を採集せり、同村内にては河原の叢間、水田附近、山腹の草生地等に極めて少數のものを見

るに過ぎず越生町上野山(六年十二月廿四日)にても一羽を見た。同地にてもあまり多からざる由、而して川角村、川越町附近にては秋季より冬季に掛けかなり普通のものなりと聞く、來去期は詳かならず、恐らく本郡内にては蕃殖せざるべし。

※(103) *Cathophastacus saemurini scintillans* (Gounn) ヤマドリ

方言 ヤマキジ(高麗村——甚だ稀に)

越生町上野山(六年十二月廿四日)にて一羽を採集し、山根村(大正元年三月)東吾野村(大正七年二月?)兩所産の二標品を購入せり、本郡西部及南部(?)の山地には稀ならず四月下旬以後前記各所にて蕃殖するもの尠からざるべし、高麗村の山地にて採卵せる數例あり

大正六年四月下旬 高麗村清流にて一卵

長徑 四八耗、短徑 三五耗、

大正七年四月廿九日 高麗村新堀にて六卵

長徑 四六一四七耗、短徑 三四・五―三五・五耗、

同年五月一日 高麗村山口にて六卵

長徑 四七一四八耗、短徑 三五・五―三六耗、

而して上述のものは共に産卵途中なるべし一日一卵として計算する時は産卵初日は四月廿四日若くは其前日たるべし依りて考察するに本郡内に於ける本種の産卵は四月下旬以後なるべく雛の孵化期は五月下旬以後ならん歟。

郡内各所にて本種の標本を檢したる結果本郡内には黒田理學士の分類せられたるウスアカヤマドリミヤマドリとの兩型を認め得たり而して十餘個の標本中ウスアカヤマドリを認めらるるもの飯能町矢嵐、高麗村地内兩所産の二標品のみ、(恐らく南部の山地に産するものは多く該型なるべし)即ち本郡はヤマドリ類に於てもフクロウ類と同じく南北兩型を見るの地なり共に南方型の尠きも亦本郡南部を一部の鳥類(或は哺乳類も然るか?)に於ける南北兩型の分布境界線の通ぜるを立證するに足るべし。

附記 本種は従来雉屬 (*Phasianus*) に編入せられしものなるが上記の屬—鶉雉屬 (*Tringophasianus*) として分つ方可なるべしと信ず即ち本屬の雄鳥は腰羽の袋狀ならざる事、頭部に耳狀羽を全く認めざる事等を以て雉屬との差異點となすにあり。

※(104) *Phasianus versicolor versicolor* Vieill. ｷ ｲ

高萩村 (六年十一月一日) にて本種雄鳥の尾羽を採集す、大家村 (七年一月) にても獲られし事あるを聞く高麗村にて畑中の雜木林より飛出せる一雌鳥を目撃せるも明に本種なりとは斷言し難し、越生町附近、飯能町等にも産する由標本となりたるものは川越町、飯能町其他各所にて多數を見たり、本種は前種の如くに山地のみに偏せずして郡内全部に廣く分布するものゝ如しされど西部の山地中には全く見ざる所もあるべし、本郡内にて疑ひ無く蕃殖す。

※(105) *Falco aeston insignis* (Garr.) コチ ヨウゲンボウ

芳野村 (大正五年十二月) 産の一標品を川越町にて購求、高麗村新堀山 (六年二月九日) にても目撃せる事あり。

(106) *Falco tinnunculus japonica* T. & S. チョウゲンボウ

飯能町 (七年四月廿七日) の桑畑に下降し居りたるもの一羽は疑なく本種なるべく (該鳥は脊部は明に淡栗色なりき) 尙高麗村附近にても本種らしき鷹類を數回目撃せり、川越町附近にても稀に獲らるゝ事ある由。

(107) *Falco peregrinus calurus* LATH. ハヤブサ

名細村平塚 (年月不明) にて獲られたる一標品を川越町にて見たり。

附記 川越町にて聞きたる所に依れば山根村附近の山地にてハヤブサに極似せる小型の鷹類の獲らるゝ事あり方言ヤマハヤブサと稱すと、それは恐らくチヨハヤブサ (*Falco subuteo japonensis* Burt.) なるべしと信ずれど見たる事なきを以て附記するに止めたり (該種はチヨウゲンボウ、コチ ヨウゲンボウ兩種とは全く異ると謂ふ)。

(108) *Milvus ater melanotis* (T. & S.) ト

方言 トンビ、トービ (共に甚だ稀)

高麗村・飯能町等にて飛翔せるものを見る事あるも次種に比して妙きものゝ如し川越町附近にも見る事ありと謂ふ。

(109) *Turdus luteo-plumbeus* Hodgs. ノスリ

方言 マグソツタカ(高麗村、川越町、越生町)

高麗村にては四季稀ならず川越町にて同地附近にて獲られたる本種の標品四―五を見たり、恐らく本郡内にて蕃殖する事あるべし。

(110) *Spizacus nipponensis* Hodgs. クマタカ

方言 クマダカ(越生町——稀に)

高麗村新堀山(六年六月)にて二羽を目撃せり、越生町上野山にても稀に見る所のものなりと聞く隣郡秩父山地より飛來するものなるべし、因に秩父郡内にては間々見受るものなる由。

(111) *Halictus alvictus brooksi* (HARR) ナジロワシ

鶴瀬村(六年十二月十一日或は十二日?)にて獲られたる幼羽の雄の一標品を川越町にて見たり、各部の測定左の如し

嘴峯四六・五、會合線六八、翼長六〇三、尾長三一九・五、跗蹠八一耗(該標品は翼を張れる本製なれば翼長は確實とは言ひ難し)。

(112) *Acipiter nisus nisus* (L.) ハイタカ

方言 ハヤブサ(飯能町——誤稱)

高麗村にて數回目撃せり、飯能町、川越町等にて標本並に剥皮をかなり多數に見受けたり本郡産鷹類中のノスリに次ぐの種たるべし、恐らく蕃殖するものもあり得べしと信ず。

(113) ? *Astur palumbus* (L.) オホタカ?

高麗村高岡山(七年五月二日)にて本種らしき一羽の鷹類を目撃せり甚だ低く前方より飛び來りしかば色彩はかなり悉しく見る事を得たり即ち胸腹部に細き鷹斑を無數に見受けたるに依り且體型の前種より餘程大なりし等を以て本種なるべしと考察す。

(114) *Circus erythrinus* (L.) チウヒ

川越町附近にて獲られたる一標品を同町にて見たり、秋季は同地附近の水田上を飛翔し居るものを見る事稀ならざる由、西部にては未だ目撃せる事なし。

(115) *Anserinae* ガン類

高麗村、芳野村等にては秋冬の候高空を雁行し過ぐる群を間々見受けれど未だ下降せる事あるを識らず、遠き爲種名を決定する事を得ざれども恐らくマガン (*Anser albifrons* (Scop.)) 及びヒシクヒ屬 (*Melanonyx*) の兩種を含めるならんことを考察する所なり。

(116) *Fa. galericulata* (L.) ナシドリ

方言 ナシ、ナシガモ (共に前掲種名と併びてかなり廣く分布せらるゝ方言なり)

飯能町飯能川にて獲られたる雄鳥の一標品を同町にて見、川越町附近の産なる雌雄の標品を川越町にて見たり大家村、霞ヶ關村等にも獲られたる事あり。

(117) *Anas zonorhynchos* SWINH. カルガモ

方言 チガモ (芳野村伊佐沼) ? ガリ (同所)

芳野村伊佐沼 (六年六月中旬、十一月一日及二日) にて見たり、夏季は同沼にて蕃殖するもの尠からざる由。

(118) *Anas platyrhynchos platyrhynchos* L. マガモ

方言 アチクビ、ホンガモ (稀に)

芳野村伊佐沼及川越町四谷 (六年十一月一日及二日) にて數羽づゝを見受けたり、川越町にて賣買せらるゝ所の前種並びに本種は前記兩所にて捕獲せられたるもの多き由、而して冬間は鴨類中最も多きものなり。

(119) *Nettion crecca crecca* (L.) コガモ

高麗村にては冬間稀に山中の小池、高麗川の深淵等に見る事あり、川越町附近にては冬間は普通なるものゝ由。

(120) *Puffin acuta* (L.) ナガバモ

方言 ナガ(川越町)

霞ヶ關村(六年十一月一日)にて雄雌二羽の飛翔せるを目撃せり、川越町附近にても獲らるゝ事稀ならずと聞く。

(121) *Spatula clypeata* (L.) ハシビロガモ

川越町附近の産なる本種雄鳥の一標品を同町にて見る。

附記 川越町にて聞きたる所に依れば同町附近にてはアジ、アカッシラ、ヨシアカ(共に同町方言)なる鴨類の獲らるゝ事ある由、而してアジはトモエガモ(*Nation form sui* (GEOFF))なるべくアカッシラはヒドリガモ(*Mareca penelope* (L.))なるべし然るに最後者ヨシアカなるものは何種の鴨を指すものか詳かならず、前述のものも産する事は確實なるべきも見ざるものなれば茲に附記するに止む。

(122) *Botaurus stellaris stellaris* (L.) サンカノゴ井

南畑村東大久保(大正六年十二月)にて獲られしと謂ふ一標品を川越町にて見たり、該鳥は採集時蘆生地内にて嘴端を上空に向け佇立し居りたるなりと、嘗て靱山も神奈川縣下にてかゝる姿型をなし居るものを見たる事あり該時のものは周圍の蘆葦の風に從ひて動搖するに擬して同じく嘴端並に頭頸部を動かし居りたり。

※(123) *Arctia sinensis* (Gm.) ヨシゴ井

芳野村伊佐沼(六年十一月一日)にて幼羽のもの一羽を採集す、同所及川越町四谷(六年十一月一日及二日)にて少数づゝを目撃せり、恐らく伊佐沼にては蕃殖するなるべし。

(124) *Butorides japonica campestris* (SCHENCK) サ、ゴ井

高麗村(七年五月二日)田面澤村(七年十月一日)にて各一羽を目撃せり、川越町附近にては稀ならずと山恐らく木郡内にて蕃殖するものあらん。

※(125) *Torsakius goisagi* (TEMM.) ミゾゴ井

高麗村新堀山（七年四月廿七日）にて一羽を採集す、川角村（大正五年四月）産の一標品を川越町より購求、川越町附近にては夏季水田間の小溝等に間々見る事ありと謂ふ。高麗村の山地にては四月十日（大正七年）最早渡來者を目撃せり、同月廿四日夜間本種の鳴音を調査すべく登山し下の如き結果を得たり、川口法學士高著「ビッテルン？」（大正六年）に記載せられたる本種の鳴音はウォーフ、ウォーフとあれども余等の聞きたるは *Ihon ght. Ihon ghtu* を五六聲繰り返へし鳴くを聞きしのみ、ウォーフなる音を一回も

ミゾゴキ雄鳥
山腹の地上を歩み居るもの（高麗村）



第 卅 一 圖

ミゾゴキ雄鳥
地上六尺程の横枝に棲し観察者に警戒せるの姿（高麗村）



第 卅 二 圖

る草生地及水濕地にてミ、ズ、カニの類等の多き所に數日間を過ごせしもの、如く該鳥の食餌となりし残りし残物と認めらるる所のカニ類の甲殻、脚部等所々に散布せられ又該鳥の棲架と覺しき樹下には排泄物を糞からず見受く排泄物は極めて良く消化したる粘土狀の塊（樹上より一個所にのみ墜泄せしに依り地上にて塊となる）並に糞類に多く見る所の白葉色を呈せるものを混じ居れり恐らく

聞かず而して余等の聞きたるものは後に到りて雄成鳥なる事確實となりたるを以て川口氏の聞かれたるウォーフなるは雌の鳴音にはあらざりしか？ 雄鳥の鳴音の *ihon* は喉音にして非常に大聲——恰も鼓の大音の如くにして響きあり、*gah* は引音にして小——キジバトの引音の稍大なる位の程度なりき、同月廿九日晝間、新堀山（高麗村）にて雄雌二羽のものを目撃せり檜の密林中なる溪間——水量甚だ少く兩岸は稍緩勾配な

粘土状のものはミ、ズを食したる時のものたるべく白堊色のものはカニ類其他のものミ消化残物たるべしと考察す、上述の點は川口氏の調査せられたるミゾゴ井（所謂ピツテルン？）の野生時の食餌ミ全く一致せる所なりと謂ふべし、本種は恐らく本郡内にて蕃殖するものあるべしと考察すれども未だ廢棄だに發見する事を待す。

※(126) *Nycticorax nycticorax nycticorax* (L.) ゴ井 サギ

方言 ゴイッツギ(高麗村)？バカサギ(芳野村伊佐沼)

高麗村（六年四月十四日、十一月廿二日——廿七日、十二月廿日）にて六羽を採集せり、高麗川村、飯能町、川越町其他本郡内各所に極めて普通のものにして薄暮、月夜、曉明等に飛鳴を聞く事稀ならず、闇夜はあまりに鳴かざるものゝ如しされど全く聞かざるにはあらず比較的尠き事は確實なり）恐らく本郡内にて蕃殖するもの尠からざるべし。

(127) *Fedea cinerea japonica* CLARK ア ラ サ ギ

高麗村（六年十一月十四日及十七日）に雄雌二羽のもの飛來せり該時以外には見たる事なし、芳野村産の一標品を川越町にて見たり、本郡内には多からざるものゝ如し。

(128) *Garrulus garrulus garrulus* (L.) コ サ ギ

方言 シ ラ サ ギ

飯能町（六年五月十五日）高麗村（六年十一月中旬）にて各回雄雌二羽のものを目撃せり、古谷村（六年六月中旬）にては多数群集し田面に下降せるを見たり、芳野村伊佐沼にては夏季は非常に多くして獵期開始頃（十月中旬）迄は普通に見得れど開獵後は殆んど姿を見ざるに到る由、而して蕃殖場は芳野村鴨田なる禁獵區内なりと謂ふ。

附記 川越町にて聞きたる處に依れば同地附近に飛來する白色なる鸞類はダイサギ、チウダイサギ、クロハシ、コサギ、セウセウサギ一名イツ

パイ等ある由、ダイサギなるものは恐らくコモ、シロ（*Herodias alba himalayensis* (Cuv.))なるべくチウダイサギはチウサギ（*Mesophox j. m. tr. nevada* (WAGLER))に相當すべくクロハシ、コサギの兩名稱は前掲種 *Garrulus g. garrulus* の老幼の差なるべく、而してセウセウサギ即ちアマサギ（*Tringa*

coromantia (Bodd.) にイッパイなる方言ある點に留意せらるべし。

(129) *Phalacrocorax* sp. ウ の 類

方言 ウドリ (高麗村)

大家村 (六年八月) 高麗村 (七年八月六日及八日) 兩村共に高麗川にて目撃せり西部山地附近にては夏季のみ見受くる所のものなる由なれば或は該地にて蕃殖するものあらん歟、カハツ (*Ph. carbo sinensis* (Shaw & Nodd.)) シヤツ (*Ph. capillatus* (T.&S.)) 兩種中なすべきも毎回遠距離より觀望せしに過ぎざれば種名を明言する事あたはず、

※(130) *Phalacrocorax Bodd. sp.* アカチネツタイテウ

芳野村伊佐沼 (明治四十年五月) に暴風の折一羽を獲、而して該鳥より抜きたりと謂ふ中央尾羽一枚を川越町小牧某氏より贈られたり。

※(131) *Puffinus glacialis glapishca Stearn.* ハナジロフルマカモメ

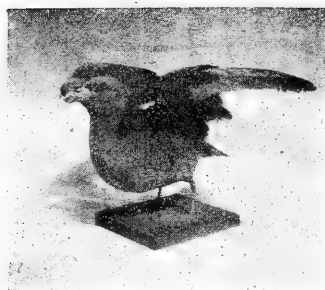
山田村産
ハナジロフルマカモメ

山田村なる入間川 (大正七年一月十二日(?)) にて獲られたる一標品を川越町より購求す、採集當時の様を聞くに該鳥は單獨にて河流に降り居りたるものなる由、而して採集日の以前に暴風雨等の事なかりしに、本島内に於て本種の獲られたる事は之を以て嚙矢にす (詳細は動物學雜誌二十九卷六月號にあり)。

(132) *Tachypus fauvelis fauvelis (Tunst.)* カイツブリ

方言 モグリッチョ (高麗村)

芳野村伊佐沼及鴨田 (六年十一月一日及二日) 坂戸町附近越邊川 (六年十一月廿五日) 等にて目撃せり、高麗村高麗川には稀に來る事ある由にて同川にて獲られしと謂ふ一標品を見たり、伊佐沼にては四季を通じて見受くるものなりと聞く恐らく同沼にて蕃殖するものあるは疑なき處なる



第 卅 三 圖

べし。

附記 以上の各種の他に尙一種本郡内にて採集せられたるあり、されど本邦産鳥類にあらざるの種なるは確實にして各所に籠飼せらるゝもの稀ならざれば籠鳥の逸したるものと看做す方可なるべし即ち左記の種なり

※ *Phalacrocorax (Gm.)*

アカクサイニコ

福原村中臺（大正六年十月廿二日）にて狩獵家に依り獲られたる一標品を川越町より購求す、翌日完全なるものにして共に先端に籠飼に依りて當然成るべき摩損等は尠しも見る事を得ず。

以上にて今回調査せる大略を終りたれど嘗て本郡内入間川にて採集せられたるクロトキ (*Turdus minorophis (Linn.)*) の一標品の東京上野帝室博物館に所藏せらるゝを識る（帝國博物館 A3600）されど同館の標本には採集年月等明記無く且標本も大分古き事等より推考すれば本郡内に往時は渡來せるものもありたるは疑なき處なるも現今にては恐らく渡來する事あらざるべしと信じ茲には除き置く事せり。

イッパイサギに就て（本號一九八一—一九九頁參照）

一種頂に長毛なき者をダイサギと云、白鶴子なり、又尋常の鷺に大小あり、大なる者をシマメグリ本草と云、一名ガラリサギ同上形大にして脚黑色なり、小なる者をコサギ同上と云、形小にして脚黄色なり、最小なる者を一盃サギ本朝と云、肉少く僅一盃に滿べきなり、一種アマサギは一名狸狸サギ岳州ナハシロサギ、形常鷺より微小く、頭頂黄赤色、後には白色に變ず、是臨桂雜識に、有黄毛如鷺、背有黄毛と云ものなり。

（古事類苑動物部六一四頁より）



講 話

「チャージュボン」運動の回顧

獸醫學士 内田清之助 譯

左に掲ぐる所は數年前必要ありて Report of the National Association of Audubon Society 1904 中の一編 History of the Audubon Movement を摘譯したりしものなるが 米國に於ける鳥類保護運動の一端を知るに足るものあるを以て本誌の餘白を乞ふて掲載することとせり 但し此報告は十數年前の出版に係り其後「チャージュボン」協會の事業は益發展しつゝあるを以て該協會の現況を知らんとせば最近の報告に依りて本編を増補するの必要あること勿論なれども 本誌の切期日の切迫せると且其暇なきにより不本意ながら一二の補註を加へたる外凡て舊稿の儘何等訂正を施さず茲に掲ぐるごととせり 讀者之を諒せられんことを乞ふ

北米合衆國民は千八百八十三年頃既に同國に鳥類濫獲の現象あるを認め之を憂慮したりしは當時の雜誌「森林と河川」誌上に左の如き評論あるを以て知るを得べし曰く「我國に産する小禽類の保護問題は近年次第に公衆の注意を喚起するに至れり」云

尙數ヶ月後の同誌は「燕を保護せよ」なる論說中に「目下羽毛商は婦人帽裝飾の目的に燕の翼羽及胸毛を買入れつゝあるを以て羽毛商を得意とする剥製家は之が爲巨萬の燕を捕殺す」この記事を掲げたり

翌年即ち千八百八十四年には世人の鳥類濫獲に對し注目する傾向益顯著なるに至りしこゝ多數の新聞紙が次の標題の如き論說に其紙面を割きし事實に徴し知るを得べし

例へば「小禽の保護」なる題下には數年來小禽の數の著しく減少せるの事實を指摘し或は「鳴禽の保護」「鳴禽の保存」等の題下には法律を設けて合衆國産の鳴禽及食蟲鳥類の獵獲を禁止するの必要を論じ又「鳴禽類の減少」なる題下にはボストンの剝製商が頻に廣告して米國産鳥類を蒐集しつゝあるの事實を挙げ且羽毛商の店頭には七十五仙の正札を附せる數百羽の黃鳥を日撃せるを記せりアジサシ類の減少も亦此時代より始まりたるものにてフロリダよりマサチューセツツに至る地方に於て盛に捕獲され之が爲め此優雅なる鳥類の大部は流行の犠牲たるに至れり今日吾人の目撃するアジサシ類は皆て無數に棲息せるものゝ僅に一部の敗殘者にして漸く我「ナージュボン」會の保護により安全に其生を送り繁殖し得たるものとす

亞米利加鳥學協會の事業

千八百八十四年七月三十日 紐育の亞米利加博物館に於て開催せられたる亞米利加鳥學協會の第二回年會にてブルースター氏は鳥類特に海岸に棲息するアジサシ類が羽毛商の爲に捕殺せらるゝを憂ひ其濫獲の統計が如何に驚くべきものなるかを指摘し北米の鳥類及其卵保護の目的を以て六名の委員を任命せん事を提議せり而して此委員會は他の斯の如き目的を有する諸協會と提携して其目的を達すべきを論ぜり此提案は賛成せられ六名の委員より成れる委員會の設立を見るに至れり

生物學課の設立

上述せる鳥學協會年會の結果は委員會の設立の外尙一の豫期せざりし良好なる結果を得たり即ち鳥學協會は合衆國會及加奈太政府に對し鳥學上の問題に就きて之を補佐し尙必要なる事件を提議するの目的を以て一の委員會を設立せり此委員會が國家に對する補助は頗大にして遂に農務省より年々五千弗の補助を受ける事となり從て農務省は鳥學協會委員中其の事業を監視すべき職員を設くべきを要求し其結果千八百八十五年四月鳥學協會委員會は直にメリアム氏を撰定し助手としてフヒツシャー氏を任命せり此新施設は今日合衆國農務省の一課として存する生物學課の端緒を開きたるものにして現任課長はメリアム氏にして其幕下には現時合衆國に

著名なる鳥學者數名を以て組織さる(註合衆國農務省生物課は其後漸次擴張せられ現今は生物調査局に稱せられ局長(Biologist-in-Chief)次長(Acting chief in absence of chief)以下十數人の技術官は何れも著明なる應用鳥學專家にして北米鳥類の調査並に保護に關し多大の業績を擧げつゝあり)

此農務省中の重要な一課たる生物學課の事業は逐年其價値を認められ來れり而して其の事業は一面には教育的方面に活動す「ナージュボン」會は上述の關係により常に此生物學課とは密接の關係を保持し來り其の重要な事業及考案は凡て生物學課に謀りたる後之を採用す例へば「ナージュボン」會より發行せる教育用小冊子の如きは其主要部は生物學課の供給せる「鳥類食物の研究」によれるものなり

初期の法規

ニュージャーシ州にては千八百八十五年既にグリッグ氏によりて提出せられたる法案即夜鷹・鏝刺・鷗・鳴禽・食蟲鳥類(獵鳥を除く)の捕獲を禁ずる法律を布けり之恐らく鳥類に關する最初の法律なるべく之によりて獵鳥以外の鳥類は凡て保護せらるゝに至れり食用としての鳴禽

千八百八十五年センネット氏は「森林と河川」雜誌誌上に「市場の所見」と題しノーフォーク市場にて發賣さるゝ非獵鳥の目錄を作れり之に依れば當市場に提供さるゝ非獵鳥は二十六種に達し其名稱は駒鳥の一種・ミンソッパイ科の二種・連雀一種・雀科八種・鳩・鳥フクロウ等にして之等の鳥類は同市場十數軒の鳥店にて數百羽の多數に發賣せるを目撃せり云ふ此状態は現今と頗異なる所にして現時の市場にては鳴禽の發賣せらるゝもの絶無にして又州によりては獵鳥の發賣をも禁止せる所あり往時非常に多數の鳴禽を發賣せるニューオルレアンス市場の如きも現時は全く鳴禽の販賣を禁止せり之全くルジアナ州「ナージュボン」會の効績に歸すべきものとす

鳥類保護に關する亞米利加鳥學協會委員會

千八百八十五年十一月紐育に開會せる亞米利加鳥學協會總會に於て委員會長ブルースター氏は國產鳥類保護に關する委員會の決議

を報告せるが此報告は討議の結果頗重要なる問題と認められ飾羽用鳥類捕殺に對する輿論を喚起するの必要あることを議決せり。リアム博士の如きは此委員會の事業は鳥學協會の爲すべき最急務に屬すべきを認容せり。鳥類保護事業の活動の第一期中最旺盛なりしは千八百八十六年にして此年亞米利加鳥學委員會は雜誌「理學」の發行者及人道會々長の補助を得て「理學」百六十號附録として十六頁の冊子を出せり。此冊子は次で「亞米利加鳥學協會委員會報告第一號」として十萬部以上を印刷せり。此書の内容を擧れば次の如し

アレン氏「現時の合衆國に於る鳥類濫殺に就て」

ダッチャー氏「紐育市附近に於ける鳥類の濫殺に就て」

センネット氏「食用として鳥卵の濫獲」

チャプマン氏「鳥類と婦人帽」

論 說「鳥と農業の關係」

” ” 「鳥類に關する法規」

” ” 「鳥類の爲合衆國婦人に訴ふ」

鳥類及其卵巢の保護に對する法規なる亞米利加鳥學協會模範法規と稱するものは此小冊子によりて初めて其體を具へて世に公にせられたるものにして其後此模範法規は種々實驗の結果改良増補せられたるも要之其根本義に至りては千八百八十六年初めて起草せられたるものと異なる所なし

第一期「チージュボン」會の設立

現今の「チージュボン」會の前身たる第一期「チージュボン」會の設立に關し予は茲に當時の雜誌「森林と河川」の論說「チージュボン會」(千八百八十六年發行)の一説を引用せん

「世人は鳥類の羽毛を裝飾用に用ふる風習の厭ふべき事を容易に認むる能はず。法規は此未開なる風習を防止する力極めて少きものな

り然れども若し公衆が此風習の厭ふべきを感じるに至れば自然速に此惡風を一洗するに至るべく此個人的盡力は甚遅緩にして其良風の普及緩慢なりと雖遂には此目的を達するに至るものなり

十九世紀の前半ジョン・ジェームス・泰州ジュボン氏なる人あり多大の努力を以て國民に合衆國産鳥類に關する智識を普及せしむるに力めたり氏は繪畫に堪能にして鳥類の畫及其習性に關する著述を公にして専愛鳥の念を普及せしめたり

今茲に設立せんとする野生鳥類及其卵の保護を目的とせる會に命名するに當り氏の名を冠して「泰州ジュボン」會なる名稱を以てせんとする本會は何人とも雖鳥の保護の爲力を致さんとする者の入會を歓迎す而して其目的とする所は

- 一、食用以外の野生鳥類の捕殺を防止し
- 二、凡ての野生鳥類卵巢の捕獲を禁止し
- 三、裝飾用として羽毛の使用を防止す

にして此精神を普及せしむる爲吾人の事業を補助せんを欲する者は各地に特別なる支會を設立し得べし而して此支會には無代價を以て其地方に汎布する爲に本會發行の回報其他の印刷物を配布すべし本會の事業は凡て亞米利加鳥學協會委員會の計畫せる所を補助するものとす

一度本會設立の報傳はるや各地より歡迎の辭を「森林と河川」雜誌社に向け發送するもの頗多かりき千八百八十六年末には「泰州ジュボン」會は會員一萬六千人を有するに至れり

「泰州ジュボン」雜誌

「泰州ジュボン」雜誌は初めて千八百八十七年一月鳥類保護の機關雜誌として發行せられたり同年同月の「森林と河川」雜誌に曰く個人的の應答或回報等の方法は爾來「泰州ジュボン」會の用るし手段なるも其運動事業等の増加するに従ひ之等の方法は到底其必要を充すに足らず今や之か特別の機關雜誌發行の機運に際會せり

此「泰州ジュボン」雜誌は「森林と河川」雜誌發行者により出版され代價は一ヶ年五十仙の少額に過ず而して本誌の内容は教育的

の讀物及趣味ある鳥類に關する讀物を掲載し又每號「チージュボン」氏の原畫を複製せる著名なる鳥類の圖版及其種の解説を載せ又「チージュボン」氏の傳説其他鳥類の經濟上の關係及小兒の讀物たる通俗的鳥談を掲ぐ

此年五月には「チージュボン」會は會員の數約三萬人に及び七月末には三萬六千人八月に至りては約三萬八千四百人に達せり

第一期「チージュボン」運動の衰運

千八百八十八年に至り鳥類保護事業の大勢は急速に衰微し此問題に留意せる出版物漸く減少するに至れり當時の「森林と河川」雜誌は紐育に於ては法規の禁止あるにも係らず多數の鳴禽類が其春期移住期に際して捕殺せらるゝの事實を報せり又同誌十一月號の論説には次の如き評論あるを見る「本誌上に於て吾人は屢小禽の捕殺の如何に憂ふべきものなるかを細論せり又鳥類保護に關する諸法規は遺憾なく發布せられ之に關する學會は設立せられ會員は極力鳥類羽毛の裝飾用を用ふるの惡習を打破せんことを力めたり以上の如き盡力にも係らず都人は依然として其衣服を飾るに羽毛を用ふるを止めず婦人の髪飾は從來の如く小禽の諸部を使用し無數の鳥類の遺骸を婦人の頭上に認むるを得べし斯の如き状態は「チージュボン」會役員に對し打撃を與ふるものにして羽毛商の復興は「チージュボン」會の從來實施し來りたる事業の價值を少からず減少するものと云ふべし」

千八百八十八年十二月「チージュボン」雜誌は第二卷の末冊を出版して廢刊するの止むなきに至れり從て其鳥類保護に對する事業も中絶の非運に會せり又一方に亞米利加鳥學協會の事業を見るに之又「チージュボン」會と同様此時代に於て最不振の狀況にあり即同會年會は千八百八十八年第六次會を開き逐年開會し來れり雖會議は煩振はず只僅少の報告あるに止り千八百九十二年及九十三年の二回は何等の報告さへなし九十四年の總會には有名なるチャップマン氏會頭となり翌年十一月開催せられしも此年即千八百九十五年末には鳥類保護問題最沈滞を極め第一期活動の終期と稱すべき時代に達せり亞米利加鳥學協會々員は其光明を失ひ、羽毛を裝飾用に供する風俗は往時と等しく流行し法律の制裁も其發布當時と等しく些の効力なく加之「チージュボン」會は滅亡し「チージュボン」雜誌も亦再刊行する能はず鳥類保護の事業は全く絶望の淵に沈み嘗て千八百八十三年希望に充ちて計畫せられし本事業も僅に十二年の短生涯を以て終滅せざるを得ざるに至れり

今此鳥類保護運動が上述せる如き悲運に會せるの原因を考ふるに恐らく次の如き諸因に依れるものなるべし

一、此運動は單一に一學會により着手せられたる事

一、此運動に要する費用は全く他の目的に設立せられたる公會の負擔たりし事

一、本運動の範圍は他の補助なき個人或公會の事業としては餘りに弘大なりし事

一、本會の事業運動及其費用は全國諸州の協同的事业たるか或多數の人々の寄附に俟つに非ざれば到底行はれざる事加之當時にありては之を補助すべき法律及保護機關缺亡せる等の諸因によれる事明也

第二期即現在の「ナージュボン」會の起原

鳥類保護の第二期の活動は千八百九十六年一月マサチュセツツ州に於て「ナージュボン」會の設立せるに始まる之に次ぎて起りしはペンシルバニア州にして之等を始めとして急速の勢を以て漸次各州に及び現今にては三十七ヶの「ナージュボン」會の設立を見るに至れり之等の「ナージュボン」會は漸次良好の發達を遂げ合衆國各州の狩獵規則を整一ならしめんとする目的は漸次到達せられ又「ナージュボン」會の模範法規の行はるゝ所實に二十八州の多きに達せり

而して之等の「ナージュボン」會は何れも獵期の短縮春獵の禁止獵鳥輸出及販賣の禁止等合衆國內に於る獵鳥の減少を防止すべきあらゆる方法を講じつゝあり

尙上述の「ナージュボン」會の事業を補助する事多大なるは鳥學雜誌「バードローア」の發刊す此雜誌は現今第七卷（大正八年第二十卷發行）に達し合衆國內各州立「ナージュボン」會の間に鳥學上の新事實鳥類保護の方法手段等を交換すべき機關となり各州會の關係を密接ならしめ同時に官廳と學會若くは會員との連絡の機關たるものなり

テューヤー氏資金

千九百年の頃に至り世俗は再鷗、鰻刺等を裝飾に使用する流行盛となり羽毛商の供給は其需要を充す能はざるの盛況に達せり此時代にアボット、テューヤー氏は此警戒すべき事實を愛鳥家に訴へ繁殖期に於る海鳥の保護及此目的に従事する保護人の費用として用ふる

資金を募集せり氏は逐年此事業の爲に熱心に盡力し其結果は年々共に見るべきものあり現に昨歲此事業に従事する保護人全國に三十四人を見るに至れり

聯合委員會の設立

千九百年十一月鳥類保護運動を獎勵し其効果をして一層大ならしめん爲各州の「チージュボン」會聯合協議會をケンブリッジに於て開會せり此時指名せられたる委員會は千九百一年十一月紐育に於て開會せる會議に於て次の各項を報告せり

- 一、各州「チージュボン」會は聯合組織となす事なく各獨立を維持し置く事
- 二、然れども其効果をして一層大ならしむる目的を以て各州の「チージュボン」會凡て一致の步調を取るが爲次の方法を講ずる事
- 三、各州「チージュボン」會は亞米利加「チージュボン」會聯合委員會と稱する委員會に一人の委員を任命する事
- 四、各州委員は各州會に於て協議すべき事項を生じたるときは委員會に於て有利なりと認めたるときは其州會を代表建議し得べき事

五、年々商議會を開催する事

千九百一年以來聯合委員會は新「チージュボン」會の設立を獎勵し且基礎確立せざる新設「チージュボン」會に對して保護獎勵を與へ其他鳥獸保護官、狩獵諸法規及一般教育的事業を獎勵し加之各州會相互に意志交換の機關たらしむるに努力しつゝあり

千九百三年より中央會委員會は教育的の目的を以て挿圖入冊子の連續出版を開始せり

以上を以て「チージュボン」會報告の概要を紹介せるが次に尙参考の爲千九百十三年度に於ける同會會計報告を掲げ以て本稿を終らん

千九百十三年度中央「チージュボン」協會支出表

保護區に關する費用……………	一、八〇七	弗
アラスカ鳥類保護費……………	一、一九〇	九〇

狩獵鳥獸保護費……………一、二〇六一〇

白鷺保護費……………四三三七八

印刷費(雜誌 Bird Lore, 掛圖 有益鳥圖譜、教育用冊子等)……………九、九三四五六

鳥類愛護思想普及講話費……………二三二〇〇

及に關する諸費 幻燈に關する諸費……………一、〇八一六五

雜費……………一、八四三五三

兒童教育費……………五、七六五七〇

俸給及旅費……………一四、三五四一

通信費……………二、三一〇四二

雜費 事務所借賃……………一、二六〇〇〇

雜費……………三一四五八

計 四〇、七三三〇六

黃鳥九州に來るか (鳥六號六六頁參照)

〔此鳥東國には來らず、筑前領蛇島フロンシマに稀に來る、此鳥は朝鮮に近き地故なり、又陸州夜久鳥にもあり、桑椹熟する時のみ早朝に來る、柴鶴鴛とは異にして、大さ伯勞の如し、全身黃色、目は紅色を帯び、目の通り頸をめぐりて黒し……〕〔古事類苑動物部八一五頁より〕此鳥さへ宜敷……間々日本へ見へる、先年薩州山川湊の邊に大松とまり居て、松虫を取喰しを見たる也、何れも九州に渡る鳥なり、能く心掛くべし〔同八一六頁より〕



大分縣八坂地方の鳥類

上 忝 治

八坂地方は縣の東北に位置し西南には近く鹿鳴越、遠く由布、鶴見の諸峯を眺め、南方は日出、川崎の諸村を隔て、海に連なり東は東村、杵築町の二村に接して杵築港を扼し、北杵築村の波多方、岩屋の諸連山によりて北風を遮ぎらる、然して村の中央を貫流する八坂川の流域のみ僅かに平坦部を形成し其他はすべて丘陵起伏、豊州線鐵道は此村の一端を通ず、雖も地勢は終に山村と稱せざるべからず。

林野は到る處赤松黒松茂生し、社寺の境内には殊に常緑カシ類鬱蒼として景色疎野ならず、今山林の普通なる植物を舉ぐれば、忍冬科、茜草科、木犀科、石南科、胡頹子科、山茶科、冬青科、漆樹科、荳科、薔薇科、樟科、殼斗科、楊柳科、松杉科

等にして忍冬科のニンドウ、茜草科のクヰナシ、胡頹子科のグミの各種、冬青科の數種、漆樹科のハビ、薔薇科のノイバラ、等の果實に於ける、其他の花蜜に於ける鳥類の生息に幾分の關係あるなるべし。

氣候は西北に山を背負ひ、東南海に近きがため温和にして夏時に於て九十度(華氏)を上下し嚴寒の候と雖も四十度を降るこゝ稀なり、斯かれば冬季積雪三日に及ぶこゝもなく鳥類の餓に苦しむこゝ未だ曾て有らず、試に冬日身を山林特に松林中に運べば諸種の鳥類嬉々として、ヤニサシガメ類、ウラジカヒガラムシ類及マツケムシ等を捕食するを見るを得べし。

今左に貧しき觀察を以て該地方に最も普通に目撃し得べき種類に就きて順序もなく述べんごす。

1. *Passer montanus*

ス、メ

到る處に群棲す、苗代期に當つて糶を啄食するこゝ甚だしけれ共此期以後螟蛾及其幼虫を食する事、尙宅地附近の果樹の害虫を食する事甚大にして木種の功罪遽に斷ずべからざるものあり營業は多く人家の軒端なるがため草葺にては其軒屋根を損す是が爲にや一尺圍位の竹の三節位なるに一節に一ヶ宛孔を穿ちたるものを軒に挿し以て巢の代用に供せるを或る山間部にて見た

り、町家にてはコシアカツバメの巢を奪ふと猛烈なるものあり、

2. *Chloris sinica minor* コカハラヒワ

方言單にヒワミ呼ぶ、好みてゲンゲ、スゞメノテツボウの繁茂せる田圃に遊ぶ、晩春松林にて囀るゝ頻なり。

3. *Emberiza cioides ciopsis* ホ、ジロ

多數産す、終日囀りて止まず。

4. *Emberiza personata* アナジ

多産ならず、冬雪の日屢庭園、軒下等に來る。

5. *Pyrhula pyrrhula griseiventris* ウ ツ

春秋の二季山野に鳴聲を聞けども人里に近づくこと尠なし。

6. *Zosterops japonica* メ ジロ

夥多産す、椿、梅、等の花粉媒助者なり、冬季より春季には群をなして遊飛す、サカキの果實を嗜食す、常にエナガと俱に遊ぶ、蕃殖期には深山に入る、

7. *Spodiopsar cinereus* ムクドリ

8. *Corvus macrorhynchos japonensis* ハシブトガラス

9. *Corvus fungilegus pastinator* ミヤマガラス

極めて稀れなり。

10. *Acridula caudata trivirgata* エナガ

極めて多産、林野にては常にメジロと混じて群遊す、好みて毛虫類を食ふ、森林益鳥の尤たるものなり、此地方にて多數蕃殖す、方俗本種をシジウカラミ呼ぶ事あり。

11. *Larus major minor* シジウカラ

普通なり。

12. *Parus ater insularis* ヒガラ

13. *Lanius bucephalus* モ ズ

14. *Lanius cristatus superciliosus* アカモズ

モズは當地にて蕃殖す、モーズと發音す。

15. *Hirundo rustica gutturalis* ツバメ

16. *Hirundo daurica nipalensis* コシアカツバメ

前種は戸毎に來りコシアカツバメは町家に多し、普通二回は育雛すれ共三回は確かならず、彼の農家が苗代田に烏おごしこして枝張りたる竹を數本立つるは本種の爲には好適の休息場所なる物なれども近年漸く廢れたり、愛護の點より見て惜むべし、渡來期に就ては予の日誌によれば左の如し、但しツバメ種なり。

三月二十五日 (明治四十一年)

三月十日 (明治四十二年)

三月十九日 (明治四十四年)

三月二十三日 (明治四十五年)

三月十七日 (大正二年)

三月十一日 (大正三年)

三月二十二日 (大正四年)

然してコシアカツバメは本種より数日後れて来るを常とす、こ
ば記録なけれ共確言し得べし、去期はコシアカツバメの方晩し
同種が去期の近づく頃となれば屢高空にて旋回飛翔を試み而し
て何日ともなく影を失ふに至る。

コシアカツバメは該地方にてイワツバメト呼ぶ。

17. *Troglodytes fannigates* ミンサザイ

方言ミソチウと呼ぶ、普通なり。

18. *Regulus regulus japonensis* キクイタダキ

極めて稀なり。

19. *Horreites cantans* ウグイス

普通なり、メジロと俱に遊ぶを見受く、六月に入れば鳴聲絶つ。

20. *Turdus fuscutus* ツグミ

十二月に入りて普通見るを得べし、二月の候多数群をなして麥
圃に現はる。

21. *Turdus chrysolaus* アカハラ

稀に認め得。

22. *Ruficilla aurea* ジャウビタキ(方言ヒシカチ)

秋季現はれ来る忍冬の果實ウドの果實等を好みて食ふ屢鳴に逐
はる。

23. *Parsiger cyanurus* ルリビタキ

24. *Hemichelidon sibiriea* サメビタキ

25. *Cyanophila cyanomeniana* オホルリ

大正七年四月下旬里の小供幼鳥を捕へ来る。

26. *Hypsipetes amaurotis amaurotis* ヒヨドリ

秋より春にかけて人里近く来る、好みて椿の花密を吸ふ、晴雨
を論ぜず拂曉よりキーンと終日啼く、往々囀るこゝあり。

27. *Anthus maculatus* ビンズ井

28. *Motacilla alba ingens* ハクセキレイ

29. *Motacilla boarula melanop.* キセキレイ

大正七年度は九月十七日初めて見受く

30. *Motacilla alba japonica* セグロセキレイ

31. *Anthus spinoleta japonicus* タヒバリ

晩秋より群をなして刈取たる稻田に来る、一毛作田にては刈株
に在る蠅蟲、二毛作田にては動き出されたる螟蟲、稻象虫の幼蟲

及蜘蛛等を食ふ、斯かれば麥蒔に際し努めて人の近傍に集る。

32. *Alauda arvensis japonica* ヒバリ

蕃殖期は四月より五月が最も普通なり、主として麥田に構巢す

田植に際し雛の未だ巢立し得ぬ巢も往々あり、程度に繁疎の差

こそあれ天氣清朗の日中空に懸れる囀聲は四季とも聞かざるこ

となし。

33. *Lynggicus kizuki kizuki* キウシウコゲラ

本科のものは尙他に産すべきも目撃にては確かめ得ず。

34. *Cypselus pacificus* アマツバメ

本種は南端村地方にて飛翔せるを見たるのみ。

35. *Caprimulgus indicus jotaka* ヨタカ

春宵夏曉頻りに鳴きて諸鳥の膽を奪ふ、殊に夏月は朝疾く草刈

の子の眠りを覺すに限りなし。

36. *Strix uralensis fuscescens* キウシウフクロウ

冬より夏にかけて鳴聲を聞く一種悽愴の味を覺ゆ、方言小僧に

呼ぶ、其鳴聲を「コゾウトケトケ(又はトケトケトケ)小僧疾く

來い疾く來い」に譯し鳴聲甚だしき時は人死すに云ひ傳ふ。

37. *Halcyon pileata* ヤマセウビン

38. *Alcedo bengalensis* カハセミ

共にシヨロビに稱す。

39. *Cuculus optatus* ツツドリ

ホンホン鳥の呼ぶ。

40. *Cuculus poliocephalus* ホトトギス

41. *Turtur orientalis* キジバト

42. *Sphenocercus sieboldi* アラバト

43. *Scolopax rusticola* ヤマシギ

44. *Agialitis dubia curonius* コチドリ

45. *Haematopus ostralegus osculans* ミヤコドリ

八坂川の下流部に普通なり、コチドリの頻りに鳴くや哀愁の感

を強からしむ、(編輯者曰くミヤコドリも普通なるや)

46. *Porzana fusca erythrothorax* ヒクヒナ

夏曉鳴く事頻りなり、方言クロドリと呼ぶ、蓋し雛の羽毛黒け

ればなり。

47. *Coturnix coturnix japonica* ウヅラ

數に於て尠なけれ共山野に稀ならず。

48. *Phasianus versicolor* キジ

國東地方に近づくに従つて多く産す、未だ充分の觀察は成し得

ず。雖も白色の肩線を缺く事は確かなるが如し。

49. *Phasianus scutellans*

ヤマドリ

往年到る處に産したりしも近年獵獲盛んなるため深山にて稀れに獲ることあるのみ、因に本種の尾羽の黒焼したるものは小兒の耳疾に賞用さる、(編輯者曰く大分縣下にヤマドリは産せざる筈なり次の種のみならん)

50. *Phasianus soemmerringii*

アカヤマドリ

此地方にて近年見る事なし。

51. *Accipiter virgatus solaris*

ツノミ

52. *Milvus ater melanotos*

トビ

53. *Cygnus musicus*

オホハクテウ

大正八年一月二十日午後四時頃八坂村の北端に在る櫛羅司池にて十四五羽游泳しつゝあるを發見して同村の銃獵家工藤力氏に告げたるものあり、同氏は内三羽を射獲す、未だ曾て見たることなき珍奇のものにして、衆人歎賞す由つて同氏は暫らく街頭に掲げて一般人に觀覽せしめしむ云ふ、予の見たるものは次に記す一羽のみなりき。

羽毛全部乳白色、體長(嘴端より尾羽の末端まで)五尺、翼の擴張七尺六寸、嘴蜂三寸四分、上嘴は嘴端より鼻孔の少し基部まで黑色、其より基部は黃褐色、下嘴の下面は黃褐色、而して同色は圍眼部に及ぶ、脚は全部黑色、附蹠三寸七分、中趾の長さ五

寸四分を算したり、當時の體重三百匁、他の二羽は此より一羽は少しく大きく一羽は少しく小さかりきと云へり、三羽の内一羽は同村矢守熊次氏藏す、然して他二羽は如何に始末されたるや知らず、此頃の事にてや海濱の漁夫等も眼近く見たる事嘗つてなく唯稀れに群をなしたる大鳥上空を翔けるを目撃する事あれ共クルークルーこの鳴聲を聞き鶴かと思惟し居たりと話し合へり、同日は北風吹き荒みて天候險惡、午前中は雪さへ降りて温度は華氏四十度以下を指せり、一月二十六日は八坂川の下流部下河原の淵湛に二羽遊べるを見たるものありし。

54. *Puffinus fluvialis philippensis*

カイツブリ

先づ普通目略し得べきものは上記の如し、然して山峽に耕地散在するが故に隨處小なる池沼あり、加ふるに八坂川の河口部に近きを以て諸種の水禽類、海産鳥類等數多常棲又は渡來するものあるべきも此方面に就きて知る處無ければ後日に譲らん、唯銃獵の發達に伴れて大形獵鳥類が逐年數に於て減少するは何人も肯定せざるべからざる事なりとす(大正八年二月七日記す)

再び種子島の鳥類に就きて

荒木彦助

「鳥」第六號に於て「種子島の鶴及び附近の二三鳥類」を題し、其地に認められる特殊の鳥を紹介したるが、更に精確なる近年の實況を明白にし得たれば、訂正又は補遺の意味を以て寄稿す。鶴類は一昨年冬期に本島の北部にて、大隅海峡を擁する北種子村國上の大田なる田圃に、眞那鶴四羽の餌をあさるを見し者あり、南種子村葦永の田圃にも毎年、同種の渡るを例さす、併し其數は既報の如く、二―二羽づゝ、散在するに過ぎず。中種子村西海岸なる阿高磯の小沙漠に來るものは、多く鶴なるものゝ如し。既報に娯鶉させるは黒田長禮先生に因りて、印度三斑鶉なるを教示されたり、此種は大隅の佐多岬地方までも分布され居るを報じ來りぬ。葦永賣滿池に於けるは他の水禽を混するも主として鴨類にて、同村平山尋常小學校長今井田喜之助氏に調査を託したる處、九月下旬に渡り翌年二月下旬に去り、集合したる時は十萬位を觀察すとの事、一獵期の捕獲は一夜百羽内外とし僅に千五百羽位を出入す。又鴨を保護する爲め鷹を驅除す其數十羽位なりと云ふ。

鷓・千鳥類の方言其他

叔山徳太郎

黒田理學士高著「鷓・千鳥類圖説」に掲げ洩れの方言二―三を左に記す。

東京市場ではアチアシ、ギをカネシギと謂ひツルシギをアカアシ、ギ又はアカバネシギと呼ぶ、武州川越にもカネシギと謂ふ方言はあるが何種を指したものが詳でない、同じく東京市場でソリハシ、ギにソリキアシと謂ふ方言がある、之は普通のキアシ、ギに類似して居る點から出た語だと云ふ事はすぐ解る、勘察加西海岸の日本人漁夫は多く北海道の江差で羽後秋田附近の者が多いそれで彼等の用ひて居る語の内は兩所の何れかの方言である事は疑ない、ホウロクシギをオホシギと呼びチウシヤクシギ、チグロシギ等も一所にくるめてツルシギなどと呼んで居る、トウネンの事はマメシギと謂ふ、露語では一般に鷓類をクリークと呼び大きなものをホルシヨイ(大きい)クリーク(鷓)と云ひトウネンの如きものを(主としてトウネンのみ)マーリンキ(小さい)クリークと呼んで居る他の鷓類は唯クリークとばかり呼ぶがソリハシ、ギのみには特にベソチニクと云ふ語がある露語に暗い余には語原の所は詳でない。

武蔵國入間郡高麗村ではタゲリをケツグロと呼ぶ、古くからある語ださうで余は土地の古老から聞き識つた、下總松戸附近

鳥類名纂

脇山三彌

ではヤマシギの事をボツタシギと謂ふ、北海道の函館附近の狩獵家のヤブシギと呼んで居るものもヤマシギを指したものでらしい、尙同地でカミナリシギと呼ぶものがある、話を聞いて見るに春先―終獵の頃草藪の附近等から飛び出して空高く舞ひ上りゴロ／＼と聞ゆる様な音を發して急轉直下の降り方をする鵜類ださうでタシギでもなければヤマシギでもない云ふ、恐らくそれはアオシギだらうと思はれるけれど實物に接した事がないから斷言する事は出来兼ねる。

印旛沼附近ではクサシギの事をカハラシギと謂ふ、武州比企郡のカハラバンと同じ語原であらう(後者は鵜・千鳥類圖説に載つて居る)。川越附近でテウセンシギと謂ふのは確まは解らなけれぬイソシギを指したものと云ふ思はれる。

東京市場でメダイチドリと呼んで居るものは多くシロチドリ若くはイカルチドリを誤つて居る事が多い標本商もそれを其儘調べもせず拵いて仕舞ふらしい、京都ではイカルチドリをカモガハチドリとも呼ぶ東京隅田川に於ける都鳥の如きもので他の所では通用しない語らしい東都の都鳥對、京の加茂川千鳥は一方の見るに對する一方の聞くのであつて其間に兩地の人情も含まれて居て面白いと思ふ。

歌人問て曰く廓公とは何故と答て曰く鳴聲より來る *Urenku*

Kuhenku, Cuckoo, Cuckoo, Cuckoo 苟くもカクコウと發音する字ならば差支無かるべし曰く「センニウ」とは何で答に窮して曰く先入主となる予輩如何ともする能はず曰く鳴は何ぞ鳴は何ぞ三足鳥、四十陵、五位は如何と甚だ煩し即ち古書を探して左のノチトを作る漸次補綴せんと欲するなり

○ガン カリ(日本書紀)クロオトリ(伊勢守貞陸記)雁(本草)

○ヒシクヒ 大雁(古今著聞集)鴻(本草)菱を食ふにより菱喰

ひこ云ふは俗説ならん

○カモ カモ(日本書紀)マガモ(藻鹽草)コモ(萬葉)青羽鳥

(藏玉集)青頭雞(萬葉)アラクビ(雄のみ)ハタカカモ(雌のみ)川武家調味故實

み)川武家調味故實

○コガモ 小鴨(鷹百首)刁鴨(本草)

○オナガガモ 沉鳥(正字通)タカベ(倭名類聚鈔)(萬葉)

○アシカモ (土佐日記)葦鴨(萬葉)

○スマカモ スマ(八雲御抄)海中にあうて群り鳴く聲鈴の如

しと云ふ意義より來る

○アイザ アチサ(藻鹽草) アチ(萬葉) 秋紗, 秋沙(萬葉及八雲御抄)

○チシドリ チシ(萬葉) 瀟鷗(本草) 紫鷺(本草) 鷺鷥は紫色少く且つ小さし

○カイツブリ 鷗鷗(本草) ニホドリ(萬葉) ニホ(和名類聚鈔) 鷗(字鏡) ミホドリ(古事記) 二寶鳥(萬葉) 閑水鳥(假名文字遣) 鷗カイツブリ(塵添搥囊鈔)

○ウ クロトリ(土佐日記) 鷗鷗(本草) 鷗(續日本紀日本靈異記令義解) 水鳥(萬葉) シマツドリ(仙覺萬葉注釋)(日本紀私記) 鳥鳥(言塵集) 川鳥(言塵集)

○シギ シギ(三代實錄) 鷗(本草) 田鳥(和名鈔) 鳴(大和風土記) 鷗(塵添搥囊抄字典)

○クヒナ クヒナ(日本書紀)(本草和名) 秧雞(本草) 鷗(日本靈異記)

○バン 黒鳥(和名抄) クロトリ(倭名類聚鈔) 田雞(臺灣府志) コバンに充つ(百鳥圖) オホバ

○チドリ 千鳥(萬葉) 水喜鷗 オホチドリに充つ(百鳥圖) 鶺鴒

○山城風土紀)

○セキレイ 鶺鴒(毛詩鳥獸考) ニハクナグリ(和名鈔, 本草和名)

名) ニハタ、キ(本草類編夫木集) ツツナハヒ鳥(八雲御抄) トツキオシヘトリ(日本紀私記)(八雲御抄) イシタ、キ(言塵集) ムキマキ鳥(言塵集) イシクナキ(家中竹馬記) 稻負鳥(新撰萬葉集)

○トキ 紅鶴(本草) トキ(和名抄) 桃花鳥(日本書紀) 鶺鴒(延喜式) タウ(トウ)(新撰字鏡) 朱鷺(禽經) 唐の鳥(御隨身三上記)

○サギ サギ(和名類聚抄)(和名抄)(新撰字鏡)(曾我物語) シロサギ(新撰字鏡) シラサギ(平家物語)

○コサギ 小鷺(鷹百首)

○ダイサギ 大鷺(鷹百首) 白鶴子(本草)

○アマサギ(藻鹽草) 黄毛(臨桂雜識) アマ(八雲御抄) 青鷺(續日本紀) 青莊(本草) ミトサギ(倭名類聚鈔) 蒼鷺(和名類聚鈔) ミト(八雲御抄) アヲ(八雲御抄)

○ゴイサギ 旋目(本草) イヒ(倭名類聚鈔) 五位(平家物語) 延喜帝神仙苑に幸して六位を召して捕へしむ鳥の宣示に従ひて捕に就しは神妙なりて五位を授けて放つ

○ミゾゴイ 方目(本草) オスメドリ(和名類聚鈔) 白女鳥(扶桑略記) 護田鳥(本草)

○カサ、ギ (和名類聚鈔) 鶺鴒(詩經) 韓國鳥(塵添搥囊鈔)

○シヤクシギ サクナギ(新撰字鏡)

○カハセミ ソヒ(和名類聚鈔) 魚狗(本草魚唐禽經) ソニ(新撰字鏡) ソニトリ(古事記) セラヒ(源氏秘抄) 少微(塵添瑳鏡)

鈔) ソナ(言塵集) カホヨ鳥(言塵集)

○ヤマセミ 水乞鳥(夫木集) 狭衣(故木集) 翡翠(本草)

○ホト、ギス ホト、キス(萬葉 和名抄 字鏡等) 杜鵑(本草源平盛衰記) 霍公鳥(萬葉) 鸚鵡鳥(和名類聚鈔) シテノタオ

サ(源氏物語) 時鳥(和泉風土記) 沓手鳥(江談抄) 靴の代金

ご云ふ意なり神話的の長物語あり トキノ鳥(八雲御抄) ホ

トドリ(塵添瑳鏡鈔) 橘鳥(藏玉集) タラサ鳥(藻鹽草) 田の長

の意 五路鳥、草ツク鳥、賤鳥、田歌鳥、タソガレ鳥、イモ

セ鳥、早苗鳥、玉サカ鳥、鏡暮鳥、メヅラ鳥、ウツタ鳥、サ

クモ鳥、ユウカケ鳥、ウナヒコ鳥(皆、藻鹽草) 廓公(新撰字

鏡) 子規(紫桃軒雜綴) 子雉、蜀魂(神話的のもの) 鸚鳩、買鏡

(楊雄傳註)

○キツツキ 啄木鳥(本草) テラツ、キ(物部守屋の幽靈寺を滅

さんが爲に來る) 列鳥(爾雅) 都盧(爾雅) タクミ鳥(藻鹽草)

○ヤマドリ 鶴雉(本草) 山鳥(萬葉) 亥子之鳥、節料鳥(安東郡

專當沙汰文)

○カシドリ 椋鳥(藻鹽草)

○佛法僧鳥(扶桑略記) 佛法世(赤染衛門集)

○ミサゴ (和名類聚抄) 鸚(本草) カクカノトリ(日本紀私記)

出(新撰字鏡) 出鳩(和名抄) 覺賀鳥(日本紀私記) 鶺鴒(大平

記)

○ワシ 鷲(和名抄) 鷲(本草) 眞鳥(仙覺萬葉集註釋) トホツ

シ(和名鈔)

○ハヤブサ 隼(通雅) 鶻(言塵集) 速纏(古事記) ツハサカマ

鳥(藻鹽草)

○コノリ 晨風(本草) 小紀兒鷓 雉なり

○ハイタカ ハシタカ 鷯(爾雅註) コノリの雌なり

○タカ 鷹(本草) クチ(日本紀)

○オホタカ 大鷹(言塵集) 雌なり ハシタカ(鷹百首) 大雲萬

葉(白鷹(大和本草))

今は昔鶴に舞を教へしふる事

森 爲 三

百させ餘り古の事なりこか、慶尚北道慶州郡西面に李某名もの
る者ありけり。或日一羽の鶴を捕へ來て、奇しき法もて、之に

舞ふ事を教へたりてふ奇談あり。今其の方法を傳へ聞くに、先づ其が風切羽の主なるものを左右各兩三枚宛切取りて、飛ぶ事を得ざらしめ、次ひで此れを温突の中に追入れぬ。聽て下より薪焚きつけて熱く温突を熱したりければ、鶴は熱さに得堪へずして豫て用意の大丸太の上に飛上りぬ。然るに轉がり安き丸太の事にて、こもすれば前にのめらんこし、後によろけんこして、哀れの鶴は、絶え間もあらず羽はたきて、苦しき平衡を保つなりけり。李某は得たりこ笛取出し、翼の動きに應じつゝ、調子を合せて吹立てければ、鶴も何時しか其の音調に慣らされて、後には其が調のまにまに、或は高く或は低く、疾くもゆるくも笛手の心のまゝに誘はれて、其が翼を動かすに至りぬ。かくして三月餘りも経ぬる後、鶴を温突の外に連れ出し、丸太の上から止らせて笛もて之を試みけるに、温突の内さ少しもかはらず、羽振おかしく、巧みに舞を演ぜしこなん。

ムクドリとウヅラの交接卵か

靱山徳太郎

淺草區内の一飼鳥商に好く馴れた子飼のムクドリが一羽愛養

されて居つた此鳥は人語や其他の物眞似なきも二三語は知つて居り籠から外へも遊びに出せる程のものださうな、それを今春偶然の機會から同家に飼つてある雄鶉と配合させた處外見上受精も行はれるらしい飼主も是を一奇として此事を方々に話したその話が聞き傳つた時珍らしい事とは思つたが更に一月十九日に一卵を産したと云ふ事を再び聞くに及んで好奇心から其卵を取りよせて見た處外殻は美しき藍青色、長徑二・六、五耗(八分八厘)短徑一・九、七耗(六分四厘)重量一匁五分五厘でムクドリ初産の卵として普通程度と認められる、更に卵殻を靜かに開いて内部を檢した處卵黄の上部に胚を確實に見出した、此様な卵に適當な温度を與ふる時は完全に孵化するかどうかと云ふ事も實驗して見たかつたけれど何しろ唯一の卵を第一回の實驗に供して仕舞つたのだから今の所其事は立消への次第、其後の産卵は未だ聞かない。面白い事には此雌鳥即ちムクドリの相雄はたつた一羽きりしかないさうだ、そうして又交接の時、雌は靜かで居るけれど終るや直に特有の喧騒な聲を發しながら一頻り其附近を飛び廻るこか聞いた。

附記 卵の計量日は産後一週間を経たる廿六日なりしかば新

鮮の時より重量の輕減せしやは計り難し。

質疑應答



一十一 質疑者 東京 榎山徳太郎

問 一 カイツブリの學名は *Colymbus ruficollis philippensis*, *C. flaviventris philippensis*, *C. f. flaviventris* の何れを用ふべきものに候や。

答 本州産カイツブリの學名には *Colymbus f. flaviventris* Temst. を用ふる方正當なるべく、臺灣産のものには、*C. f. philippensis* Bonnat. を使用すべきなるべし。但し多くの夏羽の標本を比較するに非らざれば本州産は前者のみなるか又は臺灣産と同一のものあるや否や決し難し。カイツブリの屬名を他のものと區別せんことをせば *Tachylaptes Reichenh.* (1849) を用ふるも可なり。

問 二 ハイタカは *Falco japonicus japonicus* (L.) に候や又は他の亞種に候や。臺灣に産すべし云ふ *A. n. melanochistos* なるものはハイタカとの區別點何所に有之候や、命名者は何人にて候や。

答 日本産のものには *F. n. japonicus* (L.) を用ふべきなり。而して他に *A. japonicus* Stejn. (Proc. U. S. Nat. Mus., Vol. XVI, 1893, p. 625) の學名を有するものあり常陸國にて獲られ

雌なるが淡灰色に富むべし云ふ。此學名の正否は充分調査せざれば決し難し。*A. n. melanochistos* Hume はヒマヤ地方に主産する種類にて臺灣にては恐らく稀れなるべし、ハイタカとの區別は上面著しく暗色なること、特に雌に於て翼長一〇一〇・五吋ありハイタカにては雌の翼九・五吋あるに過ぎず。學者によりては黒變種なりと云ひ又は別種或は別亞種なりとせり。恐らく亞種として分つ方正しかるべし。

問 三 ユリカモメは *Larus r. rickiaudus* L., *L. r. rufistriatus* Temm. の何れを用ふべきものに候や。

答 前名の方、學者によりては二つに區別せぬ人あり。

問 四 ホトトギスは *Circus i. intermedius* (又は *intermedius*) にて正確に候や。

答 *C. i. intermedius* Vahl にて正し。

問 五 コゲラの「タイプ」は北海道のものに候や本州のものに候や。

答 Hargett (1884)によれば "In insulis Nippon et Yezo dietis" あり即ち基型は明瞭ならず本州及び北海道の兩者を意味す。

問 六 邦産のピンズイは *Anthus t. macularius* Jordan にて宜敷候や又他に別名有之候や、*Pipus* 屬を用ふべきものにて候や。

答 本邦のピンズイは質問の學名通りにて可なり。
Pipus Kaup (1820) は *Anthus* Bechst. (1807) の「*ノニム*」なり。共に *A. trivittis* が基型なり。

問 七 *Chelidon* の屬の「タイプ」は何種にて候。*Hirundo* の屬の「タイプ」に共に年號も御教示願上候。*Chelidon* を用ひずしてツバメに舊來の *Hirundo* を用ひイハツバメに *Delichon* を用ひても宜敷きものに候や。

答 *Chelidon* の屬の「タイプ」は *C. rustica* なり、質問の兩屬の「タイプ」の年號は左記の如し。

Hirundo Linn. (1758).....^{Type}*H. urtica*

Chelidon Forster (1817).....*C. rustica*

ツバメに *Hirundo* を用ふるごせばイハツバメにもこれを用ひざるべからず。何んかよれば *Hirundo* L. (1758) は凡

てのツバメ類の總稱にして特にその基型の定まりしものに非らざりしを Forster (1817) が始めてツバメ類に (*Chelidon* (1817) を用ひイハツバメ類に) *Hirundo* L. (1758) を用ひ、而してシャウドウツバメ類に *Repparia* Forst (1817) を用ひたるが故なり。因に *Chelidon* Boie (1822) が屢タイハツバメ類に用ひられ居ることは誤りにして 1817年に Forster が已にツバメ類の屬とせるものなり、又 *Delichon* Moore (1854) の存在を認むるごせば *Hirundo nipponensis* (Moore) にのみ使用すべきなり。

問 八 モズを *Lanius* 屬より別ちて *Phoenax* となし、アカモズを *Oraneda* チゴモズを *Finnortomus* となしても宜敷きものに候や又チゴモズモズとは同屬と致す可きものに候や或はモズモズアカモズを同屬と致すべきものに候や三種共同屬となしてオホモズのみ別屬となさば何屬が一番古きものに候や。

答 モズ、アカモズ及びチゴモズの屬名を *Lanius* より分たんに欲せば各々に質問通りの屬名を用ひて然るべし。然れどもチゴモズモズを又はモズモズアカモズを同屬となすの必要なるべし。三種を同屬としてオホモズ

類のみを分たんとせば *Taurus* L. (1766) を用ふべし而して他は之に次ぐ古き *Emmooctonus* Bate (1886) を使用するを得。然れども回答者の考へにては之等のモズ類は凡て最古の *Taurus* 屬に編入する方穩當なりとす。

問 九 カヤクヰリは *Acronotus*, *Pumelia* 何れの屬名を採るべきものに候や。

答 *Acronotus* Bechst. (1802) は已に 1797 年に他の學者(人名不明)によりて *Cinctus* の何づれかの種の屬として用ひられたり云ふ故にカヤクヰリには *Pumelia* の方を用ふべし。

問 十 ノビタキ *Pratincola*, *Saricora* 何れの屬名を用ふべきものに候や兩屬の年號をも合せて御教示願度候。

答 ノビタキの屬名は *Pratincola* なり。兩屬の年號は左の如し。

Type
Saricora Bechst. (1802) *S. caerulea*
Pratincola Koch (1816) *P. rubra*

年號は前名の方早きと「タイプ」は大に相違す

問 十一 ノジコは *Kusipia* として別ちても宜敷く候や。

答 ノジコの屬名は *Emberiza* にして *Kusipia* を用ふるべし。

つを得ず。 *Emberiza* Bp. (1832) は *Sylvia* の「*Emberiza*」にしてその「タイプ」は *Sylvia americana* であり他に *Emberiza sulphurata* 等を以て基型とせる屬名なきが如し。

十二 質疑者 岐阜縣 柳原 要 二

問 十二 ユリカモメの成鳥と幼鳥との羽色明細に御指導相成り度御願ひ申上候。

答 本種は夏羽と冬羽とによりて相違す。通常吾人の目撃するは冬羽の場合多し左に兩者の記載をすべし

夏羽——頭は帶褐黑色又は珈琲褐色、喙は淡銀灰色、圍眼部、上下尾筒、尾及び全下面は純白なり。但し下面には淡紅色を帶ぶ。初列風切は白色にして先端及び内瓣の縁は黑色なり。次列風切は銀灰色にして外側羽は先端黑色なり。嘴、眼瞼の縁、脚及び趾は暗濃紅色。虹彩は暗褐色なり。雌は一般に雄より小形なり。

冬羽——頭には夏羽に見る如き黒褐色の部分全くなく、眼先及び後頭に少しく鼠色を有し耳羽には黒灰色の一斑あり其他は夏羽と同様にして只下面に淡紅色を帶びず。嘴、脚趾共夏羽の場合よりも赤色にして暗色を帶びず。

幼鳥——額は白色、頭の他の部は主として灰褐色、上面は
 樺褐色にして初列風切の外側の三羽の外瓣、先端及び内
 瓣の縁は黑色、然し中部は白色なり。但し最外側の一羽
 にありては羽軸の内側に暗縁を暫時の間保つものなり。

以下の初列風切にありては暗色は内瓣の上部程増加す然
 し第五羽以下にては外瓣は淡灰色より帯褐色にして先端
 に一白斑あり。次列風切は中部黑色にて縁は白色なり。

尾羽は白色にして黒褐色の帯あり。體の下面は暗白色な
 り。嘴は暗黄色先端黑色なり。跗蹠及び趾は暗赤黄色な
 り。但し上面の褐色は成長と共に速かに失はれ當歳のも
 のにては十二月頃には白色に變するを常とす。

幼期——成鳥と同様なるも上雨覆には多少の褐色斑紋あ
 り。初列風切の外瓣にはなほ幼鳥の黑色を存す。頭部の黒
 褐色は一ヶ年後にありて辛うじて生じ始むるものと假定
 せらる。而して尾の黒帯は次の秋季にありて全く消失す
 此時にありて成鳥よりも黒色多き新たなる初列風切も生
 ずるなりと云ふ説あり。實際幼期の羽衣の持續期間は斯
 くの如に短かし。而して是等の幼期のものは第二の春季
 に至る迄は生殖を始めぬものなり。(以上黒田長禮回答)



□第十一回總會 本年五月廿八日午後五時より春季總會を神田

一橋學士會假會館に於て開會し左の諸君の出席あり。(來會順)

黒田長禮 鷹司信輔 内田清之助 菊池米太郎

大岩紀鹿 丘 淺次郎 大久保忠春 松永安衛

岡田信利 森田淳一 永井 靖 飯塚 啓

田子勝彌

會場には鶴科及鳩科鳥類標本並書籍圖書の陳列あり、晚食後
 内田幹事の會計報告を了り會則の變更を議し(別項参照)午後九
 時半散會す。陳列標本左の如し。

種類 個數 出品者

鶴科 鳥類 七十五 百二十一 黒田長禮氏

鳩科 鳥類 十三 十五 動物學教室

鳩科 鳥類 二十七 三十 黒田長禮氏

鳩科 鳥類 十三 十五 動物學教室

エナガ變種	一	動物學教室
シジュウカラ變種	一	黒田長禮氏
カケス變り	一	熊谷三郎氏
カケス變り	一	内田清之助氏
ミカドキジ幼鳥其他	二	菊池米太郎氏
キンケイ異常卵	二	黒田長禮氏
アヒル異常卵(赤色)		黒田長禮氏
鶺鴒類寫生圖十葉		黒田長禮氏
Krutchinnikow 著 Histoire et Description de Kamchatka	一七七〇年發行	岡田信利氏

□會則の變更 別項記載の如く春期總會の際左の如く本會會則の一部の變更を議決せり。

第四條 第一項

一年三回雜誌『鳥』を出版すること

第五條 本會々員を分ちて甲種會員乙種會員の二とす

一甲種會員は會費として一ヶ年金三圓を納むること

一乙種會員は會費として一ヶ年金一圓五十錢を納むること

第六條 甲種會員には雜誌『鳥』臨時刊行物を配布す

乙種會員には雜誌『鳥』を配布す 臨時刊行物は定價一圓

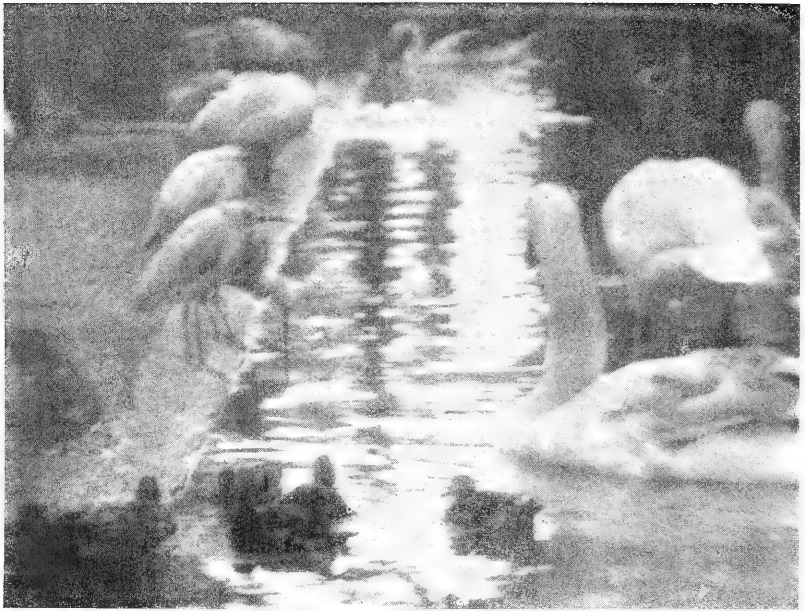
を限り無代配布す 其他は定價の三割引を以て講讀するを得

本會經費は從來會費並書籍雜誌の賣上金を以て維持するに足らず年々支出の約二分一は數氏の特志家の寄附金によりて償はれ來りたるも近來印刷費の暴騰は底止する所を知らず到底従前の會費並寄附金額を以てしては支出に不足を生ずるに至りたる爲め右の會則の變更を必要とするに至りたり。尙雜誌の發行回數を年三回に變更したるも右は一年間の總頁數は從來と同様にして一冊の頁數約從來の三分二に減少する見込みなり。雜誌定價は從來通り三十五錢とす。雜誌發行回數の増加は來年度より實行し會費値上げは本年度より實行す。

□ミカドキジ再び献上せらる 臺灣總督府にては昨秋ミカドキジ雄二羽を採集 兩陛下に献上せることは前號に報じたるが其後總督府囑託菊池米太郎氏九名の生蕃を使用し採集に苦心せる結果雌雄二番を生擒したるを以て總督府にては再之が献上の爲め同氏持参去月出京せられたり。

□北米通信 在北米の會員水野誠氏より本會員某氏の許に達せる書信中左の如き面白き寫眞及記事あり茲に掲載す。

(前略)當シカゴ市は非常に寒冷の地にて零下十度以上に相成る



會員 水野誠氏寄贈

集群の禽渉と禽水 圖四卅第
(Lincoln Park, Chicago. Jan. 1919)

由にて昨年一二月頃は積雪十尺以上にも達し候趣本年は幸にも未其程度に達し不申雪も極めて少く御座候(中略)日曜日には公園、博物館等に移り候リンコロン公園には動物園有之鴨や白鳥は馴れくしく池中を遊び廻り人の與ふる餌に集まり居候寒冷の折柄に候得者動物は大部分屋内に憩居致居中候多くの禽類は一室内に區分して入れられ候が種類は上野動物園のものより以上澤山とは思ひ申されず候が専門家より見候はゞ随分珍らしきもの可有之候(中略)小寫眞はジャクソン公園にて栗鼠に南



會員 水野誠氏寄贈

鼠栗と氏野水 圖五卅第
(Jaeson Park, Chicago)

京豆を興へ居る圖に有之栗鼠は野飼ひと相成り人を見ては餌を
貰ひに集まり來りて中々可愛らしく御座候總數六十位に見受け
られ申候

□入 會

大賀 一郎 大連市天神町ユ區五五

荒木百合子 熊本市人吉町天主公會内

大岩 紀麿 東京府北豊島郡高田雜司ヶ谷

土居 寛暢 朝鮮平壤府泉町三

坂本 保重 山梨縣廳内

阪井 辰三 神戸市加納町二丁目十六番屋敷

藤田 昌世 高知縣幡多郡宿毛町丸島

池田 岩治 廣島高等師範學校

高野 利治 埼玉縣大里郡吉岡村楊井八七八

□轉 居

馬庭 軍市 朝鮮京城初音町二〇〇番地

大澤 保 名古屋市中區中市場町三ノ十八

大場 四平 朝鮮平壤歩兵第七十七聯隊

森川 勉 滿洲撫順小學校

水野 誠

*c/o Consulate of Japan, S. Michigan Ave.
Chicago, U. S. A.*

著 者 共 助 之 助 之 助 之 助
內 田 清 之 助 之 助 之 助
仁 部 富 之 助 之 助 之 助

鳥類の渡り及蕃殖期

定價一圓五十錢稅不要

東京動物學會發行

鳥第七號「勘察加半島西海岸採集鳥類目錄」正誤表

頁	段	行	誤	正																														
101.	—	—																																
	}	地圖の内(一部地方)	ホリシエツキイ川	ホリシエ [○] レツキイ川																														
		同上	コシエゴチ [●] アンスキイ川	コシエゴチ [●] エンスキイ川																														
102.	下	—																																
		{測定表の内	<table border="1"> <thead> <tr> <th>番號</th> <th>採集月日</th> <th>.....</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>.....</td> <td>.....</td> <td>.....</td> </tr> <tr> <td>.....</td> <td>.....</td> <td>.....</td> </tr> <tr> <td>K.78</td> <td>12/VII</td> <td>.....</td> </tr> <tr> <td>K.88</td> <td>19/VII</td> <td>.....</td> </tr> </tbody> </table>	番號	採集月日	K.78	12/VII	K.88	19/VII	<table border="1"> <thead> <tr> <th>番號</th> <th>採集月日</th> <th>.....</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>.....</td> <td>.....</td> <td>.....</td> </tr> <tr> <td>.....</td> <td>.....</td> <td>.....</td> </tr> <tr> <td>K.78</td> <td>10/VII</td> <td>.....</td> </tr> <tr> <td>K.88</td> <td>12/VII</td> <td>.....</td> </tr> </tbody> </table>	番號	採集月日	K.78	10/VII	K.88	12/VII
番號	採集月日																																
.....																																
.....																																
K.78	12/VII																																
K.88	19/VII																																
番號	採集月日																																
.....																																
.....																																
K.78	10/VII																																
K.88	12/VII																																
103.	上	11.	A. P. Platyrrhyncha,	A. P. Platyrrhyncha,																														
104.	下	3.	「帶暗綠色にして」の次に	「次亞種の如く」を [○] 加ふ																														
,,	,,	13.	Anteriotringa,	Anteliotringa,																														
105	上	13.	● 磨損	○ 磨損																														
,,	下	2.	● 鳥類目錄	○ 鳥類目錄																														
,,	,,	4.	dar kslate	dark slate																														
107.	下	11.	脚淡紅色	脚は [○] 淡紅色																														
,,	,,	20.	行の最後の「th」は	the [○]																														
108.	,,	2.	L. calliops,	L. calliope,																														
,,	,,	5.	● 低度	○ 程度																														

日本鳥學會規則

第一條 本會ハ日本鳥學會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ハ東京帝國大學理學部動物學教室内ニ置ク

第三條 本會ノ目的左ノ如シ

一 鳥類ニ趣味ヲ有スルモノ、懇親ヲ計ルコト

一 鳥類ニ關スル學術ノ進歩ヲ促スコト

一 鳥類愛護ノ思想ヲ普及セシメ鳥類ノ保護増殖ヲ計ルコト

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ評議會ノ決議ヲ經テ隨時種々ノ事業ヲナス

一 當分一年ニ三回雜誌「鳥」ヲ出版スルコト

一 臨時出版物ヲ刊行スルコト

一 毎年春秋二回會合シ鳥類ニ關スル講演談話ヲナシ同時ニ鳥類ニ關スル圖書標本其他ノ展覽會ヲ催ス

一 鳥學的探檢ヲ舉行スルコト

第五條 本會々員ヲ分チテ甲種會員ト乙種會員ノ二トス

一 甲種會員ハ會費トシテ一ケ年金三圓ヲ納ムルコト

一 乙種會員ハ會費トシテ一ケ年金一圓五十錢ヲ納ムルコト

第六條 甲種會員ニハ雜誌「鳥」及臨時出版物ヲ配布ス

乙種會員ニハ雜誌「鳥」ヲ配布ス、臨時出版物ハ定價一

圓ヲ限リ無代配布ス其他ハ定價ノ三割引、以テ講演、ルヲ得

第七條 本會ニ入會セント欲スルモノハ住所氏名職業ヲ記載シ

本會ニ申込ムハシ但甲種會員ノ入、退會ハ評議員會ノ

決議ニヨル

第八條 本會ニ會頭壹名ヲ置ク

第九條 本會評議員會ハ會頭幹事及ヒ會員ノ互選ニコル評議員

若干名(甲種會員)ヲ以テ組織ス

東京帝國大學理學部動物學教室内

日本鳥學會

役員

會頭 理學博士 飯島 魁

幹事 內田清之助

評議員 理學博士 飯塚 啓

理學博士 丘 淺次郎

公 爵 應 司 信 輔

黑田長禮

子爵 松平頼孝

投稿及質問規定

(一) 鳥類の習性、渡り、方言等に關し廣く各地方會員の投稿を

歓迎す

(二) 既掲原稿は返戻せず、但し挿畫に使用せる寫眞及び圖畫は

希望により返戻すべし

(三) 原稿は紙の表丈を使用し一行、二十五字詰に認められたし、

假字は平假字を用る動物名及び外國語は片假字とす

(四) 挿畫は寫眞以外のものは墨汁にて認められたし

(五) 原稿は東京赤坂區福吉町黒田長禮氏宛郵送せられたし

(六) 本會は鳥類に關する質疑に應答す、質問の事項は返信封封

入理科大學動物學教室内本會宛郵送せられたし

(七) 質問解答は一般讀者に有益なりと認むるものは本誌に掲載

するも其他は質疑者に直接解答するものとす

大正八年七月十八日印刷

定價金參拾五錢

大正八年七月廿一日發行

禁轉載

編輯兼
發行者
東京市日本橋區兜町二番地

木下憲

東京市日本橋區兜町二番地

印刷人
神谷岩次郎

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所
東京印刷株式會社

帝國大學理學部
動物學教室内

日本鳥學會

振替口座東京六五九九番

發行所

發賣所

東京日本橋區
十軒店町

裳華房

振替口座東京一〇七番

斯界稀有の新著

理學士 黒田長禮先生著

最新刊

鶉千鳥類圖説

四六二倍版總布製美裝
三色版五葉寫眞版五葉
挿畫百五十個
正價金 八圓

本編は種類の識別最困難なる鶉・千鳥類 (Charadriidae) の全世界に産するもの二百三十七種類

を圖説せるものにして何れも各種に就きて雌雄・夏冬羽・老幼の記載及び分布・習性等を記

述し特に本邦産の種類に就きては最詳述せり 尚各亞科より亞種に至る迄細密なる索引を具

備し總論としては本科鳥類の形態・習性・「渡り」・分類法・参考文書等を記述する事二十三

項に亘り其他分布表・學名索引等を附録として添附せり

圖版は鳥類寫生圖に最堪能なる横山慶次郎畫伯の筆に成り十葉約八十種の邦産種を圖し本文

挿畫には内外種の寫眞、寫生圖等百五十圖を挿入せり

裳華房書店發行

東京日本橋
十軒店

電話本局一千
七百東京東替振

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 內田清之助 著
第一篇 鸚類圖說

絶版

獸醫學士 內田清之助 著
第二篇 海産保護鳥類圖說

原色版四枚 三十錢
 定價四錢
 郵稅四錢

理學士 黑田長禮 著
第三篇 世界の鴨

原色版一枚 寫真版五枚
 定價七十五錢
 郵稅六錢

理學士 黑田長禮 著
第四篇 世界の雁と鵠

原色版四枚 寫真版五枚
 定價四十八錢
 郵稅八錢

仁部富之助 著
第五篇 郭公の蕃殖に關する研究

コロタイプ版一枚 地圖一枚
 定價五錢
 寫真版五錢
 郵稅四錢

理學士 黑田長禮 著
第六篇 臺灣島の鳥界

原色版四枚
 定價四拾錢
 寫真版四拾錢
 郵稅四錢

理學士 黑田長禮 著
第七篇 鮮滿鳥類一斑

原色版十枚
 定價一圓五十錢
 寫真版十枚
 郵稅十二錢

理學士 黑田長禮 著
第八篇 六郷川に於ける鶺鴒千鳥類の渡り

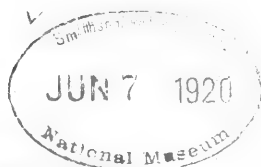
原色版一葉 寫真版一葉
 定價七拾五錢
 寫真版一葉 寫真版一葉
 郵稅六錢

房 華 裳 町店軒十區橋本日本 番七百京東替 所 捌 賣

"TORI" THE AVES

BULLETIN OF THE ORNITHOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

Vol. II. No. 8.



Frontispiece:

A flock of Water-fowls on the outer moat of the Imperial Palace.

Contents:

On some specimens of birds from Saghalin in the Sapporo Museum.

By *T. Momiyama*.

On the migration of some common species of birds in the vicinity of Seoul, Corea. By *Y. Kuroda* and *J. Miyakoda*.

On the habits and sexual differences of the Himalayan cuckoo. By *M. Kawaguchi*.

Migration and habits of Swallows in Shikoku. By *Y. Enomoto*.

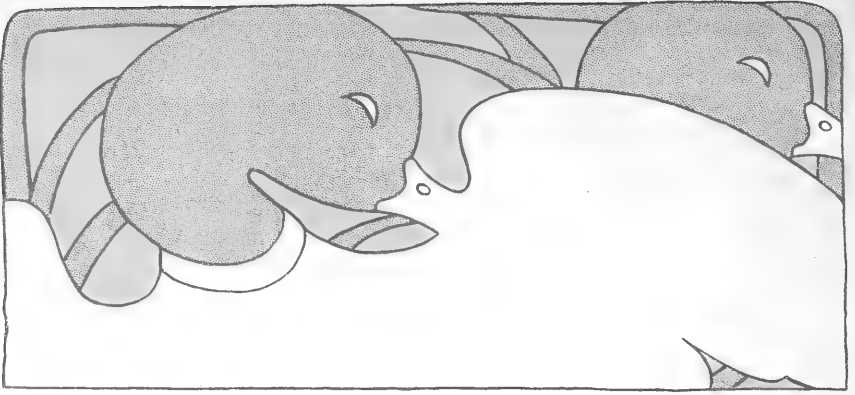
Notes on some birds from Iruma-gun, Prefect. Saitama. By *T. Momiyama* and *M. Nomura*.

History of the Audubon Movement. Translated by *S. Uchida*.

Miscellaneous notes.

Queries and Answers.

Proceedings of the Society.



鳥

第
七
號

行發月二十年七正大

會學鳥本日



鳥 第 二 卷 第 七 號 目 次

故波江元吉君肖像 (口繪第二圖版)

論 說

濟洲島採集の主なる鳥類に就て (附、濟洲島産鳥類目錄).....

アヲバヅクの蕃殖の觀察.....

オホトウヅクカコモミサケイゴに就て.....

沖繩及び奄美大島の採集鳥類.....

勘察加半島西海岸採集鳥類目錄.....

講 話

鶴龜長壽傳説.....

徳川時代の薩摩に於ける動物園.....

雜 纂

高野山の一年.....

旅順の雀と筑前の雀.....

コシアカツバメの蕃殖.....

雪中の農作物鳥害例.....

飼養鶉の雛卵と雛の體量とに就て.....

マガンの下面變り.....

本郷區内にて見たる鳥類.....

理學士 黒田長禮

法學士 川口孫治郎

理學士 黒田長禮

堀井榮吉

榊山徳太郎

理學士 黒田長禮

荒木彦助

榎本佳樹

脇山三彌

理學士 黒田長禮

仁部富之助

鶉の家

森の爲三

鶉の家

質疑應答 五 件 (黒田長禮、黒川義太郎、下郡山誠一回答)

雜 報 十 二 件

故波江元吉君

波江元吉君は明治四十五年五月本會第一回例會に於て評議員に擧げられ爾來本會の爲に盡瘁せらるゝ所尠からざりしが近年健康を害せられ攝養到らざるなかりしも今春來病漸く重く療養其效なく終に本年五月廿四日小石川の邸に於て永眠せられたり誠に哀惜の情に堪えず

君は明治九年東京博物館に奉職せられ同十五年東京大學に轉ぜられし以來逝去に至るまで三十餘年間理科大學動物學教室にありて一意動物學特に脊椎動物に關する研究に没頭せられ其間農商務省の囑託によりて鳥類の調査を内務省の囑託によりて鼠類の調査に従事せられしのみならず東京動物學會創立者の一人として本邦動物學界に貢獻せる所枚舉に遑あらず特に大和明治九年(沖繩)同十九年(四十二年)伊豆七島(同廿年)對馬(同廿四年)等に於ける鳥類採集の如き本邦鳥學の進歩に貢獻せること偉大にして永遠に其功績を傳ふべきものとす

今左に同君の姓を有する鳥類を列記し以て君の追憶に資せんことす

1. *Dryobates leucos namiyai* Stejn.

ナミエガラ(飯島博士、一八九一年)

D. namiyai Stejn, Proc. U. S. Nat. Mus., IX, p. 116 (1886)

産地、南本州、四國、九州

2. *Luscinia komadori namiyai* (Stejn.)

ホントウアカヒゲ(飯島博士、一八九一年、小川學士、一九〇八年)、ナミエアカヒゲ
(小川學士、一九〇五年)

Icterus namiyai Stejn, Proc. U. S. Nat. Mus., IX, p. 645 (1886)

産地、沖繩本島

3. *Chelidon javanica namiyai* Stejn.

リウキウツバメ(飯島博士、一八九一年)

C. namiyai Stejn, Proc. U. S. Nat. Mus., IX, p. 646 (1886)

産地、琉球諸島

4. *Purus varius namiyai* Kuroda

ナミエヤマガラ(黒田學士、一九一八年)

P. varius namiyai Kuroda. 動物學雜誌、第卅卷、三二六頁、三三三頁、大正七年八月産地、伊豆新島

次に波江氏の遠せる論著を掲げ以て君の事業の一端を知るに便せん

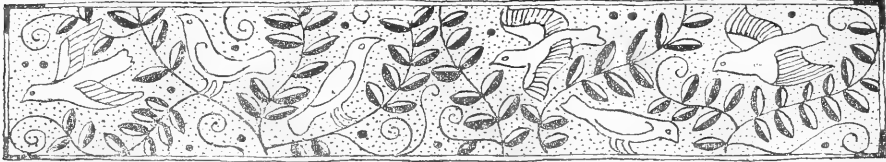
動物學雜誌掲載の分

著者	表	題	卷數	頁數
1 波江元吉	日本に棲息する蝙蝠の話		一	六五、九六、 二四、一七三、二三 三五、三八、三六、 四八、五〇、 二〇一、 二七〇、 三三、三六、
2 同	日本のマス類に就て		一	二七〇、
3 同	伊豆諸島の鳥類		一	三三、三六、
4 同	鶴に就て		二	七三、
5 同	蟬の發音器に就て		二	四七、五三、
6 同	東京市民の食膳に供する動物に就て		三	七三、三七、四九、
7 波江元吉 土田兔四造	對馬採集日記		三	三五、二四、
8 波江元吉	ペンタクライナス採集法		四	八、三九、四三、 四七九、
9 同	コキクガシラカハホリに就て		四	四七九、
10 同	アマカヘル 雨蛤に似て非なるもの		五	三〇、五七、三〇、
11 同	<i>Leptistes</i> 屬の雌雄の標徴		五	三〇、
12 同	丹羽氏の質問に就て(鳥類に關するもの)		三	三〇、
13 同	沖繩蝶類に就て		三	四四〇、 二四三、 二四三、 六七、 一五〇、
14 波江元吉	シバエビ		七	三三四、
15 同	カワガヒビルの保護糸		七	三三四、
16 同	モエビ		七	三七五、
17 同	アカシエビ		八	六八、
18 同	銃獵家に望む		八	七〇、
19 同	ヨシエビ		八	一五一、
20 同	トラフガヘル		八	一八九、
21 同	シラタエビ		八	二二八、
22 同	アマガヘル雨蛤に就て		八	二六四、
23 同	サクラエビ		八	三九五、
24 同	アルパトロース號を横須賀に觀る記		九	五五、
25 同	ウシエビ		九	一〇七、
26 同	本邦産蛇類の學名に就て		九	三三七、
27 同	三崎近傍のクルマエビ類		九	三七六、
28 同	タカチホヘビに就て		一〇	四四、
29 同	エゾイタチに就て		一一	二九〇、
30 同	タカチホヘビの新産地		一一	七二、
31 同	ヤイロツクミ英彦山に來る		一二	三三六、
32 同	野鼠を驅除する一方法		一三	一七、
33 同	四國産爬虫類及兩棲類		一五	二八四、
34 同	土佐の蜻蛉		一五	二九七、
35 同	遠藤理學士留別海岸に狼魚を捕ふ		一五	三四〇、

著者	表題	卷數	頁數
36 波江元吉	高知産爬虫類	一六	四二三、
37 同	三崎實驗所船小屋中の小蛇	一六	四二三、
38 同	八重山群島産カナヘビ屬の新種紹介	一七	五七、
39 同	南島島産動物	一七	二一八、
40 同	越中滑川附近の動物	一七	二六七、
41 波江元吉	播磨産蛇類に就て	一七	三八一、
42 波江元吉	樺太の蛇	一八	三〇一、
43 同	白蟻の敵	一八	三〇一、
44 同	斷片鳥報	一九	一〇五、一三三、一三三、
45 同	蝦蟇果して無用の長物歟	一九	一五五、
46 同	臺灣産毒蛇	二〇	元、四三、
47 同	香魚の産卵場と食餌	二一	二六六、
48 同	支那産鯪	二〇	二六三、
49 同	函根山椒魚筑波山上に棲息す	二〇	三八八、
50 同	アカツクシガモ	二〇	三九九、
51 同	ヤツガシラ	二一	四二、
52 同	沖繩及奄美大島の小獸類に就て	二一	四二、
53 同	ヒゲナガエビ	二二	四五二、
54 同	南米秘露の動物	二二	一五〇、
55 同	小海雀	二四	九九、
56 同	ハカネズミの大群海を渡る	二四	一七四、
57 同	沖繩及奄美大島の採集鳥類	二四	三六一、
58 同	沖繩産守宮類に就て	二四	四一一、
		二四	四四二、
著者	表題	卷數	頁數
59 波江元吉	沖繩群島を通過する鷹類は果して何種なりや	二四	五九五、
60 同	鶴、雪中に羽蟲を駆除する獸	二五	一七八、
61 同	朝鮮の爬虫兩棲類	二五	四一五、
62 同	朝鮮産メンゴン蛙に就て	二五	四二一、
63 同	メンゴン蛙の習性に就て	二五	五三〇、
64 同	白魚の屬種檢索	二五	五三四、
65 同	臺灣の黑肢猴	二六	二一三、
66 同	薩隅の爬虫及兩棲類	二六	三三〇、
67 同	沖繩産盲蛇の産卵	二六	四四八、
68 同	再び盲蛇の卵に就て	二六	四八二、
69 同	ハンザギに就て	二六	五二〇、
70 同	盲蛇に就て名和所長より來信	二六	五五九、
71 同	パラオ石灰洞中の蝙蝠	二七	六〇〇、
72 同	南洋諸島産蛇の一種	二八	三三〇、
「鳥」掲載の分			
表題	卷數	號數	頁數
雀と鳥	一	一	三一、
ムクドリの色	一	三	一三、
細菌學雜誌掲載の分			
表題	卷數	號數	頁數
鼠族調査第一報告	?	一六〇	一一九、



故波江元吉君の像



論 說

濟州島採集の主なる鳥類に就て

附 濟州島産鳥類目錄

理學士 黒田長禮

森 爲三

濟州島は木浦を南に去る九十五哩の海中に孤立する大島にして面積百二十二方里其の地理學上の位置は北緯三十三度十二分より同三十三度三十四分に至り東經百二十六度八分より同百二十六度五十七分に至る間にありて九州平戸邊と略々緯度を同じくす。

本島は地勢東西に延び南北に狭く略楕圓形をなし中央に海拔六千六百餘尺の漢羅山あり、第三紀若くは其の以後に屬する消火山にして絶頂に周圍約一里よりなれる噴火口を有し夫れより山脈規則正しく四方に緩斜し山麓に廣大なる裾野をなして海に入る、此の山麓に昔時美しき常緑潤葉樹の森林ありしも今は唯河岸に其の昔影を認むるのみ、されど中腹には今尙濟州島森林と稱する落葉潤葉樹の美しき林を存す。前に戸田直太郎氏は此の森林中より黒田の新亞種と檢定せしシマシジウカラミイ、ジマメジロを採集されしにより京城高等普通學校に於ても一度同島に採集を試みんとし此度本校囑託高橋承造氏に出張を命じ同氏は五月十五日京城出發木浦港より同島に渡り約四週間漢羅山南側椎茸小屋に立籠り専門に鳥類の

採集をなし六月十二日歸京せり、同氏の採集物は全部にて九十三個三十種あり、今其の中主なるものにつき記載せらる。

1. *Pitta nympha* Tr. & S. ヤイロテウ

形態は日本鳥類圖説下卷三七五頁の記載通り誠に美麗なる鳥なり、今が「渡り」の最好時期（五月二十八・九日）見え彼方此方の森林中に其の鳴聲聞ゆ、其の鳴聲は二回連続して「カアヘイイ」カアヘイイ」語尾を強く上げて發し多くは老樹の梢頭に止まりミソサザイの如く體を振り乍ら調子を取る、地上に居るときは鳴聲を發せず其の飛ぶや一直線にして早く直に其の影を失ふ、胃中には多くの昆蟲の幼蟲を藏せり。

2. *Trypotes leucos quefnortensis*, subsp. nov. サイシウオホアカゲラ（新亞種・新稱）

記載——南部北海道及び本州中部以北のオホアカゲラ (*T. l. suberris* Seem.) の一見同様なるも次の諸點にて識別することを得べし、體は多少小形なること、體色一般に暗色に富むこと、上面に白色少きこと、翼に於ける白斑は餘程小形なること、耳羽は白色に富み殆ど褐軟皮色を帯びざること、下尾筒は一層深赤色なること、上下兩面の白色部には著しき黄褐色を帯びざること等にありとす。鼻孔は短毛にて僅に被はるゝ故常に外部より鼻孔を見ることを得、嘴峰三七、翼一四五、尾八九、跗蹠二二耗あり。

基型標本は大正七年五月廿一日濟州島にありて京城高等普通學校の採集人高橋承造氏の採集せる雄成鳥なり。

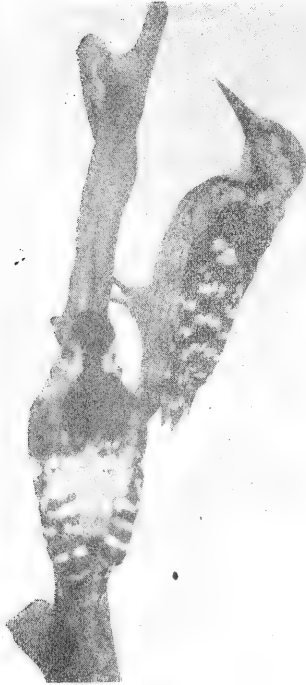
左に今回の新亞種の全部の記載を附記せば、

頭 前額・耳羽・眼先き・眼の後上部は淡黄褐色にして後頭の兩側の黄白斑と耳羽との間は黒色帯を以て境せらる、されど後頭に続く所は幅狭くなり中には切るものあり頭上の羽毛は鼠色なれど其の先は何れも美麗なる鮮紅色なり。

背 上背は一樣に黒色なるも下背は黄白色にして夫に大なる幅廣き黒色横斑を交ぬ（第十圖参照）。

翼 小翼羽・小雨覆は黒色、中雨覆は外側の二三は黒色、其の他は内外兩瓣共に大なる白色斑を有すれど黒色部の大きさに達せず、大雨覆内側の一個は何れも黒色、中には其の次の羽も黒色のものあり其の他及び風切羽の斑紋は第十二圖及び第十三圖の如し。

下面 下嘴基部より後方に至る黒帯は耳羽後方にて二分し一は上行して頭の黒色部に達し一は下行して上胸にて左右殆んど相



第十圖
テウセンオホアカゲラ

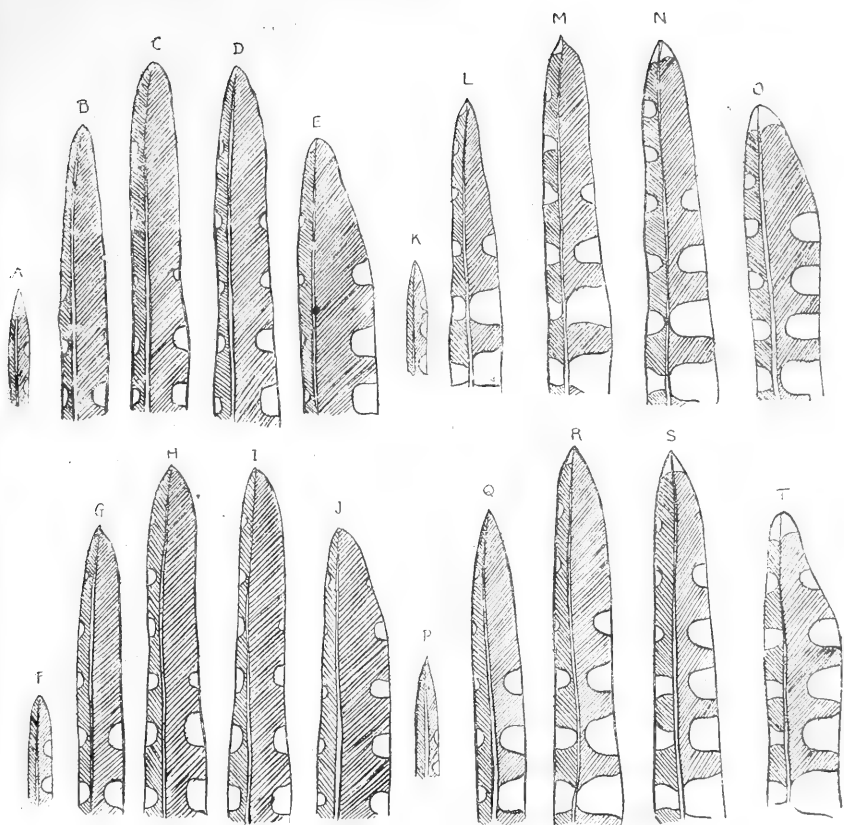


第十一圖
サイシウオホアカゲラ

合す、腮は白、喉は淡黄白、胸部の羽毛は黒色にして黄白の縁を有す、此の羽毛下に至るに従ひ（腹部の兩脇）黒色部の幅狭くなる、胸部の下部以下は紅色殊に下方に至るに従ひ色濃厚となり下尾筒は殊に紅し。

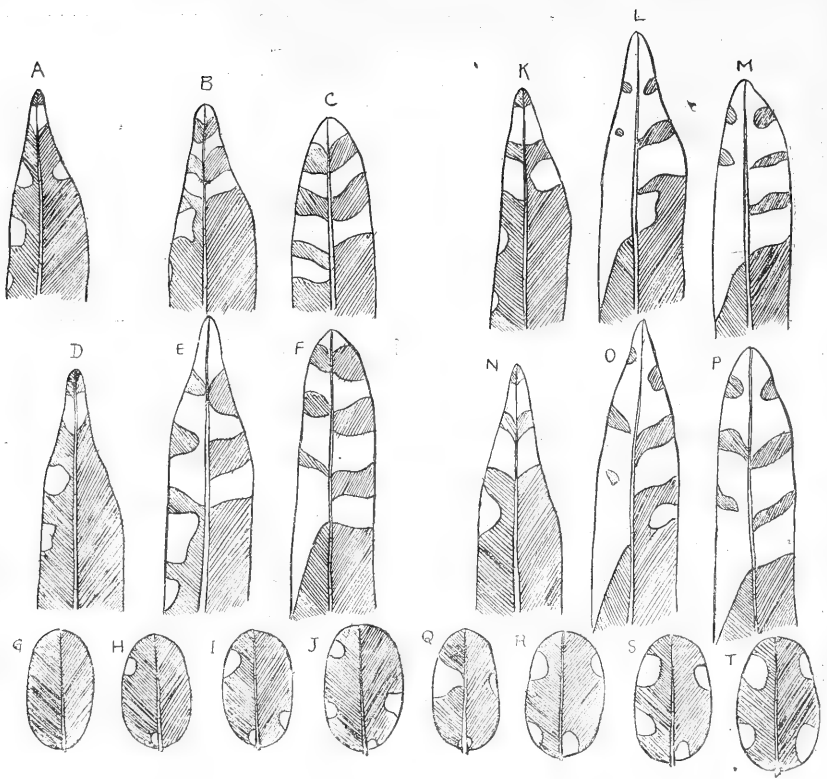
尾 中央の二對は全部黒色、第三、第四、第五對の羽毛の斑紋は第十三圖の如し。

今之をテウセンオホアカゲラ (*D. l. urdensis* Math.) と比較するにテウセンオホアカゲラは(1)下背は純白色にして夫々微かなる細き横黒斑あり(2)下嘴基部より後方に至る黒帯は耳羽後方にて二分すれど上行のものは後頭の黒色部に達せず下行のものは上胸の兩側に僅に達するのみ(3)喉は白色、胸部の中央は擬白色に淡黄褐色を帯ぶ(4)胸及腹の兩側の各羽毛の黒色斑幅狭し特に胸側のものにありて著し(5)圖の如く尾羽、風切羽共に白色斑大にして斑紋の数も多し(テウセンオホアカゲラには第二對目の尾羽に二小白斑を有するものあり)左にテウセンオホアカゲラにサイシウオホアカゲラとの測定表を示す但し*印あるものは基型標本なり(七八頁参照)。



第二十圖 初列風切の差を異を示す

A—Jはサイシウオホアカゲラの初列風切羽にしてA—Eは一標本、F—Jは他の標本に依る、而してA、Fは第一羽、B、Gは第二羽、Cは第三、第四及び第五羽、Hは第三及び第四羽、Dは第六羽、Iは第五及び第六羽、E、Jは共に第七羽を示す。
 K—Tはテウセンオホアカゲラの初列風切にしてK—Oは一標本、P—Tは他の標本に依る、而してK、Pは第一羽、L、Qは第二羽、M、Rは第三、第四及び第五羽、N、Sは第六羽、O、Tは第七羽を示す、Rの内瓣五白斑のものあり。

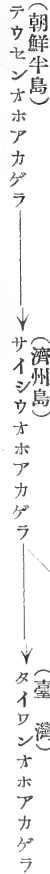
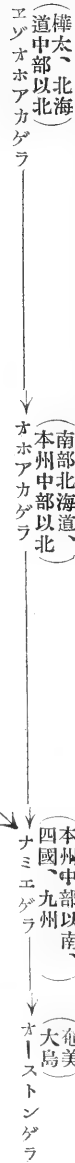


第 三十 圖 尾羽及大覆雨の差異を示す

A—F はサイシウオホアカゲラの尾羽にして
 A—C は一標本、D—F は他の一標本に依る
 A—D は第三對、B—E は第四對、C—F は第
 五對にして第一及び第二對は全部黒色なり。
 K—P はテウセンオホアカゲラの尾羽にして
 K—M は一標本、N—P は他の一標本に依
 る、K—N は第三對、L—O は第四對、M—P は第
 五對にして第一對は全部黒色、第二對は前標
 本(K—M)に屬するものは内外瓣に一個宛の
 小白點あり後標本にては全部黒色なり。
 G—J はサイシウオホアカゲラ Q—T はテウ
 センオホアカゲラの大覆雨にして G—Q は内側
 第一羽、H—R は同第二羽、I—S は同第三羽、
 J—T は白色部の最も多きものを示す。

番 號	所 藏	亞 種 名	雌 雄	採 集 年 月 日	採 集 地	翼 長	尾 長	跗 蹠	喙 峰
七八三	李王職博物館	テウセンオホアカガラ	♂	四十三年二月十六日	京城	一四四	九五	二二	四〇
三六九	同	同	♀	大正三年九月十五日	金剛山	一四一	八八	二二	三七
一二六一	同	同	♀	大正三年三月二十日	黄海道谷山	一四七	九一	二二	四一
一〇二一	同	同	♀	大正元年十二月十五日	京畿道光陵	一五二	九一	二二	四〇
八八〇	同	同	♀	同 十月十九日	江原道江陵	一四四	八八	二二	三七
八六一	同	同	♀	四十三年六月一日	京畿道光陵	一五〇	九六	二二	三七
一	京城高等普通學校	同	♀	大正二年十月三日	同	一四一	八九	二二	三七
二	同	同	♀	同	同	一四六	九三	二四	三九
三	同	同	♂	同	同	一四六	九三	二二	三七
四	同	同	♀	大正四年五月二十一日	黄海道延安	一四六	九二	二二	三八
※一	同	サイシウオホアカガラ	♂	大正七年五月二十一日	濟州島	一四五	八九	二二	三七
二	同	同	♀	同 十八日	同	一四二	八七	二二	三七
三	同	同	♂	同 十八日	同	一四〇	八六	二二	三八
四	同	同	♀	同 二十一日	同	一四四	八六	二二	三七
五	同	同	♀	同 二十八日	同	一四五	九〇	二二	三七
六	同	同	♀	六月一日	同	一四〇	八八	二三	三六
七	同	同	♀	六月八日	同	一四二	八九	二二	三六
八	同	同	♂	六月六日	同	一三九	八六	二二	三八
九	同	同	♂	六月八日	同	一四四	八八	二二	四一

前記測定より見れば平均してテウセンオホアカゲラはサイシウオホアカゲラより翼、尾等に於て大なるを知る、以上の結果此新亞種はオホアカゲラミナミエゲラとの中間のものにして色彩上は前亞種に近きも體小にして「鳥」第四號四頁参照、後亞種よりは著しく淡色なるも測定上「鳥」第四號五頁参照同大なりミ云ふを得べし。故にサイシウオホアカゲラはエゾオホアカゲラミ一見して相異なる。此亞種發見によりて本邦産オホアカゲラ類ミテウセンオホアカゲラとの連續を明に示すものなりミ云ふを得べし、即ち體色の淡色のもの（北方）より次第に濃色（南方）に移り行くを見るべし。



次に地方に關せず單に淡色のものより濃色のものに至る順に列記せば、

エゾオホアカゲラ↓テウセンオホアカゲラ↓オホアカゲラ↓サイシウオホアカゲラ↓タイワンオホアカゲラ↓ナミエゲラ↓
オーストンゲラ

3. *Tarsipterne arcuata ussuriensis* Jony サンクワウテウ

日本鳥類圖説下卷三九五頁の記載ミ一致し半島に産するキウシウサンクワウテウミ比するに背面紫赤色にして半島産より赤味強く、次列風切羽の外瓣の縁朱紅色にして幅廣きミ、腹の白色部の範圍狭きミ及び最外側尾羽ミ第二對目の尾羽との差大なるも八分を超えず多くは五分以内なることによりて明かなり。左に測定を記せば、

番號	所 藏	亞 種	名	雌雄	採 集 年 月 日	採 集 地	翼長	尾長	跗 蹠	嘴 峰
一	京城高等普通學校	キウシウサンクワウテウ	♂	大正二年五月二十八日	京畿道光陵	寸分厘 三一五	寸分厘 七九五	寸分厘 九〇	分厘 五〇	分厘 五四

五	四	三	二	一	三	二
同	同	同	同	同	同	同
					サ ン ク ワ ウ テ ウ	
同	同	同	同	同	同	同
♂	♂	♂	♂	♂	♂	♂
同	同	同	同	同	同	同
六月	六月	六月	六月	五月	五月	五月
八日	六日	五日	五日	二十一日	二十一日	二十一日
同	同	同	同	同	同	同
					濟州島	濟州島
二九〇	二九〇	三〇五	三〇〇	三〇五	三〇〇	三〇〇
九九〇	九二〇	八一〇	八三〇	七〇〇	七〇〇	七〇〇
五	四	七	八	五	一	一
五〇	五〇	四六	四六	四八	〇八	〇六
五〇	五〇	四八	五〇	五〇	五〇	五〇

4. *Xanthopygia nareissina xanthopygia* (Hay) ヤマジロキビタキ

翼の白斑は雨覆のみならず内側三列風切の外辨にも及ぶ。普通のヤマジロキビタキと同じけれども採集せる二個の中一個は眉斑幅廣く且つ其上縁に後端に黄色あり(羽の基部は白色)又一個は眉斑幅廣けれども白色にして唯後方上頸に達する所は黄色なり、而して二個共上胸兩側の黒色部多し、半島産のものにても稀れに眉斑後端に黄色を帯ぶるものあり、體の測定其他を表示すれば

雌雄	眉	斑	採集年月日	採集地	喙峰	翼長	尾長	跗蹠
♂	上縁	黄	大正七年五月二十一日	濟州島	分厘 三五	寸分厘 二二五	寸分厘 一五〇	分厘 四五
♂	後方のみ	黄	五月二十六日	同	三二	二二〇	一五〇	五〇
♀			五月二十一日	同	三六	二一五	一五〇	五〇

5. *Hoplitis cantans cantans* T. & S. ウグヒス

テウセンウグヒスは(1)外形の稍小なること(2)背面紫色なること(3)眉斑及下面灰白色なること(4)脇は橄欖褐色に近し(5)初

列風切第一羽は同第二羽の半ばより稍々長し(6)鳴聲も「ケキョ」を長く連続して頻發すること等によりて異なる、體の測定を表示すれば

號	亞種名	雌雄	採集年月日	採集地	翼長	尾長	跗蹠	嘴	峰
一	テウセンウグヒス	♂	大正三年六月二日	京城西大門外	二寸三分	二寸三分	八分	八分	五分
二	同	♂	大正五年七月十六日	平南价川	二寸四分	二寸四分	八分	八分	五分
三	同	♀?	大正六年六月十九日	京畿道清涼里	二寸二分	二寸四分	八分	八分	五分
一	ウグヒス	♂	大正七年五月二十六日	濟州島	二寸二分	二寸三分	七分	七分	五分
二	同	♂	同 六月七日	同	二寸二分	二寸二分	八分	八分	五分

6. *Troglodytes troglodytes*, subsp. ミソサザイ類

フウセンミソサザイは(1)雨覆に於ける白斑の數極めて少く僅に中雨覆に三個づみの白色斑點を有するのみなること(2)初列風切外辨の茶色斑紋幅狭くして色濃きこと等によりて異なる恐らく日本産と同一なるべし。

亞種名	雌雄	採集年月日	採集地	翼長	尾長	跗蹠	嘴	峰
テウセンミソサザイ	♂	大正六年九月二十日	京城西大門外	一寸八分	一寸三分	五分	五分	四分
ミソサザイ類	♂	大正七年六月一日	濟州島	一寸六分	一寸五分	五分	五分	四分

7. *Eophona personata personata* (F. & S.) イカル

ハシブトイカルは(1)大雨覆内側三枚は白色に非ずして淡黄褐色なること(2)三列風切は淡黄褐色にして背の色と異なること(3)額は白斑を交へず純黒なること(4)腮の黒色部は極めて幅狭き(八厘位)こと(5)脚は淡黄色なることにて區

別せらる、體の測定を表示すれば

亞種名	雌雄	採集年月日	採集地	翼長	尾長	跗蹠	嘴	喙峰
ハシブトイカル	♀	大正七年一月九日	京城市場	三分七厘	二分八厘	七分	七分	七分
イカ	♀	大正七年六月一日	濟州島	三七〇	二七五	七〇	七〇	七五

8. *Alauda arvensis intermedia* Sw. チウヒバリ

幼鳥の記載左の如し。

背面黒褐色にして羽縁兩側は赤褐色先は灰白色を呈す、風切羽も黒褐色にして外辨赤褐色なり而して先端は幅狭く灰白色なり、後頭部の羽毛微に冠狀をなし先端何れも灰白色なり、顔には黄白色の肩斑あり、尾羽も黒褐色にして縁赤褐色最外尾羽白色なれども内辨内方は黒色なり、下面淡褐色にして脇は暗褐色を呈し喉は淡黄褐色なり而して喉には微かなる褐色斑點あり胸は赤褐色の地に黒褐色の縦斑あり、嘴は上嘴褐色下嘴稍長し、脚は淡褐色なり。第一初列風羽は幼鳥にては常に成鳥よりも長し。

亞種名	雌雄	採集年月日	採集地	翼長	尾長	跗蹠	嘴	喙峰
コヒバリ	—	大正六年五月二十日	平安南道龍岡郡	二分九厘	二分〇	六〇分	六〇分	三分八厘
チウヒバリ	幼鳥	大正七年五月三十日	濟州島	二分九厘	一分七〇	八五	八五	四分五厘

後趾の爪はコヒバリは一分六厘なれども濟州島のチウヒバリの幼鳥は三分八厘の長さ有す。

9. *Turdus major quepariensis* Kuroda シマシジウカラ

漢羅山南側雜木中に多し、其の鳴聲普通のシジウカラミ稍々異なり甚だ清亮なり、腹部中央の一黒縦斑は普通のシジウカラより幅廣し、雌は雄に比し喉及び上胸の黒色部に金屬性光輝多し。

番 號	雌 雄	採 集 年 月 日	採 集 地	翼 長	尾 長	跗 蹠	嘴	峰
一	♂	大正七年五月二十日	濟州島	六九 _{ミメ}	五九 _{ミメ}	一八 _{ミメ}	一一 _{ミメ}	一一 _{ミメ}
二	♂	六月九日	同	六五	五二	一九	一二	一二
三	♂	六月三日	同	六七	六二	一八	一一	一一
四	♂	六月一日	同	六八	六五	一八	一一	一一
五	♀	五月二十日	同	六六	五四	一七	一一	一一
六	♂	六月一日	同	六九	六四	一七	一一	一一

10. *Zosterops palpeirosa tjinne* Kuroda イ、シマメジロ

漢羅山南側の雜木林に多く現時最も盛に鳴く、殊に小鳴きするときに聲佳し、雄は下面淡黄褐色の地に中央縦に黄條通り。

番 號	雌 雄	採 集 年 月 日	採 集 地	翼 長	尾 長	跗 蹠	嘴	峰
一	♂	大正七年五月二十二日	濟州島	六〇 _{ミメ}	四五 _{ミメ}	一九 _{ミメ}	一一 _{ミメ}	一一 _{ミメ}
二	♂	六月一日	同	六一	四五	一八	一一	一一
三	♂	六月八日	同	六一	四五	一八	一一	一一

11. *Fijihalos caudatus trivirgatus* (T. & S.) エナガ

額淡赤褐色、頭上灰白色にして基部黑色なり、半島産と異なり嘴基部に起り眼の上部を経て頭側の黒色部に連なる黒帯は幅廣し。半島のものを *A. caudata magna* Clark として呼ぶ、*trivirgatus* を得ずハルテルト氏によればシマエナガのみにて *magna* はその幼鳥なりと云ふ。

番 號	雌 雄	採 集 年 月 日	採 集 地	翼 長	尾 長	跗 蹠	喙 峰
一	♂	大正七年六月一日	濟州島	一寸九分 一九〇	二寸六分 二六〇	五寸 五〇	二七分 二七〇
二	♀	同 五月二十一日	同	一寸八分 一八五	二寸五分 二五五	四寸八分 四八	二寸五分 二五

12. *Hystericus amurensis amurensis* (Temm.) ヒヨドリ

亞 種 名	番 號	雌 雄	採 集 年 月 日	採 集 地	翼 長	尾 長	跗 蹠	喙 峰
ヒヨドリ	一	♂	大正二年五月二十八日	京畿道光陵	四寸五分 四五五	四寸一分 四一五	七寸 七〇	一寸五分 一〇五
同	二	♂	大正七年五月二十一日	濟州島	四寸七分 四七〇	四寸三分 四三〇	七寸 七〇	一寸〇分 一〇〇
同	三	♂	同 六月一日	同	四寸三分 四三〇	四寸〇分 四〇〇	七寸 七〇	一寸〇分 一〇〇
同	四	♀	同 六月九日	同	四寸四分 四四五	四寸一分 四一〇	七寸 七〇	一寸〇分 一〇〇
同	五	♂	同 六月七日	同	四寸一分 四一〇	三寸八分 三八〇	六寸八分 六八	一寸〇分 一〇〇
同	六	♂	同 六月九日	同	四寸五分 四五〇	四寸〇分 四〇〇	六寸八分 六八	破損
同	七	♂	同 六月八日	同	四寸三分 四三五	四寸〇分 四〇〇	七寸 七〇	一寸〇分 一〇〇
同	八	♂	同 六月二十四日	忠清南道伽耶山	四寸二分 四二五	三寸八分 三八五	六寸五分 六五	一寸〇分 一〇〇
同	九	♀	同	同	四寸〇分 四〇〇	三寸四分 三四五	六寸七分 六七	九寸五分 九五

右表の如く忠南伽耶山産のものは他のものより小形にして次列風切羽の外瓣の縁及び中雨覆の先端は茶褐色なり、光陵及濟州島産のものは風切羽及中雨覆は暗褐色にして其の縁は自然に褪色せるのみなり、最後の二個の標本は疑ひなきエゾヒヨドリ *H. amurensis japonici* にして前表のものは全部ヒヨドリと見るべきものなり而して次列風切の外瓣其他に黄褐色あるは日本内地産のものにも往々

ある事にしてエゾヒヨドリに特殊のものは云へず然れども如何なる爲めか恐らく氣節の爲めには非らざるか又は年齢の爲めか不明なり。

濟州島産鳥類目錄

- | | | | | | |
|----|------------------------------------------------------|-----------|----|----------------------------------------|----------|
| 1 | <i>Gavia septentrionalis</i> (L.) | アユ | 16 | <i>Fimetta fulcata</i> (Georgi) | ヨシガモ |
| 2 | ” <i>arctica</i> (L.) | オホハム | 17 | <i>Nethon creca creca</i> (L.) | コガモ |
| 3 | ? <i>Colymbus fluviatilis philippensis</i> (Bonnat.) | カイツブリ | 18 | <i>Dafila acuta</i> (L.) | チナガガモ |
| 4 | ” <i>nigricollis</i> (Brehm) | ハジロカイツブリ | 19 | <i>Spatula clypeata</i> (L.) | ハシビロガモ |
| 5 | ” <i>cristatus</i> (L.) | カンムリカイツブリ | 20 | <i>Marrec penelope</i> (L.) | ヒドリガモ |
| 6 | <i>Plalacrocorax capillatus</i> (L. & S.) | シマツカハウ | 21 | <i>Fuligula marila</i> (L.) | スズガモ |
| 7 | ” <i>pelagicus</i> Pall. | ヒメウ | 22 | <i>Clangula clangula clangula</i> (L.) | ホ、ジロガモ |
| *8 | <i>Demitigretta sacra</i> (Gm.) | クロサギ | 23 | <i>Cosmonetta historionica</i> (L.) | ミノリガモ |
| 9 | <i>Hemigræzetta eulophotes</i> (Swinhoe) | カラミラサギ | 24 | <i>Mergus merganser</i> L. | カハアイサ |
| 10 | <i>Ardea cinerea jouyi</i> Clark | アナサギ | 25 | ” <i>serrator</i> L. | ウミアイサ |
| 11 | <i>Ixys galericulata</i> (L.) | チンドリ | 26 | ” <i>albicollis</i> L. | シロアイサ |
| 12 | <i>Anas platyrhynchos platyrhynchos</i> L. | マガモ | 27 | <i>Anser anser</i> L. | コマカリガネ |
| 13 | ” <i>zonorhynchos</i> Swinhoe. | カルガモ | 28 | ” <i>albifrons</i> (Scop.) | マガン、カリガネ |
| 14 | <i>Tadorna cornuta</i> (S. G. Gm.) | ツクシガモ | 29 | <i>Cygnus bewicki</i> Yarrel. | ハクテウ |
| 15 | <i>Casarca rutila</i> (Pall.) | アカツクシガモ | 30 | <i>Buteo buteo plumipes</i> Hodgson | ノスリ |
| | | | 31 | <i>Milvus ater melanotis</i> L. & S. | トウ |
| | | | 32 | <i>Falco peregrinus calurus</i> Latham | ハヤブサ |

- 33 *Phasianus colchicus karpovi* Dut. カウニイキジ
 * 52 *Eurystomus orientalis edouardi* Sharpe. ヲツトウソウ
 34 *Grus monachus* Temm. ナヅヅル
 * 53 *Halegion coronatus ungar* (L. & S.) ノヤンニヤウゴン
 35 *Squatarola squatarola* (L.) ゴイゴン
 * 54 *Cypselus pacificus* (Latham) アブツバメ
 36 *Fregattia alicuda* (Gray) イカルチドリ
 * 55 *Dryobates leucos quejutenensis*, subsp. nov. サイシウオ
 37 „ *alexandrina debilis* Swinhoe シロチドリ
 ホアカヅラ
 38 *Numenius cyanopus* Vieillot ホウロクシキ
 56 *Lymnopus kiraki seelohani* Hargitt コゲラキ
 39 „ *phaeopus variegatus* (Scopoli) チウシヤクシキ
 * 57 *Ptila nympha* L. & S. ヤイロテウ、ヤイロツグミ
 40 *Tringoides hypoleucus* (L.) イソシキ
 * 58 *Alauda arvensis intermedia* Swinhoe チウヒバリ
 41 *Hedromomus ochropus* (L.) クサシキ
 59 *Anthus cervinus* (Pall.) ノネアカタヒバリ
 42 *Tringa tenuirostris* (Horsf.) シンシキ
 * 60 *Hypsipetes amurensis amurensis* (Temm.) ホロドリ
 43 *Calidris leucophaea leucophaea* (Vrosg.) ノコシキ
 * 61 *Terephone atrocandata orskovi* Jony サンクワウテウ
 44 *Pelidna alpina schkatzina* (Vieill.) ノヘシキ
 * 62 *Alouatta leucosticta* (Raffles) コサメヒタキ
 45 *Gallinago gallinago* (L.) タシキ
 * 63 *Xanthopygia navesina xanthopygia* (Hay) トシロキヒタキ
 46 *Sceloporus rusticola rusticola* L. ヤシシキ
 * 64 *Muscicapa marginalis* Temm. トギタキ
 47 *Icterus sanctus* (Swinhoe) ツヅロカモメ
 * 65 *Cyanopitta cyano-rufata* (Temm.) オホルリ
 48 „ *caurus* L. カサメ
 66 *Turdus naumanni* Temm. ハチジヤウツグミ
 49 *Synthliboramphus antiquus* Gmelin ウルスマメ
 67 „ *pallidus* Gmel. シロヘシ
 50 *Streptopelia turtur orientalis* (Latham) シンペト
 * 68 *Monticola solitarius philippensis* (P. L. S. Muller)
 * 51 *Cuculus canorus telephonus* Heine クワクコウ
 イソヒヨドリ

- 69 *Phoenicurus auroreus aurorea* (Pall.) ジャウビタキ
- * 70 *Horeites cantans cantans* (T. & S.) ウグヒス
- * 71 *Phylloscopus borealis borealis* (Blasius) コムシクヒ
- * 72 “ *occipitalis coronatus* (T. & S.) センダイムシクヒ
- 73 *Regulus regulus japonensis* Blakiston キクイタマキ
- * 74 *Troglodytes troglodytes*, subsp. ミンサハイの亞種
- * 75 *Chelidon rustica gutturalis* (Scopoli) ツバメ
- 76 *Sitta europaea bedfordi* Ogilvie-Grant アカハラキマハリ
- * 77 *Parus major guelphartensis* Kuroda シマシジウカラ
- * 78 “ *rufus rufus* (T. & S.) ヤマガラ
- * 79 *Aegithalos caudatus trivirgatus* (T. & S.) エナガ
- 80 *Corvus macrorhynchos japonensis* Bonapart. ハシブトガラス
- * 81 “ *corone orientalis* Eversm. ハシボソガラス
- 82 “ *frugivagus pastinator* Gould ミヤマガラス
- * 83 *Zosterops palpebrosa ijime* Kuroda イノジメジロ
- * 84 *Eophona personata personata* (T. & S.) イカル
- * 85 *Chloris sitca minor* (T. & S.) コカラハヒハ
- * 86 *Passer montani saturatus* Stejneger スシメ

- * 87 *Passer rufilans rufilans* (Temm.) ニウナイスマメ
- * 88 *Emberiza cioides ijime* Stejneger イノジメホ、ジロ
- 備考 *印は本校所蔵にして多くは今回高橋承造氏の採集にかゝる、其他は李玉職博物館の所蔵にして大正四年一月より四月迄に亘り戸田直太郎氏の採集にかゝるものなり。
- 濟州島には鳥類多数に棲息すれども鶺鴒は棲息せず又島人に聞くに黄鳥は渡來せざるが如し。
- 尚以上目録の外に高橋氏の鳴聲を聞きたるものにホト、ギス、ツ、ドリあり、濟州島の鳥類は一般に朝鮮半島よりも對馬に近く例へば半島に産せざるウグヒス、エナガ、コカラハヒハは對馬及び九州と共通にて半島にては之れに代ふるにテウセンウグヒス、シマエナガ、テウセンカハラヒハを以てす、カラシラサギ、マミジロキビタキの如きは半島と共通のものなり、九州、對馬及び朝鮮半島にキウシウサンクワウテウを産し濟州島に本州と同一のサンクワウテウを産することは特筆する値あり、而して濟州島特産の鳥類はサイシウオホアカゲラ、アカハラキマハリ及びシマシジウカラの三種なり。

Description of a New Subspecies of *Dryobates**leucotos* from Quelpart Island.

By

Nagamiichi Kuroda, *Tyinkashi*

and

Tamezo Mori,

*Teacher of the Natural History in the Sool**Higher Common School.***DRYOBATES LEUCOTOS QUELPARTENSIS,**

subsp. nov.

♂ ad. (type of subspecies). Similar to *D. leucotos subcivris* Stejn. of southern Hokkaidō and the northern parts of Honshū, Japan, but rather smaller in size and darker in the coloration of whole body; upper parts less white; the white spots on wing feathers much smaller; ear-coverts whiter being more faintly tinged with brownish buff; under tail-coverts much deeper red; the white area on both upper and under surface much less fulvescent; nasal opening exposed faintly covered with some short hairs. Culmen 37mm., wing 145mm., tail 80mm., tarsus 22mm.

The type specimen is from Quelpart Island, one of the southern

islands of Corea. It was collected by Mr. S. Takahashi, May 21, 1918, and is now preserved in the Sool Higher Common School.

Eight more specimens of the present subspecies were examined by us. They measured as follows. In 3♂s: culmen 33-41mm., wing 139-144mm., tail 86-88mm., tarsus 22-23mm. long; and in 5♀s: culmen 36-37mm., wing 140-145mm., tail 86-90mm., tarsus 22-23mm. long.

The new subspecies is obviously intermediate between *D. l. subcivris* and *D. l. naniyai* of southern Honshū, Shikoku and Kinshū. In the coloration of feathers it is much nearer to the former than to the latter, while in size it is distinctly smaller than *subcivris* but undistinguishable from *naniyai*. It is decidedly distinct from *D. l. leucotos*, *D. l. nipponensis* (= *D. l. corensis*) and *D. l. lilfordi*.



アチバヅクの蕃殖の觀察

法學士川 口 孫 治 郎

大正七年七月廿一日川尻彌三次君よりの報によれば、高山町外、大八賀村漆垣内なる二宮神社境内に梟型の鳥が巢くつてゐる。更に聞けば、去十五日午後、内なる雛三羽が早や葡萄色の羽毛で體の大部分を蔽はるゝまでに成育し、二三歩跳躍し得るやうになつてゐたのを、附近の心なき男共が巢から持ち出して居つた。それを上西氏が見付けて其不心得を諭して巢に返さしたのである。唯其中の一羽を育てるこいつて留保した者があつたさうだが、一向經驗のない男のこゝこて程なく猫にさられたと聞く。

滯留中の實驗者は其翌廿二日午後、共々觀察に行く。巢は境内東南隅に離れて特立せる、周圍十六尺餘、高約十間許、地域百坪以上を蔽へる一大老樺の地上三間許なる幹の一部の空洞内に在る。

其内部の觀察にかゝる前、親鳥の日中の所在につきて確かめんと欲し、境内の木立、就中常綠樹の繁みを精察したが、遂に見出し得ない。乃で巢内の實驗に著手する。三間梯子を立てかけ、之を登つて巢の入口に近くと、今まで一向に知れなかつた親鳥が突然何處から飛び來つて、實驗者の頭上僅に一尺許の空を掠めて翔ける。下から示威の發聲するこゝ、攻撃だけは止めて附近の枝にこまりフルツミ響く低き嫌忌の表示らしい叫を反覆する。此時始めてアチバヅクに相違ないこゝこを確めた。愈々巢内觀察にかゝる。空洞の入口は徑二尺許、内部は奥へ一尺五寸、横幅三尺餘、下へ二尺で底になつてゐる。雛は二羽其一隅に蹲つてゐる。餘程成育して、人を見て唯さへ圓い眼を一入見張つて警戒し示威する。周圍に構巢材料もなく、又それを敷いてゐたらしい痕跡をも止めない。熟察するに、洞内底部の一隅、稍凹んだ處に卵が横へられ其處で孵化したものらしい。

此日の實驗で、彼親鳥は杉の密林よりも遙に明るい樺の枝の葉陰に日中靜止してゐるこゝこが分つた。之は勿論巢に近づく敵に對する用心の爲でもあらうが、羽毛殊に下から見た彼の腹部の羽毛の色彩が、樺の幹や枝や葉なきこゝの關係上、自づこ保護色になつてゐる

るこも、從て慣れない敵には甚だ分り難く、動もすれば樹の瘤ぐらゐりに看過されさうであるこも、寧ろ安全であるこも分つた。廿三日は陰曆六月十六日に當る。仍て月明を利用して徹夜觀察するこにした。夜禽のここくて從來あまり其習性が分明して居なかつたが、實驗の結果多少分明して來た。左記は其概要である。

午後四時觀察に着手す。今日は逸早く、櫻の葉陰に靜止し居る親鳥を認む。觀察の後、他の一羽をも發見す。前者は前日認めしものにして頭部葡萄酒に富み下面は比較的白らみ從て黒縦斑稍鮮明に見の。後者は比較的稍小型にて頭部葡萄酒に富み下面一體に比較的に茶樹の度濃く、從て縦斑白づこ前者はさ際立たず。從來の實驗に徴し前者は雌、後者は雄ニ推祭す。

同三十分撮影の爲に梯して巢に近づく。此時前日の如く攻撃し來るものは、大型の親、即ち推定の雌である。小型の親は稍隔つた枝に全く無關心の態で靜止し、毫厘の身動きもしない。午後九時、苦心慄慄の後、辛うじて雛の「レンズ」を嫌つて反り身になつた瞬間を撮影す。(第十四圖参照)

午後六時五十五分、觀察地點の背後の木立にて、始めて、ホツ、ホツ、の聲す。小型の親の聲である。午後七時、兩親鳥交互に巢に出入を始め。爾後頻繁に餌を運ぶ。同廿分、



第十四圖
ア ナ バ ヅ ク の 幼 鳥

一の親鳥巢に入れば、他の親鳥下方に垂れし枝にこまる。見張番の如く見ゆる。此時、空洞内なる巢よりチュリー、チュリー、チリ、チリ、の聲頻りに起る。雛の口を開きて餌を求むる聲らし。形容に似も付かぬ細いやさしい聲である。七時半、側方の木立で再び親鳥のホツ、ホツ、を唯三回反覆するを聞く。十六夜の月漸く東にほのめく。雙眼鏡にて北方觀察地點より、南の方、樺の枝間を透かし觀るに、鳥の動靜手にこる如く分明す。同四十二分、親鳥、枝にこまり片脚にて立ち、他の片脚を舉げて趾にて、嘴に

啣める「トンボ」を攫み、再び之を嘴に啣みなほし、更に啣みたるまゝを趾にてバサ／＼音させながら「トンボ」の羽を扱く。其の脚の働きは鈍拙なる人の手のそれよりも遙に巧に見受けらる。斯くて雛に哺するに適當なるものとする。彼の趾に獨特の粗き羽刺を有するは此扱きの作川をなす爲であるらしいことも分つた。

斯くて第一回の哺給より既に通じて二十回のそれに達した。時計を見るに七時五十分を指してゐる。僅に五十分間に、兩雛の爲に二十回、即ち各雛十回宛の哺給を受けてゐる。頻繁に過ぐるものと思はる。

斯く兩親鳥が其雛に哺給した餌食は、決して之を地上から採取しない。全く巢の所在の樗の八方に擴がれる枝の範圍を核として約十二三間を一邊させる立體的の空間のみで採取せらるゝ。採取の方法は、靜に枝にこまつて居て、見付け次第、飛んで行つて捕獲するのである。捕獲せらるゝものは、枝にぶら下がつて宿らんこし又は既に宿れる方言「オドリコトンボ」「シホカラトンボ」「チーチーセミ」等其主なるもので、外に時々追つかけて空中で捕獲して歸るこゝちもあるが、其時の獲物に前述以外の蟲もあるやうに認むれども、其何蟲なるかゞ確に分らぬ。

午後八時半頃から親鳥の巢に出入する度数が段々鈍ぶり始めた。反比例に雛が頻りに鳴く。九時五十分頃より月益々明らかになる。同五十五分兩親鳥同時に巢内に入る。程なく相次で出づ。其後、親鳥等各自枝に靜止して、餌を採取し哺給するこゝち著しく稀となる。

十時十分、川尻君歸り垣水君來る。此時實驗者は共に、樗の第一枝に靜止せる小型の親を距る三間半の下に接近したるに、彼は日中の無關心の態度を全く反對に、突如敢然として實驗者の雙眼鏡を狙つて攻撃し來り、額に其羽風を著しく感ぜしめた。巢に接近する敵を攻撃する任務は、日中は雌親、夜中は雄親であつたのが妙である。

十一時十分頃哺給ありし後、約二十分毎位に餌を運ぶのみ。即ち四十分毎くらゐに一度哺給の計算となる。雛折々例の鳴聲を發す。同十五分「ヨタカ」の鳴聲溪向ふの林よりす。同五十分頃より山際の水田に「カヘル」の「ケコ、ケコ」の聲全く歎む。東北の山頭に霧動き來る。溪の「カジカ」折々聞ゆ。

廿四日午前〇時十分霧散じ月冴ゆ。ホッ、ホッ、反覆三四回。一時半、雌親枝に止まりたるまゝ頻りに自己の毛なみを繕ひつ

あるを認む。椽の實、觀察者の爪先なる地上に落つ。勃として聲あり。四邊の寂寞を破る。二時三十五分、夜風の寒さを感じ。此間、兩親鳥全く働かず。

午前三時四十分頃より親鳥共漸く働き始む。同四時、四邊漸く明るく、月光を利用せずして觀察するを得るに至る。同十分聊か意外にも一雛、巢の入口に出現す。此時、兩親鳥狂へるが如く頻りに縦横に飛交ひ、時々近傍の枝に止まりて、低きホッ、ホッ、を發す。同十五分、雛始めて雌親のこまれる枝に移る。

此時以後、兩親鳥も巢内に残れる他の一雛の頻りに鳴きつゝあるを毫も顧みず。唯この巢立せし雛のみに、左右より押寄するが如き勢にて哺給す。雛は恰も日本人の小兒が往々手にする玩具なる「張子の虎」の如く、其頭をの字型に右に左に滑らかに緩漫に動かすつゝ、右に雌親より、左に雄親より盛に哺を受けつゝ、時々チュリー〜と鳴く。頓がて充足せし見え追求しなくなる。雄親「セミ」を銜み來つて哺せんとするに、雛開口せず。雄親煩悶の態にて頓がて右側に轉じ、雌親に哺す。雌親之を受けて例の扱き方にて殺し、嵩を小さくして雛に哺す。雛違々として遂に之を受く。

午前五時全く哺育を中止し、親鳥等は雛を稍離れし更に高き枝に靜止し、其後少しも動かさず。全く日中の休息に入つたのである。雛、程なく中心を失し傾倒せんとして他の枝に移らん企て、復た過ち細き枝に倒まに懸垂す。十二分許の後、三度目に安全に他の枝に移る。優に五六間を飛ぶ。懸倒十二分の間に頭部丈は正しく保ち、絶えず觀察者の方面に張目しつゝありしは、憐れにも滑稽であつた。

廿四日午後七時頃より巢内に残れる一雛にも哺給す。廿五日午前四時半、其雛を圍みて混雜せること昨曉の例の如し。數分前、巢立せるらし。哺給は夕方開始後當分の間、明け方停止前暫くの間、殊に頻繁にて、眞夜中には割合に少きものなることを確む。巢立後一ヶ月を経た八月廿八日頃、尚ほ樗を中心として、親子連れ合つて毎夜徘徊して居た。

因に云、此樗の空洞には數年前矢張り同様の鳥が巢くつて育つた。三里人は云ふ。實驗者は、從來の經驗より推して、來年には此處に巢くうことなからんも、來々年か其次ぎの年には多分、此アチバヅクの系統をひきしもの來り巢くうならんことを豫斷す。

オホトウゾクカモメとサケイとに就て

理學士 黒田長禮

「鳥」第二卷第六號一頁に鷹司理學士はオホトウゾクカモメ (*Callarecta aurantica* (Less)) が相模灣に於て採集せられたことに關し詳細な記事を發表せられた。予は此種類が一九〇八年以前に已に我國で捕獲されたことがある様に思はれるものを見た。それは横濱の故アラン、オーストン氏の List of Japanese Birds and Eggs from Hondo, Kinsu, Hokkaido, and the Ioochoo and other Islands, 1908, p. 8. である。此目錄には日本以外のものは悉く含まれては居らぬであらうと思ふのにオーストン氏はトウゾクカモメ類を左の名稱で示して居る。

(一) *Stercorarius catarrhactes* subsp. ? (11) *S. crepidata* (Basys.) (三) *S. parasiticus* (Linn.)

(四) *S. pomatorhinus* (T.)

右の内(一)はクロトウゾクカモメ *S. richardsi* ni (Swainson) と同であつて只 Basys があるのは Basys の誤りであることが直にわかる。(二)はシロハラトウゾクカモメ、(四)はトウゾクカモメ *S. pomatorhinus* (T.) であることが容易に知られるが(一)の種類は我國の何づれの種類を指すであらうかと思つたので調べて見た處が鷹司氏の論文二頁にある *Callarecta shua* Brunn. のシノニムであることが明となつた。處がオホトウゾクカモメは此の屬ではあるが別種である。然しオーストンも純然たるものと思へなかつたことを見え subsp. として記してある點は如何にもオーストンの種類が *shua* に似て居つたかを意味するのである。勿論 *shua* が日本で獲られたことを聞かない。そうだとすればオーストンの種類は最早殆ど疑ひのないオホトウゾクカモメであらうと思つた。近頃動物學教室の標本中にオホトウゾクカモメの一標本が藏せられて居るのを見出した、然かもオーストンが寄贈したものならしく附箋には廿三年七月下旬、浦賀沖、オーストン氏とあつた、即ち明治廿三年(一九〇〇年)に已に我國にて獲られたことが明となつた。此標本の測定を記し

て見るこ、嘴峰(露出せる)五一・五耗、翼三九一、尾一三八、跼蹠六五で少しも疑はしい點はない。

次に過日相州馬入川で一船頭の談に「昨年頃十一月頃」馬入の鐵橋の少し上流の河原で實に珍らしい外國の鳥が捕へられた云ふので、種々尋ねて見るこ河原に歩いて居る間は兩翼を引摺つて居つたこのこで、二羽しかも雌雄が一方は横濱の外人に、他方は東京の人に容易に撃たれた。其鳥を見るこ大さは鳩位で足に全部毛が生へて居り雄の方は中々色々の色で美しい鳥で尾は細長くあつたこのこで其名は外人に聞いた處が滿洲の鳥だ云ふたさうである。して横濱の方は剝製になつて居るこ云ふこ迄聞いた。此鳥は云ふ迄もなくサケイ(*Syrnoides paradoxus* (Pall.))に相違あるまいと思つた。横濱に若しあるならば見るこが出来たらうと思つたので横濱の寺岡直氏に問合せて見たが不幸にして心當がないこ云ふ返事であつた。それ故其儘にしてをいたがオーストンの前記の目錄10頁に明に此種類の學名が記されてあるのを見出した。又内田清之助氏の話によるこ餘程以前に此種か相州酒匂で一羽捕獲せられたこのこであるから恐らくオーストンの目錄にあるのはその酒匂で捕獲された爲めではなからうか。又船頭の言が事實であるこすれば少なくも此珍鳥が我國(朝鮮を除く)で二回然かも接近した地方で獲られたこ云ふのは面白い事である。

因に此鳥は朝鮮でも少く稀れに獲られた位で朝鮮の季王家博物館所藏の鳥類目錄(大正七年四月)にも所有せざる種類の内に入れてある程である、只飯塚博士によつて朝鮮で嘗て獲られたこの報告があるのみである(動物學雜誌第廿四卷、一〇三頁參照)。滿洲には普通の方で奉天附近並びに關東州で獲られて居る。奉天では澤山に剝製になつて居るのを見た位ひである。

かもめるる藤江の浦の沖津洲に夜舟いざよふ月のさやけき

顯 仲

沖繩及び奄美大島の採集鳥類

堀 井 榮 吉

余は昨大正六年七月九日鹿兒島を出發大島本島に約二十日を過ごし沖繩本島に約十五日を過ごし八月十四日一通りの採集を終つて歸つたのである。此約三十五日間千個近くの動物を採集して來たのであるが余の不熱心なものと淺學の上に參考書等に乏しい片田舎に居ることとて之等の調査には意外の時を費し未だ充分の整理は行き届かぬのであるが其一部分なる鳥類だけでもと本紙の餘白に發表する次第である何卒誤の點は余の淺學として一笑に付することなく先覺者の教導を賜はるを得ば仕合せに思ふ次第である。

儲て數の上から述べるなちば百個近くの採集をしたのであるが其種類から云ふならば甚貧弱で沖繩では十種位、奄美大島からは二十種位のものである。然して之れまでの動物分布表には沖繩と奄美大島は共に琉球とせられ一地方と看做されて記載せられて居る様であるが余の考では其間に多少の相異がある如く思はれるので奄美大島と沖繩とを區別して之等を記載する次第である、名稱の上に※印を記したるは奄美大島と沖繩とに共通の種類である。

奄美大島の部

1. *Totanus hypoleucus* (L.) イソシギ

一二三散在するを海岸に見るのみ然し一般に鵲の類は少なきが如し。

※ 2. *Sterna dougalli grucalis* (Gould) シニアジサシ

到處の海上に常に大群をなすを見る海岸の岩壁の斷崖の穴にも營巢育雛す七月には卵を採集するを得。

3. *Turtur orientalis* (Latham) キジバト

鳥民はカラバトニ云ふ森林の間にて採集せらるゝも多からず此島には繁殖し年を通じて見るこ云ふ。

4. *Sphenocercus pernamus* (Stejn.) リウキウアヲバト

極めて普通にして又到處に小群を見るを得れざ里には割合に少く深山にては容易に採集せらる、同島にて繁殖し年々を通じて採集せらる、鳥民は青鳩又は尺八鳩と稱し捕へて籠鳥とするもの多し容易に籠に馴れ得るも其性弱く飼ひ悪き鳥なりこ云ふ。

5. *Halegon cromata* rufa Wal. リウキウアカセウビン

鳥民はアカゴロ又はコールニ云ふ多く山間の溪谷に早朝其鳴聲を聞く高地にては少々普通なれども里には極めて稀なり山間に繁殖し年を通じて見るこ云ふ。

6. *Alcedo bengalensis* Gam. カハセミ

普通田圃の小流に見られ常に單獨に住む、年を通じて見るこ云ふ。

7. *Dryobates leucotos oostoni* (Ogawa) オーストンゲラ

深山に入る時は少々普通に見らるゝ種類なり早朝又は夕方には容易に採集せらる、深山に繁殖し年を通じて見るこ云ふ。

8. *Myzopetes kizuki nigrescens* Seeb. リウキウコゲラ

深山に見らるゝも多からず此地に繁殖し年を通じて見るこ云ふ。

9. *Hypsipetes amurensis ogurae* Hart アマニヒヨドリ

到處の森林中に大群をなすを見る十數羽採集せるも殆ど幼鳥のみなりしを以て見れば此島にて繁殖するなるべし鳥民は一般にヒヨドリノ類をヒウスンニ云ふ。

10. *Terpisphaea atrocapitata* illce Bangs リウキウサンクワウテウ

深山に少々普通に見らるゝ種類なり余の採集したるものは凡て幼鳥のみなり、鳥民の語る所にては四月上旬頃渡來し然も營

巢育雖して九月頃去るこ云ふ鳥民はズナガこ稱す長尾の意味なりこ云ふ。

17. *Muscicapa narcissina oustoni* (Bangs) リウキウキビタキ?

六月廿二日雌一羽を採集す。

※12. *Monticola solitarius philippensis* (Mull.) イソヒヨドリ

海岸には少々普通に小群をなすを見る容易に採集せらる、春季繁殖するものゝ如し余は幼鳥をも採集せり。

13. *Erihaeus komadori* Temm. アカヒゲ

深山溪谷に極めて普通なり春季繁殖し年を通じて見らるゝこ云ふ、余の採集せるものは凡て幼鳥のみなり、鳥民の之れを採集するには細竹の管の長さ二寸位の中央に穴を開き管の中にヨシの葉切れを入れ呼笛を作り笛の一端を指にて閉塞し一端を口に當てゝ高く一聲吹く時は良く其音を慕ひ集る故容易にこりもちにて多く採集し得るなり。籠鳥こなすが故に其繁殖時季には一日數十を捕らへ業こなす者ありこ云ふ。

※14. *Cisticola cisticola bruniceps* (T. & S.) セツカ

畑地の間に多く散棲し容易に採集せらる。

15. *Hirundo javanica namuyei* (Stejn.) リウキウツバメ

所々に散棲するを見るも多からず春季渡來營巢育雖し十月頃去るこ云ふ。

16. *Pericrocotus teginae* Stejn. リウキウサンセウクキ

深山に見らるゝも多からず、本島にて繁殖するものゝ如く余の採集せるものは幼鳥なり年を通じて棲息すこ云ふ。

17. ? *Parus rufus castanorensis* Gould タイワンヤマガラ

鳥民はヤマガラスこ云ふ山間に見らるゝも多からず春季繁殖し年を通じて棲息すこ云ふ。

※18. *Parus major okinawa* Hart. チキナハガラ

所々に見らるゝも多からず春季繁殖し年を通じて見らるゝ云ふ鳥民はメスウマニ呼ぶ。

19. *Corvus macrorhynchos leucicauli* Lesson. リウキウハシブトガラス

山地に小群を見る、本島にて繁殖するものゝ如く採集せるものは幼鳥なり年を通じて見らるゝ云ふ。

20. *Corvus lithi* Bonaparte ルリカケス

深山に普通なり常に小群をなし所々に鳴聲を聞く、余の採集せるものは幼鳥多し。春季生殖するならん日中は採集困難なるも早朝又は夕方には稍採集し易し、杉箬を割りて其間にヨシの葉を挟み呼笛を作り吹く時は其音を慕ひ集來す故容易に採集せらる。住用村を中心として最も多し、數年前迄は濫獲せられて其數減少したりしも其後保護したる故繁殖したり云ふ鳥民はヒウサニ云ふ。

※21. *Zosterops palpebrosa lochoensis* Tristram リウキウメジロ

到處に小群をなすを見る春季繁殖するものゝ如し。余は幼鳥を採集す、村童は附近の丘上に於て捕獲せるを數回見たり。範鳥をなし鳥民は一般にメジロをアタクサマニ云ふ。

沖繩島之部

1. *Turdus taigoo* (Sykes) インドミフウヅラ

余は甘藷畑の間にて採集せるも多からざるが如し。

2. *Gallinula chloropus parvifrons* Blyth バン

沼地又は海岸の草間に普通に見らる余の採集せしものは凡て幼鳥なるを以て見れば本島に繁殖するならんか兒童の捕獲せる幼鳥を到處に見たり。

3. *Charadrius cantianus dealbatus* (Sw.) シロチドリ

渚に散棲するを見るも多からず本島にて繁殖するならんか余の採集せるものは凡て幼鳥なりき。

※ 4. *Sterna dougalli gracilis* (Gould) シニアジサシ

到處の海上に大群集をなすを見る鯉を漁するものは其群を見て鯉群のあるに揚所を知る便にす。一羽を射落す時は群鳥それに集合する故容易に多数採集するを得年を通じて見又海岸の斷崖に營巢、育雛す云ふ。

5. *Ninor scutulata* (Rafin.) アナバヅク

森林に棲し本島にて繁殖するもの如く余の採集せるものは幼鳥にして種類の決定に困難なりき。

6. *Hypsipetes amurensis pygmaea* Stejneger リウキウヒヨドリ

森林に群棲するを見る春季繁殖するならんか余の採集せるものは幼鳥のみなり。

※ 7. *Monticola solitarius philippensis* (Miller) イソヒヨドリ

海岸又は海岸近くの松林に此小群を見る本島にて繁殖するもの如く採集せるものの中には幼鳥多し。

※ 8. *Uristicola casticola bruniceps* (T. & G.) セツカ

耕地殊に甘蔗畑の間に單獨に棲むを見る容易に採集せらる。

※ 9. *Parus major okinawae* Hart. チキナハガラ

森林に普通小群をなすを見るも多からず營巢繁殖するもの如し。

※ 10. *Zosterops palpebrosa tochoensis* Tristram リウキウメジロ

森林中に普通小群をなし花蜜を探るを見る稍々多く營巢、育雛するもの如し。

此稿を脱するに當り此採集に於て沖繩縣技師小管伴七郎、沖繩縣糖業試験場長農學士兒玉潤一、同場技手新里利恒、大島糖業試験場長農學士鳥原重夫、同場助手嘉忠義、諸氏の多大の援助と便宜とを與へられたるに對し茲に深謝の意を表す。

勘察加半島西海岸採集鳥類目錄

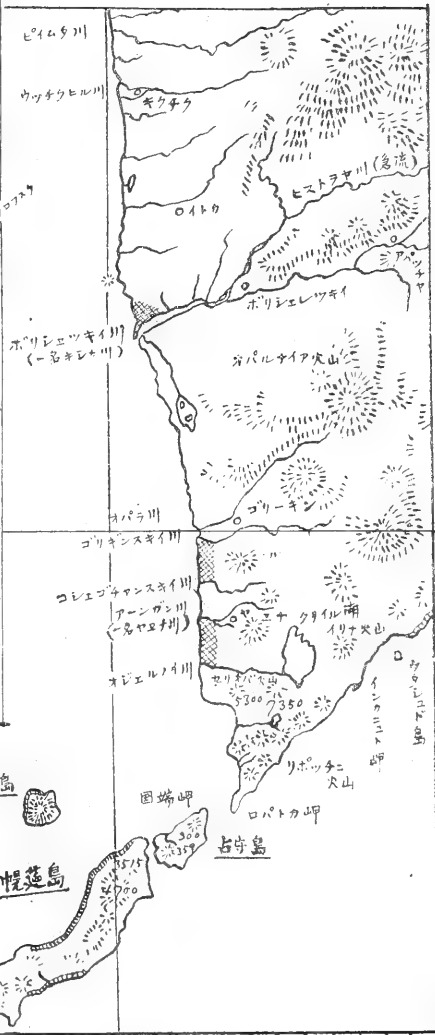
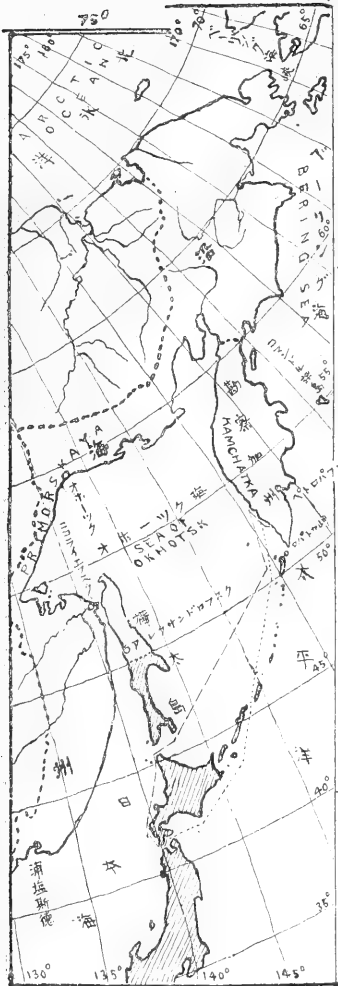
叔山徳太郎

本目錄は本年六月中旬より八月下旬に互り余が露領勘察加 (Kamohatake) 西海岸の一部に於て採集せる鳥類標本全部の種名及亞種名なりとす。

而して今回の採集巡路及び日程下記に如し。

- | | | | | | |
|---|----------|---------------------|---|----------|---------------------|
| 同 | 大正七年六月八日 | 浦鹽丸にて函館港發 | 同 | 日 | ヤウエンスキイ着 |
| 同 | 十日 | 宗谷海峡通過 | 同 | (四日間採集) | |
| 同 | 十四日 | ホリシエレッツキイ着 | 同 | 卅一日 | 同地發オジエロノイ着 |
| 同 | 十五日 | 同地發 | 同 | (十八日間採集) | |
| 同 | 十六日 | コシエエチエンスキイ着初めて上陸 | 同 | 八月十八日 | 浦鹽丸にてオジエロノイ發 |
| 同 | (卅六日間採集) | | 同 | 日 | コシエエチエンスキイ着發 |
| 同 | 七月廿二日 | 小汽艇にて同地發、ヤウエンスキイ着上陸 | 同 | 十九日 | ホルシエレッツキイ着上陸 |
| 同 | (三日間採集) | | 同 | (三日間採集) | |
| 同 | 廿五日 | 同地より陸路オジエロノイ間採集 | 同 | 廿二日 | 浦鹽丸にてホルシエレッツキイ發(歸航) |
| 同 | 日 | オシエロノイ着 | 同 | 廿五日 | 擇捉海峡通過 |
| 同 | (二日間採集) | | 同 | 廿七日 | 襟裳岬沖通過(午後) |
| 同 | 廿七日 | 同地より陸路ヤウエンスキイ間採集 | 同 | 廿八日 | 函館港着(午前) |

勘察加西海岸 地方之一部



54°

52°

50°

号符
 - - - 往航
 寫純
 採集地

阿頼皮島

幌筵島

圖端岬

占守島

154°

156°

158°

圖 五 十 第

此採集に於て五十四種類、合計二百〇八羽を得たり。各所に於て多大の便宜を與へられたる堤商會員諸氏に對し深謝の意を表す。尙採集に際し過勞を共にせられたる助手新谷昂三君に感謝す。此各種類の分類に際し指導せられたる黒川理學士の好意を厚く鳴謝す。左に採集鳥類を各科に分ち採集地、月日、其他を細記すべし。但し採集地は僅々四―五個所に過ぎざれば略字を用ふ。即ちKはコシエゴチエンスキイ *Koshegochenski*, Yはヤウエンスキイ *Yawenski*, Oはオシエレンノイ *Ojornoi*, Bはギナンホンスキイ *Bolshevitski*, Wはミトギンスキイ *Mitoginski*, Gはグリーンキンスキイ *Goliginski* なりとす。

GAVIIDÆ

(1) *Gavia septentrionalis* (L.) ホウ

K. 1 ad., June 16.

(2) *Gavia* sp. (?) *Gavia arcticus arcticus* (L.) ノホノイ

G. 1 young, June 23.

PUFFINIDÆ

(3) *Puffinus tenuirostris* (Temm.) ノンホノノノナギエリ

K. 2 ♂s. & 2 ♀s?, June 20, 2 ♀s, July 12 & 16.

今回採集の各標品諸部の測定表を左に掲ぐ(單位は耗にして重量は匁なり、以下同斷)

番號	採集月日	嘴峰	翼長	尾長	跗蹠	重量	雌雄	測定者
K. 3	20/VI	31.5	262	81	51	92.5	♂	根山
K. 4	"	30.5	264	86	48	91.5	♂	"
K. 5	"	31	258	84	50	92	♂?	"
K. 6	"	32	266	89	50	97	♂?	"
K. 89	12/VII	32	261	83	51	122	♀	"
K. 103	16/VII	34	258	88	49	101	♀	"

(4) *Fulmarus glacialis glaptesche* Stejn. ノナンロフルマカモ

K. 2 ♂s, July 9 & 10, 2 ♀s, July 8 & 12.

FULMARIIDÆ

番號	採集月日	嘴峰 (mm)	翼長	尾長	跗蹠	重量	雌雄	測定者
K. 51	8/VII	34	306	124	50	180	♀ ad.	根山
K. 67	9/VII	33	292	121	53	139	♂ ad.	"
K. 78	12/VII	26	31.9	124	51	153	♂ ad.	"
K. 88	16/VII	33	279.5	113	48	139	♀ ad.	"

上記の各標品は皆暗色型なり、尙他に余が目撃せしものも皆同型にして淡色型は一羽も見る事を得ざりき、本亞種に於ては恐らく暗色なるものが原型にして淡色型なるものは變型なるべし。此點はフルマカモ (*F. g. glacialis* L.) には反對なる譯なり。尙フルマカモが邦領海内にて獲られたるの記録あれども頗る疑はしく恐らく本亞種を誤認せしものなるべし。

ANATIDÆ

(5) *Merganser serrator* (L.) ウツマイサ

K. 2 ♂s, June 18; 1 ♀, July 12.

(6) *Fuligula fuligula* (L.) キントロンシロ

K. 2 ♂s, June 17 & 18.

(7) *Marila marila marila* (L.) スヰガキ

K. 2 ♀s, June 17 & July 14; 3 youngs, July 17;

B. 1 young, Aug. 19.

(8) *Dytila acuta* (L.) ナナカシキ

K. 2 ♀s, June 23 & July 12; 2 youngs, June 16 & 23.

(9) *Maruca penelope* (L.) コムリガキ

K. 1 ♀, June 29; 2 youngs, June 29 & July 4.

(10) *Janus platyphanca platyphanca* L. フカキ

K. 1 ♀, June 26; 5 youngs, June 16; 26 & July 19.

(11) *Melanonyx segetum scirvirostris* (Swinh.) コムンコ

K. 1 ad, June 26.

本標品各部の測定次の如し、嘴峰 71.5mm. 下嘴の最厚部 11.5mm.
翼長 447.5mm. 尾長 147.5 mm (凡々) 跗蹠 80mm. 中趾爪共 85mm.
尾羽の數十六枚、齒の數廿四個。

註——本亞種並に其「Type」のものにも稀に尾羽の數の十八枚なる

ものあり。

FALCONIDÆ

(12) *Archibuteo lagopus*, subsp. ♀ ケアンシノスリの類

B. 1 imm., captured on June, 1918.

オホシロハシキイ堤商會漁場員東井金造氏より寄贈せられし活物にして目下余の飼養を續行せるものなり。

跗蹠の後面は蛇腹狀にあらざりて網狀なり。

PHASIANIDÆ

(13) *Lagopus lagopus albus* (Gm.) カリノトライネナ

K. 4 ♂s, June 16, 21 & 23; 2 ♀s, June 27 & July 7, 13 youngs,

June 27—July 20; 8 eggs; June 21; O. 1 ♀, Aug. 10; 1 imm.,

Aug. 8.

番號	採集月日	嘴長	嘴基部の高サ	翼長	尾長	跗蹠	雌雄	測定者
K. 8	16/VI	21½	12	191	126	42	♂	親山
K. 28	21/VI	21	12	197	120	41.5	♂	”
K. 9	23/VI	21	12	197.5	126	41.5	♂	”
K. 10	”	20	—	203	125	41.5	♂	”
K. 11	17/VI	20	11.5	188	106	41	♀	”
K. 48	7/VII	19	10.5	185.5	119	33	♀	”
O. 46	8/VIII	19	8	156	70	37.5	♂ juv.	”
O. 47	10/VIII	18.5	12	185.5	115	39	♀	”

因し *Lagopus lagopus albus* (Gm.) は北米のハンソン灣の西岸より西は北アラスカを經て東部西比利亞に達す。黒田理學士所藏の北千

鳥の一標品及び動物學教室の雌雄のものは *Trigopus trigopus* よりも *Trigopis* の Group の方に近き様にも思はるゝ由にて且つ勘察加のものとは全く相違せりと云ふ。故にカラフトライネウが千島に産すや否や目下の所にては不明なり。

CHARADRIIDÆ

- (11) *Charadrius dominicus fulvus* Gm. ムナヅロ
B. 1 (sex[♂]), Aug. 22.
- (15) *Oithobremus mongola mongola* (Pall.) メタイチドリ
O. 2♂ s, July 25 & Aug. 2; 1 (sex[♂]), Aug. 2; 2 youngs, Aug. 7.
- (16) *Numenius cyanopus* Vieill. ホウロタンシキ
K. 1♂ ad, July 18.
- (17) *Phaeopus phaeopus variegatus* (Scop.) チロシヤタンシキ
O. 1♂?, Aug. 2.
- 此標本には淡色の頭中央線全くなし恐らく生殖後の爲め摩損し去のしならん。
- (18) *Limosa limosa melanuroides* (Gould) タンロンシキ
K. 1♂ ad, June 17; B. 1♀?, Aug. 19.
- (19) *Terekia terek* (Lath.) ノリンノシキ
O. 1♂, Aug. 14; 2♂ s?, Aug. 13 & 14; 2♀ s, Aug. 14.
- (20) *Heteractitis incanus incanus* (Gm.) メリケンキアミノシキ
P. 1♂ imm., Aug. 19.
- 嘴長三八、鼻溝の長一八・五、翼一五三、尾六三・五、跗蹠三四、中趾爪共三二耗あり。脚は帯暗緑黄色にして趾端黄色ならん。
- (21) *Heteractitis incanus brevipes* (Vieill.) キアミノシキ
O. 4♀ s ad, Aug. 2 & 7.
- (22) *Tringoides hypoleucis* (L.) トンシキ
O. 1♂ imm., Aug. 14.
- (23) *Phalaropus hyperboreus* (L.) ノカエリヒレンシキ
K. 2♂ s ad, June 16 & 17; 1♀, June 16.
- (24) *Limontes minuta pygmaea* (Pall.) ムナキ
K. 2♂ s, July 6 & 12; 4♀ s, July 6, 12 & 19, O. 3 imm., Aug. 12-14; B. 1♂, Aug. 21.
- (25) *Acteria tenuirostris* (Horsfield) チンシキ
K. 1♂ & 1♀, July 12; O. 1♀?, Aug. 14.
- (26) *Ptilina alpina sibirica* (Vieill.) ノンシキ
K. 3♂ s, June 16 & July 6; 3♀ s, June 16 & 24.
- 採集せる大羽のもの、嘴及翼の長さは雄、嘴峰 35.5—36.5mm. 翼 113—117mm. 雌、嘴峰 39—40mm. 翼 105—121mm. ちり、一羽の雌の翼 105mm. は短かぢり過ぐ感あれど該標品の嘴峰は 40mm. ありて明に *P. a. alpina* (L.) とは異なり。

(27) *Stercorarius opehatus* (Banks) クロトウゾクカモメ

K. 3 ♂s, (1 black phase), June 19, July 4 & 14, 1 ♀, June 29;

B. 1 ♂, Aug. 22.

本種成鳥の夏羽の下面は肥、喉及び前胸部及び腹部は帯黄白色にして後胸部に幅横き灰鼠色の横帯あり。

(28) *Lissa tritactyla pollicaris* Ridgw. ニユカモメ

K. 1 wing, July 8; Y. 1 ♂imm, July 23, 1 ♀, July 24; O. 1 ♀,

Aug. 8.

(29) *Chroicocephalus rithundus* (L.) ユリカモメ

K. 3 ♂s, July 2; 1 ♀, June 18.

七月二日に採集せし一雄成鳥は頭部は僅かに夏羽を變じつゝ、
あるも翼、尾其他は磨損せる儘の冬羽のものなりき。

(30) *Larus canus* L. カモメ

K. 1 ♀ad., June 16.

(31) *Larus marinus schistisagus* Stejn. オホセグロカモメ

K. 1 ♂ad., July 15; 1 ♀imm, June 18; O. 1 ♀, Aug. 8.

内田氏著『海産保護鳥類圖説』及び『日本鳥類圖説』上巻の索引に依れば

(A) 翁の色淡し……………オホセグロカモメ

(B) 翁の色濃し……………セグロカモメ

とあれども誤りにて Saunders の英國博物館鳥類目録 Vol. XXV より抄録すれば

(A) Mantle sooty black to dark pearl-grey…………schistisagus.

(B) Mantle line-grey to dark pearl-grey…………regia.

とあり。因に東京附近にて獲らるるものにも翁の色濃淡二様のものを見受く、而して極めて淡きものは正確なる *L. argentatus regia* なるも他の濃色なるものは明に決し難きも多分 *L. marinus schistisagus* なるべし。今回採集せる二羽の成羽のものゝ内にも濃淡二様を認め、それと淡色の方にてても *schistisagus* の記載とよく一致すれば今回の採集品全部を *schistisagus* とすも恐らく誤りあらざるべし。

(32) *Sterna longipennis* Nordm. アジサシ

K. 1 ♂, June 16; 1 ♀, July 3.

内田氏『日本鳥類圖説』上巻アジサシの項に脚色は黒き様記しあれども活物若くは新しき死鳥にありては濃深紅色を呈す。

(33) *Sterna paradisica* Brunnich キタアジサシ(新稱)

K. 1 ♀, July 16; B. 1 ♀ & 2 (Sex?), Aug. 20.

アジサシに極めて近きも嘴及び脚の朱紅色なるを以て誤る事なし、新舊兩世界の北部に産す。勘察加に於ては疑なく兩種共蕃殖す、共に親鳥の哺育を受けつゝある雛を日撃せり。

左に今回採集せるカタアシサシの各部の測定を掲ぐ。

番 號	採集月日	全長	嘴 峰	翼 長	尾 長	跗 蹠	雌 雄	測 定 者
K.104	16/VIII	331 ^{1/2}	27.5	246	155	16	♀	榎 山
B.11	20/VIII	352	30.	269	184	16.5	♀	”
B.12	”	326	30.	267	180	15	♀	”
B.13	”	354	31.5	264	160	15	♀	”

ALCIDEÆ

(34) *Taulea cirrhata* Pall. エムユリカ

Y. 1 ♀ ad., July 23.

(35) *Uria lomvia arva* (Pall.) ノンブトウミカリス(新種)

K. 2 ♂s ad., July 12 & 18; 1 sex?, July 27; O. 1 ♀, Aug. 13.

番 號	採集月日	嘴 峰 の高さ	翼 長	尾 長	嘴 蹠	中趾 爪共	雌 雄	測 定 者
K.89	12/VIII	42.5	15.5	215	53	39	♂	榎 山
K.114	18/VIII	47	16	229.5	55	38	♂	”
K.	27/VIII	48.5	—	227	60	39.5	♀	”
O.62	13/VIII	40.5	11.5	135.5	46	35.5	♀	”

(36) *Simoenochus cristatulus* (Pall.) エトロフウミスヅメ

K. 1 ♀, July 18.

(37) *Synthlipsis antiquus* (L.) ウニスヅメ

K. 1 ♀ ad., June 18.

(38) *Brachyphapus yersia* (Pallasi) マダラウミスヅメ

B. 1 Young (sex?), Aug. 20.

今回採集せし一標本は極めて小形にして測定上も亦各部分小なる故 *B. marmoratus* (Gm.) に等しき様なるも充分なる調査の決果マダラウミスヅメの幼鳥と決したり。今英國博物館鳥類目録 XXVI, pp. 592—593 を見るに幼期のものゝ記載は次の如し

“Immature. Resembles the adult in non-breeding plumage, but the feathers of the upper parts are narrowly margined at the extremity with whitish buff, and some of the feathers of the breast and belly are fringed with smoky-brown; the bill is much shorter than in the adult and measures 0.65 inch.” (Ogilvie-Grant).

今回の標本は全く此記載と一致せり且つ尾羽は黒色なるも小なる帯白色斑を有するところはマダラウミスヅメの場合に一致せり。只幼鳥なる爲め測定上大に小形なること次表の如し。耗す時つにて同一標本の測定を併記せり。

全長	嘴 蹠	翼 長	尾 長	跗 蹠	中趾爪共	中趾の爪	測 定 者
212 ^{1/2}	16	124	31	17.5	23	4	榎 山
8.30 ^{1/2}	0.65	4.9	1.22	0.7	1.1	0.18	”

従來勘察加よりは *B. perdit* 及び *B. brevirostris* の二種は報告せら

れあれども *B. marmoratus* は報告なし故に此標本が後者に非ざる

ことを一層確實ならしむ。就も Clark 及び *Brachyphampus sp.*

として勘察加にて見たる事を記し居るも採集せしむりし故種名は決し

兼ねる由記載しありしものは恐らく前二者内なるべく又 Alentian

Island については *B. marmoratus* を見たりと記せり。シーホーム氏其

他従來我國にては *B. perdit* と *B. marmoratus* とを誤り居りたる

事あり。近似の三種類の成鳥の相違点を記せば下記の如し。

(A) Culmen from forehead to tip 0.65—0.95
inch; outer tail feathers brownish black.

(A) Upper parts barred with rufous chestnut (breeding-
plumage); culmen 0.65—0.7. *marmoratus*.

(B) Upper parts barred with dull tawny and buff (breeding-
pl.); culmen 0.8—0.95. *perdit*.

(B) Culmen from forehead to tip 0.4; outer tail-
feathers white. *brevirostris*.

ALAUDIDÆ

(39) *Alauda arvensis pekinensis* Swinh. ホトトギス

K. 1 ♂, June 26; 2 ♀s, June 16 & 26; Y. 4 ♂s, July 28 & 29,

1 ♀, July 29; O. 2 ♀s, July 25 & 27; 2 (sex?), July 25 & 31; B.

1 ♂, Aug. 19.

MOFACILLIDÆ

(40) *Budytes flavus smilthina* (Hartl.) ツメナガセキレイ

K. 2 ♂s, June 16 & 23; 1 ♀, July 17; B. 1 imm., Aug. 21.

本亞種幼鳥の色彩を述べれば眉線は白色ならずして帶黄乳酪色を呈
す。——ツメナガセキレイ (*Budytes flavus fulvus* (Sw.)) 幼鳥に於て

は(札幌博物館所藏樺太産標品並に黒田氏所藏臺灣産標品に依る)眉
線は反對に灰白色なり。——體の下面はツメナガセキレイ幼鳥に比

し餘程赤味勝ちにして寧ろキキキレイ (*B. leavida melanope* (Pall.))
幼鳥に類似す。されどキキキレイ幼鳥より春面の黄綠色に富む事脚

の煙黒色にして(キキキレイ幼鳥の脚淡紅色)後趾の爪長き事等に依
りて直に判別するを得。 *B. flavus flavus* (L.) と本亞種とは極めて似

たるものなれば幼鳥に於ても殆んど等しくして記載のみより見
時は其何れなるか判別に苦む程なり (Hartert, *Vog. Pal.*, p. 288.)

併乍其分布上より見る時は本亞種と見る方正當なりと信ず。ホルテ
ルト氏も本亞種の蕃殖地を次の如くに記されたり “Brühet wahr-

scheinlich nur in Kamtschatka.” 又クラーク氏に依れば本亞種
に關し “This bird was common in the lowland about Pet-

ropulski (Petrovavlovsk, Kamtschatka), especially in a broad
valley which makes inland from the large pond near th

town" (Clark, Proc. U. S. Nat. Mus., Vol. XXXVIII, p. 71, 1910) なる。

本亞種は從來我領土内にては朝鮮及び滿洲にて獲られたるのみならずが今回余が千島幌筵沖航行中船上にて捕獲せるものは疑なき本亞種なりき。恐らく北千島には渡り行くものもあり得べしと信ず。因にツメナガセキレイは千島及び樺太には産するも勘察加よりは報告せられたる事なきものと如し。

(41) *Motacilla alba lugens* Kittlitz ホクセキレイ

K. 4 ♂s ad., June 16—July 7; 1 ♀ ad., July 19; 4 ♀s imm., June 19—July 7; Y. 1 ♂ ad., July 28; 1 ♂ imm., July 29.

(42) *Anthus cervinus* (Pall.) ムネノカタヒバリ

K. 3 ♂s, June, 16; 3 ♀s, July 14—19; 3 youngs, July 4; 6 eggs, June 23; Y. 1 ♂, July 28; 1 ♀, July 27; 1 young, July 23; O. 3 ♂s, July 25 & Aug. 15 & 16; 1 ♀, Aug. 16; 4 youngs, July 23—Aug. 5.

MUSCICAPIDÆ

(43) *Muscicapa mugimaki* Temm. ナキトキ

K. 1 ♀, June 19.

TURRIDÆ

(44) *Turdus obscurus* Gm. トウチヤジン

K. 1 ♂, June 16. (45) *Luscinia caliope* (Pall.) ノト

K. 2 ♂s, June 17 & 18; 3 ♀s, June 16, July 14 & 19. 1 young, July 14; O. 2 ♀s, July 26.

今回採集せる五雌の内、四羽の喉部は各々其低度を異にすれど全く白色ならずして雄鳥のそれの如く鮮紅色を呈し且頸線、眉線其他の諸部雄鳥と異ならず、されど雌鳥に於ける紅色部は褐色せる如きもの多けれど中には殆んど雄と見誤るゝ程のものあり、斯るものにも鮮紅色部と胸部暗色との間に些少の白色部を認め得れば鑑別する事難からず。從來本種雌鳥の喉部は紅色ならずして白色なりと記載せられたるもの甚だ多く也 (Seeborn, Cat. B. Brit. Mus., Vol. V, 1881, p. 306; Oates, Faun. Br. Ind. Birds, Vol. II, 1890, p. 102; Seeborn, Bds. Jap. Emp., 1890 pp. 52—53; Dresser, Man. Pal. Bds., Part I, 1902, p. 66; McGregor, Man. Phil. Bds., Part II, 1909, p. 553) 只バルネルト氏のみは次の如く記されたり “♀ ad. Oberseite wie beim ♂ ad., der Superciliarstreif mehr rahmfarben. Kinn und Kehle weiss, meist mit fahlbraunen Spitzon-Flecken, der obere Teil nicht selten rosenschon verwaschen.” (Hartert, Vög. Pal. p. 738) 因に余が該地に於て觀察せる所に依れば上陸當時(六月中旬)採集せる一羽の雌の喉部は白色なり

き、而して六月下、七月上の兩旬は雌鳥の抱卵期なるものと如く單獨の雄鳥を見るのみにして雌鳥に會せし事なし。七月中旬以後は雌雄二番づきのものを目撃せし事數回ありて毎時注意せしも皆雌鳥の喉部は紅色なるものと如く見受けたり。或は本種雌鳥の生殖羽にはあつちかと思はるゝを以て記して後の研究を俟つ。

附記—余の所藏せる信濃産雌一羽(十一月採集)の喉部は極めて淡きも紅色を認め

SYLVIIDÆ

(46) *Loeustella lanceolata* (Temm.) トキノセンリウ

M. 1 ♀, June 14.

(47) *Loeustella ochotensis* (Midd.) シトヤンリウ

K. 5 ♂s, June 16—July 18; O. 1 ♀, July 26; B. 1 ♀ imm., Aug. 19.

番 號	採集月日	喙 峰	翼 長	尾 長	跗 蹠	雌 雄	測 定 者
K. 54	16/V I	14 ^{1/2}	72	55	23	♂	狹 山
K. 55	"	13	69	51	23	♂	"
K. 56	24/V I	13.5	69	55	24.5	♂	"
K. 75	25/V I	13.5	72.5	61	23.5	♂	"
K. 117	18/V II	12.5	71	57.5	23.5	♂	"
O. 13	26/V II	14.5	66.5	54.5	25	♀	"
B. 4	19/V III	12	67	50	24	♀? juv.	"

(48) *Acanthopneuste borealis borealis* (Blasius) コムシクヒ

O. 1 ♂, July 26.

HIRUNIDIDÆ

(49) *Riparia riparia jinnae* (Lönnb.) シヤウドウツバメ

O. 4 youngs, Aug. 2.

SITTIDÆ

(50) *Sitta europaea albigrons* Taczanow. シロビタヘキマハリ

B. 1 ♂, Aug. 19.

喙峰一八・五、翼七八、尾四五、跗蹠一七・五耗あり。

FRINGILLIDÆ

(51) *Fringilla cauculator kantschulensis* (Dybowski) キンチンレ

カフ

O. 1 ♀, July 26.

(52) *Carduelis erythrurus grebetskii* Stejn. アカヤシロ

O. 1 ♀, July 26.

(53) *Chloris sinica karavakii* (Temm.) オホカハラヒハ

O. 1 ♂, July 25; 1 ♀, Aug. 3.

(54) *Catantopus japonica coloratus* Ridgw. シメナガホシロ

K. 2 ♂s, June 16 & July 14; 3 ♀s, June 16 & July 19.

歐洲産鶴の「渡り」の本能

候鳥の飛行は頗る早く甚だ持續力がある、鶴の移住の時は一時間三十哩も飛び、斯く速力が早いにも拘らず其隊に數時間も續くが見へる程大きいのである、其時は一羽一羽と後から續く様な事はなく、かなり廣い縱隊を作つて飛行する、鶴の遷移に於て最も不思議な事は他の候鳥の様に一年中遊歴して或る場所から食物や適當な溫度を持つた他の場所に出掛けるのではなくして二つの規則正しい定つた住地を持つてゐるのが特徴である而して其一つの住地は北地方即ち我等の住する(獨逸)其他の一つは南地方即「エジプト」海岸である、そして此隊は眞直ぐに且つ規則正しく一つの故郷から第二の故郷へと移住し各々の場所で一定期間を費す。

鶴の「渡り」の本能に付て奇異に感ずる事は必ず前年の故郷を再び見出し彼等が一邊造つた巢を修繕して之れに住ふ事で、田舎の穀倉の上とか百姓屋の屋裏に巢をかけた鶴は千哩もある「アフリカ」を數千の町や村の上を掠れ飛んでそれで少も迷はず、一直線に彼の故郷にきて二度其巢を使ふのである。

世界中の最大地理學者が最も善い地圖を備へても、そんなに容易に正しい道を見出す事は出来ないものである、航海者は注意深く作られた船時計の時刻と太陽の位置とを比較して行かねばならぬ、それでも尙現在居る場所を數哩も遠く間違へる事が屢々ある、然るに此鳥は殆ど信ずる事の出来ない程の速力で突進し地上の眼界を遮る雲の上が高く此荒れ凄む空氣の海を貫いて飛びそれで迷ひもせず半年前造つて置いた屋裏に向て直進するのである。

此事には本能なるものが支配するのである而して此本能なるものは其動物の保全、蕃殖、或は養育(自分を養ふこと)と直接の關係が無いので一層不可解である彼等が移住の途中に於て數千の斯の如き巢があるにも拘はらず必然的に同じ一つの巢を自分の唯一の所有として之に一生涯住むと云ふことは此鳥に「所有」と云ふ觀念の本性があつて此本性は神聖犯すべからざるものとして自然から享けたものらしいと云ふことを吾人に暗示して居る。

極々稀には知らない鶴が他の巢に這入つてゐる事がある、それは恐らく此様な例外の時で即自分の巢が留守中禍により又放逐により破壊された時で、然し本來の所有者がやつてくると其度に鶴の間にその巢の所有に付て喧嘩が始まる、其處で闖入者が逃走するか又は闘争者の一方が死で仕舞うまで争ひが止まぬ假令闖入者がずつと強くても本當の巢の所有者が逃げて行くのを未だ見た事がない自分の所有權を破棄するより、むしろ殺さるゝのである、これに反して闖入者は權利の觀念を持たないので若し所有者を克服する事が出来ないと思ふと逃走を企てる。

次の事は未だ十分の説明も出来ず且つ來元如何なる事柄なるか全く分らぬ事ではあるが鶴の「渡り」に關しての觀察せられた一の特性を此の機會に言及せざるを得ないのである。

さて冬が近づいて鶴が旅行の準備が出来ると先づ總ての鶴が集つて團體となり、旅行を共同にするが爲め他の團體と合し此隊が遠く出掛る前に鶴社會は普通野原におり其處で輪をつくり其真中に一二羽の鶴を置き嘴で鳴子の様な音を立て、輪の中の鶴の上に襲ひかゝつて殺して仕舞ふ、かくして隊はたゞちに飛揚し此處から去るのである。此變象を人は「裁判の日」と言ひ此内に何か不正行爲をした鶴に對する裁判の一種と見做さるゝ。然し寧ろ此れは弱々しい者や病氣の者で此旅行を共にする事が出来ずさなくとも瘡れて仕舞う様な者も殺すのであるらしい。兎に角此謎の様な變象は甚だ不思議な事で動物界に於て此と比較する事が出来る様な似よりのものを見出さない。

(バルンスタイン)

講 話

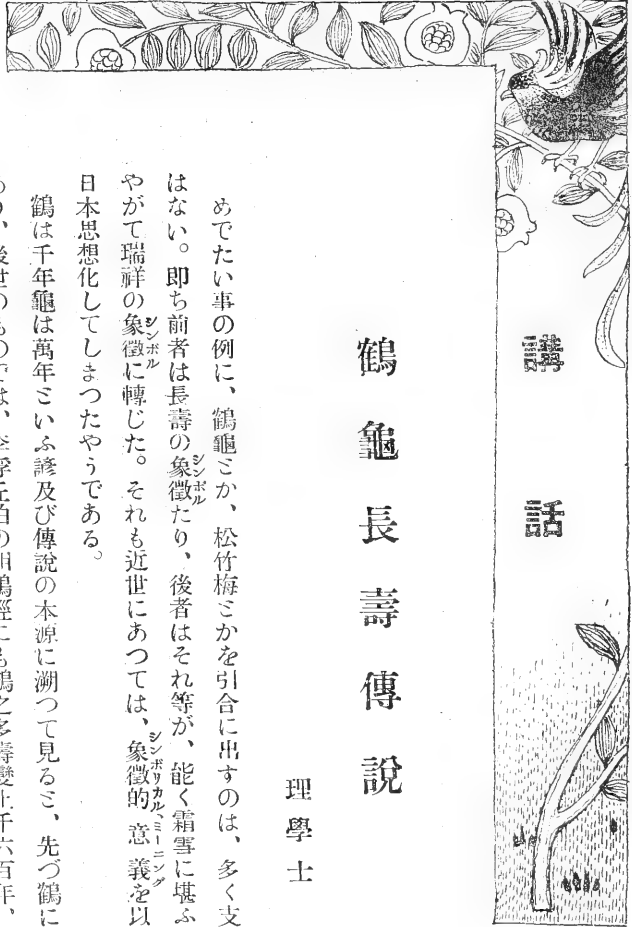
鶴 龜 長 壽 傳 説

理 學 士 黒 田 長 禮

めでたい事の例に、鶴龜センボウとか、松竹梅センボウとかを引合に出すのは、多く支那傳來の思想であつて、日本固有の思想ではない。即ち前者は長壽の象徴センボウたり、後者はそれ等が、能く霜雪に堪ふるものだからで、徳操の象徴センボウなり、やがて瑞祥の象徴センボウに轉じた。それも近世にあつては、象徴的意義を以て、國民的一般趣味性に合致し、殆んど純日本思想化してしまつたやうである。

鶴は千年龜は万年といふ諺及び傳説の本源に溯つて見るに、先づ鶴については、古くは淮南子に鶴千歲極其遊センボウあり、後世のものでは、李浮丘伯の相鶴經にも鶴之多壽變止千六百年、形定體尚潔センボウある。龜については、廣五行記補に龜齡經萬歲、又は萬年謂靈龜センボウなき見えてゐる。わが靈龜、神龜の年號も、龜を瑞祥の象徴センボウとする支那思想に基いたものである。この鶴龜長壽の思想の一部が、わが國文學にあらわれたものとしては、平安朝のものでは、土佐日記を挙げねばなるまい。其の承和五年正月九日の條に、

宇多の松原を行き過ぐ。その松の數いくさばく、幾千年經たりセンボウ知らず。もセンボウ毎に波打ち寄せ、枝毎に鶴ぞ飛び通ふ、面白しセンボウ



見るに堪へずして、舟人の詠める歌、

見渡せば松のうれごに棲む鶴は千代のどちこそ思ふべらなる。

ごいふのがある。所謂「千世の友」^{トモ}とは、鶴に千年の壽あるごいふ想定を基礎としての造語である。しかし紀貫之の所見については、白帖に鶴千歳棲於偃蓋松とあるを思ひ浮べざるを得ぬ。倭訓栞に「鶴は千年にして蓋松に安す」といつてゐるのは、この白帖から出たのであらう。こゝに注意しなければならぬことは、鶴は決して樹上に棲まぬものである。李浮丘伯相鶴經は、鶴を以て、止不集林木と^ツいひ、李時珍も、鶴が樹に棲み木に巢ふことを認めて居ない。故に本朝食鑑は今古の畫工皆樹上の鶴を描くは恐らく是れ鶴を誤り視たるものならんといつてゐる。鶴鳴九臯ごいふ詩經の句から見ても、其の洲渚田隴の間に棲むものなることがわかる。即ちわが田^タ鶴^ツ葦鶴の語源ご頗る似たものがあるのも、一奇である。さすれば貫之の實見したのは恐らく鶴であつたのかもわからぬ、義經記にはこれは龜割山の龜の萬却をこつて、鶴の千歳になぞらへて、龜鶴殿とごつて奉り……………とある。謠曲鶴龜は

龜は萬年の齡を經、鶴も千代をやかさぬらん。千代のためしの數々にく、何を引かまし姫小松の綠の龜も舞ひ遊べば、丹頂の鶴も一千年の齡を君に授け奉り、庭上に參向申しければ……………

といつてゐる。徳川期に於ける史實及び文學としては、倭訓栞に

寶永の主上、新内裏へ遷幸ならせ給ふ鳳輦の上はるかに鶴の舞かけりけるを諸臣千年のためしご賀し物し奉られける

とあつて、從一位前内大臣源通茂の歌を擧げてゐる。鶴御狩は「幕朝年中行事歌合」に

すべらきの千世のおものゝためしや鶴の御狩に君が出らむ

鶴の御狩は、内、仙洞、東宮へ、參らせられんがために、御身づから狩に出させ給ふ也

とあつて、佳例の一になつてゐた。近松巢林子は雪女五枚羽子板に

やあらめでたや、こなたの御壽命申さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎が八千歳

きたまへてゐる、鶴の千年といふことは、單に文學上の弄語でなく、或は事實上、鶴は千年以上の壽を保つものゝ信ぜられて居たらしい。今この傳説の由來をも併せて記述しよう。即ち本朝食鑑の如きは、

李浮丘伯之言不爲虛誕。本邦亦有此類矣。我神大君。○德川家康之養鶴、放在武野之田澤、經六七十年尙飛翔。

さいひ、又た

源二品朝之放鶴、亦暨五六百年、來往于駿遠之田澤。偶觀之者、謂、翼間有金札、記年號支干云。世以爲奇。こつゞけ、更に

實羽族之宗長、仙人之驥騏也哉。此鳥以千年之物、中華之人、不爲食品。

こ結んでゐる。山崎美成は三養雜記に「頼朝卿放たまふ鶴」さいふ項を設け、

鎌倉由比が濱にて、頼朝卿の鶴を放たまふこと、世にあまねくいひ傳ふれき、吾妻鏡をはじめ、正き記録にかつて見えたるもの

なし中略これらのこと、または後人の俗説によりて、傳會したることによこおもはれて、其實はいかにかあらん疑をりしに、過

し頃、頼惟柔の此鶴を詠る詩を、石田醒齋がもこにて見たり。中この詩によりて、年來の疑ひ、一時にさけたり。世人のいひつ

たへたるも、故なきにはあらず。

こ述べてゐるのである。是に於て余は、頼杏坪の春草堂詩鈔を檢して、山崎美成の斥す所の詩を讀まんこするのである。

瘞 鶴 吟

彦根武居士亭、退余遊湖北、登某邱。有祠。祠側有鶴墳。士亭曰、侯嘗射一鶴。源右大將所放。感悼瘞之。余聞慘然作此。

江州刺史田鶴獲。鶴繫金牌在其脚。題曰建久ムム年。刺史視之忽嗟愕。爲營兆壙刻誌銘。爾來見鶴斂弓繳。因思鎌府全盛時。鶴

岡放鶴君臣樂。皆謂霸業盤石固、與鶴同結千年約。○以下省畧

さいふのが、即ち杏坪の詩の前半であるが、この詩は鈔卷二に収録する所のものである。詩鈔目錄によれば、卷一古今體四十四首

文化年間江都往來所得こあるので、この瘞鶴吟は、文化年中の作であつたこがわかる。さて頼朝放鶴の事は、江戸砂子に、下濫谷

羽澤の來歴を記して、

建久二年頼朝の飼鶴此所に来り、巢を作りしに因て、鶴澤と名け、其雖始めて羽うつ所を羽澤といひ、其遊來る所を鶴舎といふ。こいふ記事がある。果してさうであつたすれば、放鶴は建久二年以前の事としなければならぬが、よし建久二年としても、それから文化元年まで、六百十三年を経てるから、杳坪の詩意に従ひ、その友人武居士等の事へてゐた當時の彦根侯が獲た鶴とすれば、鎌倉時代から生き長らへ、五百數十年の壽を保つてゐた譯になる。けれど吾人は鎌倉放鶴史實に就ては、多く信を措くに足らぬとするものである、それは吾妻鏡に何等所見なきこが一、頼朝卿眞蹟日記影鈔本といふものに放鶴のこいふあれど、それは後人の偽書であるこが二、放鶴の事實が、本朝食鑑、江戸砂子以外何等傍證的材料を發見し得ざるこが三、而して二書共に徳川時代の撰で、前出の記事は史料としては、全くいふにも足らぬものである。次に瘞鶴碑といふものは、支那にもあつて、それが支那傳襲の摸倣であるらしい事が四、以上の理由で、頼朝が鶴を放つたこいふ事實を認めない限り、その鶴が五六百年後に及んで、駿遠の田澤に飛んで來たさか、江州で彦根侯が獵獲したさかいふ口碑もアテにはならぬ。況んやその瘞鶴碑が支那のを摸倣したらしい形迹があるのに、尙更信用は出來ぬ。眞面目一方の杳坪老は、こいで一バイ食はされたのに相違ない。故に吾人は頼朝鶴を放ち、その鶴五六百年の壽を保てりとの口碑を是認するこは出來ない。で、鶴は千年龜は萬年といつた所で、それは單に長壽の象徴的意義をあらはすだけで、直に鶴は千年の長壽を保ち得るものとは信じ得られぬ。龜にても同様である。

鶴龜と共に瑞祥の象徴となつてゐる松竹梅の出所をも、この際附記して置かう。蓋し松竹梅の出所は、高士奇の金盞退食筆記、唐の李邕が題畫の詩、及び月令廣義なきにある所のものであるが、これは今敢て詳説せぬこにする。兎に角、鶴龜松竹梅は、かくの如くして、日本上古の思想でなく、全く支那思想の影響を受けていひ始めたものであるこを明にして、この稿を終る。尙ほ本稿を艸するに當り、古事類苑動物部の記事に負ふ所あるを斷つて置きたい。(大正七、一〇、一)

むれてゐるたづのけしきにしるき哉千年すむべき宿の池水

おのが世に千世をしめたるあしたづはすがたも聲ものさけかりけり

顯 季

干 蔭

徳川時代の薩摩に於ける動物園

荒 木 彦 助

薩摩藩主島津重豪に云つた人は、極て多方面に興味を有され、流石の富裕な大藩も府庫を空乏に致したる傳へらる、其豪奢な嗜好は動物類に及び、城下なる鹿兒島郊外尾畔に、鳥獸の多數を飼養され、また現代の小規模な動物園位はあつたでしやうかと思れる、從て其費用も少からず傾注されたもの見え、書簡の残つてるものには、今回斯く珍き鳥が長崎出島屋敷(外人居留地)に來て居る、夫は如何なる次第で求めたいから、なき辯解して買入れの都合を付けられたやうになつて居ます。併し飼養場は太守の別邸であるから、公開されたものではなかつたでしやう。爰には管理の役人が居て、禽獸の手入をしましたのは勿論ですが、彼飼鳥必要の著者比野勘六の如きも、御鳥係の一人で藩主の旨を受け、鳥類に關する研究をしたものご認めて誤はありますまい。重豪より家臣河口轉へ發せる、鳥類購入の注文書を見れば、此動物園の規模ご、當時如何なる鳥類が市場に取扱れたかご云ふをも、略、推知するを得ます。惜い事には注文狀に月日を記入してないので、何時ご明白に判斷は出來ませんが、此薩摩太守は紀元二四零五年(延享二年十一月七日)より同九三年(天保四年一月十五日)までの人ですから、略見當は附けられます。頼山陽が入薩して、前後兵兒諂にて、一は尙武の舊習を、一は軟化した新傾向を文字に止めて居るのも、此時代でありまして、大金を鳥類に投ずるのを重臣に遠慮せねばならなかつた一事で觀れば、江戸語や風俗を採用し、あらゆる方面に巨財を浪費されて、善意に於ける薩州の開闢即武技一遍の遠地に、文化の發達を招致した中年後の事でありましやう、夫であれば紀元二四四一年(天明)以降の事かご思はれます。鹿兒島圖書館の方では三二年(安永)であろうこの見解でしたが、兎に角其頃の事でありましたらう。

尾畔御飼鳥御注文狀

覺

一、ばたん鸚鵡

一羽

一、青音呼

一羽

一、緋音呼

一羽

一、紅雀

一番

一、九官

一番

一、畫眉鳥

一番

一、八哥鳥

一番

一、立家鴨

五六羽

一、かなりや

一番

一、木國鳩

二番

一、しやむろ鳩

二番

但し是はジャガタラ鳩ミ申て持渡し候やこ存じ候

(此外大中小にも何ぞ(三字不明)は、鳥有之候は、見合せ持歸り國元鳥屋へ飼置候様に)

一、じや香猫

一番

一、山あらし

一番

一、大りす

一疋

但し番にて候は、尙宜

一、白牛

一番

但男計にても尤白牛無之候は、何にても男牛二疋

一、白雀

(不明)

一、青じ替り

一羽

一、青海音呼

一羽

一、緋音呼

一羽

一、小紫音呼

一羽

一、白音呼

一羽

一、白きじ

一番

一、おーむ

一羽

一、さんかの五位

一羽

一、黒つぐみ

一羽

一、野駒

一羽

一、青しろけら
赤

一羽

一、うそ替り

一羽

一、河原ひわ替り

一羽

一、白大鹿

一居

一、極勝れ候大鹿

一居

一、隼	一居	一、かはりうそ	一羽
一、かはりせきれい	一羽	一、わたほうし頬白	一羽
一、鳥かけす	一羽	一、頬赤替り	一羽
一、あをじ替り	一羽	一、きく雲雀	一羽
一、つぐみ替り	一羽	一、白雀	一羽
一、白駒	一羽	一、おし	一番
一、雁金	一番	一、小鶺鴒	一番
一、小よし	子飼能く啼き出すを 一羽	一、雪白同うしろ	一羽

此注文書にて随分種類の多い事、特に「色變」の諸鳥を求められたのが知られますと共に、二三の珍らしい獸類の種類も見えます。既に普通の鳥は集められたから、珍禽奇獸をこの希望でなかつたでしやうか、そして太守の購入の目的が如何程までに達せられ、又何種が何程飼養されて居たかは、種類目録がないので明白にする事は出来ません。其後に藩の財政整理が調所某の手で行はれましたから、動物園が如何に始末されたかも不明です。隣國熊本藩の古老に聞きますと、島津家の參勤交代には、行列中の長持に「赤ヒゲ」鳥なぎを収めてあつて、密に熊本地方でも籠鳥家は申受けられたとの話ですから、其没後或は上方等で處分したものではありませんまいか、元來島津家の記録は公開されませんの、世間には古記録なぎの保存されたのがありませんので、以上の事實の外は明になつて居ないやうです。(完)

朝あけのこほる波間に立るる羽音も寒きいけのむら鳥

廣儀門院



高野山の一年

榎 本 佳 樹

大正六年一月九日より同七年一月八日に至る一ヶ年間に當地にて目撃せし鳥類には一も珍しきものなく、何れも普通のもののみなるを以て、茲に之を述ぶるは甚價値少きことなれども、只若干種の習性に就て實見せし點は、或は「渡り」及蕃殖等研究の一參考とならば幸と思ひ、少許の記述を試んとす。但し余は専心鳥類の野外研究に従事するの餘暇を有せざるにより、目撃等の時日を詳記する能はず、且つ蕃殖其他に關しても、詳細なる研究を爲し得ざりしを遺憾とす。又目撃せし種類は僅かに六十を超えず、其地域は當部落を主とし東西約一里南北約半里、海拔約二千尺乃至三千三百餘尺の間なれども、今一層廣き地域に就て詳細に調査せば尙多少の種類を加ふるを得べしと信ず。

一 ゴキサギ

前年九月中旬より同十月下旬迄に夜間鳴聲を聴きしこと約五回、其飛行方向は何れも南西に向ひ、又毎回とも暗夜にして内二回は曇天なりし。

二 サ、ゴキ

前年九月中旬より同十月月上旬迄に夜間鳴聲を聴きしこと約三回、飛行方向は一回は西、他の二回は西南にして暗夜を擇び曇天の時もありしこと前種に同じ。

三 チウヒ

前年五月下旬及七月初旬に於て各一羽を見たのみ、其第一回のは北方に飛行し、次のものは空中に舞ひ居たり。

四 ハイタカ

前年十二月下 一羽のもの二羽の鳥も空中にて争鬪せるを見たるのみ。

五 イヌワシ

前年五月上旬初にて二羽を見、其後屢高空に飛翔するを見しが、八月下旬頃に至り一羽の幼鳥と思しきもの之に加るを見たり。後者は大きに於ては微かに成鳥に劣るのみなれども初列風切は遂に十分に發達を遂げずして當地を去れり、又此幼鳥は屢

高き樅、杉等の絶頂に坐止して鳴聲を發せり。目撃せし飛翔高度の最大限は當地の上方約八百メートル、即ち海拔約千七百メートルにして、又其速度は翼を動かす時に於ては速かならざれども、翼を張りたるまゝ空中に大圈を描く時、殊に一點より遠き他の點に移る爲め直線飛翔をなすの際は極めて迅速にして所謂矢の如き速力を以てす。鳴聲は「びーよ」或は「ほいよ」と聽ゆる單調のものなるも頗る遠距離に貫徹し殊に高空に在る時は一層明瞭なり。當地を去りしは十月中旬にし天氣晴朗なる朝、當地北部に在る一山頂の樹木に靜止し三羽のものと交々鳴聲を發し少許の飛翔をなして樹上の靜止を繰り返すこと數次なりしが、漸次北方に移り去りて遂に翌日より再び其雄大なる姿を見る能はざるに至れり。

六 キジ

當地よりも低き地點には少からざるも當部落附近には多からず。

七 ヤマドリ

當部落附近の山地に棲息する由なれども甚少數なるものゝ如し。

八 イカルチドリ

昨年六月上旬當地學校の運動場（約五十間四方の平坦地にして周圍は殆んき全部山林なり）に於て一羽を見、其後同地に於て二三回之を見たり、而して又月明の夜に其鳴聲を聽きしこと二三回ありたり。

九 クサシギ

昨年五月上旬及六月上旬に於て各一回一羽のもの其特殊の鳴聲を發して飛翔するを見たり。

一〇 キアシ、ギ

昨年九月上旬に於て一夜本種約三十羽と想像し得るもの鳴聲を發して西南方に渡るを聽けり。

一一 キジバト

頗る稀に之を見る。

一二 アオバト

是亦多からざれど前種よりは稍多きものゝ如し。

一三 ホト、ギス

五月上旬より鳴き始め同下旬より六月中旬迄最盛なり、七月に入りては大に沈靜となり八月には殆んき鳴聲を耳にせず。多數渡來蕃殖するものゝ如し。

一四 ツ、ドリ

鳴聲を發する時期は前種と大差なきも其終熄時期稍早し。棲息數前種に比すれば遙かに少きも敢て稀ならず。

一五 ブツボウソウ

往時は多數棲息せし由なれども現時は頗る稀なり、昨年のお如きは只僅かに當地奥の院附近にて一二羽の鳴聲を聽きたるのみ。鳴聲は月夜に之を發するこゝ多く六月上旬より九月上旬迄之を聽く。

一六 カハセミ

少數なれども溪流或は溝渠等の附近にて屢之を見る、但し冬季に於ては之を見ず。

一七 アカセウビン

五月上旬より九月下旬迄の間森林中に之を見る、其數多からざるも稍普通なり。鳴聲は「ヒヒヒヨロ、」、或は「ヒヨロ、」、ミ聽ゆ。當地にて繁殖するもの、加し、

一八 フクモウ

少數なれども本種としては比較的多き方にして殆んど全年を通じて其聲を聽く。當地に蕃殖するものならんも只十二月及一月には鳴聲を耳にせざりし。

一九 ヨタカ

少數なれども稍普通にして四月下旬より九月下旬迄の間に屢之を見且つ夜間殊に黄昏及拂曉に於て常に其鳴聲を耳にす。鳴聲は「チヨツチヨ………」或は「キヨキヨ………」を速かに連續するものにして飛翔間並びに寺院の屋上或は樹枝等に靜止する時之を發す。

二〇 アマツバメ

五月中旬より十月下旬迄の間に屢之を見る。

二一 アチゲラ

多數棲息せざれども極めて普通の種類なり。多くは枝葉茂れる樹木に棲息し加ふるに性質頗る慧敏なるを以て目視甚困難なり。鳴聲は「ケツ」或は「ベック」ミ聽ゆるもの、外「ビュービュー」ミ聽ゆる高調の清音を發し、又嘴を以て迅速に樹皮を連撃し「コロ、」、ミ聽ゆる音響を發す。而して此音響は一月初旬より五月下旬迄之を發し接近して聽けば敢て大音にあらざれども頗る遠距離に達す、又清き鳴聲は一月初旬より十月下旬頃迄之を發し是亦遠くに貫徹す。本種は樹上に在るを普通とすれども屢地上に下降して求食、飲水するを見しこゝあり。當地にて蕃殖するもの、如し。

二二 コゲラ

極めて普通にして營巢蕃殖す。人に馴れて接近容易なり。

二二二 セグロセキレイ

餘り多からざるも極めて普通にして溪流の附近に營巢するものゝ如きも未だ實驗し得ず。其他は本誌第四號に述べたる如し。

二二四 キセキレイ

多数ならざるも極めて普通にして溪流、溝渠等の岸邊にて營巢蕃殖す。春季に於ける雄の鳴聲は甚美なり。喉の黒色部は四月上旬頃より生じ七月中旬頃消滅す。

二二五 ビンズイ

昨年九月下旬より十月中旬に互り數羽を見たのみ。

二二六 ヒヨドリ

少數なれども四季を通じて棲息す、營巢、蕃殖すること勿論なるべし。其他昨年十月下旬約五六十の一群當地を通過し西南に渡るを見たり。

二二七 オホルリ

稍多く四月下旬より七月下旬迄鳴聲を聴く。當地のものは四國地方のものゝ鳴聲に於て少しく異りたる點あり。當地にて蕃殖す。

二二八 キビタキ

稍多數棲息し五月上旬より七月上旬迄鳴聲を聴く。本種中「ツクツクボウシ」を鳴くものあり、但し眞のツクツクボウシと異り「シ」の音特に高大なり。

二二九 コサメビタキ

頗る稀にして昨年五月下旬より九月上旬に至るの間五回之を見しのみ。

三〇 ツグミ

十月下旬より翌年三月下旬迄棲息すれども甚少數なり。但し十一月下旬より十二月下旬に至る間に南方に渡行する途中立寄る者少からず。

三一 シロハラ

少數渡來し十二月上旬より翌年五月上旬迄棲息す、四月中旬より歸去時期迄美聲を發して轉る。

三二 ジャウビタキ

當地よりく低き地點には少からざるも當地には甚稀なり。

三三 ウグヒス

多數棲息すれども十二月中旬より翌年二月下旬に互る嚴寒の候には低地に下り當地には極めて稀なり。當地にて蕃殖す。

三四 メボソ

極めて少数渡來し五月上旬より六月下旬迄其聲を耳にす。

三五 コルリ

少数棲息す、昨年一月下旬より六月中旬に至る間に三回之を見しのみ。

三六 ツバメ

春末より中秋に至る間屢之を見るも當地にて營巢するものは稀にして多くは下方より飛び來るものなり。

三七 コシアカツバメ

多数渡來し當地金堂及び大門等を主とし其他寺院の屋根裏に營巢するもの多し。五月中旬頃より渡來し十月下旬迄滞在す。

三八 ミソサバ

少数棲息蕃殖す。

三九 モヅ

秋季渡來するもの稍多きも長く停止せずして去り只其一部は止まるも十二月中旬より翌年三月上旬に至る嚴寒の候には甚少し、而して三月上旬より再び少数のもの歸來し蕃殖するも是等は秋季多数渡來するものを待たずして幼鳥稍成育すれば直ちに去りて下界に到るものゝ如し。

四〇 サンゼウケヒ

四月中旬より七月下旬迄其聲を耳にすれども少数なり。當地にて蕃殖するものゝ如し。

四一 ゴジフカラ

稍多く極めて普通なり、「ツキン、ツキン、ツキン」或は「ブキン、ブキン」を聽ゆる清き高聲を發して鳴き時として喧噪なり。佛閣等に參詣人の撒きたる米を啄むを見しこゝあり。

四二 シヅフカラ

多数棲息し蕃殖すれども十二月下旬より翌年二月上旬頃迄は稍稀なり。

四三 ヒガラ

多数棲息し習性概して前種に同じ。當地にて屢々飼養せられ其鳴聲は長からざれども美なり。

四四 ヤマガラ

極めて普通なれども嚴冬間には稀なり。其他は本誌第四號に述べたる如し。

四五 エナガ

多数棲息蕃殖するも嚴冬間稀少なるこゝ前數種に同じ。

四六、ハシボソガラス

四季を通じて棲息し其數少からず。習性上他の有益鳥類の蕃殖に有害なりと認むる點多し。

四七 カシドリ

極めて普通にして四季を通じて棲息すれども夏秋の候には比較的稀なり。本種はヒヨドリ、モズ、チウヒ、イヌワシ、カラス、フクロウ、ホ、ジロ等諸鳥類の擬聲を發し就中チウヒの擬聲は最巧みなり。屢々人家附近の樹木に來り又庭園にも下降す。

四八 メジロ

極めて稀なり、昨年六月下旬二回之を見しのみ、但し當地よりも低き地點には普通なり。

四九 キバシリ

普通なれども其數多からず、昨年七月中旬及九月上旬に於て二回之を見しのみ。

五〇 イカル

十一月中旬より十二月中旬に至る間北方より南方に渡る途中少數のもの立寄り暫時滞在す。

五一 ベニマシコ

十二月初旬渡來し翌年五月上旬去る、其數多からず。鳴聲は

「ツビー」に聽ゆ。

五二 カハラヒハ

十月下旬より翌年一月中旬迄は極めて稀なれども其他は普通にして蕃殖す。

五三 アトリ

南方に渡行の途中少數のもの立寄り十二月中旬より翌年一月上旬迄滞在す。

五四 ウソ

昨年四月下旬より五月上旬迄に三回之を見たるも其數少し。

五五 マヒワ

十月中旬より翌年五月下旬迄普通なれども其數少し。

五六 ホ、ジロ

四季を通じて極めて普通なれども十二月下旬より翌年二月下旬に至る間は甚だ少し。蕃殖す。

五七 アヲジ

十二月中旬より翌年五月上旬迄普通なり。冬季積雪甚しき時は屢々人家の土間に來るこゝあり。

五八 スヰメ

平地の如く多からざれども稍普通なり。

旅順の雀と筑前の雀

脇山 三彌

雀は極めて普通の鳥なるが故に何れの時何れの處にて見るも差違を認めざれども今年二月筑前博多に閑居することとなり毎日庭前に來り戯るゝ雀を見るに旅順の雀と著しく變異あるを見るなり。もこより病中の觀察にて多少の誤謬もあるべきも旅順の雀は冬日に於ては一般に灰黑色を帶ぶ筑前の雀は羽色鮮麗なり。旅順附近は冬日は暖爐より出づる煤煙夥しく空氣中に飛散し積雪は未だ嘗て純雪白色を呈せしこと無し。冬期寒冷なる時雀は人家近くに棲み煤煙の影響を受くること特に多きが如し。鴨類等の如く人家に近づかざるものには羽毛の煤煙に侵さるゝこと少きも己にミミヅクの如きも羽色の暗灰色に汚れたるを見る。尙又特に旅順の雀の舉動不活潑にして筑前の雀の大に活潑なるを見る、思ふに是れは氣溫の關係なるべきか盛んに囀鳴して活潑に跳飛することは寒冷なる所にては不可能なるべしと思はるゝなり。凡そ寒地の鳥は皆然るものによ深く研究し且つ調査を経ざれば容易に斷定し得らるゝものに非ず。旅順にて窓外に雀の戯るゝを見ること少からざれども筑前の雀の如く頸を長

く伸ばして啞々囀鳴し樹梢の間を跳飛するもの無し。しかも常に頸を短縮して寒冷に堪へざるが如き態を爲せること恰も人の寒を怕れたる時の如きを見るを常とす。人國記に暖國と寒國との人の氣質の異なるを説けるありこれは單に人のみにあらざるべし識者の教を待つものなり。

ロシアカツバメの蕃殖

理學士 黒田 長 禮

此種類は福岡市内及び附近にて所々に點々營巢せるを見たり。余が本年夏季同地にて本種類の巢を見たる場所を記るせば、福岡市吳服町、同橋口町、粕屋郡箱崎町等にして巢は寫真に示す如く土壁又は煉瓦を塗りたる壁特に二階の屋根下に見る場合多し(第十六圖參照)、稀れには家の入口の屋根下にも見らる(第十七圖)。一般に一軒の屋根下に二巢あるも箱崎町にて見たるものは四―五巢も連營せるあり。巢の外部の材料は普通燕の如く泥土を用ふるも形狀トツクリ形をなすこと人のよく知る處なり。内部の材料は藁(大部分)、鳥羽、松葉等を用ふ而して大なる且つ内部の廣き巢にありては材料至て少く單に最内部に少量の敷物あるに過ぎざるも第十七圖の如き平たき巢にありては却つて内

部の材料充滿せるを見たり。巢の外観も種々あり所謂徳利形をなせる眞正のものあり又花瓣形のものもあり第十六圖は前者にして第十七圖は後者なり。福岡地方にては同一の家にツバメ

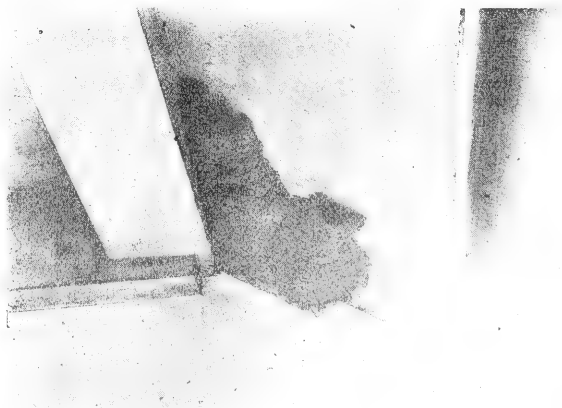


第 六 十 圖
シコアカツバメの巢

ミコシアカツバメの兩者の營巢せるを見たるこころなし。又内

田・仁部兩氏著「鳥類の「渡り」及蕃殖期」五七頁によれば福岡縣朝倉郡某町地方にては腰赤燕の方普通燕よりも多しこあり又余

が聞きたる處によれば田川郡彦山村地方にも多少巢を見るこあり云ふ。



第 七 十 圖
シコアカツバメの巢

此コシアカツバメはツバメの如く人家の屋内に營巢するこは全くなきが如く主として白壁に多し此故を以て繁營せる市町に多く従て田舎には稀れなるが如し又新設の壁或は塗り替へたる壁等には直に營巢せざるなり幾分古き壁を好む

如し、例へば東京外務省の外壁には極めて多く棲息し營巢せしが其壁を塗り替へし爲め昨今全く見ざるに至れり。

次に此種の「渡り」に關し讀者諸君の諸説を承はり度きこころあり

り。即ち内田・仁部兩氏の前記著五七頁に岐阜縣惠那郡岩村小學校よりの回答として掲げられたる一節は「普通の燕は三月末に來り九月始めに去る。トツクリツバメ(コシアカツバメ)は五月の始めに來る(岩村小學校には年々營業す)」とあり而して兩氏は他に多くの報告を列記せられしが何つれもコシアカツバメの方ツバメより早く渡來し、早く去ることを一致せり。然れども余は前記岩村小學校の報告が正しきには非らざるかを考へ得る點あり。勿論地方により多少又は大に相違するやも知れざれども余が東京にての觀察(不充分ながら)によれば自邸赤坂福吉町にてコシアカツバメの飛來せしを見たるは常に六月——九月にして三月——五月迄の間に見しことなし普通燕は三月下旬に早くも渡來す。又福岡市にありて余が春季四月初旬に數羽のツバメを見しも(二春の觀察)コシアカツバメを見たることなし。

今回七月末——九月中旬迄滞在在始めて本種を見たるは七月廿七日にして九月十二日迄見たり。ツバメも九月十二日以後は著しく減じ殆ど見ざるに至れり、東京府下にて本年はツバメは十月廿日迄は確に見たり。遅く迄留まるは幼鳥のみなるが如し。

最近榎山氏が京都に赴きし際同氏より余に贈られたる書信中にコシアカツバメに關する面白き一節あり因て左に附加すべ

し。

前略本日(十一月九日)午後加茂川河上を非常に多數のコシアカツバメ(三——四十羽近く)の飛廻り居るを見受け申候當地にてはツバメは最早尠も見受け申さず候、やはりコシアカツバメの方が遅く去るものによき考へられ候以下略

燕類の渡來期、去期及び構巢期の調査は毎年營業する家に就て觀察せし多くの結果を得ば容易に解決し得らるることなり故に本會員諸君中にて此機會を得らるる方は觀察せられ内田氏又は余の許に報知あらんことを願ふ次第なり。

雪中の農作物鳥害例

仁部富之助

當地方は昨秋以來雨天連續し、晴天らしき晴天なかりしたため、農家は作物の乾燥收納に大困難を來し、遂ひに其期を失して乾架のまゝ雪を被り、本年二月下旬に至るも何時收り納れ得る見込もなく、七八尺の雪中に埋没しつゝあり。然るに一方鳥類就中カラス・スズメ等は例年ならば積雪のため、昨今最も餌に窮する時期なれども、今冬の野外の状態は上述の如くなれば恰も天興

の恵を受けたる如く終日嘔々として棲息す。地方人は「今年は雀の豊作だ」又は「鳥の當り年だ」などいひて、その害の猛烈さに呆れ居れり。左に四五種の鳥類につき其被害の状況を述べ可し。

カラス 主として稻架に集ひ嘴にて穂より粃を扱き落し、そのまま喰ふもの若しくは切れ穂を趾にて踏み壓へ一粒つゞ啄むものにして朝空腹の時及び晝に就かんごする前特に多く稻架に群集し、その數百羽を算するこゝこあり。

スゞメ 數十羽數百羽群集して稻を害す。彼等はカラスの如く長時間稻架に停まるこゝこなく附近の樹林を根據地とも隠れ場ともし、空腹のときは稻架まで出遊し、腹滿つれば樹間に返りて囀初め、其聲湧くが如し。スゞメの稻を喰ふ方法はカラスの如く粃のまゝにあらずして必ず嘴にて粃殻を破り去り米のみを攝る。

ドバト 常に十數羽乃至數十羽群をなし、稻架に集ひ若しくは大豆架に來る。但し附近に棲息するハトの數は自ら限りあるこゝこなれば、被害の程度は前掲の二種より輕かる可きも一羽の攝取量はカラスに亞ぎ多かるべし。

アトリ 本種は例年ならば冬季間の棲息甚だ少きも、本年は食物豊富の故か可なりに多し常に單獨に居るこゝこなく、多くの場合スゞメの群に投じスゞメに其行動を共にす。而してスゞメにアトリは同一群にあり乍ら、互に相排する風もなく、又特に一ヶ所に集るこゝこいふ様子も見えず。

シメ 例年より特に多く棲息するこゝこ思はれざるも數羽乃至數十羽群をなし、主として豆架に集り終日附近を去らず。或る豆架につき檢するに恐らくは一割五分乃至二割の被害が見られたり。

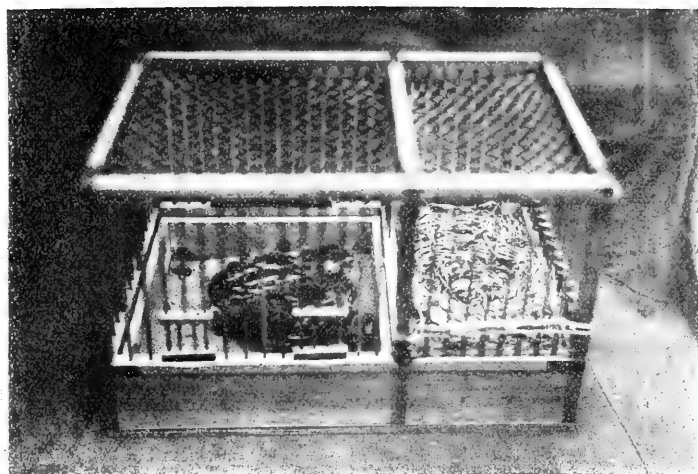
キジ 山間の村落にありては、格別珍らしき事にあらざれども、深雪のため食物に窮せる彼等は人家附近の林地に出没し往々豆架を荒し其最も極端なるものは、人の不在を窺ひ鷄のために散きたる餌を漁るを見た。蓋し稀有の現象たる可し。

飼養鶉の胚卵と雛の體量とに就て

鶉 の 家

余の飼養せる鶉は自ら胚卵孵化せしむ(「鳥」三號廿六頁参照)

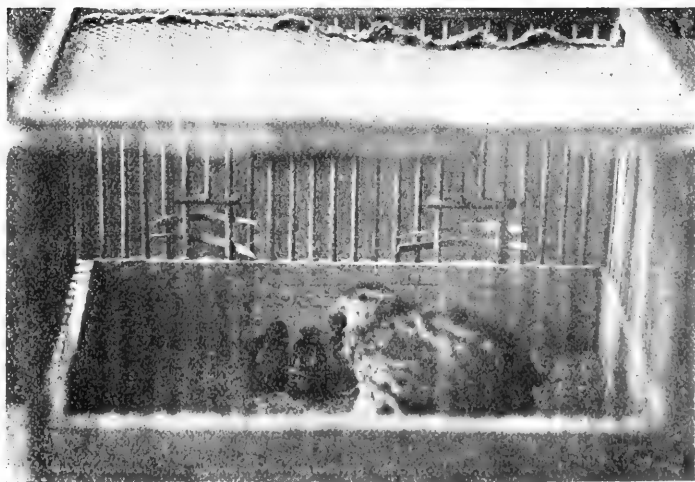
本年は五月九日より産卵、中途一日休産七十二個産卵せり、最後の六個を巢中に残し置きたるに親鶉の餌卵により八月五日未明



第 十 八 圖
ウヅラの親雛の巢
(八月五日撮影)

皆孵化せり、十八圖は其當日午後撮影したるものにして當日よ

り九月廿八日迄の雛の重量を計りしに左記の如きものを得たり
飼餌は「すり餌、卵黄、牛乳」の外「蜘蛛、蚊、糞蟲」なき與ふ



第 十 九 圖
ウヅラの親と雛二十月廿一日孵化
(十月廿五日撮影)

る事あり。八月廿日迄は午後三時より三時半の間に於て計量せ

り。第十九圖は親子雛を指示す爲め掲ぐ。

孵化當日

ぼる

午前中二回餌の絶えたることあり

三十五日 同 同 二一〇・七

一・四
一・六
一・八
二・一
二・四
三・一
三・九
四・一
四・五

二十八日 一八・二
二十九日 一八・六
三十日 一九・六

三十六日 同 同 二一・八
三十七日 同 同 二二・六
三十八日 同 同 二二・八
三十九日 同 同 二二・四
四十日 同 同 二二・六
四十一日 同 同 二二・八

二日 十日
三日 十一日
四日 十二日
五日 十三日
六日 十四日
七日 十五日
八日 十六日
九日 十七日

此雛は夜飼せず朝餌を與へて夕刻に至りて休止す親鳥は引續き産卵し居れり一日中發育の盛なるは午前にあるや午後なるやを知らむが爲めに以後三回計量することとせり其結果左の如く一般に午前六時は最も軽く午後零時半には明に重く午後六時には二三例の場合を除き著しく重くなれり。

四十二日 同 同 二二・九
四十三日 同 同 二二・九
四十四日 同 同 二二・九

親鳥は雛を慈まぬやうになれり己れ先だちて餌をむさ

親鳥雛の毛をぬきて食す夜中一羽の雛死せり(發育のよろしき者)依て親を別の籠に移せり

午後天候不良夜中より暴風雨

之迄の経験に依れば巢引中親鳥に動物性の者を多く與ふる時は雛の肥立たざる中に親鳥産卵せることあり。

十五日 六・三
十六日 七・一
十七日 八・三
十八日 九・一
十九日 一〇・一
二十日 一一・〇
二十一日 一二・〇

三十一日 午前六時 一七・四
午後零時半 一八・七
午後六時 一九・一

四十二日 同 同 二二・九
四十三日 同 同 二二・九
四十四日 同 同 二二・九

藁餌として粟を加へ與ふ

三十二日 同 同 一八・八
三十三日 同 同 一九・九
三十四日 同 同 二〇・八

換羽期に入る

狭き庭の蜘蛛は取りつくして以後與ふことを得ず

三十一日 同 同 一七・四
三十二日 同 同 一八・八
三十三日 同 同 一九・九
三十四日 同 同 二〇・八

四十二日 同 同 二二・九
四十三日 同 同 二二・九
四十四日 同 同 二二・九

二十五日 二六・二
二十六日 二七・三
二十七日 二八・四

三十一日 同 同 一七・四
三十二日 同 同 一八・八
三十三日 同 同 一九・九
三十四日 同 同 二〇・八

四十二日 同 同 二二・九
四十三日 同 同 二二・九
四十四日 同 同 二二・九

二十六日 二六・二
二十七日 二七・三

三十一日 同 同 一七・四
三十二日 同 同 一八・八
三十三日 同 同 一九・九
三十四日 同 同 二〇・八

四十二日 同 同 二二・九
四十三日 同 同 二二・九
四十四日 同 同 二二・九

二十七日 二六・二
二十八日 二七・三

三十一日 同 同 一七・四
三十二日 同 同 一八・八
三十三日 同 同 一九・九
三十四日 同 同 二〇・八

四十二日 同 同 二二・九
四十三日 同 同 二二・九
四十四日 同 同 二二・九

二十八日 二六・二
二十九日 二七・三

三十一日 同 同 一七・四
三十二日 同 同 一八・八
三十三日 同 同 一九・九
三十四日 同 同 二〇・八

四十二日 同 同 二二・九
四十三日 同 同 二二・九
四十四日 同 同 二二・九

朝鮮京城市場にて本年二月十三日に入手せしものは第廿圖に示す如き下面殆ど全部黒變せる珍らしきものなり解剖の結果雄なることを確めたり。

四十五日	午前六時 午後六時半	二四・五 二六・二 二六・二
午後より卵黄を用ゐず		
四十六日	同	二四・五 二五・四
一羽づゝ籠に入る		
四十七日	同	二五・三 二五・三 二五・三
四十八日	同	二四・二 二四・二 二六・〇
卵黄混入餌		
四十九日	同	二四・二 二四・二 二五・四
冷雨、餌同		
五十日	同	二四・二 二四・八 二五・一
冷雨、餌同		

五十一日	同	二四・二 二四・三 二五・〇
暴風雨、餌餌は同		
五十二日	同	二四・〇 二六・一 二六・一
飼餌 同様		
五十三日	同	二五・二 二六・〇 二六・三
飼餌 同様		
五十四日	同	二五・二 二五・三 二五・三
冷雨、飼餌同様		
五十五日	同	二五・二 二六・二 二六・二
朝甚雷雨鳴午後晴、飼餌同様		
九月廿八日終る		

マガンの下面變り

森 爲 三

本誌第四號にマガンの頭部白變の記事及び寫真ありしが今又



第 二 十 二 圖 マガンの下面黒變

本郷區内にて見たる鳥類

鶺鴒の家

左に記す鳥類は本郷區内なる我家の窓より見たるもののみなり。

- 1 ゴキサギ
- 2 ガン類
- 3 タカ類
- 4 トビ(加賀金澤地方言トビ)
- 5 ノスリ?
- 6 ヤマシギ
- 7 キジバト(同上方言ヤマバト)
- 8 ホトトギス(聲のみ聞く)
- 9 アラバヅク
- 10 キツツキ類?
- 11 キセキレイ
- 12 ヒヨドリ
- 13 サンクワウテウ
- 14 キビタキ?

- 15 ツグミ(同上方言ツムギ)
- 16 アカハラ(同上方言シナイ)
- 17 シロハラ(同上)
- 18 ルリビタキ
- 19 ノビタキ?
- 20 ウグヒス
- 21 ムシクヒ類
- 22 ミソサバイ
- 23 ツバメ
- 24 ヒレンジャク
- 25 モズ
- 26 シジウカラ
- 27 ハシブトガラス
- 28 ムクドリ

- 29 コムクドリ
- 30 メジロ
- 31 イカル(同上方言マメマロシ)
- 32 スバメ
- 33 ホノジロ
- 34 アラジ(同上方言アチ)

右の内ノスリ?は本年七月十二日暴風雨の節見たるものにて羽毛の色はトビに似て一層大なりき。アラバヅクは夕刻又は晩に「ホーホー」云ふ如く鳴く、一羽又は二羽來り地上より六尺位の枝に居るこゝろあり。キツツキ類?こゝろあるは鶺鴒より少し大にして木に止りたるこゝろを見るこゝろ能はず鳴聲「ヒークワクワ」云ふ如くに聞こゆ。

朝氷まけにけらしな水の面に

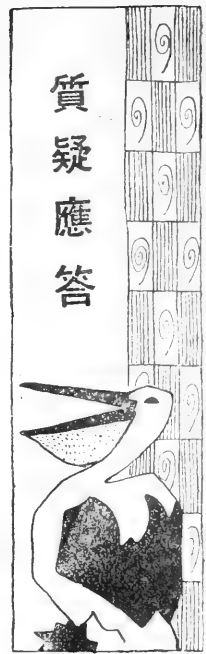
やぎる鶺鴒もゆきまなくなり

水の上にあこはさまらぬ物なれど

しばしはみゆる鶺鴒のかよひぢ

順

景 樹



質疑應答

一 一 一 質疑者 京城森爲三

問 一、ヒヨドリミエゾヒヨドリトノ區別點御教示を乞ふ。

答 此兩者の區別は稍困難なるもエゾヒヨドリは體小形にして嘴は特に繊細なり、體の上面及び脇は多少淡色なり、エゾヒヨドリの雄はヒヨドリの雄よりも常に小形(各部分)にして又前者の雌は後者の雌より常に小形なりと知るべし故にエゾヒヨドリの雄ミヒヨドリの雌とは殆んど同大のものあり得ることとす。(黒田回答)

問 二、ヤイロテウの雌雄の鑑別法御教示被下度候

答 ヤイロテウの生殖羽にありては雌は下面の赤味少く且つ色淡く、小雨覆の天青色の部分少く、光又淡し、喉の白色部分少く、背の緑青色も亦淡色なり。其他雄にありては翼一二〇耗に達するも雌は一一七耗位あるのみ。(黒田回答)

問 三、鶴類の體量、卵數、卵量、孵化日數及び「渡り」の大意

三十四 質疑者 朝鮮晉州 馬庭軍市

鶴類の體重

に就て丹頂、鍋鶴及び真鶴の夫々の場合を御教示を乞ふ。
答 鶴類に關する質疑事項に就て東京上野動物園の調査によれば左の如し。

名稱	生年月日	年齢	體量	備考
丹頂	大正二年九月 渡邊千秋猷納	本正、幼體當 時四才在カト 思ヘリ	二貫四百目	秤量當時風切新羽は殆ど完全に伸長す。
同	同	同	一貫九百目	秤量當時風切新羽は羽軸伸初めたるも其先端未だ開かず棒狀を呈す。
同	大正三年六月一日繁殖	五	二貫七百目	秤量當時風切新羽殆ど伸長す。
同	同 四年五月廿二日同	四	一貫七百目	秤量當時風切新羽大凡三分の二の長さに伸長。
同	同 六年五月十二日同	二	二貫	秤量當時風切新羽約二分の一に伸長。
同	同 六年六月五日同	二	一貫九百目	同
真鶴	明治三十八年八月購求	末	一貫六百五十目	明治四十一年片翼の風切は指骨と共に截去り完全にして新羽全伸長。
鍋鶴	同 四十二年四月同	同	一貫八十目	捕獲當時片翼を損したる由にて飛翔し能はざる程度にあり、殘翼風切新羽は完全に伸長。
同	同 四十二年一月 兒島秀吉猷納	同	同 九百目	明治四十四年片翼を切除せること眞鶴に同し、殘翼風切新羽は約二分の一の長さに伸長。

因記 上記秤量は、大正七年七月四日施行、又重量二十匁以下は切捨てたり。

(卵 數)
 丹頂及び眞鶴の産卵數は必ず一腹に二個とす(余は眞鶴に對しては經驗なきも京都動物園に於て) 鍋鶴に就ては一も見聞なし。
 一腹二個の産卵を抱温して孵化豫定日數を経過せるこき其卵を取去るこきは、大凡二週間の後更に第二回目の一腹を産卵し之を孵化せしむるここあり。

(鶴 卵 重 量)	卵 産 生 月 日 及 個 數	重 量	備 考
大正二年四月廿四日	丹頂卵一對	七十三匁	卵の秤量は生産後三日以内に行ひたるものとす。
同 同 廿八日	同 卵一對	六十八匁	初産卵は重くして後産卵は軽きを常とするもの如し。
大正三年四月三十日	同 卵一對	七十二匁	雌となり後産の分
同 五月四日	同 卵一對	六十九匁	雌となるが如き秩序的關係なるか、尙後日に於て其心に統計と孵化卵とに注意を拂ふべし。
大正三年四月廿六日	同 卵一個	六十八匁	
大正五年四月廿二日	同 卵一對	七十二匁	
同 同 廿五日	同 卵一對	六十八匁	

(孵化 日 數)
 滿三十三日にて如上の日數は、只丹頂と眞鶴に對する實驗と見聞

にして鍋鶴に就ては何等得る所無し此孵化日數を系統的に現せば

一(四月二十日朝産卵) + (滿三十三日) = 五月二十二日夕方孵化
 對(四月二十三日朝産卵) + (滿三十三日) = 五月二十五日夕方孵化

世間往々三十四日乃至三十五日目に孵化せるこを耳にするこもあるも俗に云ふ數へ日を以てするが故に朝の産卵ミ夕方の産卵ミに由て數へ方に一日の差を生ずるこあり、又丹頂、眞鶴共に産み落すや直ちに伏巢するを例とすれども偶産後一日間放任して伏巢せず夜に入り人の知らざる間に伏巢するものあり此の如きものが數へ日の三十五日を唱ふる起因をなすものなり鶴類は一卵生みし後更に四日を経て次の一卵を産す故に孵化日數も亦四日の差を生ず。俗に思ひ卵乃至思ひ孕みなぎ稱する場合には不規則に産卵するこ眞鶴、丹頂數多に於て經驗を有す、因に鶴の産する二個の卵が常に雌雄兩性なるこ云ふこは既に古く新宿動物園の古老より聞ける事なりしが同園に於て繁殖したるものに付調査したるに確固として雌雄兩性なるこを信じたり明治二十五、二十六年に同園に産出したる丹頂二對を明治二十七年に當園へ御下付相成りたるものも眞の雌雄二對にて彼此を綜合して考ふるに間違なき事實なりとす(黒川義太郎回

答)

次に朝鮮京城動物園の調査によれば左の如し。

丹頂の體量 二貫二百四十九匁

但し大正五年十二月三十一日忠南瑞山郡泰安にて捕獲せる

ものにして雌雄不明。

眞鶴の卵

大正七年五月十日に李王家動物園にて産卵せるものは前後

に只一個にして親鳥は今尙其一個を温め居れり卵の大きさは

長徑三寸五分、短徑一寸九分、重量四十四匁あり、色彩は

淡青灰色にして所々淡褐色の汚斑あり(但し六月四日の

調)

丹頂の渡來 (黃海道海州の調べ)

海州附近は有名なる鶴類の産地にして同地に在勤せる人の

話によれば丹頂は年々秋十月末頃より渡來し翌年三月末に

至り其影を没するよしなり。

因に大正六年三月十五日より廿一日迄の間に同地にて良に

て三十羽餘の丹頂を捕獲せることあり(下郡山誠一回答)

次に編輯者より質疑者に右の下郡山氏の調査の結果を報知せ

しに左の如き回答ありたり。

左に下郡山氏御研究事項と小生が岡田信利先生御指導の下に明治四十五年乃至大正三年に亙る間調査せる事實と稍や異なる處有之御高覽に供し其の原因に付き重ねて御垂教仰ぎ度次第に御座候。

一、卵量 眞鶴の場合 四十四匁(一個の量)

李王家動物園飼養のものによる(下郡山氏報)

(同園に於て大正二年五月二十日午後十二時より廿一日午

前六時の間に於て産卵せるものを同日午前八時秤量せしに

五十匁五分 (小生調)

備考

聞く處に依れば右四十四匁とあるは大正七年五月十日産

卵し六月四日に至り巢より墜落し石に當りて損したるも

のを六月四日秤量せしものなりと言ふ。

二、御参考迄に

眞鶴 大正五年一月中本道巨濟島各地の沿岸十町内外の

處(水田)に於て銃獵せし(雌雄判明せず)十羽の秤量事實

の通信を綜合するに何れも一貫七百匁より一貫八百匁の

ものなりき(馬庭軍市氏報)

次に質疑者より更に左の如き報告ありたり。

鶴に関する調

(一) 採集年月日 明治四十四年一月三十日
場所 慶尚南道陝川郡龍州面高品洞地眞鶴雄

(二) 二羽の體量 一貫七百八十匁(實際秤量せるものなり)

大は一貫九百匁
最小は一貫六百匁

(三) 渡來の場所

陝川郡龍州面高品洞地
同郡栗谷面文林里烟地
同郡同面本裏里烟地
同郡陝川面陝川洞田地
以上何れも洛東江支流南江に沿ひたる場所

(四) 渡來の種類

眞鶴 一群八九羽より二三十羽なり稀には八、九羽頂 頗る稀にして五、六羽を見るに過ぎず。
鍋鶴 見るこゝなし。

(五) 渡來の初期

年 別	初めて見たる日
明治四十三年	十一月五日
同 四十四年	十一月五日
大正元年	十一月十日
同 二年	十一月十六日
同 三年	十一月十八日
同 四年	十一月二十一日
同 五年	十一月二十一日
同 六年	十一月三十日

以上は風聞にあらず實見の日なり漸次渡來期遅るが如し。

(六) 去 期 確知せるにあらざるも大正元年前は二月初頃

なりしが漸次早くなり大正七年は一月廿五六日なりし。

(馬庭車市氏報)

以上の結果鶴類の體量は丹頂最も重く、次は眞鶴、鍋鶴の順序なるが如く、卵數にありては必ず一腹二個なり、卵量にありては丹頂の卵六八乃至七三匁、眞鶴は五十匁五分位にして四十匁さあるは不完全のものゝ如し。孵化日數は丹頂と眞鶴とにては滿三十三日を要するものなり。因に「鮮滿鳥類一斑」87頁五行「ナベヅルは……金剛山下……」こゝあるはマナヅルの誤りの由につき訂正す。

次に「渡り」の大要に關しては前記下郡山氏の報告の外「鮮滿鳥類一斑」86頁によれば左の如し。

丹頂、鍋鶴、眞鶴は木浦附近にては十一月下旬より三月下旬頃迄の間棲息す云ふ。

又内田清之助氏によれば鹿兒島縣出水郡阿久根村にては(鍋鶴、眞鶴、丹頂)年々十一月下旬より三月下旬迄の間に見るこ

云ふ。又同氏によれば山口縣熊毛郡八代村にては、鍋鶴年々十月中旬に渡來し三月下旬に去るこあり。

又ドレツサー氏によれば丹頂の場合にありて

"It is said to frequent the large open plains, and is a migrant in S. E. Siberia, arriving in the Ussuri country early in April and leaving in November" (Dresser).

こあり故に鶴類の「渡り」は朝鮮中部以南及び本邦内地にありては十月中旬乃至十一月下旬より渡來し翌春三月下旬迄止まるこ前に前記の諸説一致するも馬庭氏の最近の報告によれば渡來期、去期共に年々遅れ特に去期に於て然り之れには何にかの原因あるべし。(黒田長禮回答)

問 四、俗に「鶴は千年龜は万年」の由來並に何時代より呼び傳へられたるものなりや。

答 本篇講話欄に詳細に記述したるものを見られたし。

(黒田回答)

五 質疑者 黒田 長禮

問 五、小生飼養の眞孔雀雄七歳に本年始めて雌四歳を配合せしに一腹十九個の多數の卵を産し候かゝる例は稀れなるこに候や。

答 眞孔雀雌の十九個産卵は一腹として頗る多産、二腹としてれば普通なり是迄一腹十九個の産卵は未だ聞きたる事なし

(黒川義太郎回答)



□本會第九回總會 本年四月廿六日午後五時春期總會を神田淡路町多賀羅亭に於て開會せり。出席者次の如し(來會順)

飯島 魁 内田清之助 松平 頼孝 鷹司 信輔

黒田 長禮 森田 淳一 菊池米太郎 小林 桂助

稲山徳太郎 大久保忠春 田子 勝彌 松永 安衛

吉澤 寛夫

當日の出陳標本は啄木鳥科及蜂鳥科に屬するものにして出品者及出品點數次の如し。

出品者 蜂鳥科 啄木鳥科

黒田 長禮氏 二七種 四七種

松平 頼孝氏 二〇種

動物學教室

一二種

六種

鷹司 信 輔氏

四種

右の外靱山徳太郎氏よりイカルチドリ卵及幼鳥及其他數點の出

陳あり午後九時半散會。

□本會第十回總會 十月七日午後五時より神田淡路町多賀羅亭

に秋期總會を開催せり、當日は世界風邪流行の爲め出席者意外

に少數にて次の十氏なりし。

籩 篤麿 靱山徳太郎 黒田 長禮 内田清之助
鷹司 信輔 小林 桂助 寺岡 直 丘 淺次郎

岡田 信利 飯島 魁

會場には會員靱山徳太郎氏の今夏勸察加半島に於ける採集品

(別記)並に海雀科鷄科鳥類標本の陳列ありて靱山氏より興味あ

る勸察加半島採集旅行談ありたり終つて内田幹事より本年度會

計の報告を了し九時散會、陳列標本次の如し。

勸察加半島産鳥類 五十四種 百十五點 靱山徳太郎氏

海雀科鳥類 六種 八點 動物學教室

同 十種 十五點 黒田 長禮氏

鷄科鳥類 五種 六點 動物學教室

同 三十二種 四十六點 黒田 長禮氏

八色鳥科鳥類 八種 九點 黒田 長禮氏

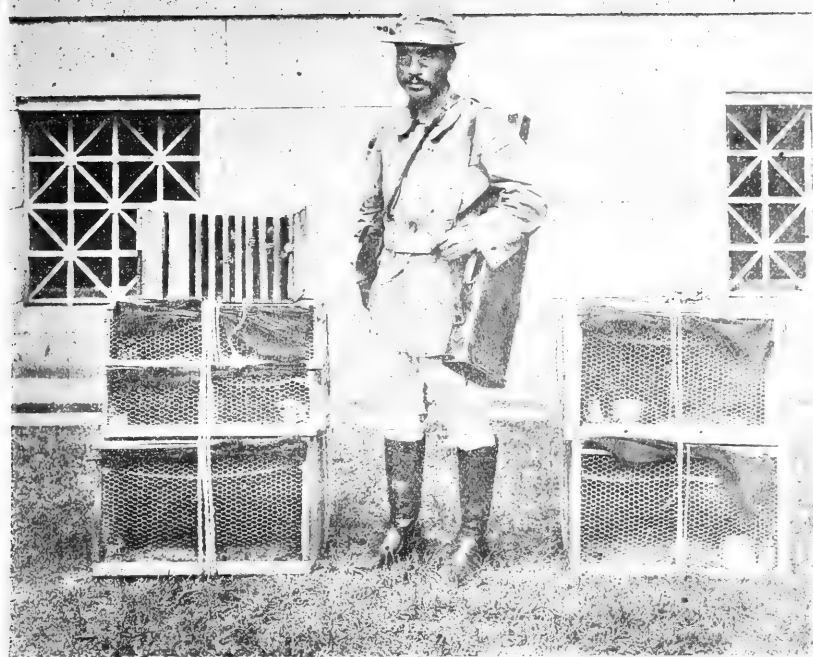
ヤマガラ、ナミエヤマガラ、オーストンガラ 三點 黒田 長禮氏
ベンケイヤマガラ(西館産) 一點 靱山徳太郎氏
オホトウヅクカモメ(浦賀沖産) 一點 動物學教室



第廿一圖 臺灣總督府より獻り上カミドジ雄 高能山産

□ミカドキジ 生鳥の献上 臺灣總督府にては豫ねて同島特産のミカドキジを生獲し天覽に供せんとの議ありしが同府博物館囑託菊池米太郎氏の苦心捕獲に努めたる結果今回漸

く能高山に於て雄鳥二羽を生擒し得たるを以て氏は同時に捕獲せる山鷄、深山竹鷄數羽と共に献上の爲め上京せられたり右のミカドキジは九月十六日及十九日の採集にして採集後一ヶ月餘



を經過せるのみなるにも係らず善く馴れ比較的人を恐れず若適常なる雌鳥を配するを得ば充分蕃殖し得べき望あるを以て氏は歸臺後雌鳥の捕獲に努むべしとのことなり。

□飼鳥共進會 中央畜産會にては例年の如く一月十四日より十九日迄六日間上野公園竹之臺陳列會内に於て家禽共進會を開催の由にて其小禽部の審査は鷹司信輔、内田清之助、黒田長禮、三氏之に當らるゝ筈なり、本會在京會員諸君には追て特待券を送呈すべし。

□鶴・千鳥類圖説 黒田長禮氏著同書の刊行は豫定より非常に遅刊せしが目下全部校了せられしを以て本誌發行の頃には發刊の運に至るべしと云ふ本會員には割引あるを以て入用の諸君は本會事務所宛豫め申込み置かれたし。

□「鳥」次號原稿締切 期日大正八年二月末日限り。

□編輯に關する一切の用件は赤坂區福吉町黒田長禮氏宛のこと。

□會計其他の件は東京理科大学動物學教室内本會宛のこと。

□入會

H. C. Oberholser

U. S. National Museum, Washington, D. C.

蓮沼 薰 三井合名會社柔佛出張所巴盤阿護護園

和田 于藏 青森縣師範學校

藤木 常隆 京都御所御苑堺町門内官舎

中尾 春雄 廣島市南竹屋町樋小路

富田 杉太郎 千葉縣木更津中學校

□轉居

大澤 保 名古屋市中區中市場町三ノ十八

川口 孫治郎 福岡縣若松市若松中學校

内田 清之助 東京麻布區筈町三一

水野 誠 在北米

□死亡

波江 元吉

「鳥」第六號正誤

頁 行

一七 十三

鷺鷥 鷺鷥

一八 十一

小鶻斗 小鶻手

十九

「鶻は至つて多く」の下「鶻も少からず」を脱す

四一 上左ヨリニ *Asperiliosa spartiosa* *Asperiliosa pelawensis*

四六 四

四百年の間に輯銘 輯録

四七 三十四

「法律書」の上に「即」を脱す

四八 七

鷺鷥 鷺鷥

四九 八

「鷺鳥類の鷺、鷹」の下に「と」を脱す

五〇 九

捕食嚴禁 捕食嚴禁

五一 十四

邦訓 邦訓

五二 五

日本現時 日本現時

五三 八

大儒碩學詮考 碩學に

五四 八

採取せしめざりしを ざりしと

五五 六九

下終行 桂長次郎

五六 七〇

下 長興鼎

五七 下二

長井晴吉 長井晴吉

日本鳥學會規則

第一條 本會ハ日本鳥學會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ハ東京帝國大學理科大學動物學教室ニ置ク

第三條 本會ノ目的左ノ如シ

一鳥類ニ趣味ヲ有スルモノ、懇親ヲ計ルコト

一鳥類ニ關スル學術ノ進歩ヲ促スコト

一鳥類愛護ノ思想ヲ普及セシメ鳥類ノ保護増殖ヲ計ルコト

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ評議會ノ決議ヲ經テ隨時種々ノ事業ヲナス

一當分一年ニ二回雜誌『鳥』ヲ出版スルコト

一臨時刊行物ヲ出版スルコト

一毎年春秋二回會合シ鳥類ニ關スル講演談話ヲナシ同時ニ鳥類ニ關スル圖書標本其他ノ展覽會ヲ催ス

一鳥學の探檢ヲ舉行スルコト

第五條 本會々員ヲ分チテ甲種會員ト乙種會員ノ二トス

一甲種會員ハ會費トシテ一ヶ年金貳圓四拾錢ヲ納ムルコト

一乙種會員ハ會費トシテ一ヶ年金壹圓貳拾錢ヲ納ムルコト

第六條 甲種會員ニハ雜誌『鳥』、臨時刊行物及ビ動物學雜誌ニ

掲載セル鳥類ニ關スル論文ノ別刷ヲ配布ス

乙種會員ニハ雜誌『鳥』及ビ動物學雜誌ニ掲載セル鳥類ニ關スル論文ノ別刷ヲ配布ス、臨時刊行物ハ定價一圓ヲ限り無代配布ス其他ハ定價ノ三割引ヲ以テ講讀スルヲ得

第七條 本會ニ入會セント欲スルモノハ住所氏名職業ヲ記載シ本會ニ申込ムヘシ但甲種會員ノ入、退會ハ評議會ノ決議ニヨル

第八條 本會ニ會頭壹名幹事壹名ヲ置ク

第九條 本會評議會ハ會頭幹事及ビ會員ノ互撰ニヨル評議員若干名(甲種會員)ヲ以テ組織ス

東京理科大學動物學教室内

日本鳥學會

役員

會頭 理學博士 飯島 魁

幹事 獸醫學士 内田清之助

評議員 理學博士 塚 飯 啓

理學博士 丘 淺次郎

公 爵 應 司 信 輔

理學士 黑 田 長 禮

子 爵 松 平 賴 孝

投稿及質問規定

(一)鳥類の習性、渡り、方言等に關し廣く各地方會員の投稿を
歓迎す

(二)既掲原稿は返戻せず、但し挿畫に使用せる寫眞及び圖畫は
希望により返戻すべし

(三)原稿は紙の表丈を使用し一行二十五字詰に認められたし、

假字は平假字を用る動物名及び外國語は片假字とす

(四)挿畫は寫眞以外のものは墨汁にて認められたし

(五)原稿は東京赤坂區福吉町黒田長禮氏宛郵送せられたし

(六)本會は鳥類に關する質疑に應答す、質問の事項は返信料封

入理科大學動物學教室内本會宛郵送せられたし

(七)質問解答は一般讀者に有益なりと認むるものは本誌に掲載

するも其他は質疑者に直接解答するものとす

大正七年十二月二十七日印刷

定價金參拾五錢

大正七年十二月三十一日發行

禁轉載

編輯兼
發行者
東京市日本橋區兜町二番地

木下憲

印刷人
東京市日本橋區兜町二番地

神谷岩次郎

印刷所
東京市日本橋區兜町二番地

東京印刷株式會社

發行所

東京理科大學
動物學教室内

日本鳥學會

振替口座東京六五九九番

發賣所

東京日本橋區
十軒店町

裳華房

振替口座東京一〇七番

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 內田清之助 著

第一篇 鸚類圖說

絶版

獸醫學士 內田清之助 著

第二篇 海産保護鳥類圖說

原定色版 四四版 三十枚
 郵稅價 四四錢 附

理學士 黒田長禮 著

第三篇 世界の鴨

原定色版 一枚寫真版五枚
 郵稅價 六七十五錢 附

理學士 黒田長禮 著

第四篇 世界の雁と鵞

原定色版 四枚寫真版五枚
 郵稅價 金八錢 附

仁部富之助 著

第五篇 郭公の蕃殖に關する研究

コロタイプ版一枚地圖一枚
 寫真版挿畫數
 定價 金卅五錢 郵稅四錢

理學士 黒田長禮 著

第六篇 臺灣島の鳥界

附 菊池米太郎述 臺灣鳥類の習性

原定色版 一口繪 一枚
 寫真挿畫數
 定價 四拾錢 郵稅四錢

理學士 黒田長禮 著

第七篇 鮮滿鳥類一斑

原定色版 一口繪 一個
 寫真挿畫數
 定價 一圓五十錢 郵稅十二錢

房華裳 町店軒十區橋木日 番七百京東替 所捌賣

内田清之助 仁部富之助 共著 東京動物學會發行

鳥類の渡り及繁殖期

■製本出來■

菊版假裝紙數百三十頁
圖版十葉挿畫三十個
定價金一圓五十錢
郵稅不
要

本邦産鳥類の「渡り」並に繁殖期に就ては、其利害の關する所廣く、夙に調査せられざるべからずして、而も未だ信賴すべき報告の公表せられたるを聞かず。これ吾人の甚しく遺憾とせる所なり。今や著者等の尠からざる努力の結果、此一篇成る。材料は精選せられたり、調査は鄭重を極む。敢て斯學の同好者並に江湖の實務家に薦めんとする所以なり。

資料 (一)中央氣象臺が全國より蒐集せる未刊行報告(二)農商務省が全國地方廳及大林區署より蒐集せる未刊行報告(三)故小川三紀氏の觀察手記(四)著者等の觀察手記(五)既刊信賴するに足るべき總ての記録

内容 (一)緒言、觀測規約、「渡り」の期節と經路(二)各種鳥類「渡り」の期節の統計的研究並に其生態的氣象學的考察(三)各種鳥類繁殖期の總括的調査及氣象との關係。以上三章、項を分つ事四十一、數十個の詳細なる表を附して説明す。特に鳥學專攻者以外の便を計りては、主要鳥類約三十種の寫生圖を挿入す。

■注意 本書ハ日本鳥學會會員ニハ本會ニ申込アレバ一人一冊ヲ限り定價金一圓ニテ頒布ス

大正七年四月

日本鳥學會

理學博士 飯島 魁先生校閱
獸醫學士 內田清之助先生著

四六二倍美本原色
版十八枚寫真版
廿九枚插繪數十個

日本鳥類圖說

正續完成

■本書ニハ本邦所産鳥類全部七百餘種ヲ網羅シ精密ナル寫生圖ヲ附シ一々其形態原産地分布習性等ヲ詳説ス
 ■總論部ニハ鳥學研究上必要ナル事項ハ凡テ之ヲ解説シ本邦鳥學研究上ノ參考文書ハ委ク之ヲ解題ス
 ■本書ニ掲ケル圖ハ原色版十八枚寫真版二十九枚插繪數十個凡テ理科大學所藏標本ヨリ新ニ寫生セル所ニ係ル
 ■保護鳥類一覽ヲ附セルヲ以テ本書ハ一面ニ於テ現行法 臺灣朝鮮モ各別ニ掲ケニ規定セル保護鳥類一切ヲ含メル完全ナル保護鳥圖譜ト云フベシ
 ■圖版ノ精巧印刷裝釘ノ善美トハ本邦出版界稀ニ見ル所トス

定價及稅
 上卷 金五圓
 下卷 金五圓
 續篇 金四圓

上下卷郵稅各
 內地 卅六錢
 內地 卅五錢
 內地 卅二錢
 續篇郵稅
 內地 廿五錢

印刷鮮麗
 圖版精巧
 裝幀優雅

斯界稀有の新著刊行豫告

理學士 黒田長禮先生著

十二月下旬刊行

鶉千鳥類圖説

四六二倍版總布製美裝
三色版五葉寫真版五葉
挿畫百五十個
正價金 八圓

本編は種類の識別最困難なる鶉・千鳥類 Charadriidae の全世界に産するもの二百三十七種類を圖説せるものにして何れも各種に就きて雌雄・夏冬羽・老幼の記載及び分布・習性等を記述し特に本邦産の種類に就きては最詳述せり 尙各亞科より亞種に至る迄細密なる索引を具備し總論としては本科鳥類の形態・習性・「渡り」・分類法・參考文書等を記述する事二十三項に亘り其他分布表・學名索引等を附録として添附せり
圖版は鳥類寫生圖に最堪能なる横山慶次郎畫伯の筆に成り十葉約八十種の邦産種を圖し本文挿畫には内外種の寫真、寫生圖等百五十圖を挿入せり

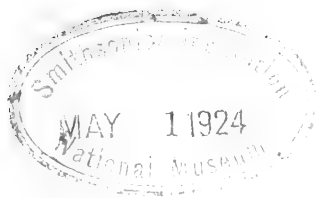
電話本局一千
七百京東替振

裳華房書店發行

東京日本橋
十軒店

Contents:

- A collection of birds from Quelpart Is.
By Nagamichi Kuroda and T. Mori.
- On the breeding habits of Ninox scutulata.
By M. Kawaguchi.
- On Catharacta antarctica & Syrnhaptes paradoxus. By Nagamichi Kuroda.
- A collection of birds from Okinawa and Amami-Oshima. By E. Horii.
- A list of birds collected in the western coasts of Kamtschatka. By T. Momiyama.
- Frontispiece: The late Mr. Namiye.
- Miscellaneous Notes.





鳥

第
六
號

大正七年五月發行

日本鳥學會



鳥第二卷第六號目次

海豹島に於けるウミガラス(口繪第一圖版アートタイプ)……………田子勝 彌氏原寫

論 說

我國にて初めて捕獲せられし大盜賊鷗に就て……………理學士 應司信輔

カムムリツクシガモ *Pseudotadorna cristata kuroha* に就し……………獸醫學士 内田清之助

アカゲラの尾羽の斑點に就て……………熊谷三郎

臺灣總督府殖産局採集鳥類目錄……………獸醫學士 内田清之助

種子島の鶴及び附近の二三鳥類……………理學士 黒田長禮

朝鮮鳥類の習性觀察……………荒木彦助

講 話

野外鳥學の一資料(其二)……………理學士 石井重美

江戸時代將軍家の狩獵(承前)……………永井 磔

雁鴨類の夏冬の棲息地……………理學士 黒田長禮

猶太民族の古代に於ける禁獵鳥類……………荒木彦助

雜 纂

バン・ヒクヒナ類の新分類(理學士黒田長禮) アカツクシガモの「渡り」(獸醫學士内田清之助)

アメリカカヒドリシミコアイ (理學士黒田長禮) コホリガモの最南分布例(梶山徳太郎) ハシ

ブトイカルに就て(森爲三) 美濃にて獲られしトキに就て(柳原要二) 東京市内にて見たる鳥

類(梶山徳太郎) 琉球産鳥類の方言(尙景) 下總印旛郡地方の鳥類方言(齊藤源三郎) 埼玉

縣下に渡來せし鶴群の真相(梶山徳太郎)

質疑應答 十 件 (理學士黒田長禮解答) 雜 報 十二 件

海豹島に於けるウミガラス（口繪解説）

田 子 勝 彌

ウミガラス *Alca troile* (L.) は樺太千島等に多數棲息する海鳥の一種で、俗にロベン鴨又は腹白なごこ呼ばれる。圖は海豹島に於けるウミガラス蕃殖場の光景であるが、此島には毎年五月下旬頃から此鳥が集合し來り、八月頃迄に蕃殖育雛を終り、八月下旬頃島から飛去つて仕舞ふ。

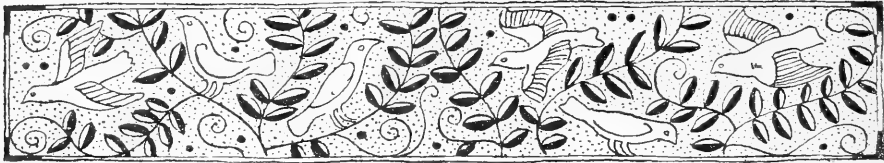
海豹島は長さ四百米突幅二十米突高さ五十呎許りの島で、其上部は一面に平たい高臺になつて居る、而して其中央には一條の道があつて此道路の兩側二十米突許を除く外は全部にウミガラスが密集し、茲で産卵育雛する。近年は高臺丈で足りなくなつて少しでも平らな所があれば崖地へでも産卵するやうになつて來た。此島のウミガラス産卵地は草も土も無い岩の露出した所で、茲へ直かに産卵する。一腹の卵は多く四個であるが孵へるのは其中の二三個丈である。ウミガラスの卵は食用として多數に採集されるが、此鳥も他の鳥の様に産むだ卵を取去るゝ後から又新に産卵し、三腹位繰返して産卵する。雛は七月初めに孵

化し、七月下旬頃には親鳥に連れられて島の周囲の浅いラグーン様な所へ行つて游泳の練習をやらせられる、斯くて八月下旬頃充分飛翔力が、發達する様になる。親鳥と共に全部島を去るのである。

海豹島は島の周囲が帶狀に砂地になつて居るが、此東側の方が有名な臙肭獸の蕃殖場であつて毎年七八千頭の臙肭獸が仔を育てる。ウミガラスは此臙肭獸と密接の關係を持つて居る、臙肭獸はウミガラスの群が崖の上で安靜にして居る間は安心してゐるが、崖の上を人が歩いたりなぎしてウミガラスが騒ぎ出すと、臙肭獸群は之を見て警戒し初め、牝獸や仔獸はぎしぎし海の中へ飛込んで逃げ去る。ウミガラスの蕃殖に最害のあるのは此島の砂地に棲息する鷗である、鷗はウミガラスの卵を盗み食ふのみならず鷗が崖から砂地の方へ落ちて來るに忽ち啄き殺して仕舞ふ。鷗は斯様にウミガラスの蕃殖には有害な鳥であるが臙肭獸に取つては甚有益な關係がある、それは臙肭獸が仔を産むで仔獸の臙肭が牝獸に附着して居る時に、鷗が直ぐに飛んで來て臙肭を喰ひ切り丁度臙肭獸の産婆の様な役目をする。こゝである。



海豹島ニ於ケルうみがらす *Alca troile* (L.) 群
(右上圖下方ノ大形ノ動物ハうみがらすト密接
ノ關係アル臍胎獸ノ群 左上圖ハ船中ニ飼養セ
ルうみがらす)
(田子勝彌氏原圖)



論 說

我國にて初めて捕獲せられし大盜賊鷗に就て

理學士 鷹 司 信 輔

大正六年の春松平頼孝氏は相模灣に於て海鳥採集をなし、珍らしき鷗を得られたり、今余に其の同定並に發表を依頼せられたるに依り氏の好意を謝し之を記述せん。

記載 頭及體の下部は灰褐色、頸側、頸の後部及胸の側面には疑白の縁を有する羽を交ひ、下腹部より下尾筒にかけては漸時其色濃く下尾筒に於てはセビア色を呈す。其他の上部は濃きセビア色にして、間肩部には羽軸に沿ひ極めて不判明なる、翼端に向つて開ける中央縦班を有す、尾羽及び大雨覆の極て基部、及び初列風切の基部は白色にして、此部分は其中廣く、翼を張れる時は一白帯を示す。但し初列風切第一羽の外辨は可なり基部迄セビア色を呈す。翼の裏面及び腋羽は濃きセビア色なり。間肩部及び風切の羽軸は疑白色を呈し鮮なり。嘴は黒褐色、虹彩は暗褐色、脚は赤色を帯びたる黑色なり。

大サ 但長は樞

番號	嘴峰	跗蹠	翼長	性
8370	4.8	6.4	39.5	♂
8512	4.7	6.6	40.5	♂
8478	4.5	6.5	38.5	♀
8513	4.5	6.3	40.0	♀
8472	4.6	6.5	37.5	♀
8474	4.6	6.2	30.5	♀
2473	4.6	6.5	38.5	♀
鷹司所有	4.5	6.4	39.5	♀

採集地。江の島沖、西方六里程の所にて俗に「大山ガケ」ニ稱する所、並に江の島沖西方約二十町餘の所なり。

本種は鷗科、盜賊鷗亞科 (Stercorariinae) に族する鳥にして、正しく今迄我國にては全く捕獲せられざる種類なり。故に之を「オホトウゾクカモメ」ニ新に稱する事せり。

盜賊鷗亞科はさらに二屬に分つ、一つは形大にして容姿重々

しく尾羽は長からず、中央二枚の羽は僅かに他の尾羽に優り、尾は鈍き楔型をなす。他は中形の鳥にして、尾羽は長く特に中央二枚の羽は長く他の尾羽をぬく。前者は、今回江島沖に得られたる盜賊鷗の族する屬にして、之を大盜賊鷗屬 (*Catharacta*) に云ひ、後者は、即ち従前の總ての盜賊鷗の種類に屬するものにて盜賊鷗屬 (*Stercorarius*) に云ふ。

Saunders 氏は、大盜賊鷗屬に下の四種を含ませしむ。

1. *Catharacta skua*



第 一 圖 ホオウトウカクモ

二

- (Brimnich) 大西洋の北部及びバドソン海峡の沿岸
3. (*C. chilensis*) (Saunders) 南亞米利加大陸の南部
3. (*C. antarctica*) (Lesson) 濠洲及びニュージーランド並に其の屬島フアックランド群島ケルケレーン島サウスオクニー島
4. *C. macrorhynchos* (Saunders) サウスヴィクトリアランド及びウエッデル海

右の如くなるを以て、今回得られたるものは、一見 *Catharacta skua* (Brimnich) の如く思はるれど、其の色彩を見るに *Catharacta skua* (Brimnich) は多少にかかはらず下部に赫

赤色を帯び、嘴は其の先端を除き濃灰色を帯びたり。之れ今回捕獲せる大盜賊鷗に見ざる所なり。

又先に白瀬氏が南極探險に趣きて持ち歸りたる標本の一部にて理科大學の動物學教室にある南海産 (South Sea) の大盜賊鷗三個に付きて比較するに、其色彩に於ても大きさに於ても略一致するを見る。今此の三個の標本の大きさを示さば

翼長 四〇糎 一三九、六 三九、六 跗蹠 六、二 一六、一 〇 嘴峰 五、二 五、〇 四、五

以上の事及び Catalogue of the Birds in the British Museum, Vol. XXV を見るに、今回捕獲せられたる大盜賊鷗は *Catharacta antarctica* であること同定するを可なりと考へたり。但し、今回の標本は、換羽期のものにして、同期に於ける本屬の特徴を良く表し、其頸部、頸部甚しきは胸、腹部の各羽迄 wornout して其先端は疑白色を呈し、中には初列風切の先端が褐色に變ぜるものもあり。又新羽の未だ鞘の脱し切らざるものもあり。夫れ故翼長は、已記の表のものより完全せる新羽の時は長大なるべしと思はる。


次に *Catharacta skua* は、Saunders 氏は、カリフォルニアに於て捕獲せられたりつゝ一時稱へしかつ、Catalogue of the Birds in the British Museum に於ては之を否定し No confirmation of reported occurrence in the Fur Countries or on Pacific side 云へり又 Baird, Biewee 及び Ridgway の共著なる、The Water Birds of North America にも Cooper 氏は下の如く云ひて、其の確證を否定せり。On the coast of California, it certainly occurs very rarely if at all-as he has never seen it, nor met with it in local collections, nor does he know of its having been identified on that coast by any one 又 A.O.U. Check List 3rd ed. (1910) にも近年の His 及び Bull, B. O. C. にも太平洋に於て得られたりと言及しあるなし。

又、勿論 *Catharacta antarctica* の北太平洋に産する記録の未だあるを聞かず。*Catharacta chilensis* が南米の太平洋沿岸にも産し、ヘルー邊迄北上せるものあれど、其の色彩今回捕獲せられしものと異り其下部甚だしく赭赤色を帯ぶるを以て、容易に本種たらしめるを知る。

如上の事より考ふるに、今回の採集により北太平洋にて初めて *Catharacta* 屬の有るを知るに至れる次第にて、甚だ面白き事なりと云ふべし。

其習性に付き、松平氏より、採集當時の模様を詳細に申し越されたる、文あれば今之を移さん。

『始めて海上に此鳥を見たるは、本年五月二十三日にして、翼に白帯ある大形の鳥類なりしを以て、珍らしきものも存ぜしも時
に海上風波強く日も亦没せんこせしを以て、此日は歸宅致候。翌日之を目的として大山ガケ（漁師方言）江ノ島西沖、即地圖上江
ノ島真鶴中間の沖位、江ノ島を去る西沖六里以上の海上にて單獨に飛來り、水風鳥の群に突入して餌を得たる後海上に浮遊せる一
羽を見出し、舟を近けしむるに、餘り舟を恐れざるものを見へて、一向に飛去らず捕獲し得たるを初めこして、合計八個を得たる
次第に有之候。

彼は何時も食を求むる爲水風鳥を追ふに非ず。時こしては一の遊戯的に追廻す事も有之候。然し突撃を試むる時は、海面を極く
低く飛翔し群中に入ては何時も水風鳥の上方に  斯の如き直立飛翔を爲す事は普通のトウゾクカモメと異なる事なく、突撃せ
るトウゾクカモメは、先其群中の一羽を追ひ、多くの場合脚を以て鷹の如くに水風鳥をつかみ、或はケリ、又は嘴を以て頸部或は
背部をつまき、翼を以てハタキ等す。以上の如き方法を爲す時は、御承知の通水風鳥にのみならず鷺族等にも其飛翔力を強くす
る爲には勢ひ體力を軽減せざる可らず之が故に其胃中に存する食物をハキ出して飛ぶ事は彼等の一の習性なるを以て、之を知て大
盜賊鷗が水風鳥に爲す一の求食方法なるべし。又餌を充分食せる後は水風鳥の群の浮遊する極て近くの處に、或は其群の内に浮び
居るも、群を爲せる水風鳥一向に平氣なるは面白き事に候。彼等に尤恐しき敵の近くに平氣に居る様は、鷗よりも水風鳥の方愚か
に非ざるかとも思はれ候。此場合鷗の盜賊鷗に對するは、少しく水風鳥と違ひ、斯様に近くに來るを悦ばず、何時も二三十間或は
其以上の距離に鷗群の居るを見受け候。何れの水風鳥（此當時海上にオホミズナギドリ、ハシボソミズナギドリ、ハイイロミズナギ
ドリ、アカアシミズナギドリ）をも迫害するも、尤小形なるハシボソミズナギドリを他より以上に目的とする様子にして、彼の迫害
の當時瘡を受たるものは、時に海上に死し居るをも見受くる事有之候。大形の鳥類故、其飛ぶや甚だ遅きものにも有之候。

標本に捕獲場所記入有之候通り、大山ガケのみには非ず江ノ島極近くにて捕獲致し候。之は、魚（イワシ、シコ）の海岸近く
に來り「セリ」を爲し水風鳥の「ニギワイ」に依て斯様なる近き場所にて捕獲し得たるものに有之候。

他事なれども、此「ニギワイ」又魚の「セリ」なる事は御承知もあるまじければ爰に一寸申上置候。

魚の「セリ」は、魚群の海面に持上り一の小山状を爲すものを申候。之は「イワシ」等の群が他のサバ其他大形魚類に追はれたる結果に有之候。但し鷗の場合は未だ海上に多くの海雀アビの居る時なれば「セリ」なるものは、必ずしも大形魚の爲にのみ起るものにては無之候。此「セリ」を見て群る場合は鷗に多く、未だ「セリ」の海面に出てざる前海面上二三ヒロ位の所にある時に群をなすは、水風鳥に多く見る様に有之候。之鷗よりも視力の強き爲か。「セリ」を見て群り来り、或は水中に或は水面に、鳴きつゝ餌を求むる様を「ニギワイ」に申候。

尙大盜賊鷗の食餌の様は、水風鳥の口中より出たる魚類の水面に落たるを食するものにして、普通の盜賊鷗の如く、或は空中に受止め、或は水中に潜入りて食するには無之候。

當年多數の鷗を海上に見たる時は、普通の盜賊鷗のみにして、此大盜賊鷗を見ず。後鷗の海上に少くなりし時、偶然水風鳥の大群の來りたる時は、又一の普通の盜賊鷗を見る事を得ずして、此大盜賊鷗を發見致候なり。思ふに普通の盜賊鷗にては、水風鳥は餘り強きものなるべく、ウミノコに於てさへも幼鳥のみを追ひ廻す風の有之候て、ウミノコ以上のものには返て追ひ廻さるる反對の有様をも見たる事有之候。斯様な次第故、普通のトウヅクカモメの餌を求むる爲に迫害せらるゝ鷗は、ミユビカモメ、ユリカモメ等が主なるものにして、オホトウヅクカモメは水風鳥を専らして、其内にも小形なるハシボソミズナギドリを害する様に有之候。普通のトウヅクカモメに有ては、二三の小群を爲すを見れども、本種、オホトウヅクカモメは、何時も單獨の行動のみを致居候。尙水風鳥の食を求むる様に付て申上候。普通カモメにあつては、水面上を飛びつつ魚を見る時は翼を疊みて水中に飛入るも、水風鳥に於ては、今一つ鷗と異なる動作を致候。之は浮遊せる。傍に魚の群を見る時は、水上に飛上る事なく、其儘大に兩翼を張て水中に潜行し、魚を捕食致候。餘りに魚の群多く水風鳥の食を求むるに急なる時は、舟及人を恐れず、舟の傍にて此動作を爲す時、舟の上より見るに、只大形なる魚類の水中にある様に見え候。之は前に申候通り、水風鳥の水中にあつて翼を張りつゝ魚を求むる爲に有之候』以上とあり。

カムムリツクシガモ *Pendulatorna cristata* Knoda に就て

獸醫學士 内田清之助

茲に掲げた圖は松平(賴孝)子爵家に古くから藏せらるゝ「鳥づくし」の歌留多中の朝鮮鴛鴦云ふ名稱の一枚を復寫したものである。此の挿畫は製版が不完全であるからカムムリツクシガモの類似の程度が認めれ難いが原圖は着色圖で頭部及び上胸が一樣に暗色である點を除いて其他は全くカムムリツクシガモに一致してゐる又名稱が朝鮮鴛鴦云ふ事も一層此同定が確らしく考へられるのである。然かも此頭部及び上胸の色彩の差違は丁度鴨類の雌雄の差として考へるゝ至極合理的に思へる様な相違である。即ち此寫生圖の鳥が雄で鮮滿鳥類一斑の口繪のものが雌として見るゝ丁度よく相

當する様に思はれるのである、黒田氏の獲られた標本は雌雄不明のもので鮮滿鳥類一斑には假に否？として記述されてある。

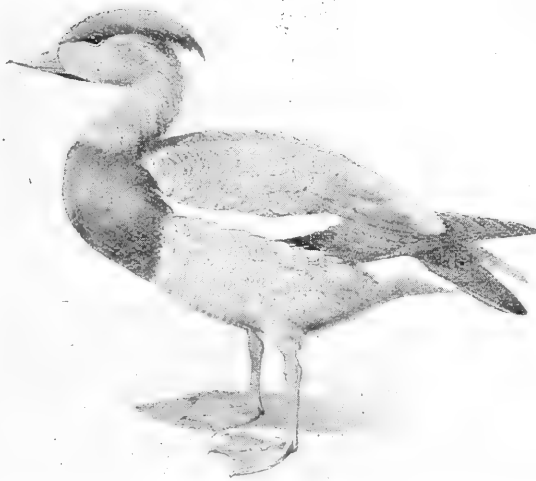


圖 二 第

(す寫模りよ多留歌しくづ鳥藏所家平松)シナンセウテ

此の挿畫は製版が不完全であるからカムムリツクシガモの類似の程度が認めれ難いが原圖は着色圖で頭部及び上胸が一樣に暗色である點を除いて其他は全くカムムリツクシガモに一致してゐる又名稱が朝鮮鴛鴦云ふ事も一層此同定が確らしく考へられるのである。然かも此頭部及び上胸の色彩の差違は丁度鴨類の雌雄の差として考へるゝ至極合理的に思へる様な相違である。即ち此寫生圖の鳥が雄で鮮滿鳥類一斑の口繪のものが雌として見るゝ丁度よく相

斯く朝鮮鴛鴦ミ云ふ名が古い歌留多に記してある所を以て見るミ之の記載も何か古書に載つて居るまいかと思はれたので二三探
 ねて見た所が觀文禽譜に同
 名の鳥があつて次の如き記
 載がある事が分つた。

朝鮮をし鳥

享保ノ比舶來アリ今

高須少將及多紀家藏ス

ル所ノ寫眞ヲ見ルニ頂

黒ク黒キ勝アリ 眼下

ヨリ喉灰白背灰色黒ニ

シテ赤黄ヲ帶 翅ニ碧

白毛アリ 臆黒ク腹灰

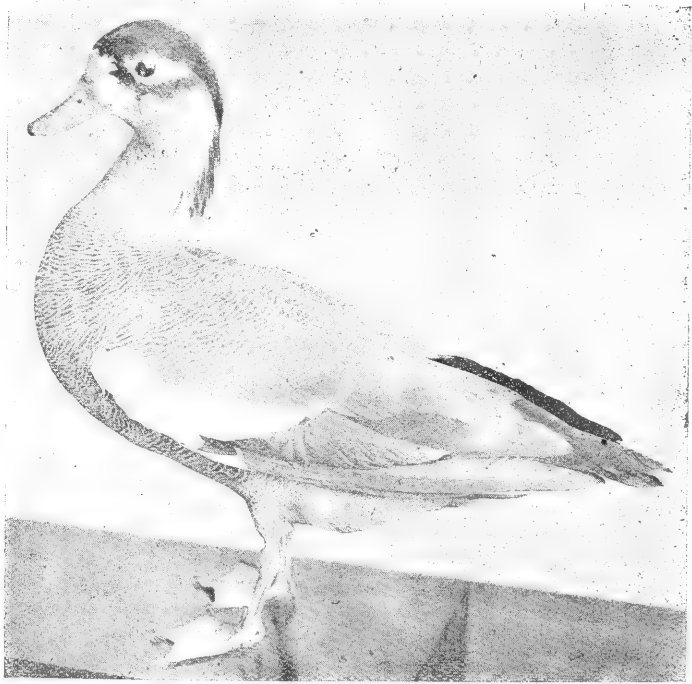
色ニシテ黄赤ヲ帶尾黒

シ 嘴ハ桃色ニシテ黄

ヲ帶脚亦同シ ツルキ

羽ナシ 雌ハ頂勝稍短

カク眼邊白ク嘴ノ根ヨ



モガシクツリムムカ 圖 三 第

リ喉白シ 胸服及背灰
 黒ニシテ黄赤ヲ帶翅白
 碧 嘴脚雄ト同ジ 爾
 山モ亦此鳥ノ寫眞藏ス
 コレカ傍ニ書シテ眞カ
 モヨリ稍大ニシテ脚高
 シトアリ コレモ又鴛
 鴦ニハアルヘカラス
 集解ノ説ニ合ストイヘ
 リ

此記載は勿論極く不完全
 ではあるが然も雌の記載に
 『頂勝稍短カク眼邊白ク嘴
 ノ根ヨリ喉白シ』とあるの
 は黒田氏記載の分ミ良く一
 致して居つて此點は全く前

に松平氏所藏の歌留多から想像した事實を裏書きするものである。

カムムリツクシガモは右述べた様に二百年前頃には朝鮮から數回舶來したものであつて當時にあつては左程稀なものでも無かつた

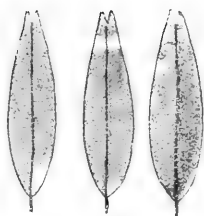
らしい、それが今日迄學界に知られてゐなかつたのは奇らしい事である、鴨類の如き大形なしかも獵鳥にあつては特に不思議な事である。想像を逞くすれば或は此種類は何等かの原因によつて百数十年此方非常に其數を減じ絶滅に傾いてゐる種類かもしれない。是等の點は今後朝鮮の鴨に就いて深く注意して居たらば解決がつく事であらふ。

アカゲラの尾羽の斑點に就て

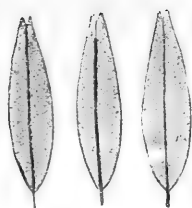
熊谷三郎

日本鳥類圖説にはアカゲラの尾羽第一對(中央二枚)には斑點な全部黑色とあれ共本年一月宮城縣栗原郡若柳地方にて採集せ

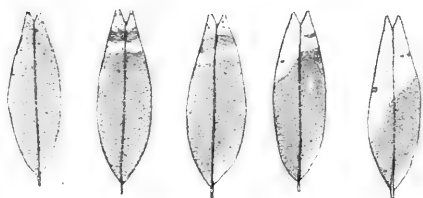
第二對



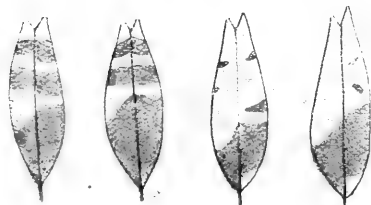
第一對



第三對



第四對



第五對

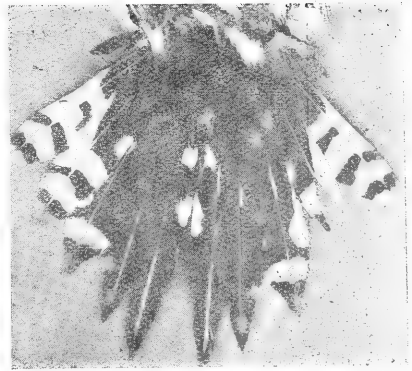


第六對



第一 四 第

アカゲラの尾羽の變異を示す



第 五 圖

- A 外辨及び内辨は全部黒色なり
- B 外辨及び内辨の羽翰先端に一褐斑あり
- C 外辨は黒色にて斑點なし内辨に三白斑（内一個は痕趾のみ）あり

第 二 對

- A 外辨全部黒色にて斑點なし内辨の基部に一白斑あり
- B 外辨の先端に一褐斑あり内辨に一褐斑（先端に）及び一白斑（基部に）あり
- C 外辨に三褐斑あり内辨はBと同じ

第 三 對

- A 外辨に三褐斑あり内辨に二褐斑（先端に）及一白斑（基部に）あり
- B 外辨に二褐斑あり内辨に二褐斑（先端に）及二白斑あり（基部に斑點なし）
- C 外辨に三斑帯あり内辨に二褐斑 一白斑（基部に）外に二個の斑痕あり
- D Cの斑點の融合せるもの 外辨の白帯は辨の大部を占め中に黒色の斑痕一あり内辨の白帯中に黒色の斑痕一あり外に二白斑及一斑痕あり
- E 外辨はDの擴大せるもの 内辨はDの斑帯との融合せるもの

第 四 對

- A 外辨に一褐斑（先端に）二白帯あり（帯中に黒點あるあり）内辨に一褐斑（先端に）二白帯及一白斑（基部に）あり



第 六 圖

B 外辨はAの如し内辨はAの如きも更に二白斑あり

C Bの白帯の融合せるもの中に黒色の斑痕あり

D 外辨はCの更に融合せるものにて黒色の斑痕なし内辨はCの如く白帯中に黒色の斑痕二あり

第五 對

A 外辨に三白帯あり内辨に三白帯及二白斑あり（斑點の擴大して帯をなせるあり）

B Aの融合せるもの外辨の白帯は辨の大部を占め中に一黒斑あり（更に白帯中に二黒斑あるあり）内辨の白帯中に二乃至四の黒斑あり外に基部に一白斑あり

第六 對

A 外辨及内辨は黒色なり

B 外辨に一白斑あり内辨に斑なし

C 外辨に二白斑あり内辨に一白斑あり

右は六個の標本（但し内一個の雄には斑點異常ならず）に就ての觀察なれば不完全なるべきも尾羽第一對（中央）に斑點あることは注意すべきことなるべし。本種の尾羽にありて上記の如く比較するときは一として同型のものあるなく實に變化多し思ふに此地方にありて尾羽の全部白變せしもの生じその系統を引きて今日に至り此の如き一定せざる面白き斑點を現はすに至りしものならんか。

（附記）アカゲラの尾羽にかかる變化あるは地方的變異としては當然のことなれども本例の如く同一地方産のものに見得るは甚面白き現象と云ふべし。他の地方のアカゲラにも此種の實例尠からざるものなるや或は此地方に限れるものもすれば遺傳的白化現象にはあらざるか（内田記）

臺灣總督府殖産局採集鳥類目錄

獸醫學士

内田清之助

理學士

黒田長禮

本目錄は昨年五月より七月に渡り總督府農事試験場技師素木博士及博物館囑託菊池米太郎兩氏が臺灣島各地に於て採集せられたる鳥類標本にして素木氏より其種類調査を依頼せられたる九十二種の目錄なり。此採集物中には數種の珍稀なる種類の含まるるのみならず今回初めて臺灣より報告さるべきものハシブトアジサシミタイワンオホセツカ(新稱)の二種あり。

1. *Podiceps Auvalis philippensis* (Bonnat.) カイツブリ 水社 雄一、五月三十一日
2. *Herodias garzetta* (L.) コサギ 水社、雌一、五月三十一日
3. *Bubulcus coromandus* (Bodd.) アマサギ 潮州、雄一、六月七日
4. *Phox purpurea nanillensis* (Meyen) ムラサキサギ 潮州、雌一、六月七日
5. *Nycticorax nycticorax* (L.) コキサギ 水社、雄一、五月三十一日
6. *Butorides javanica javanica* (Horsf.) ヒメサ、ゴキ 樹仔脚、雄一、六月二十五日
7. *Ardeetta cinnamomea* (Gm.) リウキウヨシゴキ 阿緞、雄一、五月三十日
8. *Milvus ator govinda* Sykes ヒメトンビ 南屏庄、雌一、六月四日
9. *Gomphus swinhoii* (Gould) サンケイ 採集地及び日月不明、雌一、
10. *Arboricola emarginaris* (Sw.) ミヤマテツケイ 水山、雌一、六月二十日
11. *Eamniscola sonorivox* Gould テツケイ 北山坑、雄一、五月二十二日

12. *Amaurornis pheniceus* (Penn.) シロハラクヒナ 菜公店、雄一、六月二十七日

13. *Gallinula chloropus* (L.) subsp. バン 南屏庄、雌一、六月四日

14. *Perallitis cantiana dealbatus* Sw. シロチドリ 新港、雄一、六月三十日

15. *Charoola pruthicola maldivarum* Iath. & Davies ツバメチドリ 新港、雌一、雄一、七月一日

16. *Gelochelidon anghica* (Montag.) ハシブトアジサシ 南屏庄、雌一、六月三十日

本種は臺灣にて今回始めて採集せられしものにて未だ邦文の記載なきにより左に簡単に記せば

記載——頭頂及び上頸は光りある黒色、上面及び尾羽は眞珠灰色にて外側尾羽は帶白色、外側初列風切の内辦には明なる白縁あり先端にはなし、外側初列風切の四枚の羽軸は白色なり。腮、喉、頸側及び體の下面は白色なり。嘴及び脚は黒色時こして下嘴の基部は帶赤色のここあり。又脚にも赤味を帯ぶるものあり。虹彩は暗色なり。今回檢したるものの測定を記せば會合線五一耗一多少不完全) 翼二六五、尾一〇九・五、跗蹠三一、中趾爪共一九・五、中央の尾羽ミ外側のものとの差三二・五あり。

本種はアジサシに極めて似たるも嘴の著しく太きここ、尾は翼の長さの二分の一よりも短きここ及び跗蹠は中趾爪共よりも長きここによりて真に區別せらる。

分布、歐洲、亞弗利加、亞細亞に分布し、後者にては蒙古及び滿洲にも之れを見るを得、冬季緬甸、印度、セイロンに渡り又遙に濠洲大陸にも達し且つ其地にありても蕃殖すこ云ふ。

17. *Sterna sinensis* Gm. コアジサシ 新港、雌一、六月三十日

18. *Turtur orientalis* Iath. キジバト 龍眼林、雌雄不明、五月二十日

19. *Turtur chinensis* (Scop.) カノコバト 南屏庄、雄一、六月四日

20. *Turtur humilis* (Temm.) ミキバト 水底寮、雌一、六月六日

21. *Columba pulchricollis* Hodgs. タイワンジグゾクカケバト 阿里山、雌一、六月二十二日

22. *Sphenocranus sor fins* Sw. タイワンアヲバト 北山坑、雄一、五月廿一日、雌一、五月廿二日、菜公店、雌一、六月廿七日
23. *Cuculus optatus kelungensis* Sw. タイワンツ、ドリ(新稱) 北山坑、雌雄不明、五月二十三日
 因に臺灣産のソノドリには此學名を用ふべきなり。
24. *Centropus javanicus* Durr. バンケン 枋山、雌一、六月六日
25. *Alcedo ispida bengalensis* Gm. カハセミ 阿縵、雄一、五月三日
26. *Cypselus pacificus* (Lath.) ママツバメ 山杉林、雄一、六月十一日
27. *Cyanops uchelalis* (Gould) コシキドリ 北山坑、雄一、五月二十二日
28. *Dryobates leucotos insularis* (Gould) タイワンオホアカゲラ 阿里山、雌一六月二十一日
29. *Tyrngipicus scintilleiceps kalensis* (Sw.) タイワンコゲラ 獅仔頭、一、五月二十八日 菜公店、雄一、六月二十五日
30. *Geinuss taneola* Gould タイワンヤマゲラ 阿里山、雄一、六月廿二日
31. *Alauda guttula sala* Sw. タイワンヒバリ 高斤城、雄一、五月廿九日
32. *Motacilla alba leucopsis* Gould ホノジロセキレイ 新年庄、雄一、五月三十日 山杉林、幼鳥一、六月十二日
33. *Trochalopteron taiwanum* (Sw.) ホイビイ 北山坑、雌雄不明一、五月二十一日
34. *Trochalopteron morrisonianum* Grant キンバネホイビイ 阿里山、雄一、六月廿三日
35. *Pomatorhinus muscius* Sw. ヒメマルハシ 新年庄、雄一、五月三十日
36. *Pomatorhinus erythrocnemis* Gould マルハシ 新年庄、雌一、六月一日
37. *Alcippe morrisonia* Sw. メジロチメドリ 北山坑、雄一、五月二十三日
38. *Proparus formosanus* Grant アリサンチメドリ 阿里山、雄一、六月二十一日
39. *Scoeniparus brunneus* (Gould) チメドリ 北山坑、雌雄不明、五月二十一日

40. *Stachyridopsis precognitus* (Sw.) ツアカチメドリ 達邦社附近トッフヤ蕃社、雄一、六月十八日
41. *Malacris auricularis* Sw. ミ、ジロチメドリ 十字路、雄一、六月二十日
42. *Aethnodula morrisoniana* Grant シマドリ 十字路、雄一、六月二十日
43. *Yuhina brunneiceps* Grant カンムリチメドリ 阿里山、雄一、六月二十一日
44. *Herpornis tyrannulus* Sw. アヲチメドリ 獅子頭、雌一、五月二十七日
45. *Liochla seerei* Sw. ヤブドリ 十字路、雌一、六月二十日
46. *Suthora bulmachus* Sw. ハシブトチメドリ 達邦社、雄一、六月十九日
47. *Suthora morrisoniana* Grant ニイタカハシブトチメドリ 阿里山、雄一、六月二十一日
48. *Pionotus taiwanus* Styan クロガシラ 枋山、雄一、六月五日
49. *Pionotus sinensis formose* Hart. シロガシラ 獅子頭、雌雄不明一、五月二十七日
50. *Spizax cinereicapillus* Sw. カヤノボリ 北山坑、雌一、五月廿三日
51. *Hypsipetes nigerrimus* Gould クロヒヨドリ 關仔嶺、雄一、六月十六日
52. *Hemichelidon ferruginea* Hodgs. コヤマヒタキ 阿里山、雌一、六月二十一日
53. *Cyornis hyperythrus* (Blyth) マミジロヒタキ、ムネアカヒタキ 達邦社附近トッフヤ蕃社、雄一、六月十八日
54. *Cyornis virida* Sw. チャバラオホルリ 阿里山、雄一、六月二十二日
55. *Hypothymis azurea* (Bodd.) クロエリヒタキ 北山坑、雄一、五月二十三日
56. *Cryptolopha fulvifacies* (Sw.) コシジロヒタキ 達邦社、雌雄不明一、六月十九日
57. *Rhyacornis fuliginosus affinis* (Grant) カハビタキ 十字路、雌一、雄一、六月二十日
58. *Lanthis johnstoniae* Grant. アリサンヒタキ 阿里山、雌一、六月二十日、雄一、六月二十二日

59. *Ianthia goodfellowi* Grant キクチヒタキ 阿里山、雄一、六月二十一日

60. *Notodola leucura mortua* (Sw.) コンヒタキ 阿里山、雄一、六月二十四日

61. *Microchla scouleri forbis* Hart. シロクロヒタキ 達邦社、雌一、六月十九日

62. *Cisticola volitans* (Sw.) タイワンセツカ 山杉林、雄一、六月十二日

63. *Luscinola luteoventris* (Hodgk.) タイワンオホセツカ(新稱) 阿里山、雄一、六月廿一日

本種は臺灣にて始めて採集せられたる種類なり。

記載——第一初列風切は第二羽の二分の一に等しきか或は少しく短かし、上面は鏽褐色にて橄欖色を帯び翼及び尾は暗褐色にて背の羽毛には此色の縁あり。肩線は短かく鏽黄色の不判明のものを有す。頭側は鏽褐色にて耳羽の羽軸は淡色なり。腮、喉及び以下の下面の中央は白色。體側には帶鏽粘土色を有し下尾筒も同様なるも羽縁淡色なり。上嘴は暗褐色、下嘴は淡帶黄色、虹彩は褐色なり。今回の標本の測定を記るせば嘴峯一二、翼五二、尾五五、跗蹠二〇耗あり。

分布ヒマラヤ地方の山地に主産し、支那の福建省にも達す。此種はヒマラヤ地方にては留鳥なるも亦「渡り」をなすところがあるが如し。故に今回臺灣にて獲られたるも亦疑はしきにあらず。

64. *Horeites robustipes* (Sw.) タイワンコウグヒス 達邦社、雄一、六月十九日

65. *Horeites acanthizoides concolor* Grant ミヤマウグヒス 阿里山、雌一、六月二十二日

66. *Burnesia sonitans* (Sw.) アナハウチワドリ 北山坑、雄一、五月廿三日

67. *Troglodytes troglodytes taiwanus* Hart. アリサンミンソサヰ(新稱) 阿里山、雌雄不明一、六月二十二日

附記、臺灣産のミンソサヰには此學名を用ふべく而して此亞種の外にタカサゴミンソサヰを産す。

68. *Hirundo daurica striolata* (T. & S.) オホコシアカツバメ 山杉林、雄一、六月十一日

69. *Cotile paludicola chinensis* (Gray) テウセンシヨウドウツバメ 圓潭仔、雌一、六月十日

70. *Paroedonotus tristisignatus* Gould ベニサンセウクヒ 北山坑、雌一、五月二十二日、新年庄、雄一、六月一日
71. *Franculus rex pineti* Sw. テニサンセウクヒ 新年庄、雌一、六月一日
72. *Chaptalia brunniana* Sw. ヒメオーチウ 獅仔頭、雄一、五月二十六日
73. *Baccharis alba* (Herzm.) オーチウ 店仔口、雌雄不明一、六月十四日
74. *Tanais schach schach* Tr. タカサゴモズ 新城、雄一、五月二十九日
75. *Parus insperatus* Sw. キバラシジウカラ 阿里山、雌一、六月二十三日
76. *Agithalus concinnus* (Gould) ズアカガラ 阿里山、雌一、六月二十四日
77. *Oriolus indicus* Jerd. カウライウクヒス 潮州、雄一、六月八日
78. *Munia punctulata topela* Sw. シマキンバラ 山杉林、雄一、六月十一日
79. *Uroloncha acuticauda squamirostris* Sharpe コシジロキンバラ 新城、雄一、五月二十九日
80. *Corvus macrorhynchos leucicollis* Levaillant Less. リウキウハシブトガラス 嶺口、雌一、六月十三日
81. *Nucifraga ovestoni* Ingram タイワンタケガラス 阿里山、雌一、六月二十二日
82. *Pica pica sericea* Gould カサ、ギ 山杉林、雄一、六月十一日
83. *Garrulus taiwanus* Gould タカサゴカケス 阿里山、雌一、六月廿四日
84. *Uroisssa cernua* Gould ヤマムスメ 獅仔頭、雌一、五月廿七日
85. *Dendrocitta formosa* Sw. タイワンチナガドリ 新年庄、雄一、六月一日
86. *Aethiops cristatulus formosanus* Hart. カアレン 嶺口、雄一、六月十三日
87. *Zosterops pulchroprosa simplex* Sw. ヒメメジロ 南屏庄、雄一、六月四日
88. *Dicaeum formosum* Grant ハナドリ 北山坑、雌一、五月二十二日

89. *Carpodacus vinnaceus formosanus* Grant. タカサゴマシロ 阿里山、雌一、雄一、六月二十二日
90. *Phyrhula arizana* Grant. アリサンウン 阿里山、雄一、六月二十二日
91. *Phyrhula nobilai* Kuroda. ウチダウン 阿里山、雌一、六月二十一日
92. *Passer rutilans rutilans* (Temm.) ニウチイスメ 北山坑、雌一、雄一、五月二十一日

種子島の鶴及び附近の二三鳥類

荒 木 彦 助

大隅佐多岬角の東南十里を起頭とし延長約十八里幅員五里乃至二里半にして、其周圍三十六里最高峰四百米突、琉球人の筈及榕樹ありて黒潮の暖流に沿ふて横はるは本島なり。近時本邦に珍奇なる鶴は尙ほ此小仙郷を見舞ふを忘れず、即ち其南部にて南種子村並永及中種子村西海岸の小沙漠に村人を驚す。前村にては特趣の鳥類保護法施行さる、即ち全島第一の水田一廓をなし約三百町、其一部も云ふべき寶満神社祠畔に神池あり、冬期には水田に飽食せし鴨、鴛鴦等の水禽無數に群棲す、夜間主として曉に去來する者を捕獲する爲め池畔の松樹を利用し待網を張り、所得を村教育基金に蓄積す、因りて水禽を驚す事を絶對に禁止し、附近約一里方位の銃獵は勿論鳥糞の私獵も禁止す、故に野鳥は水田にあさり池上に游泳し、白鷺、其他五位鷺等まで漠々たる一大遊園に閑雅の態を爲しつゝあり、鷺鷥の群を離れて稀に丹頂以外の鶴類を見る、其數多からず一二羽に過ぎざるは遺憾なり。寶満池は白晝に至り水禽群棲して人に驚かす實に一奇觀たるを失はず。村民稀に鴨を襲撃する鷹を望み其一蹴を待ちて大聲を發し、鷹の驚いて獲物を放棄するや落下し來るを拾得するあり、又林中に腹側より肝臟を食ひたる鴨を拾得するを聞く、中種子村の西岸長さ三里幅員二三町より十數町に亘る白沙の濱にて、幾多の溪流之を横りて海に入る所、人跡甚稀なれば瀨年鍋鶴を見たりと稱する者少らざりき。全島到る所にオーストンガラ栖息す、俗稱ス〜ン〜ビイミ云ふ蓋し鳴聲にちなみたるなり。其數甚だ多く人里近き人家の藪にも

營巢繁殖せり。

森林中には赤ヒゲ鳥を産す、北部に多く南部に少し、其保護法勵行されず法規弛みて飼鳥に供し山林の開墾に相待ち稍減少の恐れあり。本島は駒鳥甚だ少く赤ヒゲ鳥に反對に北部は殆んど皆無にて却て南部に産す。

梅雨の候に至れば鴉鳩俗稱黑鳩多く來る。又櫻花の時期には青鳩及び琉球青鳩亦少らず、姫鶉を産するも甚だ多らざるに似たり。屬島馬毛島には稍多し。本島は母島より海上三里にして無住人の一島嶼、周廻も亦三里中央に一高地ありて四方に緩勾配の傾斜を爲し、土地至つて平坦所謂砥の如し、其西海岸の一大岩礁には鱗刺の群栖して繁殖するあり、俗稱ログヒ鳥即ち其鳴聲にて櫓の支點と同名を附す、鶉の繁殖するも多し。本島の原野に一尺内外の足を容る位の廢穴連續す、一般には往年藩主野畜を放飼したるが爲め蝮蛇(頗る多し)を捕食せし蹟に信ぜらるゝも、恐らくは水風鳥の舊時繁殖せし廢穴に非ずや、曩には人類の去來至つて稀少なりし島嶼も、種子島の漁民飛魚漁を開始し、漁期即ち鳥類繁殖期の梅雨頃より數百戸家族ごとく移住するを以て、自然に鳥類の産卵育雛を脅す如き結局に至りしに非ざるか、他日の研究を待たんと欲す。

尙ほ本島には雲雀至つて多し、是れ彼の可憐なる小歌斗の生存には必適の原野にて、全島二十町歩の松樹栽植林の外は一帯に茅類、蘇鐵と野芙蓉の小疎林一ヶ所ばかりなればなり。左れば鳥類も海鳥上記せる以外は鷗、鴨(少し)等と鴉、磯鴨、千鳥類に過ぎず沿海は漁民の所有にして中央部は東京故青木子爵令弟の所有牧場たり。

要するに種子島は風土温暖にして氷雪を見ず、大島、琉球等の如く炎暑亦た酷烈ならず、中和の地九州と琉球、大島等の特産動植物の相雜れるありて、専門研究上には興味甚だ多きものあるべし。

隣接島たる屋久島は種子島の西南十六海里に在れども、周廻十八里の面積中沿海部に僅少の平地ある外は全く亂山重疊し、最高海拔六千八百尺を主峰に雲の如き幾多の山岳群立す、風氣稍寒冷にして鳥類も本土の山地と同一なり。只だ屬島口永良部島は火山系の島嶼温暖にして、小笠原、琉球等の如き大蝙蝠を産す、雀と雉子を産せず併し雉子の絶滅は近年に屬せりと云ふ。海燕多く營巢産卵するを海岸の絶壁等に見る、鶉は至つて多く民家の養鶏を襲ふて被害少からず。本島は島津藩の密貿易場にて洋人接待の狀を

語る故老も尙ほ生存せり、小活火山あり温泉ありて南海の一小樂土あり、温泉の海岸には非常に多數の永良部鰻群栖繁殖し、村民の最も美食として漁獲する所なるが、インファン、ドラメ魚も多數に漁獲されつゝあり、九州本土の南島には尙ほ世に知られざる珍香の動植物あらんか。記して専門家の研究に俟つ。

朝鮮鳥類の習性觀察

黒田保吉

左に余の觀察せる朝鮮鳥類の習性に就て報告せん。 (凡て大正六年の觀察)

黃鳥 七月二十、二十一、二十二日及び八月三、四日毎朝八時頃より江原道平康郡邑内の小丘栗松の混合森林内に於て美聲を聞く。

二十四日午前九時伊川郡邑内に於て美聲を聞く。

二十五日午前十一時平康郡望日里(伊川郡界を距る一里平康郡西面玉洞を離る一里半)雌雄二羽實視同地方は潤葉樹赤松の混合林にして紅松(ホンスン)點在し山脈は大ならざれど險しき方なり街道の兩側屏風の如く併列せる其の中間約一町より二町範圍の幅をなせる比較的平坦なる畑地、荒蕪地の混にて臨津江上流(連川を流るゝ支流の分支流)の溪流、彊にて柳、野ばら等灌木叢點在せる間に餌を求めて飛行せり雌は一箇の蟲(長さ約一寸大のもの)を得山腹の林に入り雄は其後を追て入りぬ。多分營巢せるものならんも調査の期を得ざりき比較的從順にて彼の視線内に活歩して約四間の近距離に近づくこゝを得たり。

二十七日、二十八日淮陽郡邑内郡廳裡の小丘潤葉樹林内に午前八、九時頃啼聲を聞く。

二十八日午前十一時上初北面潤葉林内に啼聲を聞く。

京城附近に於ては五月下旬果川郡牛眠里に於て雌雄を視、午前八、九時の頃に於て啼聲を聞き西涼里附近に於ては五月頃數回實視せり。

京城内に於ては拙宅前面露國領事館内の「ボブラ」の森林内には毎年八月上旬頃より九月下旬の間に於て午前八時頃より十時頃迄及び午後三、四時の頃毎日美聲を聞く營業其の他に付ての調査は立ち入ることを得ざるを以て遺憾ながら目的を達することを得ず又午前八時頃景福宮方向より渉來し午後五時頃同方向に飛去する雄一羽を數回實視せるに徴すれば或は晝間のみ渡來せるものならん。

以上實視の結果に依れば成育せる潤葉林の空氣の流通好良なる樹林を好むものゝ如く又ホホジロ、メジロ類等の如く展望良き樹木の頂き等に於て啼鳴するを見ず常に林の内より漏聞す且つ群集せるも視ず一般雌雄相伴ふを實視す。

江原道に於ける分布は以上の實視より察するに中央の鐵原、平康の荒原以外は潤葉樹所々に繁茂を見るを以て全道に於て發見せらる可く但し數多ならざる可し。

雖は京城に於ては六、七月頃高陽郡碧蹄里を離る二里高靈地方の山間よりブツボウソウの雛と共に往々持ち來るものあり。

朝鮮鶯 七月二十、二十一、二十二日、八月三、四日及び九月十日江原道平康驛附近に於て滯在中灌木の繁茂中に於て實視、但し

七、八月に於て二三羽(啼聲)九月に於ては一羽。

二十三日午前七時半平康を發し伊川に向ふ街道に於て高原二里の間に於ては聞かす高原を下り臨津江上流域に下れば兩側の山間所々に聞く午前十一時半玉洞(平康邑内より四里)着、二時間休息の後出發望日里を過ぎ伊川郡界(五時)に進むに従ひ數も増せり郡界より伊川邑内は約三里夕刻となりしを以て伊川郡内に於ては啼聲を聞かず。

二十四日伊川邑内に於て二羽の啼聲を聞く。

二十五日七時出發平康に向ふ復行約一里にして溪谷に入れば至る所の山間、及平地の灌木の茂に啼聲を聞く其數最も多く郡界を過ぎ望日里に入るに従ひ數を減ず。

以上の分布は時間の關係上斷定をなし得ざれども實視の状態に依れば伊川郡の溪谷最も多數にして他に視す。

二十六日午前十一時淮陽郡蘭谷面に於て一、二十七日淮陽郡邑内に於て二、三、二十八日淮陽邑を發し高

原驛に至る郡界附近の山間に於て數箇所舊高原邑に於て一、啼聲を聞く。

金剛山の溪谷に於ては八月の頃至る所に啼聲を聞く由。

京城附近に於ては多からず「渡り」は四月及十月下旬十一月上旬の候實視す主として野ばらの繁茂中に視、十月下旬の候之を捕獲し檢せしに成熟せる野ばらの實を食し居たり。

啼鳴は皆「ホーホケケ、キヨ」ミ高音乙音を發す谷涉りミ稱する「ケキヨ」ミは時々發すれども内地産に比しては劣なり、又内地産のもの水「アミ」をせしむる場合等發するかしましき鳴聲は時々聞けども凡ての氣節に於て注意せしも未だ地鳴のチャッチャ、くミ云ふ聲を聞かず。

ニウナイスゞメ 七月二十五日伊川郡平康郡の郡界の小丘を越し平康郡の望日里に下る數町の山間燕麥畑に於て約二十羽群をなし啄むを約三間の離にて實視せり同伴の伊川普通學校教員の談に依れば此の種の燕麥に對する被害は可なり大なりミのこにて同地方には比較的多し。

ナナガ 十二月上旬全北全州郡所陽面、鎮安郡富貴面、疆界の峠の溪流、兩畔灌木の繁茂中に約三十の群を實視す。

十二月下旬京畿道坡州部金谷里（汝山驛を去る二里、積城に至る、街道）の峠に於て約二十羽の群を實視す。

兩所とも京畿道光陵の溪流畔ミ等しき状態なり但し森林地にあらず。

カハガラス 十二月中旬鎮安郡白雲面盤松里溪流に於て一羽捕獲す。

十二月二十九日江原道平康郡北面回山里、臨津江上流に於て氷點下約二十度の氷上に於て淺瀬の氷結せざる間離より水中に潛入し氷下に餌を求め元氣旺盛なる活動振を實視せり。

京畿道内に於ては山間の溪流に往々實視するも期節の關係なるか常に一羽なり。

オホヨシキリ 七月二十五日江原道平康郡西面望日里、伊川郡邑内に至る街道の麻の繁茂せる畑内に各所に啼鳴を聞く。

二十六日夕、二十七日、二十八日朝、淮陽郡邑内に於て麻田中最も數多にして晝夜の別なくかしましき啼鳴絶えず深夜床を出て

實見せしに麻頂及び附近の柳、オブラの頂きに於て競鳴し夜の暗さを知らざるが如し但し群集をなさず。

ヅアカハシブトチメドリ 三月下旬四月の頃梧桐洞素砂附近に約四五十の群をなすこゝあり又十二月下旬坡州郡金谷里に於て百に近き大群を實視したるこゝあり。

七月二十三日江原道平康郡西面玉洞、望日里に於て約二十の群を實視せり馬上なりし爲確視ならざれども群中七八羽は羽毛未だ發達せず他に比して甚しく羽色淡きものあり察するに此地方に於て營巢せざるや。

マガモ 氣節に依り渡行せざる冬期に於て半土着性のもの

十一月二十一日正午咸北城津郡鶴中面に於て河川に沿ひ飛行せる五羽を視る午後五時吉州郡徳山面に於て十四、五羽河内に視る、二十二、二十三日吉州郡邑内附近英北、長白徳山の各面を貫通する河川内の各所に二十の群を視る以上は海上より飛來せるものに有らずして土着的にして晝は河畔に眠り夜間附近に出ずるが如し。

十二月一日に於て江原道月井里附近河流の氷結せざる箇所に二十の群所々に實視す秋期渡來後は春期迄土着的に棲むものにして京城附近に於ても同一の状態にあるもの所々に實視す。

コガモ 京城附近は九月下旬より十二、三の小群を河川に視る但し秋期は十月下旬多し。

九月八日洗浦驛（京元線）海拔二千尺の高原に於て午後五時三防方面より來り河流に下る二十餘の群を視たり捕獲はせざるも明に巴鴨ならず。

十二月一日月井里附近の河流に於て眞鴨と同じく半土着の一群あり但し多からず。

トモエガモ 十一月十一日午前九時清津停車場に往く路中海岸磯上に五羽十五六間の離にて實視其他に於ては視ず。

ノガン 二十三日吉州郡徳山面の荒蕪地の平野に於て約四五の群を視十二月三十日平康郡月井里驛近くにて約四十羽を視たり同所は冬期には特に群をなす場所なり京畿道に於ては高陽郡蘭芝島、坡州郡の臨津江と漢江と合流地點平野（荒蕪地）最も多く舊陽川郡邑内、富平平野、水原軍浦場中間畑地、永登浦附近根據點なるが如し徳亭驛より二里の平原にて時々實視すれども四五羽の

群なり。

トキ 京畿道に於ては海岸に近き平野（水田）に十一月及三、四月頃視るこゝあり。

十二月下旬大田驛を去る約二里の水田に於て二羽を捕獲し全北群山附近にて十二月中旬に一羽飛行せるを視しこゝあり。
ウミアイサ 十二月十三日咸北會寧を去る一里圖潤江畔税關前の河流の氷結せざる所に於て一羽を視る。

十二月二十一、二十二、二十三日吉州郡を貫流する上記の河川に於て四五羽、二三羽の群を視たり。

京畿道に於ては京仁、京義兩線附近漢江流域約二里の間及海岸に近き水田の水満ちたる所に三月上旬他の鴨の渡來に先だちて數十の群をなすこゝあり。

コクマルガラス（此種は往々内地の小鳥の大群中に二三混り居るこゝあり）

十二月二十三日吉州郡徳山面に於て二三百の大群ヲ視、一彈を以て五羽を得たり全く同一種の群にして他地方にて曾つて實視したるこゝなし、京城附近に於ては他種の群に十二三羽混り居るこゝは時々實視す。

ハシブトガラスは七八羽同所に於て視たり。

次に吉州郡及城津の附近は他の地方と異なるこゝは雉の最も少きこゝにして地方人の話によれば先づ棲息せざるがごこく往々二三の群を視るのみこのこゝなり、如何の理由なるや地形其の他に於ては棲息に最も適するが如き場所も皆無の有様なり但し周圍の他の郡に入れば最も多く雀より多しこの話なり。

咸鏡南、北道沿岸航海中實視

第一航 十一月八日午後十二時元山出帆十一日清津港着

元山は夜間なりし爲視察なすこゝを得ず。

九日午前七時西湖津入港、着港前二湮の沖に於てピロウドキンクロ？三羽浮遊せり、一湮の灣口に於てヒメウ？（黒き小形のもの）二羽飛行せり。灣口廣潤にして波靜かなり海は深からざるが如し。

ピロウドキンクロ鴨二十の群數箇所に視汽船の周圍に飛交せるを以て甲板上より發射して雄二、雌二を捕たり嘴は桃色(赤)にして鼻孔附近に黒斑あり雄は小隆起あり足は全部桃色にして内二羽淡黒色斑あるものあり雄雌の形非常に大小あり。

ハジロ二三十の群二ヶ所に見る(スゞガモなりしか)

コホリガモ類雄雌二、

ヒメウ?は灣内小島附近及礁磯に二三十群をなし灣内を飛行せり。

ウミネコ 及他のカモメ類十五六飛行せり。

午後十二時出帆なりし爲日没前後鴨雁の飛行を注意せしも灣内に於ては増減なし又眞鴨は氣節遅れし爲影も認めず只陸上四五羽の雁咸興方向に飛行するを視しのみ上陸者の話によれば咸興附近に於て雁の二三十の群を二ヶ所に視たりこのこと。

十日午前七時新浦入港ピロウドキンクロ、ハジロ類、小數及鶉類二三羽、ウミネコ、カモメ、各三四羽にして西湖津に比し少し。午前十時出帆城津に向ふ直航なりし爲沖を航海せしを以て水禽の影を見ず時々沿岸に接近せし傷所に於て、ピロウドキンクロ?鶉類の影小數を見る。

午後四時頃より天候險惡降雪風荒し午後六時城津に入港す。

灣内に於てピロウドキンクロ?二鴨三鶉類四五を視しのみ(船員の話によれば前航海十月に於ては附近及灣内に眞鴨の群多かりし由)午後十時出帆清津に向ふ天候益々荒く降雪甚しく常時八時間を要する航路なるに十六時間を費やせり。

十一日午後二時清津入港曇天にして灣内は波靜かなりピロウドキンクロ?コホリガモ三四の群數箇所に視、ウミネコ、カモメ多く沿岸の各所に鴨、カモメ等の小群飛行せるものを遠視せり但し眞鴨は視ず。

ウミスゞメ上陸の際築港附近に於て雌雄二羽約五間の距離にて視る。

第二航 十八日午前十時清津出帆午後六時城津着。

灣内に於てピロウドキンクロ? ハジロ類の群は前々大差なし今回はコホリガモの四五羽の群を視たり往行は鯨漁期の初期なり

しも今回は盛期に入りし爲ウミネコ及カモメの數往行に比し激増せり出帆後約一湊の波靜かなる灣内に於ては以上の各種の影を視たり外海に於ては二三のビロウドキンクロ^クを視し外他種を視す。

城津港に於ては往航に視し鵜類及ウミネコ、カモメの外ビロウドキンクロ^ク一羽を視る。

第三航 二十三日午前十時城津出帆朝鮮郵船の沿岸航路に便乗

出帆後沿岸に於ては四五のウミネコ、カモメ、鵜類の外二三ヶ所にビロウドキンクロ^ク五六羽の群を視る。

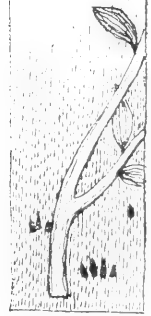
午前一時海津港入津ビロウドキンクロ^ク四五羽群、コホリガモ三羽を視る。午後六時遮湖入港ビロウドキンクロ^クの鳴聲を聞く同地人の話によればコホリガモ少しく渡來せり(同地は明太魚の本場にてやゝ漁期も盛期に向ひたりとのこと)

二十四日七時新昌入港小數の鵜類ビロウドキンクロ^ク一三十の群三四ヶ所、コホリガモ他に比し最も多く十數羽の群所々に浮遊せり(灣内廣く波靜にして水淺し)コホリガモは汽船近く十間以内の近距離に接近し潜水最も巧みにして同種の仲睦じく鳴聲は航海者等に於ては「アナタ〜」と鳴く云へどもアオーアオーと前二聲は平音にして第三聲はオーと高く鳴ききるが如く第三聲目にはオーと發すると共に頭を上にして背に着け反りかえりて口を開きて發聲す。

航海者及地方人の話によればコホリガモ渡來せば寒さも來り同時に咸南沿岸の第一の産物たる明太魚期に向ふ由、實視せし結果各地の同漁期に就て往航に於て本場たる新浦は初期にして開始後二三日、以北の各港に於ては往航は入港せざりしを以て不明なりしも歸路新昌遮浦地方は盛期、新浦は未だ盛期ならずとのことにて明太魚コホリガモは同一の季節に來るが如し。

雌の鳴聲は抵音なりし爲聞きざるを得ざりき。午前九時新浦入港往行に比して大差なし但しコホリガモ四五の群を二三視たり。一時半西湖津入港三時出帆、往航に大差なし、但しコホリガモの數は増加せり。九時元山入港往航歸航と共に夜間にして永興灣一體は視察することを得ざりき。

以上三回の航海に於て海上に於ては眞鴨は影を視す。



野外鳥學の一資料 (其二)

理學士 石 井 重 美

III 常に樹上に棲息するか、或は飛翔しつゝ食物を搜索し、又或る者(例へばカラス及びムクドリ)の如きは時々地上に降る。

A 猛禽の類。強大尖銳にして彎曲せる嘴及び爪を有し、特に脊椎動物の鮮肉若くは死肉或は大形の昆蟲類を捕食す。嘴根に蠟膜あり。

AA 眼の周圍に所謂毛圈 (Schlier) を有せず。晝間活動す。

(a) 大形、獍猛なる鳥、皮膚裸出する處あり。死肉を食ふ。——ハゲワシの類 (Tultur, cips, etc)

(b) 敏捷なる鸚鳥。生肉を食ふ。——イヌワシの類 (Nquila) クマタカの類 (Spiratus) チウヒの類 (Ticus) ノスリ

の類 (Buteo) オホタカの類 (astur) ハチクマの類 (Pennis) ハヤブサの類 (Falco) 及び (Irapatus 等。

BB 大なる眼の周圍に放射狀の毛圈あり。夜間活動す。——フクロフ (Syrnium) 及びツク (Scops) の類。

B 猛禽(眞止の)にあらず。嘴は時に猛禽類に於けるが如く彎曲するこゝあれど、嘴根に蠟膜無し。

AA 嘴短く、口の幅廣し。連續飛翔しつゝ、或は可なり遠く隔りたる高き觀測所より飛降り來りて、食餌を捕ふ。

(a) 夜間食餌を搜索す。——ヨタカ (*Coccyzus*) 及び (*Podiceps*) の類。

(b) 書間(時には薄暮)食餌を搜索す。

(aa) 昆虫を捕ふるにも連続飛翔しつゝ之を爲す。——ツバメの類 (*Hirundo*) 及び *Collocalia*, *Apus* 等。

(bb) 可なり遠く隔りたる高き観測所より飛降り來りて食餌を捕ふ。——ブツボフソウの類 (*Burysomus*) 及び *Macropygia*

非常に小形なる阿米利加産の鳥。嘴長く、細く、花前に浮動騒鳴しつゝ花密を吸収す。ハチドリの類 (*Trochilus*, etc. etc.)

CC 嘴長く且つ堅固なり。高き観測所より食餌に飛掛れど、併しながら其観測所と食餌との間の距離は比較的短し。——カ

ハセミの類 (*Alcedo*) ハチクヒの類 (*Merops*) 及び多くのモズの類 (*Lanius*) 等。

DD 樹木雑草の枝上において食物を搜索し、又時に地上に下る(食餌攝取の爲め)。

(a) 上嘴は著しく屈曲し、鉤の如くなりて下嘴の上に被ひ掛れり。多くは植物性の食物を攝る。——インコの類 (*Psittacus*, etc.) イスカの類 (*Ictinia*) マニコの類 (*Pipilo*) ウソの類 (*Pyrrhula*) サモア産の *Dulacrus* 北米の *Geothlypis* (此類の者

は昆虫を食ふ) 及びアウムの類 (*Cacania*) *Corythaeus*, *Cephalopterus*, *Rupicola*, *Cra* 等。

(b) 上嘴は唯僅かに屈曲し、或は全く屈曲せず。従て鉤の如くなりて下嘴の上に被ひ掛ることなし。

(aa) 特に普通嫌忌さるゝ昆虫、例へば毛深き毛蟲或は顯著なる色彩を有する蟲などを捕食す。而して其の間二日毎に一個の小形なる卵を産み、他鳥をして之を孵化せしむ。——クワクコウの類 (*Cuculus*, *Cucumatris*, etc.)

(bb) 比較的發見し易からざる、併しながら食物としては適當なる昆虫、及び果實を食ふ。而して産卵期の間通常毎日一個の卵を産み、自ら之を孵化す。

(a) 攀木鳥。趾端の爪を用ひて樹幹、壁面等を攀ぢ登り、尾羽を以て體を支ふ。四趾の中屢二趾は前方に向ひ、二趾は

後方に向ふ。又尾羽は屢々剛直なれり。——キツの類 (*Picus*, etc.) キバシリの類 (*Certhia*) 及び *Troglodytes* 等。

(b) 植物の枝、梢、葉、花及び果實の上にて、或は鼓翼しつゝ、或は懸垂しつゝ、或は又匍匐しつゝ其食餌を搜索す。時

に食餌搜索の爲め地上に降るこゝもあれど、餘り長くは其處に留らず。

(αα) 全く、或は殆ど全く植物性の食物を攝取す。

(i) 嘴は先端硬けれど基部は軟く、鼻孔は瓣狀物にて被はる。嗉囊及び胃は能く發達し、雛は最初嗉囊にて生ずる一種の分泌物を以て養はる。——ハトの類 (*Columba*, etc.) 及び *Megapelia* 等。

(ii) 嘴の基部軟からず。鼻孔も瓣狀物にては被はる。—— *Duceros*, *Mylloceros*, *Thamproctes*, *Protophassus*,

Scythrops 等。及びカハラヒハの類 (*Chloris*, *Gallinula*, キンバラの類 (*Tringa*) 等の燕雀類も其處に屬す。

(ββ) 少くとも一部分は動物性の食物を攝る。殊に其の幼鳥は殆ど常に動物性の食餌にて養はる。大部分の燕雀類は此處に屬す。

(i) 食餌攝取の爲め屢地上に降る。——カラスの類 (*Corvus*) ムクドリ (類 (*Sturnus*) ツグミの類 (*Merula*) アトリの類 (*Tringilla*), ホ、ジロの類 (*Emberiza*) ヤツガシラの類 (*Upupa*) 及び *Imetoceros* 等。

(ii) 葦其他雜草の葉上にて食物を搜索す。——ヨシキリの類 (*Acrocephalus*) セツカの類 (*Cisticola*, 及び *Alomophilus* 等。

(iii) 樹木の枝にて、特に飛行しつゝある昆蟲を捕食す。サメビタキの類 (*Muscicapa*) ジャウビタキの類 (*Turdicula*) ムシクヒの類 (*Phyllopus*) 及び *Capito* 等。

(iv) 細き梢、花なちにて食物を搜索す。——ヤマガラの類 (*Picus*) ミソサザイの類 (*Troglodytes*) メジロの類 (*Zosterops*) 及び *Neotritia* ミッスヒの類 (*Aliponcula*) 等。

(v) 比較的太き枝にて食物を搜索す。——カウライウグヒスの類 (*Oriolus*) カサ、ギの類 (*Picus*) カケスの類 (*Tamias*) フウテウの類 (*Parus*) 及び *Sylvia* 等。(完)

江戸時代將軍家の狩獵（承前）

永井 碌

將軍家鶴御成の事

鶴御成は正しくは御進獻鶴御成と稱するので尋常の遊獵とは自ら輕重ありて沿革もあり又鶴に關する事項もあるから爰に項を更めて記す。

鶴御成の事　鶴を捉ることも三代將軍の頃には野樓のものに鷹をかけたのだが八代將軍吉宗公の時遊獵の事を復興するに同時に鶴は勿論鷹鴨白鳥類をも保護するやうになり享保元年には吉宗公の紀州に在られたころ鷹狩の御用を勤めて居た紀州領伊勢松坂の加納甚内。橋爪源太郎の兩人を江戸に呼寄せて鶴の飼ひ附けを命じ加納甚内は葛西領西小松川村（今の東葛飾郡小松川村）橋爪源太郎は六郷領不入斗村（今の荏原郡入新井村）に宅地家屋並に扶持方を給し後には本人の望みに據り源太郎には扶持方を減して羽田村の中にて開墾せし十二石五斗の土地と外に玉川洲一丁五畝歩餘を甚内には扶持方を廢めて其の代りに小松川村の中にて開墾地四十七石七斗餘の土地を給附したるうへ兩人とも更に役柄に屬する手當金を給されしが是を初めとし各方面に亘りて數名の飼附人を置き之を綱差と稱して平生には農業をさせて皆な相應な生活を爲し得て居たから甚内の末孫は入新井村か羽田村に又源太郎の末孫は小松川村に今尙存在する筈である。

是よりして専ら綱差に鶴を飼附けさせ其の外鷹鴨をも飼附け後には鶉をも中目黒村の百姓權兵衛に命じて常に圃を飼はせたりなきて後には將軍は駒場邊に鶉狩りの時は權兵衛の手から豫め準備させるやうになつて鶉の權兵衛とて同地方に知られるやうになり子孫は今以て中目黒邊に居る筈である。

鶴御成の實例　左に記すは十四代將軍家茂公文久三年の例にして一日に四ツの鶴を獲られしは前代未聞なりとて當時吉兆か凶兆

かこ老人連は世變なきやこ憂ひをも有つたくらるで夫より三年目の慶應二年には遂に狩獵の事を廢され鶴の飼附けを止めたのみでなく多年養ひ來つて鷹を追放したれば人間なら殿様育ちにされた鶴も鷹は忽ちに餌食にはなれて中空に迷ひ鶴は其方此方の田畑を齎りてやがて影を潜めてしまつたが鷹は鳥に追れて迷惑ふもあり甚だしきは飢渴に迫つて掃溜に迷ひ込むもあり現に白山の料理店萬金の掃溜めへ隼が落ちて來て飢ミ寒さで震えてゐたこは筆者の實見する所である。

文久三年十四代將軍家茂公千住筋鶴御成 (隨侍者等は代々大抵同一である)

御供揃ひ六つ半時(今の朝七時頃)

道筋 大手門より常磐橋本町通り兩國橋より乗船大川通り橋場上り場より上陸。汐入土手下通り小塚原町裏。通新町裏。三河

島村菅苗。千住大橋を渡り掃除宿源長寺(中食所)に到る三十餘丁(此の間にて鶴の様子を見合せ鷹を掛けて捉るので有る)

此の時代飼附けて居るのは黒鶴にて二ツ三ツ又は四ツつゝ一群をなして居る之を代ミ唱へて凡そ十八九代より二十三代で有つて近きは五六間遠くも八九間位の位置まで人を寄せるなごに飼ひ馴らしてあつて此の鶴に對して將軍手つから鷹を掛け合せらるゝわけにて家茂公は手つから都合四つを獲られたのである。

因みに禁中進献の鶴は勿論のここ想じて俗に鍋鶴ミ呼ぶ全身眞黒の鶴て有つてたまゝ眞鶴ミ唱える灰色のものあるも是は一格下品にして將軍獵獲の目的物は黒鶴に在るので又白きは白鶴ミ唱へ殆んご神扱ひにしたるここ別項の如く有る。

鶴の飼附け方 鶴は秋の田の景色を見せて誘ひ寄せ飼馴らす譯にて鶴も能く前年の事を忘れず同じ所へ來るので有るが怜悯な鳥で有るから迂架迂架ミは降り立たない秋の末稻を刈り終りて田に耕夫の見えなくなりし頃より田さくりきて細い溝を田の中に作りて水を落し鶴を誘ふて代つかせるに適當の位置を見定め粃米を蒔いて餌つかせやがて十一月中旬になるミ藁束にて掛稻の體裁に做つて垣を作り其處を隠れ場として餌を遣りに行くのである其の仕方は餌蒔きの役の綱差又は見習ひの者が半纏に絞小紋の股引脚絆わらじ掛に紺木綿の手掛(略して紺てんさいふ)にて頬冠りし肥桶と同じ擔桶に粃ミ玄米を容れ全く農夫と同じやうな振して餌を蒔き又或る時は田の畔に休息なごしてひたすら鶴を馴染せて段々に近寄せ思ふ通りの位置へ鶴を居附かせ日に三度づゝ一定の餌を

與ふるのである鶴も追々馴れて末には餌時の擔桶を見れば慕ひ來るほぎになる斯くていざ御成さいふ時には近きは四五間までも人を寄せるなごに飼ひ馴らすのである十町も半道も離れる處に居る鶴をも此の手段で我が思ふ位置へ引寄せもするのである斯うなつて來るせり鶴にて飼ひ付け區域の外に居る鶴が飼ひ鶴の餌を荒らしに來る去りて之を追ひ拂ふ飼ひつけの鶴も不安の念を出して遠くへ立ち去るごの有るからせり鶴のうちでも馴らせそうな性の好いものは誘ひ寄せたり又は餌を與へたりして成る丈飼ひ鶴の邪魔をせぬやうにして又鷹鴨の類は鶴の餌を糞りに來るごもあり之も餌の有るごを鶴に知らせる便りごし且は安全の念を鶴にも起させる手段ごして鶴の邪魔にならないやうに餌を遣るごもある尤も鶴にも野鳥ご飼附鳥ごは別なり區域内のものを飼附鳥ごいふ區域外に居るものは野鳥ご呼び斯くして飼ひ馴すもの年々十四五代乃至二十餘代あり小松川。龜有附近又は千住。橋場邊を重ごし次は大森より六郷邊である。此の鶴のうちには十餘年も續いて來るものありて代づく處即ち居りつくべき場所を忘れず年々屹度同一處へ來るのが多い左うなつて來るご飼附け人の方も可愛くなつて我子の如く思ひて飼ひ附け若し將軍家の御成りの時旨く將軍の手に入るご自分の飼ひ附けた手柄を喜ぶご同時に多年飼ひ馴らした鶴に別れを惜み我子を失うたかの如く涙を流して悲歎する者もある。

鶴は性質伶俐なれば雛鳥附きのものにては雛手に入れは親鳥も屹度手に入れご親鳥が先に入ると残りの鳥は手に入らぬのみか大抵は再び渡り來ないが例である又二つのものは一方が捉られるご一方はモウ渡り來ない又鷹に追はれる丈の鶴は再び鷹をかけて捉れるごはあるが一度鷹に掛られるのを引放して逃れ鶴は性質か荒くなり自分の餌の有り所を知つて居るゆゑせり鶴ごなつて餌を荒しに來れご如何に丹精しても元の通り飼ひ鶴には成らぬものである且又田面に飼附けた鶴は翌年春の末歸北する時まで場に飽きるごこなけれご畑に飼ひ馴らした鶴は兎角飽きるもので將軍家の御成が濟むご田の方へ誘ひ出して土地に飽きさせないやうにしておくのてある鶴や雁鴨の飼附けは十月中旬よりして翌年の三月中旬まで有る。

鶴以外の御成り　將軍家は鶴御成は進獻さいふ大事なれば是れ専らでなかご余所へ廻り道や立寄りなごは無いが雁鴨や鶺鴒。雲雀又は川狩りごなるご全くの遊獵なれば其の方面の社寺又は植木屋。名有る百姓（例之木下川の名主次郎兵衛の梅又は龜井戸喜兵

衛の臥龍梅の類)の庭内を通り抜け盆栽や金魚又は土焼物など買上げらるゝことあり或る時の如きは淺草奥山の植六(淺草公園花屋敷の前)にて嘉永五年植木屋六三郎といふ者が開きしもの)を通り抜けられることもある龜井戸より向島邊又は築鴨染井の邊或は目黒邊等の社寺。植木屋又は豪農のうちには將軍家の休息されし場所や建物など存在し築鴨の内山長太郎の如きは明治廿年以後尙ほ將軍御腰掛けの建物も御成門が残つて居たのを覚えてゐる根岸の鶯春亭の庭に在る明王梅といふのも今は老朽ちたれ十三代家定公此の邊野遊の時に同亭を通り抜けられて此の梅を賞美され木の形の不動に似たるより斯く名けられしもので有る今こそは大かた忘れられたれ此の類のものは諸所に在つたやうである。

將軍家通り抜けに買上げ物の一例を記せば

嘉永六年正月九日家定公千住筋雁鴨御成りのごき例に據つて兩國より乗船吾妻橋際にて上陸淺草觀音境内通り抜け龍泉寺村より山谷。今戸。橋場邊。千住掃除宿に到り歸路は千住大橋より再び乗船の上兩國にて上陸。

上覽物 淺草境内源水の獨樂夫より植木屋六三郎方通り抜け。

同所にて買上物左の如し。

一五葉松一鉢三兩△八重櫻一鉢三兩△緋桃一鉢三兩△福壽草一鉢一兩一步二朱瑠璃置揚摸様大鉢一ヶ三兩△口鴨一番八兩三步

同年三月廿七日(同上) 龜有筋雁鴨御成も例の如く兩國橋乗船向島水神脇上陸木母寺境内通り抜け土手通り古綾瀬川端より水

戸街道を経て龜有村に到り歸路また水神より乗船。

買上物 隅田村植木屋半右衛門方にて

一南殿櫻一鉢三兩△東錦桃同二兩三步△旭山櫻同一兩三步二朱△金魚四十一疋二歩

同年五月六日(同上) 橋場筋漁獵御成り。

辰の口より乗船日本橋川筋より大川通り漁獵向島須崎上陸。野道を経て寺島村に到り同所より乗船橋場へ上陸夫より山谷。龍泉寺村邊を経て淺草觀音境内通りぬけ吾妻橋より更に乗船歸城漁獵は投網。長繩。地引等である。

買上物 須崎村植木屋平松方にて

一植交花菖蒲一鉢三兩△家造虫籠一箇二兩三步△象牙細工人形十箇附き能舞臺十二兩△變り鯉一本二兩△金魚一疋二步二朱。

其の外にも諸所にて買上物あれども煩はしければ省くべけれど品物と代價とを見合せて今日と考へ合せれば其處に多少の趣味あるべし。

尙も一つ記すべし。

安政四年三月廿三日(同上) 中里筋雉子御成りであるが平川門より一つ橋を出て水道橋より白山前町千駄木町を経て植木屋の

庭内又は天主寺境内等を通り抜け西ヶ原往還に達し平塚明神前より飛鳥山下瀧ノ川野道より巢鴨に出で元の白山前町にかゝりて歸城さいふ順序にして此の間諸所にて雉子を狩り又社寺内植木屋等を通り抜けて例の如く植木類を買上げられた。

將軍家は野外散策の様は大抵斯んな風で雉子か鶉か雁鴨か或は川狩等なるが只だ鶴の御成には進献鶴御成と稱するほざなれば極めて重大の事にされてなかく寄道なごはされず關係の向々でも鶴の御用も滞りなく濟んで御めでたいと云つて安心するなごのこゝで有つた。

將軍の一行 將軍家の郊外出遊は案外簡素なもので途中は徒士と十人組と近衛の職に在るものゝ隨從して居るが當日野遊の區域に屬する一定の場所に到れば是等の隨侍者は皆な列を止めて夫から先は御場掛りにて僅な者が扈從する丈で其の人員は左の通りであるが是は何の御成にも同じこゝである。

昵近扈從者

若年寄一人△御用掛一人△御供御側一人△御目付二人(此外近侍者若干)さいふが通例にて此の外には道案内の役向若干と近侍者もてほんの將軍の手廻りの用を達す者ばかりである。

追鳥狩 是は全く野鳥の雉子獵にて多少は前以て雉子の用意を爲し置くこゝも有るやうなれど大體野鳥狩りにして實は只だの遊獵では無く前にも記した通り練武獎勵の趣旨なれば出入の行装も普通の鷹狩とは全く異りて齊々肅々たるものである天保四年十月駒

場で行はれた追鳥狩の行列書が有るが順序を正しく書いては餘り紙幅を費すから行列の役名の大概（人員は省く）を左に記して一例とする。

徒士△徒士頭△狹箱△馬（杏箱）臺傘。日傘。雨傘△床几△使番△徒士目附。小人目附△勢子徒士組△勢子小十人組△落見日附騎馬△落見使番。徒士頭。騎馬△纏△小性組頭。書院番頭騎馬△小性組。書院組番士各五拾騎つど二組△纏△小性組頭。書院番頭△落見使番。徒士頭。同上目附△纏△鳥見△鐵砲力。貝役△鷹匠頭。鷹匠。犬。鷹。鷹方△招き△鳥見頭。鳥見△小十人組。同組頭△長刀△落見側衆△先立小納戸○將軍家△小納戸△刀持小納戸△供騎馬△側衆。若年寄△側衆△勢子騎馬衆△是より以下普通通隨侍の供立。此の行列は堂々たるもので小金ヶ原の猪狩りと同じく獎武の趣意に因るが故で有つて別項に記した西ヶ原や雜司ヶ谷邊の猪狩りには斯はぎの行装では無かつたので有る。

鶴の故障　鶴の取扱ひに付いては容易ならざりしものにて其の實例を記して鶴に關する記事の終りこす。

安政六年（横濱開港の年）三月四日の朝下谷金杉村に黒の雛鶴一羽落ち又三河島村には同じく黒鶴の負傷したものと二羽舞ひ降り其の外同月末には眞鶴一羽飛び得ずして降り居たり村方の訴へに依り鳥見役の者檢證の上其の月三日の夜雷鳴烈しく落雷に打たれしものご認定し後の眞鶴も同様なりこのことにて上司へ届け出て指令を得て落ち鶴は取捨てさせ負傷鶴は側附人に命じて飼養させ斃死するに及んで上司の命を待つて處分した筆者幼年の折かも一年に三羽の落鶴があつて孰れも處分は取捨てこあれご其の取捨て方は振つてゐる指令が有るご（實は指令の下るのを待つてもなく）其方面主任の鳥見役の手元で分解し肉は内々同僚に分配し脂肪は凝油に製し脛骨は婦人の筍に製し羽は帚ごし臍類の食はれるものは黒焼に製し分解の時少しにても血の氣あれば丁寧に白紙へ浸ませて黒焼ご共に婦人血の道の妙藥ごして尊重し油は切疵の妙藥ごし夫も腰から下へ附けては咎めるごて大事にし全く棄てるものは少しの羽毛のみにて是も清淨の地を選んで埋却したが時代に従つて信念は不思議なもので黒焼や血紙で婦人の血の道の治つたのが妙で有る尤も將軍様のおのこりの御飯粒を煎して頂けば瘡疾が落ちるご云つて信仰した時代であるから血の道も治つたか知れない。

お鶴さま　白鶴を神扱ひにすることは前項に一言記したが其の例を擧げるに一年戸田邊に白鶴の負傷して落ちたこゝが有つたが餘ほどの老鳥で有つた例に據つて大切に飼養することに成り飼附け役の邸内へ柵を拵へ丹精したが二三ヶ月の後遂に衰死したので清淨の地へ埋却せよとの命に依り其の村の鎮守の奥へ埋るこゝになつた夫は今の北豊島郡志村大字元志村の熊野神社で本殿の後の小丘の上に埋めて木標を建てたこゝを誰か言ひ出したでも無くお鶴さまに血の道の平癒を祈るさきつゝ利益が有るこゝを詣する者が出て小さな繪馬の額や切髪なごを納めるものさへ有つて明治になつても尙木標は存在されて有つたが現今は如何に成りしや。(完)

雁鴨類の夏冬の棲息地

理學士　黒　田　長　禮

本篇は朝鮮晋州道廳の本會々員馬庭軍市氏より質疑應答欄所載の如き質問を受けしにより同氏に答ふる目的にて草せしものなるも其欄にて述ぶるよりも本欄に於て細述する方適當なりと信じ聊か余の調査し得たる所を記し併せて本邦の各種類の夏季及び冬季の棲息地を明にせんとするにあり。

雁鴨類は主として大部分の種類は寒地にありて産卵、蕃殖す。而して産卵期以外の時期は暖地に渡り越冬するもの多きにより何づれを常棲地と云ふを得ず。東京附近に渡來するものにては一ケ年中の殆ど半は留るものあるにより夏季の棲息地と冬季の棲息地に分ち考ふるを可とすべし。

雁鴨類に適する温度は種類により一定せざるも東京附近にて普通に見る五種類（マガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、ナガガモ）にありては秋季渡來初期の二十九ケ年間の平均温度（中央氣象臺調査）にて示せば華氏八二度九乃至六九度四にして春季去期の温度は五七度九乃至六九度一となり而して渡來初期は八ケ年間の調査（『鳥』第一卷第一號參照）によれば平均九月五日より

十月十五日迄にして去期は三月三十一日より五月五日迄なる。即ち上記の温度及び月日にて示せし間の時期は冬季の棲息地に適するものにして之以外の時期は夏季の棲息地に適するものと考へらる。然れども温度は常に非常なる高度若しくは反対に低度は適せざるにより冬季も雖も彼等に適する温度の地に渡り夏季も亦同様適當の温度の地（主として北方）に赴き蕃殖するを多しす。次に一ヶ年中にて如何なる緯度を往復するかにて記せばこは種類により多少相違するも前記普通の五種の鴨類にありては夏季は北は北緯五〇度以上七〇度位迄の間にて蕃殖し冬季最南地方としては北緯八度乃至赤道直下即ち零度迄の間に渡る。經度にて表すには各種により相違を生ず即ち分布地の異なるによる。

南北半球に於ける差異は大にあり。即ち日本及び朝鮮に産する雁鴨類中のものは皆北半球に分布、蕃殖する種類にして赤道より以南に赴くこと殆どなし。反之南半球に産する他の種類（舊日本以外の）にありては主として南半球内に分布、蕃殖し北半球に北進するものは極めて少し即ち換言すれば各特殊の島に留鳥多きが爲めなり。

以上にて馬庭氏の質問に答へ終りたるが尚ほ左に本邦の雁鴨類の最北最南の棲息地を表記せんす。※印は本邦にても蕃殖す。

種	類	夏季の棲息地（蕃殖地を含む）	冬季の棲息地
コ	ク	北緯五九・東經一〇九（Tena Delta）より北緯七一・二三西經一五六・二二（Point Barrow）の間に蕃殖、北緯七四・四五・東經一四二・五〇（New Siberia Is.）に達す	北緯五〇以南北緯三二・四八、東經一二九・五七（長崎）を経て北經二〇・五二、一四經一五六・四〇（Mauri Is.）に達す
※シ	ジウ	北緯四〇・四、西經八五・三四（River Anderson）北緯四五・東經一四八（千島）より北緯五五・東經一六六・三〇（Commander Group）邊にて蕃殖す	北緯五五・西經一二五（British Columbia）より北緯二五（Mexico）邊に達す本邦にては北緯三五・四〇、東經一二三・四八（東京附近）位迄達す。
B. canadensis hutchinsii			

※サカツラガン
Cynopsis cynoides

北緯四〇(支那黄河)邊
 北緯四〇(朝鮮鴨綠江口)位
 北緯四五、東經一四八(千島)
 北緯五〇(蒙古國境)位
 北緯五二、東經一二〇(Argun)
 北緯五三、東經六三・三五(R. Tobol)
 北緯五三、東經一〇八(L. Baikal)
 北緯五五、東經一六六・三〇(Commander (Fro-
 pp))の邊
 北緯五五(E. Kamchatka)の邊
 北緯六二、東經六七(R. Obi)等にて蕃殖す。

亞細亞にては
 北緯三一・一三、東經一三・二七(上海)邊迄達し
 本邦にては
 北緯三五・三〇、東經一三九・三五(横濱)附近並
 びに北緯二三・三〇東經一二一(臺灣)迄達す。

コイカリガネ
Anser anser

北緯三二、東經五五(波斯)以北の地
 北緯四〇(蒙古南部及び黄河)邊
 北緯三九・三〇、東經九〇(Lob-Nor)及び北緯
 四〇、東經七〇(Turkestan)
 北緯四六・三〇、東經一三四・三〇(Ussuri地方)
 邊
 北緯五三、東經一〇八(L. Baikal)
 北緯五五(Kamchatka)位
 北緯五六、東經八〇(西比利亞の北方の蕃殖地の
 リニント)
 北緯五七、西經四(Scotland)
 北緯六五、西經一八(Iceland)
 北緯七〇、東經三〇(Varanger Fjord)等にて
 蕃殖す。
 支那にては蕃殖することあるべし、印度にては
 なからず。

北緯三〇(西北亞弗利加)邊迄達し西細亞にて
 は北緯二五(南支那及び北部印度)位迄之れを
 見る。

<p>マ ガ ン Anser albifrons</p>	<p>新世界にては 北緯四〇(Mouth of Anderson)邊 北緯六七 (R. Mackenzie) の邊より北緯七二、 東經四〇 (Greenland) 迄の間にて蕃殖し 舊世界にては 北緯六一、東經一七六(Chukchiand) 北緯六二、東經六七(Obi) 北緯六五、西經一八 (Iceland) 北緯六八、四七、東經三三(Kola Pen.) 北緯六九、東經四五 (Kolguev) 北緯七〇、東經三〇(Varanger Fjord) 北緯七一、東經五五(Novaya Zemlia) 北緯七五、東經一〇〇 (Taimyr Pen.) 等にて 蕃殖す。</p>	<p>新世界にては南は 北緯二五 (Mexico) 邊より北緯三二、西經八、 (Cuba Is.) 迄達す。 舊世界にては 北緯四三、東經五一 (Aspian Sea) に附近 北緯二五(南支那及び北部印度) 北緯二三・三〇東經一二二(臺灣)位迄達する。</p>
<p>コ カ リ ガ ネ Anser minutus</p>	<p>北緯五五(Kamchatkai) 邊 北緯六〇・三〇——μ〇(Yenisei) 北緯六七(Chukchiand) 北緯六八・東經二七(Taplant) 北緯六八・東經四五(Kaninsk Pen.) 北緯七〇(Bogomida) 北緯七一、東經五五(Novaya Zemlia) 北緯七二、μ三、μ四(Tana) 北緯七二・三〇——μ四(Valley of Taimyr) 北緯七三・五〇(Taimyr Pen.) 等にて蕃殖す。 北緯五〇 (Okhotsk Sea) 邊にて蕃殖するな らん 北緯五一・四〇(Aksha, Dauria) 邊</p>	<p>北緯三二、東經五五(波斯)邊より南は北緯二五 (南支那、北印度)邊迄達す本邦にては 北緯三五・三〇、東經一三九・三五(横濱)附近迄 達す。</p> <p>南は北緯三五・四〇、東經一三九・四八(東京附</p>

<p>オ ホ ヒ シ ク ヒ</p> <p><i>Melanonyx arvensis sibiricus</i></p>	<p>北緯五五 (Kamchatka) 邊 北緯六一、東經一七六 (Chukchi Pen.) 北緯六三・五〇、東經一一〇 (Vilyui) 北緯六九・五〇、東經一三五・三〇 (Yana) 北緯七〇 (River Boganița) 邊等にて蕃殖す恐らく北緯五〇以上のバイカル湖より日本海迄の西比利亞にて蕃殖し尙ほその以南にも達すべし。</p>	<p>近) 邊迄は渡來するもその以南は明かならず。 本亞種は歐露又は西歐地方にも迷ひ行くことあり。</p>
<p>ヒ メ ヒ シ ク ヒ</p> <p><i>M. segetum segetum</i></p>	<p>北緯四四—八〇 (Kolguev 及び Novaya Zemlia 東は Yenisei 北部地方迄) にて蕃殖す。 Sweden, Finland にて蕃殖するものは別種なり。</p>	<p>北緯四三 (Caspian Sea) の附近 北緯三〇 (西北亞弗利加) 亞細亞にては 北緯三三・二二〇、東經一二六・三〇 (朝鮮濟州島) よりなほ以南 にも達するが如きも明かならず。</p>
<p>ヒ シ ク ヒ</p> <p><i>M. segetum serrirostris</i></p>	<p>北緯五五、東經一三三 (Stanovoi range) 北緯六〇・三〇 (Yenisei) 邊 北緯六一 (Chukchiand) の邊 北緯七〇・三〇 (Taimyr Pen.) 等にて蕃殖す。</p>	<p>南は北緯三六 (埼玉縣下) 邊並びに 遙に南は北緯二三・三〇、東經一二一 (臺灣) 迄達 すること明かなり。</p>
<p>ハ シ プ ト ヒ シ ク ヒ</p> <p><i>M. segetum mentalis</i></p>	<p>北緯四五、東經一三二 (T. Khanka) 邊にて蕃殖することの外現今明ならず。 然し北緯五五 (Berings Is.) 邊にても採集せられたり。</p>	<p>北緯三七 (京城附近) 邊迄達すること明なるもその以南は不明なり本邦内地にも渡來せしも地名不明なり。</p>
<p>ハ ク ガ ン</p> <p><i>Chen hyperboreus hyperboreus</i></p>	<p>北緯六四 (Alaska) 邊 北緯六五 (Mackenzie R.) 邊 北緯七五・三〇、西經一一〇 (Melville Is.) にて蕃殖す。</p>	<p>北緯五五 (British Columbia) より北緯二五 (Mexico) 邊迄達す。 本邦にては北緯三二・四八、東經一二九・五七 (長</p>

	亞細亞にては 北緯六〇——七〇(東西比利亞の北極地方)の邊にて蕃殖す。	崎)邊迄達す。 歐洲北部に渡るも稀れなり。
オホハクガン <i>Chen hyperboreus nivalis</i>	北緯六五(Mackenzie R.)邊より以北 北緯七七(Whale Sound)にて蕃殖す。	南は遙に北緯一八・一五、西經六六・二五(Trinidad Rio I.)邊迄達す。シボーム氏によれば本邦にも渡來せしと云へど疑はしきことなり。
オホハクテウ <i>Cygnus muscus</i>	北緯五五(英國)邊より北緯六五(Iceland)乃至北緯七〇(歐洲の北極地方)にて蕃殖す。	本邦にては 北緯三二・四八、東經一二九・五七(長崎)に達す 最南地方としては北緯二五(印度)邊迄達す。
ハクタテウ <i>C. bewicki</i>	北緯五五(英國)邊 北緯六一(西比利亞) 北緯七〇(西比利亞)の邊にて蕃殖す。 歐露にては蕃殖せずと云ふ。	南は 北緯三五・四〇(東京附近)邊迄達するも此以南にも渡るや不明なり。
コブハクテ <i>C. olor</i>	北緯五〇(中部亞細亞)邊より 北緯六〇(南部瑞典)の附近にて蕃殖す。	南は屢々 北緯二五(北印度)の邊迄も達することあり朝鮮にては稀なるも北緯三四・五〇(木浦)迄達す。
リウキウガモ <i>Dendrocygna javanica</i>	北緯二〇(緬甸、印度)邊より南緯七・三〇(Java Is.)迄の間にて蕃殖す。	北緯二八(琉球諸島)邊迄達す。
ツクシガモ <i>Tadorna cornuta</i>	北緯五〇(歐洲及び南部西比利亞)より北緯五五(英國)邊にて蕃殖す。北緯五六・三〇(W. India Ind.)にて蕃殖す。	北緯二五(北部印度)邊迄達す。本邦にては北緯三五(東京附近)より北緯三二・五〇(九州有明海)邊並びに遙に南は北緯二三(臺灣)邊迄達す。
アカツクシガモ <i>Casarca rubila</i>	北緯四〇(南西班牙)邊より北緯五〇(歐洲、南部西比利亞、黒龍江等)にて蕃殖す。	北緯二三(臺灣邊)迄達す。本邦に於ける最北の地は北緯三八・五〇(山形地方)位なり。

<p>カンムリツクシガモ <i>Pseudotadorna cristata</i></p>	<p>北緯三五乃至三六(朝鮮南部)邊にて蕃殖するならんも明ならず。</p>	<p>北緯三五・一〇(釜山附近)邊にて獲られたるものある外明ならず。</p>
<p>※ ナ シ ド リ <i>Mix galericulata</i></p>	<p>北緯三六・二〇(飛彈)邊北緯三六・三八(日光)北緯三七・三三(朝鮮京畿道)邊より北緯四八・三〇(Amorland)位の間にて疑ひなく蕃殖す尙ほ以北にても蕃殖するものあるべし臺灣にも南支那にも棲息するも蕃殖するや否や不明なり。</p>	<p>冬季の棲息地の緯度も夏季の場合と大差なし。即ち南は北緯二三(臺灣)邊迄之れを見る。</p>
<p>※ マ ガ モ <i>Anas boschas</i></p>	<p>北緯四三(北海道)以北の兩大陸にて蕃殖す。最北の蕃殖地は北緯七〇邊迄達す。本邦にては北緯三六・三八(日光)にて蕃殖するものありと云ふ北緯四五(千島)邊にても少數蕃殖す。</p>	<p>北緯二〇(北亞弗利加)邊又尙ほ遙に北緯一九・二六(Mexico)邊にも達す。</p>
<p>※ カ ル ガ モ <i>A. zonorhyncha</i></p>	<p>北緯二九・四〇(Kin Kiang)北緯三一・一三(上海)邊より北緯三五(三河灣)邊北緯四〇(北部支那、朝鮮北部)北緯(四三)北海道、南蒙古)の地方にて明に蕃殖す臺灣にても蕃殖するや不明なり。</p>	<p>夏季の棲息地と大差なし南は北緯一二(比律賓)邊迄も達することあり。</p>
<p><i>A. sperilliosa sperilliosa</i></p>	<p>北緯七(南洋Palau)邊より南緯二〇(Fiji)邊迄の間に分布蕃殖す濠洲及びニウジールランドのもののはの稍々大形なり。</p>	<p>夏季の棲息地と大差なし。</p>
<p><i>A. oustaleti</i></p>	<p>北緯一六(南洋Marianne)邊にて採集せられたり。</p>	<p>同上</p>

チカヨシガモ	Charleinsmus streperus	北緯四〇(南西班牙) 北緯五五(兩大陸)邊 より北緯六八(Lapland)に達する間にて蕃殖す。	北緯二〇(印度、メキシコ、西印度)邊迄達す。 本邦にては北緯三三・四八(長崎)邊迄達す。
ヨシガモ	Bonetta fulvata	北緯六〇(東部西比利亞)邊にて蕃殖す。	北緯二〇(印度)邊迄達す、本邦にては北緯二三 (臺灣)迄達す。
シマアジ	Querquedula atroa	北緯五〇(南西比利亞)以上 北緯五五(英國)邊にて蕃殖するもなほ以北に達 するならん	南緯二〇(Calcutta)及び南緯三三(Ceylon)等の赤道 以南に迄達す。 本邦にては北緯二三(臺灣)迄達す。
※コガモ	Nettion crecca crecca	北緯四五(千島)邊より北緯五五(英國)邊迄の間 にて蕃殖し 北緯六八(Lapland)迄達す。	北緯一一(Abyssinia) 北緯八(Ceylon)等迄達す本邦にては 北緯二三(臺灣)迄達す。
アメリカコガモ	N. crecca carolinense	北緯三四(N. New Mexico)より 北緯六四(Alaska)邊にありて蕃殖す。	北緯二〇(Mexico)及び 北緯一五(Honduras)邊迄達す本邦にては北緯 三五(府下羽田)邊にて一回採集せられたり。
トモエガモ	N. formosum	北緯六一(東部西比利亞)邊にて蕃殖す。	北緯二二・三四(Calcutta)邊迄稀に達すること あり。 本邦にては北緯二三(臺灣)邊迄達す。
チナガガモ	Dafila acuta	北緯四七(Brenne附近) 北緯五〇(Bohemia) 北緯五六・三〇(W. Jutland) 邊より北緯七〇 (N. Lapend)にて蕃殖す。北米にては北緯四〇 (Illinois) 以北 北緯六四(Alaska)邊迄にて蕃殖す。	北緯二二(Cuba) 北緯二〇(印度)邊 北緯八・五九(Panama) 北緯八(Ceylon)等の南 部に達す。 本邦にては北緯二三(臺灣)迄達す。

<p>ハシビロガモ <i>Spatula clypeata</i></p>	<p>北緯四〇(N. Indiana)邊より北緯六四(Alaska)邊迄にて蕃殖す。舊世界にては北緯五〇(獨逸)より北緯六八邊迄達す。</p>	<p>北緯二〇(印度) 北緯八・五九(Panama) 北緯八(Ceylon)邊迄達す。本邦にては北緯三二(臺灣)迄之れを見る。</p>
<p>ヒドリガモ <i>Mareca penelope</i></p>	<p>北緯六五(Iceland)以北の地にて蕃殖す。</p>	<p>北緯二〇(印度) 北緯五(Borneo)邊迄達するも尙ほ赤道直下迄も達するや不明なり北米にては冬季北緯三〇(California)邊より北緯八〇(Greenland)邊迄の間に時々之れを見る。</p>
<p>アメリカヒドリ <i>M. americana</i></p>	<p>北緯四〇(N. Indiana)邊より 北緯六四(Alaska)にて蕃殖す。</p>	<p>北緯三六(Guatemala) 北緯二二(Cuba)邊迄達す。本邦にては北緯三五(府下羽田)邊にて數回得らる又北緯五五(英國)にては獲られたり。</p>
<p>キンクロハジロ <i>Fuligula cristata</i></p>	<p>北緯五五(英國)以上にて蕃殖す大西洋より太平洋の北極地方は蕃殖地なり。</p>	<p>北緯二〇(印度) 北緯一一(Abyssinia) 北緯七(南洋 Palaw)等の南部に達す。本邦にては北緯二三(臺灣)迄達す。</p>
<p>スガモ <i>F. marila</i></p>	<p>北緯六五(Iceland) 北緯七〇(Lapland)等の北地にて蕃殖す。</p>	<p>北緯三〇(北亞弗利加)北緯二五(北印度)等に渡る。 本邦にては北緯二三(臺灣)迄も達す。</p>
<p>ホシハジロ <i>Nyroca ferina</i></p>	<p>北緯四九(Havaria) 北緯五〇(南西比利亞) 北緯五四(北獨逸)及び以北の歐洲にて蕃殖す。</p>	<p>北緯二五(北印度)邊迄達す本邦にては南は北緯三五・三〇(横濱)邊迄達す。</p>

<p>メジロガモ <i>N. africana</i></p>	<p>北緯三七(地中海)遼より北緯五五(英國)位の間にて蕃殖す。</p>	<p>北緯二・五(中央印度) 北緯一一(Abyssinia)邊に達す。 本邦に渡來するや否や不明なり。</p>
<p>アカハジロ <i>N. heeri</i></p>	<p>北緯四八(Amur) 北緯五五(Kamchatka)邊にて蕃殖す。</p>	<p>北緯二〇(印度)邊迄達す。 本邦にては北緯三五・三〇(横濱)邊迄達す。</p>
<p>ホ、ジロガモ <i>Clangula clangula clangula</i></p>	<p>北緯五五(英國) 北緯五五——七〇(舊世界の北極及びその以下)の地にて蕃殖す。</p>	<p>北緯三〇(北亞弗利加) 北緯二〇(印度)邊迄達す。本邦にては北緯二三(臺灣)迄達す。</p>
<p>ホリガモ <i>Harelda glacialis</i></p>	<p>北緯五九・三〇(Ungava) 以上北緯七五・三〇(Melville Is.)北緯八〇(N.Greenland)邊迄の間に蕃殖し。舊世界にても北緯七〇邊にて蕃殖す。</p>	<p>北緯三六(N. Carolina) 邊迄達す本邦にては最近に北緯三五・五一(下總手賀沼)にて採集せられたり。</p>
<p>シノリガモ <i>Historionius historionius</i></p>	<p>北緯三八(Coloradoの西南地方)北緯四九(Newfoundland)北緯六〇(Ural及び東北西比利亞)北緯六三(Yukon)北緯六五(Iceland)北緯七〇(Greenland)邊にて蕃殖す。</p>	<p>北緯四〇(Ohio, California) 邊迄達す。 本邦にては最近北緯三四・五〇位(伊豆河津)にて採集せられたり。</p>
<p>ビロウドキンクロ <i>Ordnania fusca stegingeri</i></p>	<p>北緯五五(Kamchatka) 及び東北西比利亞)邊にて蕃殖す。</p>	<p>北緯二三(臺灣)邊迄達す。</p>
<p>※クログアモ <i>Ordnania americana</i></p>	<p>北緯四五(千島) 北緯四八(Altai) 北緯四九(Newfoundland) 北緯五九(Ungava) 北緯六六・三〇(Kolchue Sound) 等にて蕃殖す。</p>	<p>北緯四〇(New Jersey, California) 邊迄達す。 本邦にては稀に北緯三五邊(駿河静岡)迄達す。</p>

<p>ケ ワ タ ガ モ</p> <p><i>Somateria spectabilis</i></p>	<p>北緯五九・三〇 (Ungavaの北方) の邊北緯六〇 (Hudson Bay) より北緯七〇・二〇 (Cape) 北緯八〇 (Greenland北方) 邊迄の間に蕃殖す。 又西比利亞にては北緯七〇以北にて蕃殖す。</p>	<p>北緯五〇・四三 (佛國 Bontone) にて一回 北緯四五・二六 (Vauice) にて一回採集せられる。 北緯四五 (千島) 北緯四〇・五〇 (Long Is.) 北緯四〇 (New Jersey) 邊迄達す。</p>
<p>コ ケ ワ タ ガ モ</p> <p><i>Enicometta stelleri</i></p>	<p>北緯五三 (Aleutian Is.) 北緯五五 (英國) 邊 北緯六四 (Behring: Alaska) 北緯七〇・二四 (露領 Finnmark) 北緯七一・二三 (Point Barrow) 等の北方にて蕃殖す。</p>	<p>北緯七〇・三〇 (Yaranger Fjord) には冬季に渡ると云ふ。 南は北緯四五 (千島) 邊迄達す。</p>
<p>カ ハ ア イ サ</p> <p><i>Mergus merganser merganser</i></p>	<p>北緯五〇・三四 (獨逸 Schlesia) 北緯五五 (Kamchatka) 北緯七〇 (北部歐洲及び亞細亞) 邊にて蕃殖す。</p>	<p>北緯三七 (地中海) 北緯二〇 (印度) 邊迄達す。本部にては北緯三二 (長崎) 迄達す。</p>
<p>※ウ ミ ア イ サ</p> <p><i>M. serrator</i></p>	<p>北緯四五 (千島) 北緯四五・二〇 (Maine の南部) 北緯五三・五 (Ireland) 北緯五七 (Scotland) 邊より北は北緯七三 (Greenland) にも蕃殖す。</p>	<p>北緯三〇 (北亞弗利加) 北緯二八 (Florida) 北緯二五 (北印度) 等に渡る。 本邦にては尙ほ南方北緯二三 (臺灣) に迄達す。</p>
<p>ミ コ ア イ サ</p> <p><i>M. albellus</i></p>	<p>北緯五四・五 (Greifswald) 北緯五五 (英國 Behring Is.) 北緯五七 (Baltic Sea) 邊にて蕃殖す。</p>	<p>北緯三七 (地中海) 北緯二〇 (印度) 等に渡る。 本邦にては北緯三二 (長崎) 邊迄達す。</p>

猶太民族の古代に於ける禁獵鳥類

荒 木 彦 助

世界に於て早くも流亡の民となり其墳墓の國家を失ひし悲惨なる猶太族も嘗て彼等の祖先が天啓を受し稱せらるる宗教に因りては天下に特絶の存在を認めらるべきものなり。其宗教の經典たる舊約聖書を繙けば紀元前(西曆)八百年より四百年の間に輯銘されし巻頭のモーセ第五書(The fifth book of Moses)法律書たる申命記(Deuteronomy)に鳥獸中の捕食すべきを否らざるを規定して嚴命しあり鳥類にては健翮を持ちて空中に翱翔する物ニ森林中小動物昆蟲を捕食する物ニ水邊に停立して魚蟲をあさる物ニを主要に鸚鵡ニ駝鳥を附加せり今古典を記するまゝに探討せば、

[英譯] of all clean birds ye may eat but these are they of which ye shall not eat, the eagle, and the gier eagle, and the ospry, and the glede, and the falcon, and the kite after his kind, and every raven after its kind, and the ostrich, and the night hawk and the scree-w. and the hawk after its kind, the little owl, and the great owl, and the horned owl and the pelican, and the vulture, and the cornorant, and the stork, and the heron after its kind, and the hoopoe, and the bat, and all winged creeping things are unclean unto you, ye shall not eat of any thing that dieth of itself, thou mayest give it unto the stranger that is within thy gates, that he may eat it, or thou mayest sell it unto a foreigner, fore thou art an holy people unto the Lord thy god, thou shalt not seech a kide in its mothers milk.

[邦譯] また凡て潔き鳥は皆汝等之を食ふべし。但し是等は食ふべからず即ち鵬ツツ、黃鷹クマタカ、鳶ハヤブサ、鷹タカ、黑鷹クロタカの類、各種の鴉カラスの類、ダチフクロウカモ、メスメタカカ、カツツ、カツツ、カツツの類、鶴カウ、鷺サギ、白鳥ハクテウ、鸚鵡オスマドリ、大鷹オホタカ、鳩ウ。鶴ツツ、鸚鵡ツツの類、鵪鶉ウおよび蝙蝠。また凡て羽翼ありて匍ふカころの者は汝等には汚れたる者なり、汝これを食ふべからず。凡て羽翼をもて飛ぶカころの潔き物は汝等之を食ふべし。凡そ自ら死たる者

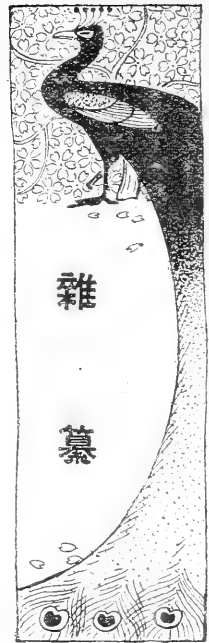
は汝等食ふべからず汝の門内に居る他國の人に之を與て食しむべし又これを異邦人に賣るも可し汝は汝の神エホバの聖民なればなり汝山羊羔コヤギを其母の乳にて煮るべからず。

〔漢譯〕 凡鳥之潔方可食 其不可食者即鷹、鸚鵡、鷹、鴛、小鷹與其類。鴉與其類。鴛、鵝、鵞、夜鷹、魚鷹、雀鷹與其類。鷓鴣、鸞、鸞、鳩。鸚鵡、爰居、魚狗。鶴（鶴又作鵠，希伯來音哈西大即慈鳥之義）鸚鵡與其類、鴛、蝙蝠、以下略之。

上記の如くにして其拔書に因れば和漢英の譯名必ずしも一致せず本會の碩學には英譯に付き自ら精確の譯語を有せらるべきに茲には其和譯の訓讀にて凡そ其鳥類の如何なる者が禁止されしかを知るに難からず先づ假りに和訓の丈を標準とせんか鳥名二十個にて鷺鳥類の鷺、鷹、鴉類、鸚鵡類、鴛鳥を除けば鷓鴣、鴛の有期保護鳥を有する外皆な禁止鳥に屬する所謂益鳥多きは注意すべき事に爰に古典の文字に従へば儀禮慣例を嚴守し拜神に一種の頑迷なる信仰を伴ひし民族なれど今日の益鳥に相當する者の捕食嚴は大きに興味ありと云ふべし即英譯に邦順を附せば

Ospray (鷓鴣ニサハ) Glerde (Buzard) ノスリ普通歐洲產の Kite も本名を用ひらるゝも buzzard も含まれるは別に Kite あるを以て鷓を擬したる) Kite (鷓ニヤ) Nighthawk (蚊母鳥ニタカ) Seawew (gull 鷗カキメ) Little owl (小鴉ニフクロウ) Great owl (大鴉オホフクロウ) Horned owl (鴟鵂オホミズク) Stork (鶴コウヅル) Heron (鷺サギ) の七種の益鳥有り邦譯より緝拾せば鷓、トビ、梟、フクロウ、鷗、カウヅル、鷺、サギ、鶴の六種の益鳥なる以上に就き民俗か敬神上の迷信か捕食に値ひせぬかを別とするも其殺傷を禁止するより受くる處の利益は決して少々に非ず日本政時の保護鳥ならざる鳥類も鷓、鷹類、鳥類並に飛翔する爲め鳥類と同種の規程に入れらる蝙蝠類まで一として其肉食性を利用して多少の効果なきものはなく人生に没交渉の生類を以て目すべからず猶太民族の風習たる潔癖と此法律の勵行とより來る野生小動物の繁殖の爲め起る農山林の被害驅除と生物死屍の遺棄に因る腐敗物の排除等は其主要なる處の鳥類活用に伴ふて得らるゝ結果と云ふべし殊に紀元前三千七百餘年はモーセに統率されし猶太民族約二百萬が埃及に虐待せられ今日の流離以上の状態に在り漸く埃及の拘束を脱して故國の樂土を望んで歸朝の行途に就くや旅中四十年の歲月をアラビヤの荒野に彷徨し飢餓に苦み風土に惱みて悲慘の限を極め民力困疲の絶頂に有りたれば産業に衛生に特別の用意なくんばあ

るべからず左れば法律も自嚴格を要し或は獎勵を加へ或は禁斷を行ひ野生天然動物の如きまでに其意を注ぎたらんか吾人の見聞に因りても古人の益鳥保護には傳説を加味したり神仙の威光を藉る等の事なきに非ず兎に角猶太民族か四千年前に此法令を有し夫れが假に數歩を譲りてモーセ五書編輯の時代の民俗とするも尙ほ紀元前八百年とせば二千七百餘年となり紀元前四百年とするも二千三百餘年前にあり古典の文字通りに解すれば直接には捕殺食用の禁止となり間接には或鳥類の保護法なる法律を有す若し其精確適切なる考證や科學的研究は自ら人あり吾が大儒碩學證考を煩さん又申命記には特種の鳥類の食用禁止と共に魚獸の食用にも同一の法律條項あり、牛、羊、山羊、牡鹿、羚羊、小鹿、鷹、鷹の如く反芻動物にて蹄の二分せるものを食ふべく反芻にして蹄二分せるも駱駝、兎を食する勿れ禁斷し山鼠も特に之を指示し豚は絶對に禁食となす魚類は鱗なきもの鱗なきものを食はしめず之れも鳥類に參酌せば不消化物もあり賞味に値ひせぬもある如く兎に角惡食異味を採取せしめざりしを考え難きにあらず就中牝鹿を食用に加へず母羊の乳汁にて仔羊を煮るべからずとせるは流石世界萬邦の優秀なる人類を拜跪せしめつゝ今日に及ぶ博愛を旨とせる一神を傳へし民族と云ふべく動物愛護の精神見へて所謂二十世紀に於ける文明の人士をして顔色なからしむる者か。稿者は十年を閱する病床にあり一步の自由もならぬ從て斯道の師友を有せず專斷臆測の誤謬は諒恕を祈る。



バン・ヒクヒナ類の新分類

理學士 黒田長禮

Hartert, E. : — On Some Railidae. Nov. Zool., Vol. XXIV, 1917, pp. 265—274.

著者は *Porphyrio* 屬中亞弗利加産のもの及びバレークチツク産のもの六種類を記し次にバン屬中の *Gallinula chloropus* 各亞種を次の如くに分ちたり。

1. *Gallinula chloropus chloropus* (L.)

翼長雄にては一七五——一八八耗、雌にては一六五——一七六耗。歐洲産。

2. *G. chloropus parvifrons* Blyth

G. ch. chloropus より小形にして翼長雄にては一五六——一七六(稀に一八二)、雌にては一五五——一六五耗。

印度、セイロン、支那全部、琉球、日本に分布し恐らく西藏のものも此亞種に屬するならん。

3. *G. chloropus orientalis* Horsf.

上雨覆は帶蒼石板色にて橄欖褐色の羽縁を缺如す。翼一四五——一六七耗。

ジャバ、スマトラ、馬來半島、セレベス(稀)等に分布す。比

律賓のものは大部分此亞種なるも *G. ch. orientalis* ㄝ *G. ch. parvifrons* ㄝ の中間のもの又は *G. ch. guami* に似たるものもあり(抄録者曰く臺灣産は恐らく第三の亞種ならん)

4. *G. chloropus guami*, susp. nov.

翼長(雌雄)一六五——一七五耗。

マリアナ群島のグアムに産す。

5. *G. chloropus brachyptera* (Brehm)

翼長凡そ一五〇——一七五耗。

亞弗利加の熱帯地方よりケープコロニー、St. Thomé、及び An-nobon, Seychelle 諸島、Prasin Ile Aried に分布す。

6. *G. chloropus pyrrhorhoa* Newt.

Mauritius, Réunion 及びマダガスカルに産す。

7. *G. chloropus sandvicensis* Streets

ハワイ群島に産す。

8. *G. chloropus galacta* (Lieht.)

ブラジルの南部、パラグウェー、ウルグエー、アルセンチナの北方、ボリビアの東に産す。

9. *G. chloropus pauxilla* Bangs

西部コロンビア、恐らく又西イタワドルのなほ南にも達すべし。

10. *G. chloropus cacinnaeus* Bangs

翼長一六九——一七八耗。

北米の北部の温帯地方、東部、及び中央部に分布し南はニカラグワ稀れにはコスタリカに達す。大アンチレス、北部小アンチレス、バハマにも稀に且つ地方的に之れを見、カリフニア、ケープサンラカスにては分離的の群棲を見る。

G. ch. cerceris Bangs は南ルカス、小アンチレスに産するものなるが多分第十のシノニムと見るべきならん。

11. *G. chloropus garmani* Allen

南米秘露のチチカカ湖、西部ボリビア及び智利に産す。

12. *G. frontata* Wallace

此種は赤脚にて嘴大なることによりて他のものより直ちに分たるるも *G. chloropus* の亞種と見るべきならん。

セレンクス(稀) *B. erit.*, *Coram.*, *Andonina*, *ウギニア*, *Sumbat*, *Philippis* 及びボルネオ(例外として偶然來ることあり)に之れを見る。次にヒクヒナ類を左の四亞種に分けたり。

1. *Porzana fusca erythrothorax* (L. n. s.)

額より眼の凡そ中央部迄或は頭頂の大部分は褐赤色、上面は暗橄欖褐色にて新鮮の羽衣にては緋色を帶ぶ。下面及び額は他の近似種に比し一般に淡色にて淡褐赤色なり。大形にて翼長一〇五——一二〇耗(三十五羽の調査)。

日本にては北海道より九州、屋久島に分布し、東部支那にては南は雲南よりシヤムに達す。

2. *P. fusca phaeopyga* Stejn.

P. f. erythrothorax に似たるも嘴は厚く且つ長く上胸の褐赤色は恐らく稍一層飽和せる感あり。スタインゲルの記載とは全く一致せず。

琉球諸島にありて八重山、沖縄、奄美大島に産す。

3. *P. fusca bakeri*, subsp. nov.

翼長九七——一〇八(一二〇稀れ)なるも時として *P. f. erythrothorax* と同長のものあり下面の褐赤色は濃色にて暗色なり。頭頂は一般に全部褐赤色なり。著者は *P. f. bakeri* 及び *P. f. fusca* 。

の差を多くの卵の大きさによりて前者の方大なるを述べたり。

北部印度にては Kashmir より Cachar, 上部アッサム、及び緬甸に達し南はカルカッタに及ぶ。

4. *P. fusca fusca* (L.)

P. f. laketi と同色なるも體は餘程小形なり。翼長

八九—九九耗。

比律賓群島、セレベス、

ジャバ、クリスマス島、

ボルネオ、スマトラ、及

び馬來半島に産す。此外

セイロン、南印度(稀)、

Kanara, Travancore, Wy-

hind 及び Mysore にも分

布す。(抄録者曰く臺灣産

のものは本亞種に入るならんか。)

アカツクシガモの渡り

獸醫學士 内田清之助



第七圖

松平氏飼養場於けるアカツクシガモ

今年は例年より寒氣が強いせいか鴨の渡りが一般にいくらか多かつた様子であるが之ニ關係があるか否かは分らぬがアカツクシガモが奇らしくも内地で屢捕獲された。茲に掲げた寫眞

は松平頼孝氏が一月十六

日鳥商から得られた雄鳥

で此鳥は千葉縣下で竊繩

で捕獲し同邸に十數日間

飼養後遂に斃死したもの

である。又羽田の黒田家

の鴨場には昨冬十一月下

旬頃から一羽のアカツク

シガモ雌が渡來し(動物

學雜誌二月號參照)一月

十七日に一度捕獲された

が翌日寫眞撮影の際取逃

がし目下再び溜池に顯れて居る(第八圖參照)。尙一例は動物學雜

誌一月號の齊藤宗雄氏の記事に依れば山形縣庄内地方でも昨年

十一月初旬に此種が捕獲されてをる。斯く諸方で度々採集され

て居る所で見ると今年は大分内地へ渡つて來たものらしく思は

れる因に従来も内地で採れた事が絶無ではない現に松平家の標

本室にも下總古賀

産(一九二二年一

月一日)の雌鳥が

保存されてある。

アメリカ

ヒドリゴ

ミコアイ

サ

理學士

黒田長禮

本年一月十六日

府下羽田鴨場でア

メリカヒドリ

Mareca americana

(Gm.)の雄の稍若

いものが捕獲せら

れ今余の飼養中で

ある(第九圖参照)。



圖 八 第

影撮日一十二月一年本(右稍中央)モガシクツカアるけ於に場鴨田羽

此鴨は云ふ迄もなく北米の鳥類であつて我

國へは偶然渡來するに過ぎない誠に珍らしい種類である。

余が動物學雜誌第卅

一卷一四五頁に於て

始めてアメリカヒド

リの名で記述したが

これが羽田で初めて

捕獲せられたのだこ

思てゐたが其の餘程

以前にも矢張雄が一

羽(秋の十月)記憶

する。捕獲せられて

ゐたことに心付い

た。勿論その初めの

もの時は單に變り

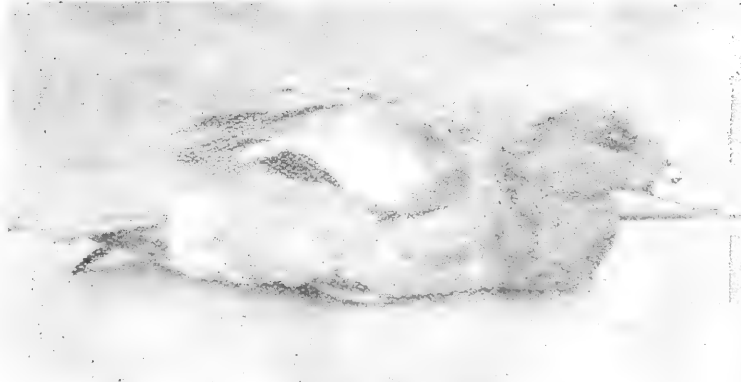
物だこのみ考へてい

たが今から考へるこ

此種に相違ない様に

思はれる。夫故今回

のものは第三回目に同鴨場で獲られたのである。そして第二回



リ ド ヒ カ リ メ ア 圖 九 第

目のものと今回のものとの間は更に十年間を経て居る此點のみでも稀れであることが知られよう。昨冬から今春は氣候の爲めか鴨類の渡來數が多かつた故従つて數年前から非常に少くなつた普通のヒドリガモも此獵期には比較的數が増したその群に混じて此種が渡來したことは殆ど疑ひないことである。此種は此鴨場以外でも嘗て一二羽獲られたこと云ふことである。

寒氣が烈しく鴨の渡來數の多い爲めか内田氏の報告にもある如くアカツクシガモさへ數羽が内地で捕獲されて居るが羽田鴨場にも上記二種の外始めてミコアイサ (*Mergus albellus* L.) の雌(或は幼鳥か)一羽が本年一月廿五日に渡來したのを見た。其他ヲカヨシガモも三十四年目の本年二月六日に雌幼鳥一羽が捕獲せられた。羽田鴨場で此獵期間に不思議に思はれるのは海鴨類が一羽しか現はれないことである三年前には十數羽も來たことがあるし少くも例年數羽位は必ず見るのに今度は一羽のみ見ないことは何故だか想像が付かない。

コホリガモの最南分布例

羽山徳太郎

本種が本州北部にて獲られし事は先に黒田理學士に依り報ぜ

られたりし所なるが(本誌第四號四四頁)昨年十二月九日下總手賀沼(北緯三五度五一分)に於て本種の雄鳥夏羽のもの一羽捕獲せられたり。こは恐らく從來に於ける最南の分布例たるべし。

ハシブトイカルに就て

森 爲三

本年一月九日京城市場に赴きしにシメを多數繩にて括れる中にイカル類一羽あるを發見し調査したるに朝鮮にて未だ採集せられたる報告なき左の學名を有する大陸型のものなるを知れり因てその記載をなし報告す。

Eophona personatus mugitrostris Hartert

採集地 京城市場

年月日 大正七年一月九日

記載 日本鳥類圖説下卷五〇二頁四六二イカルの記載と同様なれども(一)翼に於て(1)初列風切は外側の一枚は全部黒色其の次の四枚は中央に於て内外縁共白斑あり其の次の三枚は外縁のみ中央に小白斑あり最後の一枚は全部黒色なり(2)次列風切は全部銅鐵樣光澤を帯ぶる黒色(3)三列風切は脊と同色(4)肩羽、小翼羽、小雨覆、中雨覆は黒色(5)大雨覆の内側の四枚は白色基部灰黒色

が、れり其の外側の一枚は黒色にして其の先に小白斑あり夫れ

より外側は鋼鐵色光澤を帯びたる黒色なり(二)脚は淡紅褐色なる點に於て異なる。翼長三寸七分五厘、尾長二寸八分五厘、中

央尾羽二寸四分、跗蹠七分、嘴峰七分五厘。

本亞種の分布は東部西比利亞ミ支那の大部分なり。

嘴の太きこゝによりて今回新に上記表題の如き和名を附すこゝにせり。

美濃にて獲られしトキに就て

柳原 要 二

本年一月十五日當地の小學校卒業生の一人は美濃國武儀郡神淵在にて採集されし朱鷺(雄)一羽を購入し寄附されたり。餘りに珍らしき故左に測定其他を附し報告す。

全長二尺三寸八分。翼長一尺二寸三分。擴長四尺七寸。尾長四尺九分。嘴峰六寸七分五厘。跗蹠二寸六分。

嘴は黒色にて上嘴の先端には小部分帶赤黒色。脚は褐色にて所に黒色を帶ぶ。趾も同様にて趾爪は淡褐色に黒色を帶ぶ。虹彩は黄赤色。嘴の基部の裸出部は赤橙黄色なり。尾羽は十二枚あり。胃中には馬姪一匹、ドゼウ一尾、タニシの小形のもの一

個、其他貝殻の細片多數を含有せり。

東京市内にて見たる鳥類

榎山池太郎

1、カイツブリ 冬期三宅坂附近の御涼内、不忍池等には普通に見るも數あまり多からず。隅田川竹谷の渡附近にて一羽見しこゝあり、赤坂區内にて繁殖せしこゝある山

2、ウ

高空を飛過すものは間々見受るも一羽若くは二三のものなり、月島沖にて游泳せるものを見しこゝあり、恐らく芝濱離宮内にて繁殖するものあるべし。

3、コサギ

櫻田門附近にて見るもあまり多からず嘗て一回京橋區築地に於て一羽見しこゝあり。

4、ゴキサギ

極めて普通、市内各所に於て繁殖す。

5、ミノゴキ

夏期京橋築地に於て幼羽のもの二羽を捕獲したるこゝあり。

6、サンカノゴキ

京橋築地に一回飛來したるこゝあり。

7、コガモ 冬期三宅坂附近の御塚内、不忍池等に

普通に見る所のものなり、其他にも飛來せる個所も尠なからざるべし。

8、マガモ 前種と同じ、されど数は前種程多からず。

9、カルガモ 同上、三種の内最多数のものなり。

10、オホヒシクヒ(?) 冬期三宅坂附近の御塚内に見るこゝあり、高空を飛過するものも見受けられず、本種なるや他種なるや明かならず。

11、トビ 四時極めて普通、市内各所に於て繁殖す。

12、キジ 小石川植物園内にて見しこゝあり。

13、ムナグロ(?) 芝濱離宮附近の海岸に於て一羽見しこゝあり、夜間鳴聲を聞くこゝあり。

14、ユリカモメ 秋期より冬期に掛け月島附近、隅田川

其他の河川に見る所のものにして群をなし居るこゝ多し。

15、ウミネコ 前種に混じて飛來するこゝあり。

16、キジバト 冬期は普通に見受けられ、一羽若くは

雌雄のものを見るこゝ多し、本種は恐らく市内に於て繁殖するこゝあらん。

17、アヲバト(?) 去年八月始めて本種を見たり、早朝未

明に群飛し渡海し行きたり、(築地海岸にて)

18、ホト、ギス 四月下旬より五月中旬に鳴聲を聞くこゝあり甚だ稀(京橋築地)

19、カハセミ 毎夏京橋築地に於ては一番のもの飛來す、本種は市内に於て繁殖するこゝあるべし?。

20、ミヅク 稀に見るこゝあり(京橋築地)

21、フクロウ 嘗て一回捕獲したり(同所)

22、キセキレイ 河邊、池畔等に見る、珍らしからず。

23、セグロセキレイ 前種と同じきも數前種に比し尠し。

24、ハクセキレイ 前種と同じ、稀に見る。

25、ビンズイ 且て一回京橋築地に飛來したり。

26、ヒヨドリ 秋期より初春迄極めて普通に見る所のものにして數も尠からず。

27、キビタキ 春期(四五月)稀に見る(京橋築地)

28、ツグミ 秋期は群來するところあるも冬期は一二羽のものを見るを常とす(京橋築地)

羽のものを見るを常とす(京橋築地)

29、アカハラ 稀に見るこゝあり(京橋築地)

30、シロハラ(?) 築地海岸なる海軍造兵廠外の石垣附近に居たるを見しこゝあり遠かりし爲本種なるやクログミなるや詳かならざれど本種とせず方確かなるべし。

31、ジャウビタキ 冬期は珍しからず、数はあまり多からず。

同上、されど前種より一層少きもの、如し。

32、コムシクヒ 「渡り」の際、旬日止るものを見る、本種の方後種に比し二旬程早く來り、数はあまり多からず(京橋築地)

33、メボソ 前種に後れ來る数は前種より多し(京橋築地)

34、ウグヒス 晩秋より初春迄珍しからず。

35、ミソサバイ 初冬より初春迄、見るこゝあるも數尠し。

37、ツバメ 四月より十月に至る間、極めて普通、市内各所にて繁殖す。

市内各所にて繁殖す。

38、コシアカツバメ 三宅坂附近には極めて多し、麴町區内にて繁殖す、他にも繁殖地あらん乎

39、ヒレンジャク 春期「渡り」の際多數のものを群來し旬日にして去る。

40、モズ 秋期、冬期、極めて普通、されど数はあまり多からず。

41、シバウカラ 四時、極めて普通、市内各所に於て繁殖す。

42、ヤマガラ 秋期前種の群に雜り、又は單獨若くは雌雄のものを見るこゝあり(京橋築地)

43、ヒガラ 秋期シバウカラと混群し或は本種のみの群を見るこゝあり(同所)

44、エナガ 同上(同所)

45、ハシブトガラス 極めて普通、市内各所に於て繁殖す。

46、ハシボソガラス 同上、前種に比し少きもの、如し

47、ムクドリ 四時極めて普通のものなり夏期は殊に多し、市内各所に於て繁殖す。

48、コムクドリ 夏期見ることあり(京橋築地)恐らく市内にて繁殖することあるべし。

49、メジロ 秋期より初春に見る、渡來期には小群のものを見るも以後は概して一二羽若くは數羽のものを見る。

50、シメ 秋期及冬期、甚だ稀なり(京橋築地)

51、イカル 嘗て冬期(一月?)京橋築地にて一羽を獲たり。

52、ウツ 嘗て秋期一羽を捕獲したり(京橋築地)
53、コカハラヒワ 下町(主として京橋、日本橋區内)にて

は稀に見るも山の手方面にては差程珍らしきものにはあらざるべし、谷中墓

地内にて營巢しあるを見しことあり、(六年六月)

54、スズメ 四時普通、繁殖數夥し。

55、ホシジロ 嘗て數回飛來したり(京橋築地)

56、アマガシ 冬期は普通に見れども數は甚だ多くは一羽のものを見る(京橋築地)

57、ハシビロガモ 三宅坂附近の壕中に見る多からず(鴨

類は一般に夏季は全く見ることを得ずカルガモの如きものにても然り)、

58、ヒドリガモ 三宅坂附近の壕中に見る、同所に於ては其數カルガモに次ぐ、

59、ハイタカ 赤坂區内

60、サバ 嘗て上野動物園内にて同園内に於て捕

獲せられたり云ふものを見しことあり。

61、コアジサシ 日比谷附近に飛來せることある由(黒田理學士に依る)

62、アカセウビン 嘗て赤坂區内に暴風の折飛來せることありし由

63、アヲバヅク 赤坂區内にては繁殖するものある由

64、アカゲラ 赤坂區内にて二羽來りし由。

65、ヒバリ 昨六年十月一日暴風の時疑なき本種一羽低空を飛過せるを見たり、或は籠鳥の逸したるかも知れず(京橋築地)

66、トラツグミ 且て一回見たることあり(京橋築地) 赤坂區内に於ても一回來りし由。

67、イソヒヨドリ 昨六年九月廿日日本橋區内に於て本種

雄鳥一羽を見たり、籠鳥の逸せるもの

こは想はれざりき。

68、オホヨシキリ 且て一回飛來せることありし由(赤坂

區内)

69、イカル 冬間稀に飛來するものあり、曾て一羽

を捕獲せり(京橋築地)

附記 以上の他に千鳥の類鴨の類類白の類等あれき種名確實な

らざれば茲には除くこころせり、赤坂區内に於ける觀察は凡て

黒田理學士の御教示に依るものなり同氏の好意を厚く鳴謝

す。

琉球産鳥類の方言

尙景

和名 琉球方言

ワシ 類 ワシヌトキ(キはリの轉化せ

しもの)

タカ 類 タカ

ハヤブサ 類 ハヤブサ

リウキウコノハヅク マヤーヂクク又はホーホード

キ(マヤーは猫の意、後名は
多分鳴聲より取りしものなら

ん)

リウキウハシブトガラス ガラシ(カラスより轉じたる

もの)

スズメ クラー小(小こは可憐なるも

のこの意にて鳥以外の種々の

ものにも附す)

リウキウツバメ マツタラー小(多分古文の糞

まりちらし等より源を發せし

こ云ふ)

リウキウメジロ ソーミナー小(意味不明)

ウグイス ウグイシ

リウキウサンクワウテウ ナガズーガンター又はミーヂ

ーフヒフヒ(前名は長尾にて

冠毛ある鳥の意、後名は鳴聲

より取りしものならん)

リウキウヒヨドリ ヒューシ(ひよすより轉化せし

もの)

ア カ ハ ラ モウトキ(意味不明)

イ ソ ヒ ヨ ヒューシクナー又はクン(クナ

ーの意不明)

オ キ ナ ハ ガ ラ ナークグラ(宮古の雀この

意)

ア カ ヒ ゲ アコウ

キ セ キ レ イ ブーミタミラー(尾を上下

に動かす爲めに云ふ)

カ ハ セ ミ カンヂユヤー(意味不明)

リウキウアカセウビン クカル(鳴聲がクカルル

ミ聞ゆるを以て名づく)

キ ツ ツ キ 類 キータタチャー(木を啄くこ

の意)

ノジコ(カラアヲジ?) ヌシユク

リウキウサンシヨクヒ マーチヌシンク(松の芽を

喰ふこの意)

オホルリ(ルリビタキ?) カミヌトキ(神の鳥ミ云ふ意

にて此鳥を捕獲するミ神罰あ

りミ云ふ)

ウヅラ(インドミフウヅラ?) ウヂラ

キ ジ バ ト ヤマボート

リウキウカラスバト ガラシボート又はウシボート

(前名は烏鳩の意にて後名は

牛の聲に似たるによる)

リウキウアヲバト オウボート

リウキウガモカ ム

ヲ シ ド リ ウシヌトキ

サ 、 ゴ キ カーサージ(河の鷺この意)

シヤウジヤウサギ アカサージ(赤き鷺この意)

コ サ ギ サージ小

ヘ ラ サ ギ イビラーサージ(イビラこは

杓子の意なりミ云ふ)

クロツラヘラサギ クロイビラサージ

ト キ コーナー(鳴聲より取りたり

ミ云ふ)

ク ロ ト キ クロコーナー

バ ク ロ ト キ アカグチゲミル(赤口のクヒ

ナこの意)

リウキウオホクヒナ クミル（クヒナより轉化せしもの）

リウキウヒクヒナ アカグミラー小

リウキウヨシゴキ アカニシ又はヤマトドキ（前名は意味不明、ヤマトド井は内地より來りし誤認せしも

のならん）

カ モ 類 カムメ

ヤ マ シ ギ ヤマシュージャー

タ シ ギ シージャー

ア ホ ウ ド リ バカドキ

下總印旛郡地方の鳥類方言

齋藤源三郎

和名

方言

カイツブリ

ムグツチヨ

ゴキサギ

ヨガラス、バツコ

ノ ス リ

マクソツタカ

ク キ ナ

キニウナ

ヤマシギ ボテシギ

セグロセキレイ ムギマキ

ツグミ チヨウマン

アカハラ クソツボロク

ウグヒス チャツチャ

ミソサザイ ミソツチヨ

ツバメ ツバクロ

モズ モンズ

スズメ ノキバ

ヒタキ ヒツカタ

キツ、キ類 バンジヨドリ

トビ トンビ

シメ マメマキ

埼玉縣下に渡來せし鶴群の真相

榎山徳太郎

日本鳥學會第八回總會の席上、内田清之助氏の談に、大正六年八月、埼玉縣比企郡北吉見村地内に、鶴群渡來せりとのこゝにありしが、去十一月二十五日、北吉見村に趣き、同村在住の原

巖比より、親しく聞き得たる所の事項を左に記さんに、

渡來せる地は、比企郡北吉見村地内のみならずして荒川の對岸なる北足立郡内へかけて往來し居りたるものにて、其初めは、八月十日頃、北吉見村一ツ木附近の荒地へ下りたる群を發見したるものにして、後には一ツ木より同村御代地及び對岸なる北足立郡多間宮村糖田、小谷村五反田附近より上流吹上村大青附近に至る荒川沿岸の地を去來せるを目撃せり。而して十月一日迄は、可なり多數のものを見受けたりしが、十月一日の出水以後は、全く群來なくして、稀に一二羽のものを見たりしが、同月十日頃にて、全く其影を絶ちたる由なり。

鶴なりと稱せる鳥は、高さ四尺餘ありて體色殆んど純白にして尾端に尾狀の黒色羽を有せず、脚黒黄色、嘴淡黄色の如く見受く、前三趾間の廣さは、河原に印せる足跡に依り、大人の片手の五指を攘けたるご稍々等しきを驗し得たりと。

一ツ木に於ける觀察に依れば、渡來せる初は、未明に非常に多く、晝間は尠くして、夕暮に到れば未明程にはあらざるも、稍々多數のものを見たるも、農夫の耕作開始後(九月中旬以後)に及びては、朝夕以外には殆んど見るを得ざるに到れり、恐らく該時外には、對岸北足立郡多間村地内、並に小谷村地内に居

りしものならんご。群の最多數七十三羽を數へし朝ありしも尙ほ以上より多き日もありたるもの如く、而して五羽乃至十羽は、毎朝にても見るを得たる由。

夜間の棲息は不明にして、毎朝西南の方面より、目測五六十米の高さを、一羽若くは亂群となりて飛來し、廻翔しつつ下降し、堤外なる柳樹及び其他の矮樹へ棲止し、四顧せし後泥地及び河原へ下るを常とせり。樹木に棲止せる時は、樹木を覆ひて之が爲め樹は全く白化せるが如く見えたり。渡來せし最初の頃は、三四十間の距離迄も近接し得たりしが、後附近の村民其他の見物人の群集(毎朝百人以上も來れりご)するに及びてよりは、六七十間にて飛去るも、遠距離には行かずして、荒川の對岸方面若くは上流の方面へ行きたり、夕暮には暫時中空を廻翔したる後、西南方に飛び去るを常とせり。

コサギ *Herodias garzetta* (L.) 同(地にてはシラサギと稱す)の混在せる事もありたるも、餘り多からず。

尙ほ同氏が小學校其他の標本、並に圖に依りて驗したる結果、ダイサギ *Herodias alba* (L.) ならんご想はれたりご。

以上は原氏の語られたるごにのみ依りたるものなるが、他の二三の村民によりて聞き及びたる事項の内右ご異りたる點の

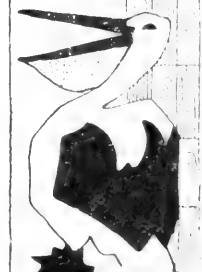
みを左に記せば、

(一)毎朝飛下れる後、日の出づるに及びて、序に東方に歩み行くを常とす。

(二)多数の中に、尾端に黒色なる尾状羽を有し且頭上少しく赤色をなせるものの混れることありて、此種は他のものの樹上に一時棲れる時も、獨り直接に地に下りたり、而して該種は他のものより、體幾分が大にして、頸はやや短きものの加し、甚だ稀に見受くる所のものなりとす。

上記の(二)に依れば、或は眞正の鶴類も來れるものかとも想はるれど、眞正の鶴類にしては、渡來期の早きに過ぐる感あれば、茲には只聞き得たる事實のみを記し置くに止む。而して埼玉縣下に渡來せる鶴群なるものは、グイサギなることは疑ふべからざる所にして、今回の去期の獵期前なりし爲め、或は次年度に再び渡來することもあるべければ、其折は實物に就きて委しく調査の上、更に報告することとし、茲には只目撃者の談話を掲ぐるに止む。

質疑應答



質疑者

岐阜縣 柳原 要 二

問一 蒼鷺の雌雄の鑑別法並びに他の鷺類の雌雄の區別點、御教示被下度候。

答 アササギの雌雄の區別は雌は後頭及び前頸の下部にある長

き飾羽は雄よりも短く體は小形にて且つ體色も暗色に富む。

以上の外には區別すべき點なし従て生殖羽の雌雄を比較するにあらざれば鑑別困難なり。他の鷺類は本邦産の場合にて

雌雄の區別は生殖羽のものにありては外見上、セグロゴキ、

ミゾゴキ、及びサ、ゴキにありては殆ど區別なく、ムラサキ

サギにては雌は雄よりも暗色にて且つ小形なり、アマサギに

ては雄よりも飾羽短く體も小形なり、其他のグイサギ、チウ

サギ、コサギ、アカバシラサギ、サンカノゴキ等は單に雄よ

りも小形なるのみにて又ヨシゴキ、リウキウヨシゴキ、及び

オホヨシゴキにありては雌雄の差先づ著し特に後者にありて

然り。す。詳細なる區別の記載は内田氏著「日本鳥類圖説上卷」一〇六——一〇八頁参照ありたし。

質疑者

朝鮮晋州 馬庭 軍市

問二 雁鴨は春は暖地より寒地に向ひ秋は寒地より暖地に来る(「世界の雁ミ鴫」一〇六ページ)右は何れが常棲地にして何れが産卵地なりや。又如何なる程度の寒暖(寒暖計の示度)を適度とするものなりや。尙一ヶ年中如何なる経緯度を往復するものなりや。(一年中十二ヶ月に分け経緯度)(南北半球に於ける差異はあるものなりや)。

答 本號講話欄に詳細に記したる故之れを参照せられたし。一ヶ年中を十二ヶ月に分け経緯度によりて各種の往復地を示すここに就ては未だ充分なる材料を有せず。

問三 海苔養場の海苔を食ふ鳥類の屬及種名。

答 海苔養場の海苔を食ふ鳥類に就ては未だ充分に調査したるこゝなきも左の種類の鴨類は恐らく疑ひなく海苔を好み食ふならん。

Marca penelope (L.) ヒドリガモ

Eumetta falcata (Georgi) ヨシガモ

右二種の外ツクシガモ (*Tadorna cornuta* (S. G. Gm.)) も食ふ

こゝあり得べし。其他海鴨亞科に屬するハジロ類は恐らく大部分のものは好み食ふべし。雁類にも求食するものあるべし。こゝ思はるれど明確に記すこゝを得ず。尙ほ以上の外の水鳥類にも多少食ふ種類あるべし。因に日向國にてはヒドリガモの方言をノリクラヒミ云ふ由。

問四 海苔養場の海苔を最も好む雁鴨の種類及習性。

答 海苔を好み食ふ雁鴨の種類は已に記載せしものの外現今にては述ぶるを得ず。元來雁鴨類は海藻を好食する習性あるに、より大部分の種類は多少なりとも海苔を食ふこゝあるべし。

前記ヒドリガモ及びヨシガモにありては海藻類を特に好み野生に於ける彼等の糞は春季は主として綠色を呈す。此點のみにても明なるべし。即ち此種類は餘程雁類に近き食物(植物性のもの)を好食す。

問五 雁鴨が海苔を食するは如何なる機能に出づるものなりや。

答 雁鴨類が海苔を食ふは好みて食するもの多かるべし。

問六 雁鴨類一羽が捕食する量(一日又は一渡來期の量)

答 雁鴨類一羽が食する量に就ては未だ充分の調査をなしたるこゝなし。元來彼等は初秋より初夏即ち生殖前迄は最も能く食物を食ふものにして此長時期にありては食ふべきものさへ

あらば殆ど食道全部は充滿せしむる程に食ふを常とす。而して生殖期の前に至り彼等の體は充分肥大するに至る。故に此以後には營巢、産卵の方に向ひ食物の方には餘り重きを置かざるに至り生殖終りたるときは身體著しく衰へ體量も亦生殖前の二分の一乃至それ以上に減じ（特に雌に於て然り）。それより程なく夏季の羽衣脱更を始む。此脱更を終り更に秋に向ふに従て再び多くの食量を欲するに至る。一日又は一渡來期の量を調査したるころなきも夏季の食量は冬季のものに比し半減以上に少きことを知るべし。

問七 冬季捕獲鳥類（死のまゝ）荷造並に遠地に送附の處理方法及夏季の同上。

答 冬季捕獲鳥類を死のまゝ荷造並に遠地に發送せんとするには十一月中旬以後より二月中旬頃迄は朝鮮より内地迄位ならば別段特別の方法を取らずとも差支へなきも十月初め又は二月下旬以後にては先づ頭部の腐敗せざる様注意を要す。此方法に就ては嘴を出来るだけ開き鹽を充分に入れ下腹を縦斷して内臓全部を抜き取り（此時標本材料なれば雌雄を檢すべし）鹽を充分につめ而して頭部を生菜にて包み鳥體の脇部にも生菜を入れ而して日本紙又は新聞紙にて鳥體全部を包み木製の

箱（ミカン箱等紙箱は不可）に入れて送附すべし。食用品なれば頭部腐敗するも差支へなきも標本用としては頭部腐敗するときは頭羽全部脱落して完全の標本ならず。次に夏季に同様送附するときは一層腐敗せざる様充分なる注意を要す。此場合には冬季と同様にては危檢多き故頭に濃厚なる食鹽注射を行ふべしその他は冬の場合と同様にて可なるべきも遠地に送るには尙ほ腐敗の危険あり故に頭及び鳥體に適度の昇水水を注射せば恐らく腐敗せざるべし但し此場合餘り濃厚の液を注射するときは各部固結して剥製さなし難し（特に頭にありて然り）故にその手加減を要す。若し數個の鳥類を同一箱に入れて送るときは最も注意を要し各個を生菜にて包み之れを各紙にて全部を巻き而して箱内にて鳥體の直接に接觸せざる様にすべし。然れども箱内に生菜の多すぎるときは夏季は之れが腐敗をなすことあるべし。若し標本用の場合には鳥足に糸にて附箋を附すべし（附箋は西洋紙に限り日本紙を用ふべからず）その附箋には雌雄（不明のときは記さず）、採集地（出來得るだけ精細なるを要す）及び採集年月日を記すべし。

問八 剥製上の注意事項及參考書名。

答 鳥類剥製上の注意としては左の數ヶ條を採用すべし。

1. 標本をなす鳥類は成るべく完全に且つ新鮮なるものを選び、(但し珍鳥、稀鳥なる場合には多少の不完全あるも捨てずして剥製をなすべし)。

2. 鳥脚には常に必ず採集地、年月日及び雌雄を附箋に記し結び置くこと(採集地及び年月不明のときは貴重な標本もその價值殆どなし)。

3. 乾燥せざる生の鳥なりし場合には附箋に虹彩の色、嘴及び脚趾並びに爪の色を附記すべし。若し上記の外裸出部(顔

其他)にある場合にもその部分の色を記すべし。

4. 生の鳥類なれば全長(嘴端より尾端迄の最大長を測る、但し無理に引延さざること)及び兩翼間の長さ(兩翼を開き翼端と翼端との長さを測る)を測定(可るべくミリメートルを用ふること)し附箋に記すべし。其他の部分の測定は乾標本となりたる後にても大差なき故若し出來得ざる場合には除くも不可なし。

5. 生の鳥なればその鳥體の重量を測り附箋に記すべし。

6. 鳥類の食物を檢しその何物なるかを記すべし。

右の内特に1. 2. 及び3. の三ヶ條は必ず採用すること。

鳥類剥製に關する參考書は左の如きものあり。

小野田伊久馬著——鳥類剥製法

Hasluek, P. N. : Taxidermy ("Work" Handbook series) 1912.

Coule, H. K. : How to Skin a Bird. "History of Lake County",

p. 370, 1912.

以上の内始めの二著は本剥製(飾標本)製作に參考して共に良書なり。第三は假剥製(學術用標本)製作に最も良し。鳥類研究

に用ふる標本としては是非第三の方法によるべきものとす。

問九 雜誌「太陽」の表紙圖案は鶴の三本足なり其由來の詳細御

垂教を願ふ。

答 「太陽」の表紙の鳥(鶴にあらず)の三本足の圖案の由來に就

ては左の如き傳説より來りしものなるべし抄録せば、

〔延喜式二十一〕 祥 瑞

青鳥南海、赤鳥、三足鳥日之精也、右上端○中畧、白鳥

太陽之精也、右中端○中畧

〔扶桑略記天武〕 十一年太宰府貢三足鳥

〔芭蕉之集〕 鳥之賦

上汝がこきは心貪慾にして、かたちを墨に染たる人に有て

賣僧といふ釋氏も是をにくみ、俗士も甚うこむ、嗚呼汝よ

くつゝしめ。翼が矢先にかゝつて、三足の金鳥に罪せられ

んこを。

〔鶉衣拾遺上〕 鶉箴

上おふけなくも、日輪に三足のからすもおはしませば、さの

みさがなき物もおもひくだされず畧下

以上の如くにて先づ太陽内に三足鳥ありと云ふ迷信より來れるものと見るべきなるべし。

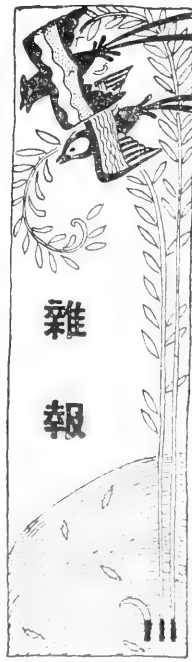
質疑者

鹿兒島 荒 木 彦 助

問十 鹿兒島縣下の種子島沿岸にては冬期の暴風後に Albatros

(信天翁鳥)(翼は一間内外なる)の屍體を往々見出し候彼の地方に於ては「大の鳥」を申し候て「ダーノトリ」を轉訛致し候本邦沿岸には他所にも回遊致し候や。薩摩郡川内地方にては高麗鶯を稱し候者、鶯巢有雛致し候同地方にては之を「駒鳥」を申し居候由本邦他地方も本鳥の鶯巢見られ候や。

答 信天翁は本邦沿岸にては長崎、東京灣及び北海道函館邊迄も回遊することあり。次に高麗鶯の鶯巢に關しては其鳥類が實際 Oriolus indicus なるや若し又は駒鳥とせば全く別種にして標本なり又は完全なる記載なりを見ざる内は決し難し従て鶯巢の範圍も答へ難し。(以上十件黒田長禮解答)



□本會第九回總會 四月二十六日午後五時より神田淡路町多賀羅亭に於て春期總會を開催せり 詳細は次號に掲載すべし

□鶉千鳥類圖說の發刊 黒田長禮氏著同書は曩きに本會臨時刊行物として出版の豫定の所其後内容變更の爲め紙數増大し意外の大部となれるを以て蒙華房書店より單行本として出版する事となれり 同書は本會會員に限り定價の一割五分引を以て購讀せらるるを以て御入用の方は本會事務所宛申込まれたし但し定價は確定の上次號に掲載の筈 内容の詳細は本誌廣告欄を見られたし

□鳥類の渡り及蕃殖期 の出版は非常に遅延せしも漸く出來せるを以て本會甲種會員全部及乙種會員中講讀申込の諸君には既に配本を了せり 尙乙種會員中講讀希望の諸君は本誌廣告欄記載の條件により至急申込を乞ふ

□『鳥』七號原稿切 期日九月末日限り

□編輯に關する一切の用件は赤阪區福吉町黒田長禮氏宛の事

□其他會務に關する一切の件は理科大學動物學教室内本會宛

□入會者

鹿兒島市山下町一八八

東京市本郷區駒込四片町十

東京市小石川區原町三ノ六

東京府世田ヶ谷三宿一一一

山口縣阿武郡佐々並村二五六

臺灣總督府國語學校

大阪府東區南本町一丁目オサ商行内

東京府中澁谷字田川九四一南部初方

神奈川縣小田原中學校

熊本縣飽託郡大江村九品寺七

朝鮮京城西大門町二丁目四六

朝鮮京城龍山漢江通十一

□會員轉居

北海道札幌博物館

朝鮮慶尙南道廳第一水産課

東京市麻布區本村町一一〇番地

荒木彦助

松永安衛

林保吉

神谷直秀

兼常彌富

堀川安市

酒井彌之助

大澤保

伊藤和貴

竹野家立

黒田保吉

都田甚三郎

岡田信利

馬庭軍市

戸澤富壽

沖繩縣首里區當藏町一ノ一五

東京府上澁谷一四一

千葉縣海上郡高神村高神小學校

和歌山縣立海草中學校

廣島縣蘆品郡立實科高等女學校

山口縣立德基高等女學校

福岡市博多馬場新町六増崎恒衛方

□改姓

□會員死亡

香川縣大川郡譽水村

北海道札幌博物館

□臨時刊行物第七編『鮮滿鳥類一斑』正誤

頁行

32 十七

39 五

41 十二

67 十一

79 六

85 十

88 十三

89 十二

尙景

吉澤寛夫

齊藤源三郎

太田成和

佐藤龜一

小田常太郎

脇山三彌

菊輪養之助

樋矢正徹

村田庄次郎

正

繁殖羽

ことにより

ミヤマカケス

北陵

本年

老鳥

よき方

91 十八 降れを

93 十四 オホバン

附録11 五 コガセ

同 12 八 江源道

同 35 下ヨリ三 Synthliboramphus

同 35 下ヨリ八 右同

同 23 六 パコン

同 91 八 カラアチシロ

同 繪カムムリ 二分一貨物大

同 口シガモ

鳥五號中郭公の繁殖ニオホヨシキリとの關係正誤

頁 行 誤

六二 一七 解決スル上ニ必要ノ

六三 三 假親ナルハ

六三 三 二例ニ過キサリシヲ以テ

六三 三 二例ヲ知レルノミナリシ

六五 三十四 行チ更ヘズ

六五 四 郭公ノ親ガ

六五 一〇 一度ナリ

六五 一三 マダ俄カニ

六六 七 巢ヨリ卵チ

六六 一〇 以外ニ

六六 一二 特ニ

これヲ

オホバン

コガセ

江源道

右同

コバン

カラアチシ

三分一貨物大

正

解決スルハ郭公ノ繁殖研

究上ニ必要ノ

假親トシテ

二例ヲ知レルノミナリシ

チ以テ

行チ更ヘズ

郭公ノ親ガ

一度ナラズ

末ダ俄カニ

巢ヨリ一卵チ

以前ニ

爰ニハ

六七 一 抽出シ卵殻全面繪具チ

六七 表一八ノ六 七月一六日

六七 備考ノ二 他ノ巢チ

六八 同 三 モノアラザル

六八 一 今コレト

六八 表三ノ三

六八 表三ノ五

六八 表四ノ三

六八 表四ノ五

六八 一區

六八 三 椀ハ二回共ニ

六九 七 刺戟

六九 八 保タル

六九 九 小數

七〇 四一五 反對ニ如ヘ置クモ其巢

七一 一三 コトハナサズ

抽出シ其卵殻全面ニ繪具

チ

七月一八日

他ノ凡テノ巢ハ

モノニアラザル

今コレチ

一

一

二

三

一類

椀ハ一回ニシテ

刺戟

保タル

少數

行チ更ヘズ

反對ニ他卵チ加ヘ置クモ

コレガタメ親鳥ハ其巢

コトチナサズ

會員名簿

(大正七年三月現在)
○印ハ甲種會員

A

本郷區駒込曙町十三
臺灣南投廳埔里社
鹿兒島市山下町一八八

C

長崎縣東彼杵郡竹松小學校

E

和歌山縣伊都郡高野山四一八

F

福井縣立福井農學校內
東京府下澁谷一九二九

G

岐阜縣加茂郡東白川村

H

北海道札幌農科大學
千葉縣長生郡鶴枝村下永吉
鹿兒島市高等農林學校

東京市牛込區原町三ノ六○
臺灣總督府國語學校

I

東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町九〇二
小石川區雜司ヶ谷百
關東都督府中學校
神奈川縣立小田原中學校

K

赤坂區福吉町一
東京市上野公園動物園
臺灣總督府殖産局博物館
橫濱市太田町一ノ十
宮城縣栗原郡若柳新町五五
熊本縣立高等女學校
神田區五軒町一
麻布區飯倉町
本郷區龍岡町廿七
飛彈高山町
山口縣長府

○林保吉
堀川安市

○飯島魁
○飯塚啓

伊東育太郎
伊藤和貴

○黑田長禮

○黑川義太郎
菊池米太郎

○小林桂助
熊谷三郎

河上才次
米山米吉

北里柴三郎
近藤他喜

川口孫次郎
桂長太郎

臺南博物館

本郷區龍岡町二七近藤仙太郎方

朝鮮京城中學校

山口縣河武郡佐々並村二五六

大分縣速見郡八坂

東京府下世田ヶ谷三宿一一一

三重縣阿山郡上野町字西町

朝鮮京城西大門町二丁目

M

小石川區久堅町四四

熊本縣第一師範學校

朝鮮京城高等普通學校

理科大學動物學教室

金澤市中安藤町十二

京橋區明石町三一

本郷區駒込西片町一〇

朝鮮京城龍山漢江通一一

N

小石川區大塚坂下町四四

○風野鐵吉

岸喜鑑

小菅昌三

○兼常彌富

上泰治

神谷直秀

○菊輪養之助

黒田保吉

○松平頼孝

森川勉

森爲三

森田淳一

水野誠

○榎山徳太郎

松永安衛

都田甚三郎

○波江元吉

神田區裏猿樂町六

新宿角筈新町百四十四

秋田縣仙北郡花館村

福井縣立福井中學校

朝鮮大邱高等普通學校

○

小石川區小日向臺町一ノ四四

京都府木屋町島津製作所標本部

小石川區小日向臺町三ノ一〇七

北海道札幌區農科大學博物館

山口縣立德基女學校

淺草區小島町四十五

和歌山縣立海草中學校

朝鮮新義州守備隊

東京府中澁谷宇田川九四一南部初方

S

沖繩縣首里區當藏町一ノ一五

朝鮮京城博物館

臺灣總督府農事試驗場

長興鼎

永井晴吉

仁部富之助

中力一二

中野與右衛門

○丘淺次郎

小川弘太郎

○小野安堯

岡田信利

小田常太郎

○大久保忠春

太田成和

大揚四平

大澤保

○尙景

○下郡山誠一

素木得一

愛知縣東春日井郡坂下村大字内津五二

岡山縣兒島郡興除村大字會根

朝鮮平壤公立高等女學校

福島縣信夫郡鳥川村大字上鳥渡字茶中十二

廣島縣蘆品郡實科高等女學校

千葉縣海上郡高神小學校

大坂市東區南本町一丁目オサ商行

T

麻布區本村町

東京府下豐多摩郡澁橋町大字柏木四二一

橫濱市太田町一ノ十小林方

茨城縣多賀郡日立鐵山

長野縣長野市立商業學校博物學教室

麻布區本村町一一〇

臺灣南投廳埔里社街三三一

京橋區傳馬町二

朝鮮京城本町二丁目

小石川區西原町二ノ四〇

熊本縣飽託郡大江村九品寺七

白石 兼松

妹尾 惠喜太

萱原 三郎

關東 八

佐藤 龜一

齋藤 源三郎

酒井 彌之助

鷹司 信輔

寺尾 新

寺岡 直

田中 誠吉

高松 良

戶澤 富壽

鷹羽 貞將

田村 彥兵衛

樽元 龜太郎

田子 勝彌

竹野 家立

U

青山原宿百七十番地十二號

朝鮮慶尙南道廳第一部水産課

W

福岡市博多馬場新町六增崎恒衛方

福岡縣遠賀郡八幡町

Y

四谷大番町八

芝區白金臺町傳染病研究所官宅

府下目黒林業試驗場

東京府下澁谷一四一

長野縣松本市女子師範學校

小石川區大塚窪町八

岐阜縣稻葉郡南森村細畑百五十

東京府日暮里町七六一

南滿州大連市出雲町一八號

○内田 清之助

○馬庭 軍市

脇山 三彌

渡邊 登美次

○藪 篤麿

山田 信一郎

矢野 宗幹

吉澤 寬夫

矢澤 米三郎

○山内 繁雄

柳原 要二

吉田 雙之助

吉倉 汪聖

日本鳥學會規則

第一條 本會ハ日本鳥學會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ハ東京帝國大學理科大學動物學教室ニ置ク

第三條 本會ノ目的左ノ如シ

一鳥類ニ趣味ヲ有スルモノ、懇親ヲ計ルコト

一鳥類ニ關スル學術ノ進歩ヲ促スコト

一鳥類愛護ノ思想ヲ普及セシメ鳥類ノ保護増殖ヲ計ルコト

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ評議會ノ決議ヲ經テ隨時種々ノ事業ヲナス

一當分一年ニ二回雜誌『鳥』ヲ出版スルコト

一臨時刊行物ヲ出版スルコト

一毎年春秋二回會合シ鳥類ニ關スル講演談話ヲナシ同時ニ鳥類ニ關スル圖書標本其他ノ展覽會ヲ催ス

一鳥學的探檢ヲ舉行スルコト

本會々員ヲ分チテ甲種會員ト乙種會員ノ二トス

第五條

一甲種會員ハ會費トシテ一ケ年金貳圓四拾錢ヲ納ムルコト

一乙種會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓貳拾錢ヲ納ムルコト

第六條

甲種會員ニハ雜誌『鳥』、臨時刊行物及ビ動物學雜誌ニ

掲載セル鳥類ニ關スル論文ノ別刷ヲ配布ス

乙種會員ニハ雜誌『鳥』及ビ動物學雜誌ニ掲載セル鳥類

ニ關スル論文ノ別刷ヲ配布ス、臨時出版物ハ定價一圓

ヲ限り無代配布ス其他ハ定價ノ三割引ヲ以テ講讀スル

ヲ得

第七條

本會ニ入會セント欲スルモノハ住所氏名職業ヲ記載シ

本會ニ申込ムヘシ但甲種會員ノ入、退會ハ評議會ノ決議ニヨル

第八條

本會ニ會頭壹名幹事壹名ヲ置ク

本會評議會ハ會頭幹事及ビ會員ノ互撰ニヨル評議員若干名(甲種會員)ヲ以テ組織ス

東京理科大學動物學教室内

日本鳥學會

役員

會頭 理學博士 飯島 魁

幹事 理學博士 内田 清之助

評議員 理學博士 塚 飯 啓

理學博士 丘 淺次郎

理學博士 鷹 司 信 輔

波 江 元 吉

黑 田 長 禮

子 爵 松 平 賴 孝

投稿及質問規定

(一) 鳥類の習性、渡り、方言等に關し廣く各地方會員の投稿を歓迎す

(二) 既掲原稿は返戻せず、但し挿畫に使用せらるる寫眞及び圖畫は希望により返戻すべし

(三) 原稿は紙の表丈を使用し一行二十五字詰に認められたし、

假字は平假字を用る動物名及外國語は片假字とす

(四) 挿畫は寫眞以外のものは墨汁にて認められたし

(五) 原稿は東京赤坂區福吉町黒田長禮氏宛郵送せられたし

(六) 本會は鳥類に關する質疑に應答す、質問の事項は返信料封

入理科大學動物學教室内本會宛郵送せられたし

(七) 質問解答は一般讀者に有益なりと認むるものは本誌に掲載

するも其他は質疑者に直接解答するものとす

大正七年五月二十七日印刷

大正七年五月三十一日發行

定價金參拾五錢

禁轉載

編輯兼
發行者
木下憲

東京市日本橋區兜町二番地
印刷人
神谷岩次郎

東京市日本橋區兜町二番地
印刷所
東京印刷株式會社

發行所

東京理科大學
動物學教室内
日本鳥學會

振替口座東京六五九九番

發賣所

東京日本橋區
十軒店町
蒙華房

振替口座東京一〇七番

□ 錄目物行刊時臨會學鳥本日 □

獸醫學士 內田清之助著
第一篇 鵝類圖說

絶版

獸醫學士 內田清之助著

第二篇 海產保護鳥類圖說

原定色版三枚
 郵稅價四拾錢
 附錢

理學士 黑田長禮著

第三篇 世界の鴨

原定色版一枚寫真版五枚
 郵稅價六十七錢
 附錢

理學士 黑田長禮著

第四篇 世界の雁と鵠

原定色版四枚寫真版五枚
 郵稅價金八圓
 附錢

仁部富之助著

第五篇 郭公の蕃殖に關する研究

寫真版一枚地圖一枚
 コロタイプ版一枚地圖一枚
 定價金卅五錢
 郵稅四錢

理學士 黑田長禮著

第六篇 臺灣島の鳥界
 附 菊池米太郎述 臺灣鳥類の習性

寫真版口繪一枚
 定價四拾錢
 郵稅四錢

理學士 黑田長禮著

第七篇 鮮滿鳥類一斑

寫真版口繪十數個
 定價一圓五十錢
 郵稅十二錢

房 華 裳

店軒十區橋本日
 番七百京東替振

所 捌 賣

獸醫學士 內田清之助先生著

最新刊

鳥類講話

菊判洋裝全壹册

精巧圖百八十餘個

正價貳圓參拾錢

小包料金拾八錢

斯界 稀有の新著

時事新報評 料學としての立場より鳥に關する一切の知識の組織的・系統的に記述せるもの先づ鳥類の蕃殖に筆を起し「渡り」の經路其他を究明し進んで鳥類の分布、鳥と人生との關係、鳥類の保護論に及び更に其の形態、分類及び種類等を詳記せるが多數の鮮明なる寫眞版は驚く計り不思議なる鳥類の世界を一眸の下に指示し殆んど興趣の盡くる所を知らしめざる程にて加之著者の明快平易なる説明は何人にも愛禽の念を起さしむ學術的價值多き良書として江湖に推奨す

理學士 鷹司信輔先生著

飼ひ鳥

菊版特製美本 全一册 紙數三百十頁

着色口繪三葉 精巧圖版 八十餘個

正價金二圓五十錢 小包料金十八錢

電話本局千壹
振替東京七百七

裳華房發兌

東京日本橋區
十軒店

内田清之助 仁部富之助 共著 東京動物學會發行

製本出來

鳥類の渡り及繁殖期

菊版假裝紙數百三十頁
圖版十葉挿畫三十個
定價金一圓五十錢
郵稅不
要

本邦産鳥類の「渡り」並に繁殖期に就ては、其利害の關する所廣く、夙に調査せられざるべからずして、而も未だ信賴すべき報告の公表せられたるを聞かず。これ吾人の甚しく遺憾とせる所なり。今や著者等の尠からざる努力の結果、此一篇成る。材料は精選せられたり、調査は鄭重を極む。敢て斯學の同好者並に江湖の實務家に薦めんとする所以なり。

資料 (一)中央氣象臺が全國より蒐集せる未刊行報告(二)農商務省が全國地方廳及大林區署より蒐集せる未刊行報告(三)故小川三紀氏の觀察手記(四)著者等の觀察手記(五)既刊信賴するに足るべき總ての記録

内容 (一)緒言、觀測規約、「渡り」の期節と經路(二)各種鳥類「渡り」の期節の統計的研究並に其生態的氣象學的考察(三)各種鳥類繁殖期の總括的調査及氣象との關係。以上三章、項を分つ事四十一、數十個の詳細なる表を附して説明す。特に鳥學專攻者以外の便を計りては、主要鳥類約三十種の寫生圖を挿入す。

注意

本書ハ日本鳥學會甲種會員ニハ無料配布ス・乙種會員ニハ本會ニ申込アレバ一人一冊ヲ限り定價金一圓ニテ頒布ス
印刷費暴騰の爲め前回廣告の特價にて頒布し難き爲め特價を一圓に改正す但し既に申込済の分は値上げせず

大正七年四月

日本鳥學會

斯界稀有の新著刊行豫告

理學士 黒田長禮先生著

■ 六月下旬刊行 ■

鵡千鳥類圖説

四六二倍版總布製美裝
 三色版五葉寫真版五葉
 挿畫百五十個
 正價約 五 圓

本編は種類の識別最困難なる鵡千鳥類 Charadriidae の全世界に産するもの二百三十七種類を

圖説せるものにして何れも各種に就きて雌雄・夏冬羽・老幼の記載及び分布習性等を記述し

特に本邦産の種類に就きては最詳述せり 尙各亞科より亞種に至る迄細密なる索引を具備し

總論としては本科鳥類の形態・習性・渡り・分類法・參考文書等を記述する事二十三項に亘

り其他分布表・學名索引等を附録として添附せり

圖版は鳥類寫生圖に最堪能なる横山慶次郎畫伯の筆に成り十葉約八十種の邦産種を圖し本文

挿畫には内外種の寫真、寫生圖等百五十圖を挿入せり

裳華房書店發行

東京日本橋
 十軒店

電話本局一千
 振替東京七百

4

15628
S. ...

20



M-9

